つても、つねに私を見ることが出來、後には自ら佛となられ、その國は諸の惡の名さえなく、老と、病と、衰と、意に適わぬ苦はなく、身も壽も樂にみつることであろう、そして道にめざめて善を修める人人が集い來ることであろう」。

二。勝鬘夫人は「この證るべき日の知らせ」を聞いて、恭しく座から起ち、十の誓を立てた。

「世尊、妾はいまから證に至るまで、

一、受けた戒を犯しますまい。

二、尊長の方方を慢りますまい。

三、あらゆる人人に怒を起さしますまい

四、人のすがたかたちや、持物に、嫉を起しますまい。

五、心の上にも物の上にも、慳しむ思を起しますまい。

六、自身のために財物を貯えず、受けるものはみな貧しい人人に與えて幸福にしてやりましよう。

七、施しや優しい言葉や、他に利益を與える行いや、他と境遇を同じうすることをしても、それを自分の爲にせないで、染なく、厭くことなく、礙ない心で、すべての人人を攝めとりましよう。

八、若し孤獨のもの、獄に繫がれているもの、又は病に惱むものなど、樣樣の苦にある人人を見るならば、直ぐに彼等を安らかにしてやる爲に、道理を說き聞かせてその苦を救うてやりましよう。

九、若し生類を捕え又は養い、或は樣樣の戒を犯すものを見るならば、妾の力の續く限り、懲すべき者は懲し、諭すべき者は諭して、それらの惡い行を止めさせましよう。この懲すことと諭すことによつて、法は長えにあるのであります。それは樂が滿ち苦が減べつて、佛の御敎がなだらかに弘まることであります。

十、正法を得ることを忘れますまい。正法を忘れるものは、すべてに行き亙る眞の敎から離れて、證の岸に行くことが出來ません。こうゆう人は正法を得ることが出來ず、意のままに任せては永く凡夫の境界を超えることが出來ません。妾はこのような大きな過を見、そして、この世に正法を得ようとする人人の限りない福利を見ますので、この誓を立てるのであります。

法の主にて在ます世尊、何卒妾の證となつて下さい。世尊はまのあたり其ことを證據をして下さつても、人人は善根が薄いために、この十の誓を守ることが出來ず、或は、疑を起して、邪の道を樂しみ、眞の安樂を得ないかも知れません。今妾はこのような人人を安らかにするために、是等の誓を立てて、それを行おうと思うのであります。もし此誓に虛がないならば、神神は必ず空から華を雨ふらし、妙なる音樂を奏でて下さることでありましよう」。

この時、空よりは華が雨とふり、妙なる聲あつてゆうよう、「汝のゆう所は、みな眞實である」と。之を見、之を聞いたすべての人人は、疑の心が無くなり、限りない歡に心踊り、ともどもに云うよう。「私共もいつも、勝鬘夫人と共に行を同じうするでありましよう」。世尊はまた、あらゆる大樂の願もそのようであると御證された。

第五節　三大願

一。夫人は更に世尊の御前に三つの大きな願を起した。

一、妾はこの眞の願を以て、あらゆる人人を安らかにならしめましよう。そして、この善根によつて、いかなる生を受けても、そこに正法の智慧を得るでありましよう。

二、正法の智慧を得た上は、厭くことなく人人に說き聞かしめましよう。

三、得た正法は、命と財產を投捨てて、必ず護るでありましよう。

その時世尊は、夫人の三つの大きな願に證し給うた。「すべての物が虛空に攝まるように、菩薩の限りない願も亦、悉く此三つの大きな願のうちに攝まる、この願はこのように眞實のもので大きなものである」。

夫人は重ねて、世尊に申すよう。「妾はいま、世尊の御力を受けて、道に適うた大きな願の眞實であることを說きたいと思います、菩薩のあらゆる願は、すべて一つの大きな願の中に入ります、それは正法を體に得る願であります。」

世尊は夫人を讃えて宣う。「善い哉、夫人よ、汝の深い智慧と方便とは、すべてに勝つている、汝はこれまで樣樣の善根を培うた、後の世の人人も汝のように久しく善を修めたものは、皆汝のように語るであろう、汝がいま說いたところの『正法を體に得る』ことは、三世の佛達の等しく說き給う所で、私も覺を得てつねにその法を說いている、かように正法を體に得る功德と利益に限りがなく、そしてその體得者である佛の智慧にも辯才にも亦限りがない」。

二。夫人は申すよう。「妾は世尊の御力を承けて、更に、『正法を體に得る』ことの大きな義理を說きたいと思います。正法を體に得る力の大きなことは、量り知ることが出來ません。先ず、八萬四千の法門を攝めている一切の佛法を得ること。世界がはじめて出來る時、大きな雲が湧き起つて樣樣の色の雨や樣樣の寶を雨らすと云われます、正法を體に得ればちようどそのように、限りない福と限りない善根とを雨らします。

世尊、又、世界がはじめて出來上る時、大きな水が集つて、この世のすべての島島を造り出すと云い傳えられて居るように、この正法を體に得ることは亦此世のあらゆる生類が信ぜねばならぬ數數の敎、すべての聖者達の神通の力、世の安けさ樂しさ、そして世に超えた眞の樂とを造り出します。否、世界が造られる時に、神神や人間の間では得難いものまでが、この法の中から出て來ます。更に又大地が、大海と山と草木と、生物との四つを擔うように、正法を體に得た人人は、自ら大地となつて四種の重擔を荷います。それは、第一に善き友を失うて法を聞かず、法をもたぬ人人に、神の世、人の世に行うべき善を敎え、第二にひたすら敎を聞くことによつて獨り自ら證を得ようと求める者には、それに適わしい敎を與え、第三に天地の道理を考えて、獨り自ら證を得ようとする人には、又それて居りますが、正法を體に得ればちようどそのように、限りない福と限りない善根とを雨らします。

世尊、又、世界がはじめて出來上る時、大きな水が集つて、この世のすべての島島を造り出すと云い傳えられて居るように、この正法を體に得ることは亦此世のあらゆる生類が信ぜねばならぬ數數の敎、すべての聖者達の神通の力、世の安けさ樂しさ、そして世に超えた眞の樂とを造り出します。否、世界が造られる時に、神神や人間の間では得難いものまでが、この法の中から出て來ます。更に又大地が、大海と山と草木と、生物との四つを擔うように、正法を體に得た人人は、自ら大地となつて四種の重擔を荷います。それは、第一に善き友を失うて法を聞かず、法をもたぬ人人に、神の世、人の世に行うべき善を敎え、第二にひたすら敎を聞くことによつて獨り自ら證を得ようと求める者には、それに適わしい敎を與え、第三に天地の道理を考えて、獨り自ら證を得ようとする人には、又それ

に適わしい教を授け、第四に自らと其他の一切とにゆき亙る道を求めて、大きな證を得ようとする者には、それに適わしい教を與えます。世尊、正法を體に得る人は、このように四種の重擔を荷い、あらゆる人人のために、請わざるの友となり、慈しみ憐れみ慰めて、法の母となります。

三。世尊、體に得られる正法と、正法を體に得ることとは、別ではありません。正法とは正法を體に得ることであります。

世尊、又、證の岸に到ることと、正法を體に得る事とは別ではありません。即ち正法を體に得ることは證の岸に到ることであります。何故かと申せば、正法を體に得ようとする人は男でも女でも、第一に施によります。即ちその肉身を切り刻んでまでも、その意を護って施を果し遂げようといたします。是等の人人は、正法をその身に打ち建てます。これを、『施によって證に至る』と申します。第二に、戒によって、五官を護り身と口と意とを淨め、第三に、忍ぶことによっていかに罵られ辱しめられても、恐れず瞋らず益忍ぶ力を強め饒む心を增し、顏色さえも變えることがありません。第四に勤めはげんで懈る心を除き、飽くまでも威儀を嚴かにして進み、第五に禪定によって亂れる心、外に向う心を攝めて正しい念に住み、第六に智慧をみがきあらゆる義理やあらゆる學事、又はあらゆる技藝を究めます。かようにしてこの各の行によって正法を身に打ち建て、それによって證の岸に到るのであります」。

四。夫人は更に世尊の御許を得、その御力を承けて、御法を體に得ることの大きな意義を説いた。

「世尊、『體に得られる正法と、正法を體に得ることとは別でない』と申すのは、正法を體に得た人人は、正法の體得そのものであるとゆうことであります。何故かと申せば、正法を體に得た人は、そのために三つのものを捨てるからであります。第一に身を捨ては身と命と財とであります。それてれば、この世と後の世に亙って、老と病と死を離れて、壞れることのない法の身を得、第二に命を捨てれば、邊りない永えの功德を得てあらゆる奧深い佛の法に達することができ、第三に財を捨てれば、普通の人のもたない、滅びず盡きぬ功德を得、すべての人人の敬を受けるのであります。世尊、このように三つのものを捨てる人は、正法を體に得て佛の證明をうけ、あらゆる人人から尊ばれます。

世尊、又、正法を體に得る人は、法が滅びようとする時、僧伽の男女達が、それぞれ徒黨を結んで謗り合い、教を壞り、和合の團體をこわそうとする時に、諂わず、欺かず、僞らぬ心を以て正法を愛で、正法を持つて、是等の人達を正しい法の團の中に入れるでありましょう。

世尊、妾は正法を體に得ることに、このように大きな力のあることを見ました。佛は固より實の眼、實の智慧、法の本にていらせられ、法に達り、正法の依處でいらせられますから、みな悉く知り給うことと思います」。

五。世尊は、夫人の説いた「正法を體に得る力」の大きなのに、隨喜の心を起させられた。

「夫人よ、汝の説く通りである。正法を體に得る力はまことに大きい。强い力士が少しでも人の身に觸れると、大きな痛を與えるように、少しでも正法を體に得ると、惡魔を惱ませる。どのような善でも、惡魔に惱を與えるとゆう事では、この正法を少しでも體に得ることに及ばない。又、雄雄しい牛王の姿がすべての牛に勝れているように、この正法を體に得ることは、彼のひたすら師の教を守ることや、徒らに自らの考を造ろうとしている事に勝れている。又、須彌山が嚴かにあらゆる山山の上に聳えている樣に、大きな教のために身と命と財を捨てて正法を持つと云うことは、大きな犧牲を拂うと云う事で、あらゆる善あらゆる覺にも勝って居る。されば夫人よ、正法を體に得ることを説いて人人を導き、彼等を正法に立たしめるがよいであろう。私は量りない劫を重ねてこの功德と利益を説いても、説き盡すことは出來ない」。

六。勝鬘夫人は、更に申し上げるよう。

「世尊、正法を體に得る心を指します。何故かと申せば、すべての種が地から生えて育ってゆくように、世のすべての善き法は、みな大乘の心から生え育って行きます。されば世尊、大乘の心に据って大乘を持ってゆくことは、取りも直さず、その他のすべての善い教を攝めていることであります。

世尊、凡そ煩惱に二通りあります。一は根本の煩惱で、これに道理に迷う見の惑と、實際に當ってそれに迷う思の惑の二つがあります。二は上の二つの根本の煩惱がその時時の心に應えて起るもので、これを起惱と申します。この見惑思惑の二つはあらゆる他の煩惱の據となるものでありますが、更にその源を求むれば、無明となり、無明はちようど、魔王が他化自在天において自在の力をもっているように、見、思の煩惱よりも一そう根本のもので、見、思の煩惱を生んだり續かせたりするものであります。

世尊、聖の如く師の教を墨守って證ろうとする人、又は自らの力によって獨り證りに急ぐ人は、この見と、思の二つの煩惱を斷ちますが、無明を斷つことが出來ない爲に、その煩惱から起る數數の煩惱に妨げられて、缺目なく法を知る事が出來ません。知る事が出來ないから、斷つべきものを斷つ事も出來ず、從うてその人達の證は眞の證と申すことは出來ません。涅槃の一部を得たに過ぎません。然るに、之とはかわって、すべての苦を知り、その本となるすべての煩惱を斷ち、すべての滅を證り、すべての道を修めるならば、はかなき世、病める世において永えの證を獲、賴なき世に賴となり、護なき世に護となるのであります。何故かと申せば、あらゆる煩惱の本である無明を斷ち盡くしておりますから、そこに開かれた境地は、全く平等で、法に優り劣りがなく、等しい智慧、等しい解脫、等しい淸さであって、その涅槃は一味であります。即ちその人は、佛のあらゆる法に至って礙りなく、すべてを知る智慧と功

徳とを得、佛となる法の王となつて自在の力をもち、師子が、諸の獸を畏れしめるように法を說くことが出來るのであります。

七。世尊、先に申した『見』と『思』との煩惱を斷つて、身ひとりの解脫に急ぐ人人は、一時は迷の苦には還らないと落着いても、更に、これまで獲た法を明かに省みて、もつと進まねばならぬ餘地のあることに氣がつくならば、遂には平等絕對の眞の證を得るに相違ありません。何故かと申せば、完全でない敎にある人は、必ず完全な敎に進むからであります。完全な敎とゆうは大乘のことで、夫は佛となる乘物であります。この意においてあらゆる敎はそのまま大乘であり、そのまま一佛乘であります。之を得るものは上なき眞の證の道を得るので、それは涅槃界であり佛の法身であります。卽ちあらゆる敎とゆう敎の最後の指す所、あらゆる物とゆう物の最後に赴く所、萬の物の歸る所、敎の歸る處であつて、又物の本體である法身であります。他の言葉で申せば永遠に滅びない佛であります。されば世尊、御佛は時と處に亙つて限りなく、そして限りない慈悲をもつて、一切の人人を憐み慰め給うのであります。御佛はまことにかようにあらせられます。又、盡きせぬ法、永遠の法、すべての世の人人の歸依する處にていらせられます。

世尊、永遠に歸依する處は佛、その法は一佛乘の道であります。この際、道を修むる僧伽が眞の道を獲ておらないならば、永遠の歸依所と申すことは出來ません。然るに、若し人あつて、佛に調えられ、佛に歸依し、法の指示によつて信する心を起し、法と僧伽とに歸依するならば、それはやがて、佛に歸依し奉るものであります。何故かと申せば、その人は第一義に歸依したからであります。それは卽ち佛であります。佛に歸依し奉ることは、法と僧伽とに歸依することであります。

されば世尊、佛の說き給うところは、一佛乘であります。その時と處の關係で方便に御說きなされた敎も、大乘の中に入り、そしてそのまま大乘であり、一乘の敎であり、第一義の乘であります」。

第四章　求道の心得

第一節　目連と富樓那

一。その頃、目連は獨り跋伽の國のスンスマーラギリに近い、恐怖林の鹿野苑に滯つていた。或る日惡魔は露地を靜かに歩いて居る目連の腹に入つて姿をかくすと、目連は腹の中に豆のような重い塊を感えて、散歩を止め、室に入つて思惟をめぐらし、惡魔であることを知つて云つた。

「惡魔よ、出でよ、佛と佛の弟子を擾してはならぬ、汝の永劫の不利益となろうから」。惡魔思うよう。「この出家は私を見付けないで出でよと云つている、この出家の師でさえ、そんなに早く私を見付けることは出來ないのに、弟子としてどうして私を見つけることが出來よう」。

目連は云う。「惡魔よ、私は汝を見付けている、汝の思うていることも知つている」。惡魔は驚いて、目連の口から出て、戶の棧の上に立つた。

「惡魔よ、汝は私が汝を知らないと思うてはならぬ。汝は今、棧の上に立つている。遠い以前、私も頭戶と呼ばれる惡魔であつたが、汝は私の妹の迦利の子であつた。その時には覺參陀佛の御世であつたが、佛には毘頭羅、參侍婆とゆう二人の偉い弟子があつた。毘頭羅は智慧勝れて說法が巧みであり、參侍婆は禪定に巧みで想や感覺を滅くする禪定に入つて居ると、町の人人は尊者が死んだのであると思つて葬式をしようとしたが、尊者は夜明に禪定を出で堆ねた柴の火を消し、鉢を持つて托鉢に出られたので、始めてその生きて居られることを知つたほどであつた。

惡魔頭戶は或る日、思うよう。「私はこの戒行の正しい弟子達の來る所も去く所も知らない、町の人人の心に入つて、この弟子達を謗り惱ませたならば、弟子達の心が亂れようから、その機會を捉えて見よう」。町の人人は弟子達を罵つた。しかし、「髮の毛のない汚い出家、贅澤い黑い遊人、梟が樹の枝に止つて下の鼠をのぞき込んでねろうているように、始終下を向いて物探をしている遊人」などと惡口をいつたものは皆死んで後、地獄に墮ちた。

佛は、弟子等に敎えられるよう。「これらの誹謗は皆惡魔頭戶のなした業である、弟子等よ、慈の心、悲の心、喜の心、平等の心を養えよ」。弟子等はこの敎を受けて、誹謗を聞いても心を動かさず、森に入つてその四無量心を修めた。

二。惡魔頭戶は、この樣に誹謗の手を用いても、機會を得る事が出來ないので、改めて町の人人に供養と尊敬を捧げさせた。供養と尊敬を捧げた人人は、死んで後多く天界に生れた。佛は、弟子等に敎え給うよう。「これらの供養と尊敬も、惡魔頭戶のなす所である、心を動かして機會を與えてはならない、汝等身を不淨と觀い、生を苦と見、無常を想うて住せよ」。弟子等は供養と尊敬とに心を動かさず、苦空無常無我の敎を觀うて道を修めた。

惡魔頭戶は二つの企が效なかつたので、或る日、佛が毘頭羅を連れて、托鉢に町に行きたもう途中、或る子供の心に入つて、陶器の破片を取つて、毘頭羅の頭に投げつけた。毘頭羅は痛む頭の血をその儘に振り返りもせず、佛に從うていたが、佛は頭をめぐらして、「惡魔頭戶は程を知らぬ」と仰せられた。頭戶は大地に吸われて地獄に墮ちた。頭戶はそれから限りない時の間、地獄の苦を重ねたのである。

惡魔よ、佛の弟子を惱ましてはならぬ。それは永劫に汝の不利となろう。私の惡は私を損わないと思うのは間違である。汝は實に長夜の惡を積んだ。惡魔よ、佛に近ずいてはいけない。佛の弟子を擾してはならない」。

惡魔は目連に見付けられ、喪心したもののようになつて姿を消した。

三。或る日の夕暮、富樓那は禪定から出て、世尊に近ずき、申しあぐるよう。「世尊、手短かな御敎を頂きたいと思います、それを頂いて獨り寂かに棲い、熱心に放逸を離れて、つとめ勵みたいと思います」。

「富樓那よ、それでは善く聞くがよい、眼の見る形、耳の聴く聲、鼻の嗅ぐ香、舌の味おう味、身の觸るる觸には、すべて心地よく意に適い、欲を惹き起すものがある。もしそれを喜び好み、執着すれば歡が起る、富樓那よ、喜の原因は苦の原因である。富樓那よ、喜の原因は苦の原因であると私は云う、又、もしそれを喜ばず好まず執着しなければ歡は起らない、富樓那よ、歡の起らぬことは、苦の起らぬことであると、私は云う。富樓那よ、汝はこの手短かな私の教を受けて、何れの國に住おうと云うのであるか」。

「世尊、私は御教を頂いて、**スナーパランタ**に住おうと思います」。「富樓那よ、**スナーパランタ**の人人は兇猛しく疎暴しい、もし彼等が汝を詈り辱かしめたなら、汝はいかようにするか」。「世尊、私はその時、**スナーパランタ**の人人は善良であるから、土塊をなげ、棒を以て打つことはしないと思います」。「富樓那よ、若し人人が土塊を投げつけ、棒を以て打つたならば、汝はいかようにするか」。「世尊、私はその時、**スナーパランタ**の人人は善良であるから、劍を以て私を打たないと思います」。「富樓那よ、若しその人が劍をもつて打つたならば、汝はいかようにするか」。「世尊、私はその時、**スナーパランタ**の人人は善良であるから、私の生命を奪うことはしないと思います」。「富樓那よ、彼等が汝の生命を奪おうとするならば、汝はなんとするか」。「世尊、私はその時、このように思います、世尊の弟子は、この汚れた身體と生命とを厭うて自ら死のうとするが、私は、このなし難い死を得ることが出來たと思います」。「善い哉、善い哉、富樓那よ、汝はこの自制と寂靜とを具えて、**スナーパランタ**に住むことが出來るものである、富樓那よ、それでは思いのままに行くがよい」。

富樓那は世尊の御教を喜び、座具を片付け、衣と鉢とをもつて、**スナーパランタ**の國へ旅した。やがてその地に着いて教を布き、その年の内に、各五百人の男と女の信者を作り、自分もその年の内に、覺を開くことができた。間もなく富樓那は、涅槃の雲にかくれた。

或る時、多くの弟子達は、世尊の御許へ行いて、富樓那の死を申し上た。世尊宣うよう。「弟子等よ、富樓那は賢者であつた、法を守り、法の故に私を煩わすことはなかつた、富樓那は實に涅槃に入つたのである」。

第二節　脯多利耶

一。世尊は、舍衛城を出でて又も遊行の旅に上り、迦維羅城の外の尼拘盧陀の林に入り給うた。迦維羅城の人人は新らしく公會堂を建てて、其落慶供養に世尊を招待した。世尊は其請を容れて、公會堂に赴き、足を洗うて、堂に昇り、中央の柱に凭り東に面うて座を取り給い、弟子等は西の壁側に近く東に面うて坐り、迦維羅城の人人は東の壁側に近く西に面うて座を定めた。油燈の光輝いて、夜の更くるまで、世尊は說法せられたが、阿難を顧みて宣うよう。

「阿難よ、この釋迦族の人人に修道者の道を教えよ、私は脊が痛むから、少しく横に臥たいと思う」。世尊は、衣を四つに疊んで布き、右脇に臥して暫く休み給うた。阿難は法を說き始めた。

二。摩訶那摩よ、佛の弟子は、戒を具え、五官を守り食に量を知り、夜の宿を眠らぬようにつとめ、七つの正法を具え、禪定の現世の樂に自由に入つて住するのである。

戒を具えるとゆうは、佛の定め給うた戒を持ち戒條を守り、行を正しくして小さな罪にも恐を見、眞面目に學び進むことである。五官を守るとゆうは、眼を以て物を見、耳を以て聲を聞き、鼻を以て香を嗅ぎ、舌を以て食を味い、身を以てものに觸れ、意を以て物を思うのに、執着をしないで心を誘い導くように五官を制えることである。食に量を知るとゆうは、正しい思を以て食を取り、虛榮のためや莊飾のためや味のためにせず、只この道を修める身體を養い、苦しい感の起らぬようにする爲に取ることである。夜の宿を眠らぬようにつとめるとゆうは、晝は或は坐り或は歩き、禁められた法から心を清め、夜の初分にも或は坐り或は歩き、禁められた法から心を清め、夜の中分には、足と足を重ねて右脇に寢ね、心正しく念素直に起きるべき時を考えてねむり、夜の後分には、起き出でて或は坐り或は歩いて、禁められた法から心を清めることである。

七つの正法を具えるとは、信と慚と愧を具え、多く學び、努め勵み、念を正しく持つて物の興廢を明かに知る智慧を具えることである。禪定の現世の樂に自由に入つて住するとは、欲を離れ不善を離れて諸の禪定に自由に入ることである。

摩訶那摩よ、佛の弟子はこのようにするから、卵を溫める牝鷄が雛鷄の顯われるのを待つように、煩惱をなくし覺に至り、上ない安穩に到着くことが出來る。摩訶那摩よ、このような弟子は智慧も行も具足つたものと云われ、心の解脫をこの世において實現することが出來るのである」。

世尊はその時、起ち上つて阿難の說法を嘉し給うた。迦維羅城の釋迦種族の人人は歡んで去つた。

三。世尊は恒河を渡つて**アングッタラーパ**に入り、その**アーバナ**とゆう邑の近くに滯在したまい、一日、町に入つて托鉢の後、森に入つて日中を過したもうた。そのとき居士の脯多利耶も亦、傘を持ち靴をはいて森をそぞろ歩きして、世尊のおいでになるところに近き、挨拶して傍らに立つた。

世尊が脯多利耶を顧みて、「居士よ、座があるから坐るがよい」と宣うと、脯多利耶は居士と呼ばれたことに腹を立てて默つていた。世尊が同じく二度三度すすめられると、彼は云うよう。「喬答摩よ、私を居士と呼ぶのは相應しくありません」。「居士よ、それでも、汝は居士の身なりをしているではないか」。「喬答摩よ、私は仕事を止め、俗を離れたのである」。「居士よ、汝はどのように仕事を止め、俗を離れたのか」。「喬

答摩よ、私は私の財産の全部を子供に讓り、それについて差出口をすることを止めて、只衣食を易易とする隱居になつています、私はこの樣に仕事を止め、俗を離れたのであります」。「汝の俗を離れると云うことと、敎において俗を離れるとゆうこととは異つている」。「喬答摩よ、どうぞその敎において俗を離れるとゆうことを說いてください」。

「居士よ、この敎においては八つの法において俗を離れる、八つの法とは、第一に殺生をやめること、第二に偷盜をしないこと、第三に妄語を止めること、第四に不和を起すような語を避けること、第五に貪欲をなくすること、第六に害恚をなくすること、第七に嫉をなくすること、第八に我慢を離れること、この八つの法によつて俗を離れるのである、然しながら、これは總て全り俗を離れる法ではない、他に全り俗を離れる法がある」。「世尊、それをどうぞお說き下さい」。

四。「居士よ、喩えば飢えた犬に肉の少しもついて居ない血に塗れた骨を投げ與えるならば、犬はその骨で飢を滿たすことが出來るであろうか、犬は只その骨によつて疲と惱とを得るだけであろう。居士よ、この敎の弟子はこの骨の喩のように欲を樂しむことを觀い、欲を樂しむことは苦が多く禍が甚だしいと、ありの儘に正しい智慧によつて知り、五欲に執着する心を捨てるとゆう捨念を修める。

又、鷲や鵄やその他の鳥が一つの肉の片を取つて飛ぼうとする處へ、他の猛鳥が追いかけて來て奪おうとすれば、その肉の片を捨てない限り、鳥は死ぬか死ぬほどの傷を受けるであろう。又、燃えたつ草の炬火を取つて風に向うて行くとすれば、その炬火を捨てない限り、手や足を燒き、或は死に至るであろう。又、身丈ほどの深い穴に燃え立つ炭火を入れ、力ある兩人の男が一人の男を投げ入れようとするならば、その男は頻りに身をもがいて後ずさりするであろうけれども、遂には落ち込んで死に至るであろう。又、恐ろしい毒蛇に遇えば、誰も手を出して螫せよ螫せよと云うものはないであろう。又、他人の富を借りて用いれば、遂に手當り次第に債主に運び去られるであろう。又、果實の熟れて居るのを見て一人の男が登つて食べている處へ、他の人が來て斧を以て根本から斬り倒すならば、樹の上の人は速かに下へ降りない限り、手を折るか足を折るか、或は死に至るであろう。

居士よ、總てこれは欲を樂しむことの喩である。この敎の弟子はこれらの喩のように欲を樂うことを觀うて、欲の樂は苦多く惱多く、禍益甚しいと、ありの儘に正しい智慧によつて、世欲に執着する心を捨て滅す捨念を修めるのである。居士よ、この敎の弟子は、かように捨念の淨らかさによつて、この上ない高い智慧を得て、この世に心の解脫を得るのである。これがこの敎において、すべて全り俗を離れることである。居士よ、汝もこの樣な具合に俗を離れたのであるか」。

「世尊、どうして私がそのようなことが出來ましよう、私は以前、異敎に迷うて知らないことを知つたこととし、知つたことを知らないこととしていました、今こそ知らないことを知らないと知り、知つたことを知ると知りました。世尊は實に、私に出家に對うての愛と信と尊敬とを敎えて下さいました、私は今日から息ある限り、世尊の敎の信者であることを誓います」。

五。拜火敎徒のケーニヤも亦、世尊のアングツタラーパに滯在せらるることを聞き世尊を訪うて敎を喜び、世尊と御弟子達とを御招待申しあげた。「ケーニヤよ、私の弟子は千二百五十人の多數である、その上汝は婆羅門を信じているものではないか」。

「世尊、たとえ、私が婆羅門を信じているものであつても、又、世尊の御弟子の數が千二百五十人の多數であつても、どうぞ明日、私の供養をお受け下さい」。世尊は打ち肯いて之を許し給うた。

ケーニヤは急いで家に歸り、親族のものや友達や召使を促して、明日の食事の用意をさせた。或る者は竈を掘り、或る者は薪を割り、器具を洗い、水瓶を置き、座席を用意え、ケーニヤ自身は圓形の小屋を準備した。その時、ケーニヤが深く歸依して居るセーラ梵士が、五百の弟子を連れて、ぶらぶら歩いてやつて來て、この樣子に驚き婚姻のためか、大供犧のためか、或は摩竭陀の頻婆娑羅王を迎えるためかと尋ねた。

「セーラよ、それらのためではない、大供養のためである、釋迦族のなかより出家して佛となられた喬答摩を、その弟子達と一緒に明日招待するのである」。「セーラよ、その通汝は佛と云われたか」。「ケーニヤよ、その通り、私は佛と呼んだのである」。

セーラは、佛の名に驚き覺えた。「佛と云えば、その名を聞くさえも難いことである。我我の書には、三十二大人相を具えたものは、家にあれば轉輪王となつて、この世界を四海の涯までも劍によらないで平定するし、出家をすれば、世の障を除き給う佛となると記してある。ケーニヤよ、今その佛は何處にましますか」。ケーニヤは右手を差しのべて向うの綠の林を指した。セーラは五百の弟子を引きつれて世尊の在す處へ行き、世尊の相好の圓かなのを喜び、やがてその敎に歸依して、世尊の弟子となつた。翌日は共にケーニヤの供養をうけ、セーラはつとめ勵んで、七日にして覺を開くに至つた。

第三節　求道の心得

一。世尊はまたも王舍城に歸り、その城外の竹林精舍に滯在し、或る日、弟子等を呼んで宣うよう。

弟子等よ、親族を離れ家を出で、心を識つてその本に達り道を解るものをば出家と名ける。

出家は世の寶財を捨て、乞い求むることによつて足ることを知り、一日に一度食い、樹の下に宿り、愼しんで再び罪を犯さぬものである。弟子等よ、人を愚かにするものは愛と欲とである。

二。弟子等よ、人あつて我をそしるも、我は慈をもつて彼を護ろう。彼もし重ねて我を犯すにしても、我は重ねて善を以

て向おうと思え。福德の氣はいつも此にあり、害の氣と殃とは彼にあるのである。

惡人の賢者を害おうとするのは、宛も空を仰いで唾するようなものである。それは空を汚さないで還つてその身を汚すであろう。また風に逆うて塵を撒き他を汚そうとすると、塵は他を汚さないで却つて身を汚すようなものである。賢者は毀ることはできぬ。禍は必ず己を滅ぼす。

道のために博く施しても、そは必ずしも大きな施とはならぬ。ただ志を守つて道を奉れば、その福は大きい。

三、人の施すのを見て、之を助けて歡ぶならば、福の報を得るであろう。譬えば、一つの炬火から數百千人の人人が火を取つてもその炬火は元通りであるように、施す福もこれと同じく滅びるものでない。

世に二十の難いことがある。貧しうして施すことは難く、貴くして道を學ぶことは難く、命を棄てて道を求むることは難い。佛の敎を見ることは難く、佛の世に値うことは猶難い。色を忍び欲を離れることは難く、好きものを見て求めないことも難い。勢力をもちながら權勢をもつて人に臨まぬことは難く、辱しめられて瞋らぬことは難く、事にふれて無心にあることも難い。廣く學び博く究めることは難く、また、我慢を除くこと輕んぜぬことは難く、善知識に會うことは難く、性を見道を學ぶことは難く、境に對うて動かされぬことも難い。機に隨うて人をすくうことは難く、心を平らにもつことは難く、是非を云わぬことは難く、善く方便を解ることは猶難い。

四。道を行うものは、譬えば炬火を持つて暗い室へ入るようなものである。暗は直ちに滅び明るきに滿される。道を學んで諦かに見れば、愚の暗は滅び、明るい智慧を得るであろう。

汝等、私がどのような思をもつて道を念い、どのような行をもつて道を行い、どのような言をもつて道を言うであろうと思うか。私はただ、四聖諦の道を念うて暫くも忘れることがないのみである。

天地を觀ては常なきを念い、山川を見ては常なきを念い、萬物の盛んな形を見ては常なきを念う。かように心を持つならば道を得ることは早い。

一日、行うて常に道を念い、道を行い、はては信心の根を得れば、その福は限りがない。

五。人は欲の火のままに華やかな名を求める。譬えば香を燒くに、人はただその香をかげども、香は薫りつつ自らを燒く。愚かの人は、あだなる譽を貪り道の眞を守らぬために、華やかな名聲を得て身を危うする。悔は後にその心を嚙むであろう。

財と色とを貪ることは、ちようど小兒が刄に塗られた蜜を嘗るようである。一嘗にも足らない美味のために、舌を截く患を殘すであろう。

妻子や舍にまつわる患は、牢獄に繫がれて手桎足梏をはめられるよりも甚だしい。獄牢には赦される時はあるが、妻子にかかる欲情は、虎の口にある禍をもちながら、己は甘い思に浸つている如く、繩の解かるる時がない。

愛欲をむさぼる人は、炬火をとつて風に逆うてゆくようなものである。手を燒き、身を燒く患のある貪、恚、愚の毒は身のなかにある。早く道をもつて此毒を除かなければ、禍は必ずその人に來るであろう。

「あらゆる穢を盛つた革の袋よ、浮世の人を誑くかも知れないが、證に入つた人を動かすことはできない、汝に私は用がない」。これは、玉女を捧げて私を試みようとしたものに與えた私の答であつた。

ゆめゆめ汝の心を信するな。汝の意は遂に信すべきものではない。ゆめゆめ色に親しんではならぬ。色に親しめば禍が生れる。

六。道に至ろうと思うものは、欲の火を去らねばならぬ。乾草を着けたものが野火の來るのを見て避けるよう、道を修むる人は、欲の火を見るならば、必ず之に遠ざからねばならぬ。

人あつて、姪の情の止まないのを患え、刄をもつて男根を斷とうとした。私は彼に告げた。「男根を斷つよりは心を斷つがよい、心は主である、主がやむならば從者は總てやむであろう、邪の心が止まないならば、男根を斷つとも何の效があろうぞ」。

道にいたることも苦しいが、道にいたらねば尙苦しい。世に生れて老い、病んで死にいたる。その苦には限りがない。心惱んで罪を累ねれば、生死は遂に止むときがない。その苦は說き盡すことはできぬ。

道に至るには、愛欲の根を拔かねばならぬ。譬えば珠簾の一本一本を拔取るに、やがては盡きる時があるように、惡つきて道を得るに至るであろう。

道を行うことは、牛の重荷を負うて深い泥のなかを行くとき、疲れきつても左右を顧みず、進んで泥を離れ、然る後に息つくようであらねばならぬ。情欲の泥はそれよりも深く甚だしいが、心を直くして道を念えばあらゆる苦を免れることが出來る。

第四節　箭の喩

一。そのころ、舍利弗と摩訶周那とチヤンナとは靈鷲山に住んでいたが、チヤンナは劇しい病に惱んでいた。或る日の夕ぐれ禪定を立ち出でた舍利弗は摩訶周那を促して、チヤンナの看護に行き、云うよう。

「チヤンナよ、病氣はいかが、苦痛は少しは靜まつたようであるか」。「友よ、病氣は重るばかり、苦痛は益劇しくなります、私は最早生きたいと思わず、劒を持つて自ら死のうかと思います」。

「チヤンナよ、それは、いけない、我我は汝が病苦に堪えて生き長えるように望んでいる、若し、望の食物や藥がないならば、私が求めて來ようし、看護は私が致そうから、病苦に堪えて生き存えて貰いたい」。

「友よ、私は食物や藥に事欠けては居りません、看護人が足らない譯でもありません、又、私は長い間、心好く世尊に事えて來ました、どうか、チヤンナは再び迷の生を重ねることのないものとなつて、自ら死んだものと思うて下さい」。

「チヤンナよ、私共は少しく汝に尋ねた

いことがある、若し出來たら答えて貰いたい」。「何なりと御尋ね下さい、御答をいたします」。「**チヤンナ**よ、眼と眼識と眼の見る境とを、これは我がもの、これは私、これは私の自我だと見られるか、どうか、耳と耳識と耳の境界、鼻と鼻識と鼻の境界、舌と舌識と舌の境界、身と身識と身の境界、意と意識と意の境界の法とを、これは我がもの、これは私、これは私の自我だと見られるか、どうか」。

「友よ、私はそれらの根と識と境とを、私のものでない、私ではない、私の自我ではないと見て居ります」。「**チヤンナ**よ、汝は何を見、何を知つて、そのように見られるのであるか」。「友よ、私は六官と識と境とに滅を見、滅を知つて、そのように見るのであります」。

その時、摩訶周那は云うよう。「**チヤンナ**よ、それ故に世尊のこの教を常に思わねばならぬ、執着をすれば動轉があり、執着がなければ動轉がない、動轉がなければ寂靜、寂靜の故に欲愛がなく、欲愛がない故に往來なく、往來がなければ生死がなし、生死がなければ今世後世及び兩世ともなく、これが苦の終りであると」。

舍利弗と、摩訶周那とは、この樣に話をして去つた。兩人が去つて間もなく、**チヤンナ**は劍を取り上げて死んだ。

舍利弗は世尊の御許へ詣でて、この事を申しあげた。世尊の仰せられるよう。「**チヤンナ**は自分の口ど再び迷の生を重ねないものと說いたではないか、**チヤンナ**は此身體を捨てて再び他の身體を取ることのないものとなつて死んだのである、**チヤンナ**は涅槃に入つた」。

二。世尊はそれより再び北の方恒河を渡つて旅を續け、祇園精舍に歸り給うた。或る日御弟子の**マールンキヤブツタ**は靜かな處に退いて思うよう。世界は常住のものかどうか、世界は限があるか無いか、靈魂は身體と異か一つか、人は死んで後在るか、ないか。こうゆう問題は世尊は尽けて說明されない。私はこれに堪えられない。世尊の處へ行つて、この問題を尋ねよう。若し世尊が說明して下さるならば、私は世尊の許に修行をつずけようし、もし何の說明もなければ、修行を止めよう。やがて彼は世尊の所へ行つてその問題を尋ね、「世尊、世尊の知り給うように說明して下さい、若し說明して下さらぬならば、私は世尊の許を去つて家に還るでありましよう」と申しあげた。

世尊は、宣うよう。「**マールンキヤブツタ**よ、私は汝に、我が處に來たれ、我が許に修行せよ、世界が常住か否か、限があるか無いか、靈魂と身體とは一か異か、人は死んで後在るかないかを說明そうと約束をしたことがあつたか」。「世尊、さように仰せられたことはありません」。「汝は又私に、私は世尊がこれらの問題を說明して下さるならば、世尊の許に修行をいたそうと約束をしたのであるか」。「世尊、そうではありません」。「**マールンキヤブツタ**よ、しからば、私も約束をせず、汝も約束をしない。汝は何の約束を尽けようと云うのであるか。

マールンキヤブツタよ、若しそのように私がその問題を說明さない間は、修行をなすまいと云うものがあるならば、その人はその中に死んで仕舞うであろう。喩えば人が恐しい毒矢に射られたとする。親戚の者や友達が集つて醫者に毒矢を拔いて貰おうとするのに、その男が云うには、私はその矢を射たものが男か女か、いかなる素性のものか、顏かたち恰好のいかなるものか、何處に住むものかを知らないうちは、この矢を拔かない。又、その弓が大弓か小弓か解らず、弦が藤蔓か糸か筋か解らず、矢が籐か葦か、羽根が鷲か鷲か鷹か孔雀か解らず、その矢が牛の筋か水牛の筋か鹿の筋か或は草か、何で卷かれているか解らず、矢鏃が馬蹄形か槍形か犢の齒か鳥の羽か解らない中はこの矢を拔かない。**マールンキヤブツタ**よ、若しこの樣に云うているならばその男はその中に死ぬまでのことである。

三。**マールンキヤブツタ**よ、世界が常住であるとゆう見解があつても、淨らかな修行が出來るものではない。世界が常住でないと云う見解があつても、淨らかな修行の出來るものではない。世界が常住である、常住でないとゆう見解があつても、生と老と死と、憂と悲と苦と惱とは同來るものである。私はそれらをこの現在において除くために法を說くのである。

世界が限がある限がない、人は死んで後に在るないとゆう孰れの見解があつても、淨らかな修行が出來るものではない。世界が常住であた、生と老と死と、愁と悲と苦と惱は同じく逼つて來るのである。私はそれらをこの現在において除くために法を說くのである。

マールンキヤブツタよ、それ故に私は說くべきことを說き、說いてならないことを說かないと思うがよい。說いてならないものとは、これらの問題の說明である。何故かとゆうに、これらの問題の說明は眞の意義も齎さず、淨らかな修行の爲にならず、煩惱をなくし、勝れた智慧を開き、覺を得、涅槃に入るためにならぬからである。說くべきものとは四聖諦である。何故かとゆうに、これは眞の意義を齎し、淨らかな修行のためであり、煩惱をなくし、勝れた智慧を開き、覺を得、涅槃に入らしむるものであるからである」。

マールンキヤブツタは、この世尊の御敎を心から喜んだ。

第五節　王寺

一。舍衞城には、波斯匿王が特に尼達のために建てた王寺とゆう寺があつた。尼は城外に住むのが當然であるが、尼にはいろいろの危險があつたので、王が佛の御許を乞うて立てたものであつた。茲には數多の尼が常に滯在して、晝は多く城外の閑林に行いて思を凝すのを常とした。惡魔はしばしば、この尼達を襲うて誘惑をしようとし、尼達はひるまず戰うて、すべて之を退けた。

アーラービ王の姫セーラーは、阿臘毘比丘尼と呼ばれていたが、或る日、ひとり閑林に入つて靜かに思を凝していた。惡魔は囁そうと思つて姿をしめして歌うよう。

うつし世に覺なければ、世を離るるも
效なし、五欲の樂にひたれ、悔なき
世を送るぞ賢き。
尼は惡魔の心を知つて、歌もて返した。
うつし世なれば覺あり、我は智慧にて
その身になりぬ。惡魔よ、なおざりの
輩よ、汝、その道知らず。
五欲は劍の如く、投槍のごと、五體
をば切るもとぞかし。汝は樂と呼べ
ど、われは然らずと云う。

二。蘇摩比丘尼も、舍衞城に托鉢して後闇林に行つて冥想の座を占めた。惡魔は歌うよう。

聖のみ至るべき位は、入ることいと難
ければ、智慧の縫針にて、など、女の
いたり得べきや。

蘇摩比丘尼は答うるよう。

心よく靜かに、智慧あきらけく、正し
く法を見るものに、女なりとてけじめ
なし。
男女の想のありて、けじめを見つる
ものにこそ、惡魔よ、汝は、語るに相
應しからめ。

三。吉舍喬答彌もまた、そこに住む尼の一人であつた。彼の女は、舍衞城の貧しい家の娘で、瘦せ細つているために、人人は吉舍喬答彌（瘦せた喬答彌）と呼んだが、前の世の善根によつて、福德に惠まれた女であつた。それで、そのころ舍衞城に住む名高い長者で、かつ慳しみの強いことで知られた或る長者に、ふとした機會に見出されて、その長男の嫁に迎えられることとなつた。それは、その長者が大事に藏つておいた黃金の延棒が、ある日調べて見ると、いつの間にかただの炭にかわつているので、大いに驚いて、「これはひとえに、自分に福運のないしるしであろう、もしこの炭を、福運の多い人が見出せば、或はもとの黃金にかえるかも知れない」そう考えて諦めて納めて、近くの市場にさらしておいた。すると一日、その前を通り過ぎたのが彼の女であつたが、拙ぬ籠に盛られた一杯の黃金が、店頭にさらしてあるのに驚いて、思わず「まあ、何とゆう澤山な黃金であろう」と呟いた。これをものかげで聞いていた長者は、喜びのあまりに踊り出て、のぞいて見れば果して炭はもとの黃金に立ちかえつてきらきらと輝いて居る。長者はかつ驚きかつその女の福運に憬れて、さては強いて請うて、ついにその長男の嫁とするに至つたのである。

こうした奇しき緣に導かれて、一夜にして富家の室となつた彼の女は、夫よりも愛でられて、まことに平和な樂しい家庭を結ぶこととなつたが、そのうち、子供も出來て、家庭は益すその樂しさを增すこととはなつた。ところが、こうした運のよい福運な家庭にも、いつも幸福の風のみは吹いて來なかつた。可愛ゆい一り子が、ようようにして這うようになり立つようになつたころ、ふとした病がもととなつて、ついに還らぬ旅へさらわれてしまつた。彼の女の歎きはゆうまでもない。冷い骸を抱いて泣き叫び、はては家人の際をねらつて戸外に飛び出し、戸毎を訪れ道行く人を止めて、可愛

ゆい嬰兒の助かる道を聞くのであつた。彼の女はもう正氣を失つているのである。人人は憐れには思うが、既に息絕えたものを蘇えらせる術もないから、ただ同情の涙を與えるより外なかつた。それから幾日か、憐れに氣の狂つた彼の女の姿の、巷から巷へとさまようて行くのが、人人の眼を曇らせていた。

ある日のことである。熱心な佛の信者である一人が、とうとう見るに見かねて、彼の女を呼びとめて敎えた。「妹よ、その子の病は重い、どうして世間の醫者の手におえるものではない、ただ一人、ここにその病を癒したもう方がある、それはいま幸に、祇園精舍に滯在しておられる御佛であらせられる」。

彼の女はこれを聞いて、もう救われたように踊り上り、直ちに祇園精舍に馳せつけて、世尊にお過い申して、ひたすら愛兒の病を救わせ給わんことを、お願い申し上げた。世尊は、靜かに彼の女のゆう所を聞かせられ、やがて優しく仰せられるよう。

「女よ、この子の病は癒し易い、然しそれには、芥子の實を五六粒呑ませねばならない、急ぎ巷に出て、實つて來るがよい」。彼の女は、餘りに容易い仰せに、急ぎ立ち上つて巷へ驅けようとした。世尊はそれを制めて、「然し女よ、その芥子の實は、まだ一度も葬式を出したことのない家、人の死んだことのないところに行つて、求めて來ねばならない」と仰せになつた。彼の女には、その意味はとくと呑みこみかねたが、いま愛兒の危急の場合に、そのことを深く考えて見るほどの餘裕はなかつた。仰せを受けて急ぎ巷に出て、戸毎家毎に、芥子の實を乞うのであつた。けれども、奇しいことには、乞われて芥子の實をくれない家とてはただの一軒もなかつたけれども、死人があるかと聞かれて、一度も死人を出さないと答える家は、全城の隅隅に求めてもついに得られなかつた。彼の女は、最初は奇しくも思つたが、しかし次第に、その奇しげな意味が解けかけて來た。人、生れて死なぬものはない。家に死別の悲しみの訪れぬものはない。いとしき妻、可愛ゆきわが子、大切な兩親、頼り要めの夫、いずこにも人の世の悲哀はつきせない。そして最後は、その無常をわが身の上に受けねばならない。彼の女は、身に粟の生ゆるような戰慄を覺えた。もう芥子粒を乞う愚かさを、續ける勇氣も消え失せた。佛の御語を待ち受けないで、彼の女の心には、もう法の眼が開いているのである。そのまま、幾日かを抱き通した愛兒の骸を墓場において、精舍に急ぎ還つて、世尊の御傍らに跪いた。世尊は、靜かにこの有樣を眺め給うて、「愛兒はいかが致した、芥子の實は求められたか」と問い給うと、彼の女は、御方便によつて夢から醒め出ることの出來た喜を申しあげ、何とぞ今日より以後、御弟子の一人に加え給うようにとお願い申上げた。かくてはからず御弟子の列に加つた彼の女は、つとめつとめて、次第に覺の日に近ずいて行つたが、ある日、惡魔は、彼の女を誘惑そうとて、彼の女の前に現われて、歌うよう。

愛し子に、別れし汝よ、泣きながら、ただひとり、などやいる。森にとさまよい入るは、よきつれを、求むるならめ。

尼は歌うよう。

愛し子に、別れたる、母の日過ぎぬ。よきつれと、ゆうものも無し。悲しみはせじ、泣きはせじ、汝をば恐るることもなし。

なべて世の、仇し樂は、消え失せぬ。闇を破り、惡魔のいくさに勝ちて、惱なく、われ、靜かに坐れり。

四。若き美しき毘闍耶比丘尼は、猶多く惡魔の誘う所であつた。

若き日の、重ねて音信るることなきぞ來れやひめよ、もろともに、樂の音にはつれ、樂しみせばや。

尼は同じく歌をもつて、その誘惑を退けた。

卑しき五欲、樂しかれども、用なければ、惡魔よ、汝に與えん。

脆く、くだけ易き、汚のこの身、恥こそあらめ、貪ほる思たえはてぬ。

この世やかの世、神の世のたのしみ、なべて貪る思の、闇みな去りぬ。

五。遮羅、優波遮羅、尸須波遮羅はみな舍利弗尊者の妹である。ともに佛の敎に歸依して、淨らかな行を修めていた。惡魔は闇林における遮羅の禪思の座に顯われて「汝は何を喜ばないで、獨りこの樣な處に居るか」と尋ねた。遮羅は「生を喜ばず」と答えた。

生のあれば死のあり、生れては惱知る。いましめ、なやみ、他かずかずの禍は御佛法を說きまして、惱離るる道示しまことに導き給わりし。

神の世の樂は、澤にしあれど、法しらざれば、再び迷に來るらめ。

六。優波遮羅に對うては、天界の樂に心を向けて求めよとすすめた。

神の世の樂も、汚に染みて、惡魔の支配に降るなり、げに縛の世や。

世はすべて燃え、世はすべて烟る、世はすべて炎吹き、世はすべて震う。

震わず動かぬ所、世の常人のいたらぬ所、魔の手の延びざる所、そこにこそ、我が心、安けく憩え。

七。尸須波遮羅に顯われては、如何なる道を樂しむかと尋ねた。尼はいかなる道も樂しまずと答えて、その理由を歌い示すよう。

御佛の道のほか、異見の道喜ばず。覺まことにたぐいなく、惡魔拂いて凡てをのがれ、なべてを見給う御佛、世尊は我が師、我はよろこべ御敎を。

八。或る日、摩訶波闍波提は五百人の尼を連れて世尊の許に至り、敎誨を願うた。その頃上座の弟子達が、順番に尼を敎誨する事になつていた。難陀迦は自分の順番になつたが、それを好まないで居た。世尊は阿難を呼んで誰の順番であるかを尋ね、難陀迦の敎誨を好まないことを聞いて難陀迦を呼ばせ、法話をするよう命け給うた。

難陀迦は命をうけて、翌る朝舍衞城に托鉢し、食後一人の弟子を連れて王寺へ出かけた。尼達は難陀迦の來るのを見て座を設け洗足の水の用意をした。難陀迦は足を洗つて設けの座に卽き、尼等に云うよう。「姉妹等よ、質問の心懸を話そう、質問をせられて、知つていることは知ると云い、知らないことは知らないと云わねばならぬ、又もし、其處に疑があるならば、『これは何でありますか』、『この義はどうゆうのでありますか』と、聞かねばならない」。

これを聞いて尼等は、難陀迦が自由に質問させて呉れるのを大いに喜んだ。

「姉妹等よ、眼は常住か無常か」。「無常であります」。「無常のものは、苦か樂か」。「苦であります」。「無常であり、苦であり壞れる法を、『これは私のものである、これは私である、これは私の自我である』と見ることが出來るか」。「大德よ、それは出來ません、耳、鼻、舌、身、意についても同樣に出來ません、何故なれば、私共は前に正しい智慧に依つて、これらの六つの感官は無常であると、あるが儘に見て居るからであります」。

九。次で難陀迦は、色、聲、香、味、觸、法の六つの感官の對象や、眼、耳、鼻、舌、身、意の上に働く六つの識に就て、同じい事を尋ねて同じい答を得、さてゆうよう。

「善い哉、善い哉、姉妹等よ、これはこの敎の弟子に依つて正しい智慧で、あるが儘に見られたのである。姉妹等よ、喩えば燃えている油燈についても、油も無常の變壞するものであり、芯も炎も光も無常の變壞である、若し人あつて油と芯と炎とは無常であるが、光は常住に變らぬものであると云うならば、それは正しい言い方であろうか」。「正しくはありません、油と芯と炎と無常ならば、光の無常なことは申すまでもありません」。

「姉妹等よ、然らば、無常であるところの六つの感官から生れる苦、樂、不苦不樂の感受は常住であるとゆうならば、その語は正しいであろうか」。「大德よ、正しくはありません、それに依つて生れたものは、それが無くなれば自然に無くなるからであります」。

「善い哉、善い哉、姉妹等よ、實にその通りである、次に喩えば樹の根や枝や葉が無常であるのに、その樹の影のみは常住であると云うならば、それは正しい言い方であろうか」。「大德よ、正しくはありません、油と芯と炎と無常ならば、光の無常なことは申すまでもありません」。

「善い哉、善い哉、姉妹等よ、然らば、その無常であるところの六つの感官の對象から生れる苦、樂、不苦不樂の感受は、常住であると云うならば、その語は正しいであろうか」。「大德よ、正しくはありません、それに依つて生れたものは、それが無くなれば自然に無くなるからであります」。

「善い哉、善い哉、姉妹等よ、實にその通りである、次に喩えば、巧みな牛殺しが牛を殺して、鋭い牛刀で、內の肉と、外の皮とを痛めずに裂きわけ、內部の膜や筋や、腱を切り裂き、肉を剝いで外の皮でその牛を包んでこのように云う、この牛はもとの通り、この皮は離れていないと、これは正しい言い方であろうか」。「大德よ、正し

くはありません、牛と皮とは離れて居ります」。

「姉妹等よ、この喩は義を知らせるために説いたのである、内の肉と云うは内の六官のこと、外の皮と云うは外の六境のこと、内の膜、筋、腱と云うのは貪欲、鋭い牛刀とゆうは心の内の煩惱を斷ち切る智慧のことである。姉妹等よ、正念、擇法、精進、喜、輕安、定、捨の七つの覺支を修めるならば、煩惱を滅して感情と理性の解脱をこの現世において現わすことができる」。

難陀迦はかように尼等を誨して、「姉妹等よ、それでは今行くが宜い」とすすめた。

一〇。尼等は難陀迦の教誨を喜び、座を立つて世尊の許へ行き、御禮を申し上た。世尊は尼等を去らしめて後、弟子等に仰せられるよう。「弟子等よ、十四日の布薩の夜には、誰しも今日の月が缺けて居るか滿ちて居るかについて惑うものはない、月は缺けて居るのである。丁度そのように、難陀迦の教誨を受けて尼等は歡んで居るが、思惟が囚になつて居ない」。世尊は、明日再び尼等を教誨するよう難陀迦に命け給うた。

難陀迦は翌る日も亦、舍衛城に托鉢して後王寺に行いて、昨日の通り質問の話をした。尼等は又、昨日の通り、世尊の許に御禮を申しあげた。尼等の去つた後、世尊は弟子等に仰せられるよう。「弟子等よ、十五日の布薩の夜には、誰しも今日の月が缺けて居るか、滿ちて居るかについて惑うものはない、月は滿ちて居るのである。丁度そのように、難陀迦の教を受けて、尼等は歡び且つその思惟は圓になつておる、この五百の尼の最後のものでも、必ず覺を得るに定つた信心の退がぬ位に入つておる」。

第六節　手中の葉

一。世尊は又南に下つて憍賞彌のシンサパーの林に入り、樹の葉を手に取つて宣うよう。「弟子等よ、この林の葉と、この手の中の葉と何れが多いと思うか」。「世尊、それは申すまでもありません、林の中の葉は幾億倍にも多いのであります」。「弟子等よ、丁度そのように、私が知つて説かないことは林のなかの葉のように多く、説く所は手のなかの葉のように少ない。何故説かないかと云うに、利益とならず、淨らかな修行のためにならず、煩惱をなくし、勝れた知慧をひらき、覺を得、涅槃に入るためにならないからである。説く所の法は苦集滅道の四聖諦であつて、利益になり、淨らかな修行のためになり、煩惱をなくし、勝れた知慧をひらき、覺を得、涅槃に入らしむるものであるからである。それ故に弟子等よ、この四聖諦によつて勤め勵まねばならぬ。

二。弟子等よ、享樂は樂に見えて、その實身を滅すものである。喩えば蔓草の實が秋に結んで沙羅の樹の根に落ちる。沙羅の樹に住む樹の神は驚き恐れて身振いする、そこへ、その樹の神の友達の神神が集つて慰める。「友よ、恐れることは要らない、その蔓草の種は、鳥に呑まれるか、羊に喰べられるか、野火に燒かれるか、樵夫がつまみとるか、幾に選び去られるであろう、種子の芽生えることはあるまい」。

然しその種子は、鳥にも呑まれず、羊にも喰べられず、野火にも燒かれず、樵夫にも拾われず、蟻にも運び去られないで、春になつて芽生える。雨期になると、一度に延び茂つて、若い柔い卷鬚を以て、沙羅の樹に卷きつく、沙羅の樹の神は、その軟い感觸に心地好く、「先には私の友達は、蔓草の恐ろしさを思うて、私を慰めて呉れた、然し、見よ、この軟い卷鬚の肌ざわりの心地善さ、來らぬ恐を待ち構えて、身振いするのは愚かなことである」。

その蔓草は追追に沙羅の樹を卷きつけ卷きつけ太つて、その頂までも覆いかくし、枝を張り蔓を延し、深い影を作つて沙羅の樹の枝を枯して仕舞う。沙羅の樹の神は初めて劇しい苦痛に眼がさめて、友達の慰めて呉れた心を想い起すようになる。

弟子等よ、樂欲は樂しく心地好くして、その身を滅すものである。

三。世尊は再び北に上つて、舍衛城に歸り祇園精舍に入り給うた。

或る日、波斯匿王は政事のために、車馬を整えて城の外にあつた。王の祖母は母后の亡くなつた後にも猶存え、年老いて百二十歳になり、老衰えていたが、王は孝心深く、老いたる祖母に事えることを樂にしていた。然るにこの日不幸にも太后は、近侍の人人の看護の甲斐なく、枯木の倒れるように俄かに逝かれた。王の大臣の不奢蜜は、思うよう。「大王はその愛して居られた太后の俄かの死を聞かれたら、どんなに悲しまれることであろう、これは何か方便を用いて、大王の受けられる悲を、薄らぐようにせねばならぬ」。こう考えて、數多の象や馬や馬車を整え、數知れぬ珍寶と妓女とを積んで、幢幡を建て呂樂をなして、死棺を圍んで城外に出で、丁度王の一行の歸城と途中で遇うように計つた。王はこれを見て、折から傍へやつて來た不奢蜜に問うよう。「これは誰の供養であるか」。「大王よ町の長者の某の母が死んだので、そのためであります」。

「これらの象や馬や車は、何のためであるか」。「象も馬も車も各、五百頭宛あります、これを閻魔王に送つて、母の生命を購おうと云うのであります」。

「愚かな事である、生命は留めることも出來なければ、購うことも出來ぬ、鰐魚の口に落ちれば必ず生命のないように、閻魔王の手に入れば免れることの出來るものではない」。

「妓女も五百人居りますが、これと交換に生命を購いたいと云うのであります」。「妓女も珍寶も何の役にも立たない」。「それでは梵士の呪術により、又は德の勝れた出家の力に依つて、購いたいとゆうのであります」。

之を聞くと波斯匿王は笑つて云うよう。「これらは皆愚かなものの考である、一度鰐魚の口に入れば、出ることは出來ない、生のあるものに死のあることはきまりきつたことで、佛の御説きなされることに、少しの間違もないではないか」。

この時、不奢蜜は、王の前に跪いて云うよう。「大王よ、仰せの如く生きとし生け

るものは皆死ぬものであります、何卒あまり強く御嘆きなされぬよう御願い申しあげます、大王よ、太后は今日崩御になりました」。

波斯匿王はこれを聞いて嘆き悲しみ、歎息を洩していたが、「善い哉、不奢蜜、汝は巧みな手段を以て、私の心の破を防いだ、汝は實に方便を知るものである」といつて、城に歸つて香や華や燈明を捧げて太后を供養し、日中ではあつたが、直ちに世尊を精舍に御訪ね申しあげた。

四。世尊。「大王よ、この日中に何處から參られたか」。

「世尊、私の祖母が今日、亡くなりました。年老いて衰えてはいましたが、百二十歳でありました。私はこの祖母を愛で好いていたので、もし王家を與えて祖母の死が贖われるものであるならば、喜んで王家を與え、駿馬や車乘や、珍寶や城郭や、乃至は迦尸の國を與えてなりとも、祖母の生命が取止められるものならば、私は喜んでそれらを差出した事でありましよう。然しながら、誠に世尊のいつも仰せられますように、あらゆる生きとし生ける者は死ぬべきものであり、必ず滅亡に行くものであります、何ともいたしようのないことであります」。

「大王よ、仰せのように、あらゆる生き者は皆死に、必ず滅びる、丁度陶器が素燒のものでも、藥燒のものでも、必ず一度はこわれると同じように」。

世尊はかように仰せになつて、更に次の偈をば唱えたもうた。

なべて生のあるものは皆、死にこそ行けや、それは皆、死をば終りとすればなり。

その業に從いて、功德の果と、罪のむくいを受くるなれ。

惡しきをなせるは地獄へ、德を積めるは天界へ。

されば善きこと行いて、後の世にこそそなえかし。

げにや功德は人人の、後の世渡す船ぞかし。

第七編

第一章　妙法の開顯

第一節　一乘の法

一。世尊はそれより南に下つて毗舍離を過ぎ、王舍城に歸つて靈鷲山に滯在し給うた。或る時、多くの弟子達や菩薩達が集うた時、世尊は「大義」と名くる法門を說き、「無量義處」と名くる禪定に入り給うと、神神は華を降し、大地は六種に震うた。大衆はこのためしない奇瑞に、歡んで掌を合せ、心を一つにして世尊を見奉つた。

その時、世尊の眉の白毫相から、一筋の光が流れ出て、東の方一萬八千の國國を照し、下は無間地獄より上は有頂天に至るまで、あらゆる有情、法を說き給う御佛、道を修むる人人、滅度に入り給う御佛、その遺形をおさむる寶塔など、いと明かに照し出された。彌勒は人人の心を知つて、歌もて文殊師利に問うよう。

（一）いかにしあればみほとけは、この御光を放ちます、華ふり栴檀かおりつつ、大地は淸けく打ち震い、人の心はおどるなり。

御光り冴えてゆくところ、東萬八千の國國は、生死のゆくえや善惡の業、つく明かに示されぬ。

（二）その國國に數數の、御佛いまして方便して、深く妙なる正法說き、無量の人を悟らしむ。

苦しみ繁きこの世なる、老病死を厭う人のために、涅槃を說き示し、苦の際をこそつくさしめ。

過ぎし宿世に福ありて、勝れし法を求むる人には、獨覺の道を說き、またさまざまの行を修め、上なき智慧を求めつる、人には佛の道勸む。

（三）いや更に限りなの、菩薩達は、つとめ勵みて道を求む。

歡心にくさぐさの、寶や家、奢などを施して、これらを菩提にささげてぞ、勝れし敎を得んと願う。

或は妻子手足まで、求むる人に施して佛の智慧を求むあり。

或は國や家をすて、髮鬚ともに剃りおとし、世の導師に近ずきて、安樂のために法を問い、

または森はた曠野に住み、道を念いて魔破り、法の鼓をうつもあり。

或は寂かに神神の、悲默してうくれども、歡ことにせざるあり。

（四）又は憍る人により、罵りうたることあるも、忍びて道を求むあり。

或は笑い戲るる、癡かの輩を離れつつ智者に親しみ道求め、思を林に攝めてぞ、千萬年に亙るあり。

かく樣樣の有樣は、佛の光に現われぬ。我等いかなるえにしにて、かかる未曾有に逢いまつる。

文殊の君よ願くは、もろ人たちの疑を除き召されよいざさらば。

二。その時、文殊師利は彌勒をはじめ、諸の菩薩に語るよう。「卿等よ、世尊はいま大いなる法を說き、大いなる法の雨を降らして、その大いなる法の義を演べようと思い給うのであろう。過ぎし世の御佛達もこのように光を放つて御法を說かれた。されば世尊も、人人をして世にも信じ難い御法を聞かせようために、この奇瑞を現わし給うのであろう。

卿等よ、量ない遠い古、日月燈明と名くる御佛いまして、正しい法を說かれたが、その義は深く、語は巧みに、それぞれの機類に應うて道を得しめ給うた。次いで同じ御名の二萬の佛が相次いでいで給うたが、その最後の御佛が、まだ出家せられぬ時に八人の王子あり、何れも威德高くて各四天下を領めていた。然るに此王子達は、父王が覺を得たもうと聞いて、みな王位をすてて出家となり、限りない御佛に仕えて善の本を植えた。時にこの最後の日月燈明佛は、今の世尊と等しく「大義」と名くる法門を說き、「無量義處三昧」に入つて眉の間より光を放ち、今見るような國國を照し給うた。一會集うた二十億の菩薩達は、その光の因緣を知りたいと願うたが、佛は禪定より起つて、その集會の中の一人である妙光菩薩に因せて、「妙法蓮華」と名くる法門を說き給い、限り無い長い間、座より起ち給わず、聽く人人もその間身も心も動かず、恰も一食の頃のように思い、少しも疲れることはなかつた。この佛は德藏菩薩に佛となるべきことを證して滅度に入りたまい、また妙光菩薩は、妙法蓮華經を持つて永えに互つて人人のために說きあかした。かの日月燈明佛の八人の王子は、皆この菩薩を師として道を得られたが、最後に佛となられたのが燃燈佛である。その弟子の一人、求名とゆうは、利養を貪り、經は讀めども解らず、語は多く忘れた。されど、諸の善の根を培うために量りない御佛に値い、供養し尊び讚え奉つた。彌勒よ、その時の妙光菩薩は我が身、求名菩薩は卿である。今この奇瑞を見るに、本と異ることはない。されば、世尊はいま妙法蓮華の法門を說き給うことであろう」。

三。やがて、世尊は安らかに禪定より起ち、舍利弗に告げ給うよう。「御佛の智慧は量りなく深く、その法門は解り難く入り難い。徒らに師說を守る人人、又は獨り覺つて他を覺らしめることを知らない人人には、知り得る所でない。何故かと云えば、御佛は曾て數知れぬ佛達に親しみ、盡くその敎を行い、勇しく勤め勵み、名稱は普く聞えて、世にためしない奧深い法を成就え、そして宜しきに從つて說き給うのであるから、その意趣は解り難いのである。舍利弗よ、私は佛となつてこのかた、種種の因緣、種種の譬喩をもつて敎を演べ、あらゆる方便によつて人人を導き、そして執着を離れしめた。そは佛の方便と證とにいたる智慧とを具えているからである。舍利弗よ、佛の智慧は廣く深くして礙えられるところもなく、畏るるところもない。深く際みない境地に入り、あらゆる類ない法を成就えているのである。されど舍利弗よ、その法は解り難く說くことは出來ぬ。ただ佛達のみ、諸法の實相を究めて居る。卽ち法の相、法の性、法の體、法の力、法の作、法の因、法の緣、法の果、法の報、法の本末の究竟は等しいと」。

座にある多くの弟子達、信者達は之を聞

いて念うよう。「私達は世尊の說き給うた解脫の法を得て、證の岸に到つた、然るに今世尊の說き給う義趣を知ることはできない」。

舍利弗は衆に代つて、「願くは世尊、この微妙の法をお說き下さい」と申せば、世尊は、「止めよ、止めよ、今もし此法を說くならば、すべての人人は驚き疑うであろう」。舍利弗、重ねて、「世尊、ここには智慧明かによく世尊の說き給う法を敬い信する多くの人人が居ります、どうぞその法をお說き下さい」。世尊。「止めよ、舍利弗、此法は微じうして思い難い、心の慢る人人は、敬い信することはないであろう」。しかし舍利弗は、更に三度請い奉つたので、世尊は、「さらば汝のために、今より其法を說くであろう」とて、說き出だされた。

四。この時、五千人の弟子達、信者達は座より起つて世尊を禮して退いた。彼等は罪深く、たかぶる心を懷いて、未だ得ないものを得たと思い、未だ證らないものを證つたと思うているものであつた。それ故この座にあることが出來ぬのであつた。世尊は默して制め給わず、舍利弗に告げ給うよう。「いま此衆には枝葉はなく、純ら眞實の人のみである。舍利弗よ、たかぶる人人の立ち去つたのは、寧ろ良いことである。私はいまより汝のために說くであろう。

舍利弗よ、かかる妙なる御法は、御佛達も罕に說き給う所で、ちようど優曇華が稀に花咲くようなものである。舍利弗よ、汝等は佛の說く言を信ずるがよい。佛の宜しきに從つて說く法の意趣は解り難い。なぜかと云えば、私は限りない方便、限りない因緣、またもろもろの譬喩をもつて法を演べたのであるが、それは思い計ることもできぬもので、ただ佛のみが能く知るものであるからである。そして佛のこの世に出るのはただ、大きな目的を果し遂げたいためである。舍利弗よ、其大きな目的を果し遂げるとゆうは、諸人をして佛の知見を開き示させ、佛の知見に悟り入らしめることである。

舍利弗よ、佛のなすところは常に一つである。そは唯人人に佛の知見を示し、それを悟らしめよう爲である。即ち佛は佛となるに就ての唯一つの敎であるところの、一佛乘を說くのみで、第二、第三の敎とゆうものはない。舍利弗よ、十方のなべての佛の御法もこの通りである。

舍利弗よ、佛は實に五濁の世に現れる。それは劫の濁、煩惱の濁、衆生の濁、見の濁、命の濁である。舍利弗よ、劫即ち時代が濁り亂れて來ると、衆生の垢はおもくなり、慳、貪、嫉がふかく、あらゆる不善の根をととのえる。この故に佛は、一つの佛乘をば三つの乘に分けて說くのである。故に舍利弗よ、もし我弟子にして、自ら證を得たと思つて此上ない正しい覺を願い求める心がないならば、それは實に增上慢の人である。されば舍利弗よ、汝等は心を一つにして此法を信じ解り、受け持つがよい。佛の言には虛妄はない。唯一佛乘の外には決して餘の敎のないことを信ぜよ」。

五。(一)我いま汝等に方便して、佛の智慧に入らしめん、これまでかくと說かざるは、時至らざりしためなりき。いまや佛の子等多く、無量の佛のみもとにて、深く妙なる道修め、心は淨く利ければ、我いま勝れし乘をとく。我が諸の弟子達よ、よしや一句の法たりと、聞かば疑う要なし、みな佛とは成るならん。

(二)十方の佛の國の中、唯、一佛乘のみありて、二つの乘なく三つもなし、それらは佛の方便のみ。假の名により人人を、導き智慧を說かんとて、この世にこそは出でしなれ。唯この一つぞ實にて、餘の二つは眞ならず、劣れる乘にて人人を、佛は濟うことなさず。

上なき道や勝れたる、乘によりてぞ我はげに、平等の法を證りたり。よしや一人の人にても、劣りし乘にて導かば慳の輩に我墮ちん。

我には慳の意なし、ものとしものに惡斷ちて、我は十方に畏なし、人もし佛を信ぜば、佛は彼を欺かじ。

(三)我いまいとも嚴かに、相好ととのい世を照し、無量の人に尊まれ、實相の印ぞ說くなれや。

すべてを我と等しうなん、せばやと我もと願いしが、いまや願は滿たされてすべてを道に入らしめん。

若し我人人に遇わんには、懇ろにこそ道敎えん、さあれ愚かの者は皆、心惑いて受くるなし。

この人善本を培わず、癡かの愛ゆえ惱みつつ、邪見の林にまよい入り、虛妄の法に執着し、我慢の矜り高くして、心まがりて實なく、千萬劫にわたりても、佛の御名や正法をば、聞くことなければ方便して、救うに難きは是非もなし。

(四)舍利弗われは方便して、苦盡す道をとき、涅槃の果を示しける。

されど涅槃は滅にあらず、もとより諸の法はみな、常に自ら寂滅なり。佛子道を行わば、來らん世にぞ佛たらん。三乘を示すこと、我が方便の力なり、あらゆる御佛みなすべて、一乘の道を說き給う。

(五)集り來れる大衆よ、疑除け佛には、異る言葉はなきぞかし、ただ一乘の敎にて、二つの乘示さじな。

宿世の無量の御佛は、さまざま方便めぐらして、ただ一乘の法を說き、諸人を道に入らしめぬ。

或は法聞き布施し、戒を持ちて定慧を得、或は金銀寶玉の塔たてて、佛の舍利を供養なし、又は土もて佛廟つくり、童子は沙もて戲に、塔造りて供養なす、又佛畫佛像造るあり、又歡の心もて、諸の音樂を奏でてぞ、御德たとうるものもあり、或は亂れし心にて、佛塔に入りて南無佛とのう。この諸の人人は、みなみなこれらの緣により、すでに道をばさとりけり。

(六)あらゆる佛は限りなき、方便をもつて人人を、佛の智慧に入れませば、法を聞く者みなすべて、佛とならぬものはなし。

御佛願を立てますは、我が行いし道をして、普くなべての人人に、得しめんために外ならず。

後の世出でますかぎりなき、御佛たちも限りなき、法說き給うもこれすべて唯一乘の法なれや。

あらゆる御佛みなともに、法はとこしえ無性にて、佛の種は緣により、起るとこそは知り給え。故こそ一乘の法をとく。

「この法、法の位にあり、世の相は常住」と、道をさとれる導師たち、方便をなして說きます。われ亦智慧の力もて、諸人の性と欲を知り、方便めぐらし法をとき、みな歡を得しめたり。

(七) 佛の眼にて見渡せば、人は六道にさまよいつ、福と智慧とに貧しくて、欲に執着深きこと、犛牛の尾を愛する如く、貪の愛に蔽われて、佛と法を求めせず、苦より苦にこそ入るならめ。

かかる人人のためにとて、我大いなる慈悲起しぬ。

我の覺るや思えらく、「もし、唯佛乘をたたえなば、人この法を信せじ、ために法をば破りてぞ、惡道にこそは入るならめ、されば法をば說かずして、寧ろ滅度に入らなんか」。

ついで宿世の佛達の、方便の力を念いしに、いま我がうる道も三乘と、分ちて說くぞ宜しきと。

(八) 思いて我は法說きぬ。さわれ道をば求む者、いよよ多くぞなりければ、今こそ時は來りたれ。

鋭くさかしき人人や、傲り慢ぶる人人は、この法信はいと難し。

今やわれには畏なし、このもろもろの菩薩らに、方便をすてて正直に、上なき道を說きあかさん。

かぎりなき時ふるとても、この法聞くことげに難し、法聞き歡びほめたたえよしや一言ゆうとても、あらゆる御佛供養するなり。

かかる人こそ甚だ稀に、優曇華さくにもまさりたり、汝等疑うことなかれ、われこれ法の王なるぞ。

(九) 普く大衆に我告げん、ただ一乘の道をもて、進まんものこそ敎ゆなれ、小さき證に急ぐもの、かかるは我の弟子ならず。

舍利弗はじめ大衆よ、この妙法は御佛の、祕要にてありされどげに、欲を樂しむ人人は、終に佛の道知らず、後の世出でん惡人も、心惑いてこの法を、信せざれば法を破り、惡道にこそは墮つるらん。

清けく慚愧をいだきつつ、佛の道を求めん者に、われ一乘の道たたえん。

この世の師たる御佛の、宜きに隨う方便をば、汝等已にしりたれや、疑去りて歡びつ、自ら佛となるを知れ。

第二節　火宅の喩

一。その時、舍利弗は歡び踊り、掌を合せて尊顏を仰ぎ申すよう。「世尊、私はいまかような說法を承つて、心はためしない歡に踊つて居ります。何故かと申せば、私は常てこの法を聞き、また多くの菩薩達が佛となるべき日を告げられたことも見ましたが、而も私はそれに預ることはできず、自ら佛の知見を失うていることを傷しく感うて居りました。世尊、私はいつも獨り山や林や樹の下にあつて、或は坐りまたは歩いている時にこのように想いました。法界に入るには等しいのに、『世尊は何故に劣つた法をもつてお濟いになるのであろうか』。併しこれは私達の咎で世尊の咎ではありません。何故かと申せば、若し私達が佛となるべき因を成就げていて、無上の覺を說き給うことを待ちますならば、必ず勝れた法を以て救われたことでありましよう。然るに、私達は宜しきに隨う方便の敎であるとは知らず、初めて法を聞きますと直ちに信し考えて證を得ました。世尊、私は實に今日まで、終日、終夜、自分を責めましたが、今や世尊よりためしない法を聞いてあらゆる疑を斷ち、身も心も安らかとなりました。これぞ眞に佛の子であつて、佛の御口より生れ、法より化生れ、法の分を得たものであることを今初めて知りました」。

(一) 我等もと、佛の子にして共共に、けがれなき法に入りつれど、來るべき世に、無上の道を說き難し。

かくて今、自ら覺りぬ、この滅は、實ならずと。

世尊いま、大衆の中にして、我が身の佛と作るべきを、說き給う、我この御語を、ききて疑除りぬ。

われ初め、世尊の御語聞きまつり、心驚き疑いぬ。「これぞ惡魔の佛となりて、我が心をば、亂すならめ」と。

さはれ、世尊は、種種の緣、またさまざまの譬喩を說き、御心の安き海のごと、聞いて疑の網斷ちぬ。

(二) まことや世尊の說きます如く、過ぎし世と現在と、また來ん世とのかぎりなき、御佛たちもみなともに、方便の中に安らぎて、この法をこそ說き給え。

世尊も亦復等しくて、方便し法を說き給う。世尊に實の道ませど、惡魔に逐にこのことはなし。

我れ疑の網にかかり、魔の所爲と思いけり。さわれ微妙き世尊の御聲は、我が心ねを歡ばせ、我が疑を滅ぼして、實の智慧に安らわせます。

我は定めて佛となり、人と神とに敬われ、上なき法の輪めぐらして、諸の菩薩を導かん。

二。その時、世尊、舍利弗に告げ給うよう。「舍利弗よ、私は遠い遠い昔から、佛の道を得しめようために、汝を敎え導いた。汝も亦長い間、私に隨うて道を學んだ。我が方便によつて汝はいま私の法の中に生れることを得た。然るに汝は悉くそれを忘れて、自ら滅度を得たと思うた。私はいま汝の本願と、その行つた道を憶い起さしめるために、此妙なる法を說いた。舍利弗よ、汝は後の世、量りない劫を經て量りない御佛を供養し、正法を持つて菩薩の道を具え、華光如來とゆう佛となるであろう。その國は淸く安らかに地は平らであつて、

民は榮えることであろう。そして久しく德の本を植えた菩薩が、雲のように集うて道を修めることであろう」。

集れる人人は、舍利弗の佛となるべき日を說かれたのを聞いて、歡び勇んで歌う。

世尊は昔、波羅奈において、四諦の法の輪めぐらしつ、いままた上なき大法をば、われらのために說き給う。そはげに深き妙法にて、信するもの稀ならめ。

我等しばしば敎受けしも、かかる妙法は聞かざりき。我等また、大智舍利弗の如くにて、やがては佛の道を得ん。

ああ、佛の道は思い難し。ただ御佛のみぞ、方便をなして說き給う。

我等のもてるあらゆる福業、この世、後の世、御佛に逢いまつりし功德をみな、佛の道に廻向せん。

三。かくて舍利弗は世尊に申すよう。「世尊、私はいま、少しも疑うところはありませんが、この千二百の弟子達は、世尊の『我が法は、生老病死を離れて、涅槃を究む』とゆう御敎を聞いて、我見と有無の見とを離れたのを涅槃を得たことと思うております。今や、世尊の御前において、未だ聞いたことのない敎を聞いて、みな疑に墮ちております、願くは世尊、この出家、在家の男女のために、その因緣をといて疑を離れさせて下さい」。

世尊、舍利弗に告げ給うよう。「先に私は諸の佛が種種の因緣や譬の方便をもつて法を說くのは、みな佛の證のためであると云うたではないか。それはみな、菩薩を敎え導くためである。

舍利弗よ、いま譬をもつてこの義を明かにするであろう。ある町に年老いた大長者がいた。彼は限りない財產、多くの田畑や召使をもつていた。家は廣く人も澤山住んでいたが、ただ一つの門があるのみで、堂や閣は朽ちくさり、牆の壁は潰れ落ち、打ち傾いて危い有樣である。然るに或る時、急かに家の四方より火が起つて、この家を燒いた。長者は驚き怖れて門を出でて思うよう。『自分は安らかにこの門から出ることはできたが、子供達はこの火の家に遊び戲れて、燃え迫る焰の恐も知らず、厭い免れる意もない、私には力があるから、彼等を家から連れ出すことはできるが、併し門は一つで狹い、加うるに彼等は幼く、識なく遊ぶことにかかりはてている、或は落ちて火に燒れるかも知れない、私はまず、恐しいことが迫つている事を知らせるであろう』。

かくて長者は子供達を呼んで、『速かに出でよ』と叫んだけれども、遊に氣を奪われた子供達は、父の言葉を信せないで、あちこちと走り戲れ、ただ父を見ただけで出る意はない。よつて、方便をもつてこの害を免れさせようと考え、彼等に語るよう。『ここに珍しい玩具がある、今取らぬば悔ゆるであろう、羊車、鹿車、牛車がいま門の外にある、皆この火の家から出てくるがよい、汝等の欲いのままに與えようから、それによつて遊ぶがよい』。

子供達は珍しい玩具と聞いて、自分等の願に適うているので、喜び勇み、互に押しあい除けあいながら、競い爭うて火の家から出た。長者は子供達が安らかに四辻に出たのを見て、躍り上るばかりに喜んだ。子供達は、『どうぞ、お話の羊車、鹿車、牛車をください』と父にせがんだ。

舍利弗よ、その時、長者は各の子供達に一樣に大きな車を與えた。それは高く廣やかで樣樣の寶に飾られ、欄をめぐらし四方に鈴をかけ、上には幢蓋を張り、瓔珞を垂れ、褥をしき、丹い枕をおき、そして白い大きな牛に率かせたもので、多くの僕從達はこれに侍つていた。長者思うよう。『私は澤山の財をもつている、劣つた車を與えてはならぬ、この子供達はみな我が子であるその愛に偏ることはない、私はこのような七寶の大車を限りなくもつている、これを等しく子供達に與えるであろう』。

四。この時、子供達は、各の大きな車に乘つて、本の望ならぬ又とない喜を得た。舍利弗よ、この長者が子供達に寶車を與えたのに虛妄があるであろうか」。

舍利弗。「否、世尊、そこには虛妄はありません、なぜかと申せば、長者はさきに方便をもつて子等を出でしめるであろうと、意をきめたからであります」。

世尊。「善い哉、舍利弗よ、汝のゆう通りである。佛は世のすべての人の父である、永えにあらゆる怖、惱、憂、愚の暗を盡して、限りない智慧と力とを具え、いつも大慈悲をもつてすべてを惠んでいる。この朽ち腐つた三界に生れたのは、生、老、病、死の惱と、三毒の火から人人を救うて、佛の證に至らしめたい爲である。人人は世の憂惱に燒かれ、貧しさに苦しみ、別に泣き、或る時は怨に苦しめられながらもその苦にひたり、寧ろ歡び戲れて厭い脫れることもその苦も知らない。されば佛は、彼の長者が方便して子等を救出したように、人人に語るよう。『汝等、三界の火宅に住つてはならぬ、もしそこに愛着しているならば燒かれるであろう、速かに出でて三つの乘を得よ』と說いたのである。

舍利弗よ、人あつて佛に從い法を聞いて信し、勤め勵んで自らの涅槃を求める。これを聲聞乘、卽ち、聲を聞いて悟る敎と名ける。かの長者の子が羊車を求めるために火宅を出るようなものである。又、人あつて佛に從い法を聞いて信し、勤め勵んで自ら智慧を求め、獨り寂けさを樂い、深く諸法の因緣を知る。これを獨覺乘、卽ち獨り覺る敎と名ける。かの長者の子が鹿車を求めるために火宅を出るようなものである。又、人あつて佛に從い法を聞いて信し、勤め勵んで佛の一切智と力とを求め、量りない人人を憐む。これを勝れたる菩薩乘、卽ち菩薩の敎と名ける。かの長者の子が牛車を求めて火宅を出るようなものである。

五。舍利弗よ、かの長者が、安らかに火宅を出でた子を見ると、自ら量りない財をもてるを思うて、等しなみに大きな車を與えたように、佛も亦、限りない人人が三界の苦を出でて涅槃の樂を得るのを見ると、自ら量りない智慧と力との法の藏をもてるを思うで、『この諸の人人は皆我が子である、等しなみに勝れた乘を與えるであろう、低い滅に入らしめてはならぬ、佛

の大きな涅槃に導くであろう』と、彼等のために佛の禪定と解脫とを與える。それはただ一つであつて聖の讃え給うところ、淨く妙なる第一の樂を生むものである。

舍利弗よ、かの長者が、初に三つの乘をもつて子等を誘い、後に勝れた乘を與えても少しも虛の咎がないように、佛も亦初に三つの乘を說いて人人を導き、その後に勝れた乘をもつて救うのに、少しも虛はない。なぜかと云えば、佛は量りない智慧と力との法の藏をもち、すべての人達に勝れた乘を與えるのであるが、彼等はそれを受け盡すことができない。夫故に佛は方便をもつて、唯一の佛の乘を三つに分けて說いたのであるからである」。

六。(一)舍利弗よ、我も亦かくのごと、あらゆる聖者の尊にして、また世の父なり。すべての人は皆我が子。彼等は深く、世の樂に執着れて、智慧のこころはつゆもなし。三界は安きことなくて、さながら火宅の如しぞや。苦しみちて怖るべし、老と病と死との火は、燃えつ盛りて小やみせず。佛三界の火宅を離れ、寂けき林の中にあり。いまこの三界はみな我が有、中の人等は皆わが子。かぎりなき世の患難を、救うはただ我ひとりのみ。

(二)敎えさとせど信ぜざるは、深くも欲に染むためぞ。故に我三つの乘を說き、人ごとこの世の苦を知らせ、世を出ずる道を演べたりし。今や人人の心みな、さだまりたれば我は此、譬をもつて一佛乘をとく。汝等この語を信ずれば、すべて佛の道を得ん。この乘は妙にして、佛の悅びますところ。あらゆる人の拜むところ。そはかぎりなき力と、智慧と禪定をもてるなり。この乘をあたえてぞ、子等長えに遊ばしめん。道を修むる者はみな、この寶車に打ち乘りて、直ちに道場に至らされば十方にまたがりて、諦かにこそもとむれば、この乘を外にして、餘の乘は一もなし

(三)さきに涅槃と說きしかど、そは唯生死をば盡すのみ、實の滅にあらばこそ、今やなすべきものはただ、佛の智慧の一つのみ。もし大いなる心をば、起さんものは必ずや、心一つに法をきけ。佛は方便をなしつれど、敎を受くるは皆菩薩。智慧少なくて愛欲に、溺るる人には御佛は、苦の相を說き明し、苦の因を知らざる輩には、欲こそ其が因と說く。若し貪欲を滅せば、苦の依る所なし、げにそは卽ち滅にて、そを得んために道修む。

(四)かく苦の縛を、離るることを解脫とゆう。されどこの人まことには、ただ虛妄を離るるのみ、一切の解脫を得しにはあらず。故に佛はこれをもて、實の涅槃と說きはせず。我これまことに法の王、法において自在なり、人人を安けくせんために、この世にこそは現われし。

舍利弗よ、げにこの法は、この世の惠に說かれたり、妄りに宣べまた傳うる勿れ。聞いて喜ぶものあらば、その人退ぎのなき位にあらん。

卽ちこの法を信ずるものは、宿世の御佛見まつるものぞ。

(五)故に汝の說く所を、信ずる人は卽ちに、我を見るもの、もろもろの、菩薩をまた見る人ぞかし。この敎には信をもて、ただ入ることを得るなれや。佛の語を信じてぞ、此敎には隨わめ。己の智慧にはあらぬなり。

されば知るなき人のなかには、此敎をば說くなかれ。智慧明かに多く聞き、または勵みて慈の、心修めて身も命も、惜まぬ人にぞ敎えかし。

第三節　信のこころ

一。その時、須菩提、摩訶迦葉、目連は、世尊が舍利弗に佛となるべき日を告げ給うたのを聞いて、歡びに躍り座より起つて、世尊を禮して申しあぐるよう。「世尊、私達は長い間敎團の首座に列り、年も老い、自ら既に涅槃を得たと思い、また進んで佛の證を求めようとはせず、佛の國を建てまた人人の心を成就えることを、少しも喜ぶ事はありませんでした。然るに今や此ためしない法を聞いて大きな利を得ました。ちようど求めぬのに自から量りない寶を得たようなものであります。世尊、私達は今譬をもつて此義を明かにしましよう」。

二。譬えば人あつて、幼い頃に、父を捨てて他國に住み、年五十に及んでますます貧に苦しみ、四方を經めぐり衣食を求めながら、はからずも生國に向うて旅をつずけていました。然るにその人の父は我子を探しつつ、とある町に住む事となつたが、その家は實に富み榮え、金、銀、瑠璃、珊瑚等量りない寶が多くの庫に滿ち、また多くの召使や、象、馬、牛、羊等の家畜も澤山あり、外の國國とも取引し、商人も賈客も多く集うて居りました。先の貧しい子はあちこちと經めぐつて遂に父の住む町にと來たのであるが、父は子と別れて五十年の間、いつも子を想い出さぬ時とてはなく、人には陽わに語ることもないが、心には秘かに痛みを懷いていた。「私には澤山の財物はあるが、年老いて後を繼ぐべき子がいない、私の命が終れば是等の財物は皆散り失せるであろう、もしこの財を讓る子があつたならば、何の憂もなく、そしてどのように樂しい事であろう」。こうして、いつも子を想い續けて居たのであります。

然るに彼の子は、此處彼處に傭われている中、或る日偶ま父の家に赴いて、門の側らに佇んで遙かに內を窺くと、父は師子の牀に坐り、價も知れぬ眞珠の瓔珞を纏い、召使は各白い拂子を執つて右左に侍つて居る。また天井は寶の帳で覆われ、壁は華の旛を以て飾られて居る。これを見た貧しい子は餘りにも嚴しい父の有樣をみて、思わず恐れをいだき、しみじみと此處に來たことを悔いた。「これは王か、または王と等しい方であろう、私のようなものが傭われ

て來る處ではなかつた、貧しい里は却つて衣食も得やすい、いつまでもかような處に長居して、どんな憂目に遇わされるやも知れぬ」と、あわてて逃げ出した。父の長者は遙かに之を見て、それが我子であることを知つて歡に胸を躍らせ、「片時も忘れることの出來なかつた懐しい我子が歸つてきたのだ、私の願は叶うた、老の身も今はなかなかに生き甲斐があつた」と、取敢ず傍えの人を遣わして、その子を連れかえらしめたが、子は驚き怖れて、「私は少しもあなた方を犯しません、何ゆえ私をお捉えになりますか」とゆう。使の人は益烈しく之を捉えて、引き立てて還つて來た。哀れなる子は、「罪もないのに、かように囚える上は、きつと殺されるに相違ない」と、恐の餘り悶絶れて地に仆れた。父は遙かにこれを見て使の人に語るよう。「そのように手荒に引きとらえてはならぬ、冷水を顔に濺いで蘇らせよ、もうその上、何も云うてはならぬ」。父はその子の意劣つて父の尊貴を見てはばかるるのを知り、態と方便して我が子であるとは語らなかつた。子は使の人の許しを得て夢かとばかりに喜び、大地より立ちあがり、衣食を求めるために貧しい里へと赴いた。

三。その時、父の長者はその子を誘うために、態とみすぼらしい姿をした二人の召使を遣して子に語らせた。「ここに仕事がある、それは塵埃を拂うのだ、賃銀は倍與える、我我とともに雇われようではないか」。これを聞いてかの子は大いに喜び、賃銀を得て、ともどもに塵埃を拂うた。父は愍んで、或る日窓牖から遙かにみると、子は痩せ瘁れ、塵にまみれて働いている。長者は態と麁末な衣をつけ、塵に身をけがしながら右手に塵取を持つて、遠くから傭人達に話しかけるよう。「皆精出すがよい、懈けてはならぬ」。こうした方便で、その子に近ずき、「おお、御身はいつも此處で仕事をしているがよい、餘へ去つてはならぬ、私はもつと賃銀を増してあげよう、また器や米や鹽等も欲しくば與えよう、年老いた召使もあれば使うがよい、すべて意を安うして私を父のように思い、すこしも氣遣うには及ばない、私はもう實に年を重ねているが、御身はいまが壯である、御身の仕事には、餘の傭人達のような胡麻化しがないように見える、今より後は御身を生みの子のように思うであろう」と。

四。その時から長者は彼を子と呼んだが彼はこの幸を喜びながらも、やはり、自分は通りがかりの賤しい者と思いこみ、二十年の間いつも塵埃を拂うた。その後は心置なく出入を續けるようになつたが、住居は前とかわらぬ茅屋であつた。長者は疾んで命の長くないことを思い、子に語るよう。「私の庫には金銀や珍寶が滿ちている。それらの在高や、選ぶべきものを殘らず知つて置くがよい、かように思うている私の意を意としてくれ、それは私と御身とは異つておらないからである、よく氣をつけて失わぬようにしてくれ」。

子はかように云われて、庫庫にあるあらゆる財物を知つたが、少しもそれを取ろうと思う意がなく、やはり本の茅屋にあつて貧しい心を捨てることが出來なかつた。又少時過ぎて、長者は子の意が漸く泰かになつて來て、自ら前の心を鄙しむようになつたのを知つて、その命の終ろうとする時、子に命つけてあらゆる親族や國王大臣等をあつめ、彼等に語るよう。「集れる方方よ、これは私の實の子であります、某の町に私を捨てて五十年の間、孤獨の憂き苦を重ねました。その名は、某我名は某である、昔その町で尋ねもとめたが、ここで遇うことを得ました、これは私の子、私はその父である。されば、いま私のあらゆる財物はこの子の有であります、そしてその出納はこの子の知る所であります」。

五。世尊、このとき子は父の言をきいて大いに歡び、「私は少しも求めていないのに、いまや此寶の藏が自から私のものとなつた」と喜びました。

世尊、この長者とは世尊、貧しい子とは私達であります。私達は生死の中にあつて諸の苦をうけ、心惑うて劣つた法に親しみ、劣つた信解をもつていました。私達は、世尊の方便によつて諸法を思惟り、戯論の塵埃を除きつつあります。私達はそのなかに勤めはげんで、涅槃に至る一日の價を得、自らそこに安んじて歡を見出し、勝れた法を求めようとはいたしませんでした。然るに今世尊は、彼の長者が子の志の劣つて居るのを知つて種種と方便してその心を泰かにし、その後にあらゆる寶を與えたように、世尊もまた、私達の劣つた法を樂うて居る心を知ろしめして、方便して私達の心をととのえ、大きな智慧を教え給いました。私達は今日、さきに待ち設けなかつたものを得たことは、彼の貧しい子が量りない寶を得たのと同じであります。

世尊、私達は長い間、佛の戒をたもちいま初めて上なき證を得て眞の御弟子となりました。眞に世のすべての人人の供養を受ける資格あるものとなりました。これ皆世尊が世にも罕なる事をもつて私達を憐み、教え導きたもうたからであります。されば量りない時を重ねても、誰かこの大きな御恩に報いることが出來ましよう。

六。その時、世尊は摩訶迦葉及び、諸の弟子達に告げらるるよう。「善い哉、迦葉よ、汝はよく佛の眞の功德を說いた。佛には量りない功德がある。量りない劫を重ねても說き盡すことは出來ぬ。迦葉よ、佛は諸法の王である。その說く語には虛がない。智慧の方便をもつて一切の法を說き演べ、そしてその法はみな深く一切智の境地に至るものである。また佛は一切の法の赴くところを知り、すべての人人のふかい心の働を礙りなく知つて居り、諸法を究め盡してあらゆる人人にこの智慧を示すのである。迦葉よ、たとえばこの世のあらゆる山や川や谷間に生えて居る種種の草や灌木や藥草や樹木の上に、大雨が一時に降り濺ぐと、それらの草や木の根や莖や枝葉が、各その種類の持前に從うて育ち、それぞれ異る華や果をつけるようなものである。ひとつの大地から生え、ひとつの雨の潤す所であるが、その草木にはそれぞれの差別がある。迦葉よ、佛もこれに同じい。佛の

世に現われることは、あの大きな雲がこの世の一切を覆うようなものである。大いなる音聲は世界に偏く、『私は世を救う佛である、解らぬものを解らしめ、安らかならぬものを安らかならしめ、涅槃に至らぬものを涅槃に至らしめる。私は一切智者道を知り、道をひらき、道を說くものである、汝等、法を聞くために佛の許に來るがよい』と宣言げる。このとき、數多い人人は佛の許に至つて法を聞いたが、佛はこれ等の人人の利根、鈍根、その異なつた性質を觀て、各の器量にかのうた法を說き、すべてに歡と善き利とを得しめた。彼等はこの世には安らかに後の世には善き處に生れ、道をもつては樂を受け、法を聞いては諸の障をはなれ、諸法のなかに於て、力の堪ゆるにまかせて漸く道に入つた。彼のすべての草木が雨に潤されて、その種類に應うて育つようなものである。佛の說くところの法は一つの相、一つの味である。それは解脫の相、煩惱を離れる相、滅に至る相で、卽ち一切智を究めたものである。もし人あつて佛の法を聞いて修行をしても、その得るところの功德は自ら知ることは出來ない。ちようど彼の草木や藥草が自ら上、中、下の性を知らないようなものである。ただ佛のみ、人の種別、相、體を知り、何の法を思い何の法を修め、何の法を得るかとゆうことを知つて居る。卽ち種種の所に住む人人を佛のみ明かに知るのである。佛はまことに一つの相、一つの味であつて、常に寂かな空に歸る法を知るのであるが、人人の信解を護つて一切種智そのものを說かない。迦葉等よ、汝等は宜しきに隨うて說く佛の法を聞いて、能く信し受けついだことは、甚だ稀有いことである」。

佛の說く法は、一味の雨の華を潤し、各がじし實らすその如し。

諸の因緣や譬もて、道をひらくは我が方便、いま汝等に實を明しぬ。

我が聲聞ける弟子達は、みな涅槃に至りしにあらず。汝等の行う所、これ菩薩の道ぞかし。

道を學びてゆくものは、みな佛とはやがてならん。

七。世尊は諸の弟子等に告げ給うよう。「久遠の昔、大通智勝佛とゆう佛が世に出で給い、量りない人人のために法を說いて皆解脫を得しめ給うた。然るに、その佛の出家せられる前に、十六人の王子があつたが、皆手を携えてかの佛の御弟子となり、佛の證を得て量りない人人を敎え導いた。弟子等よ、私もその十六人の王子の一人として此世において佛となり、數知れぬ人人を敎化したのであるが、汝等を始め、後の世の弟子達は、皆その時に我が敎を受けたものである。かように遠い昔からの求道があつて漸く佛の道に入れるのである。何故かと云えば、佛の智慧は信し難く解り難いからである。私の滅度した後、この一乘の法を聞かないで、自ら得たところをもつて涅槃とし、やがてこの世を已るようなことがあつても、前の世に私から聞いていた敎によつて、再び佛の智慧を求めるようになるであろう。故に涅槃に入るのはただ佛の乘によるのであつて、餘の乘による

のではない。弟子等よ、佛は深く人人の性を見きわめて居る。劣つた法をねがい、深く五欲に執れることを知つて、その爲に滅度を示したのである。譬えば、五百由旬もある遠いところに寶があるとして、そこへ行くには道も險しく種種の危難があるのであるが、而も一人の案內者があつて、よくその險しい道の有樣を知つていて、多くの人人を導いたとする。人人は道の半程にして、「私達はもう疲れて進むことはできぬ、行手は尙遙かである、今から引き返そう」とゆう。よつて案內者は方便を設け、もう三百由旬行けば大きな町があると云いふらし、「汝等、恐れて還るに及ばぬ、その町に入つて心のままに休むがよい、さらば安らかになるであろう、もし進んで寶のある處に至るならば、その時こそ寶を得て歸ることが出來る」。かようにして、案內者は人人の疲れた心を勵まし、ようように寶の山に近いて、「汝等、もう寶のある所は間近になつた、さきに町があるといつたのは汝等の氣を安ませるために、假に作つていつたのである」とゆうようなものである。

弟子等よ、佛もちようどこの案內者に等しい。汝等の導師となつて、遠い遠い迷の惡道を過ぎゆくのである。人人の心は弱く劣つていて、よしや大きな佛となる乘を說いても、容易く佛を見、佛に親しもうとしないことを知り、そのために聲聞の敎、獨覺の敎を說いたのである。そして彼等がこの二つの境地に入るや、更に敎えて、「汝等は未だ、爲すべきことを爲しては居らぬ、汝等のある所は佛の智慧に近い、當に思をめぐらして、その得る所は眞の涅槃ではなく、それは佛が方便をして、一の佛の乘を分つて三として說いたものである」と明すようなものである。

八。世尊は富樓那を初め、その座に集つて居る多くの弟子達に、その佛となるべき日を告げ給うと、彼等は歡に心躍つて、座より起つて世尊を禮して申上ぐるよう。

「世尊、私達はもはやこの上ない滅度を得たと思うておりましたが、今にして初めてそれは愚かであることを知りました。何故かと申せば、私達は佛の智慧を得ることが出來るのに拘らず、自分では小さな智慧を得て、滿足つて居たからであります。世尊、譬えば人あつて友達の家に行き、酒に醉い臥していると、その友は官の用事に出掛けるので、價たかい寶珠をその男の襟に秘して行つた。それとは知らず、彼はやがて醉から醒めて他國へ行つたが、衣食のために苦しみ働き、少しでも得れば滿足つて居た。その後、かの友に逢うてそのことを語ると、友のゆうには、「お前は何故そのように衣食の爲に苦しんでいるのか、私はあの際、お前を安らかにさせたいと思つて價たかい寶を襟に秘めておいた。今、現りそれがあるのを知らずに生活の爲に苦しんでいる、なんとゆう癡かのことであろう。その寶を金にかえるがよい、意のままに樂しむことが出來るであろう」。私達は正しくこの愚者であります。世尊は、その昔菩薩でいらせられた時、私達を敎え導いて一切智の心をおこさせて下さいました。然るに私達は今全くそれを忘れ、淺い證を

得て滿足つていたことは、丁度上の男が生活のために働いて僅かに得たものに滿足つたようなものであります。併し一切智の願は今も失せたのではありません。いまや、世尊は私達をめざまし給い、「弟子等よ、汝等の得た所は決して最後の證ではない、私は久しい間、汝等をして善の根を培わせたけれども、方便によつて涅槃の有樣を示しただけであつたが、汝等はそれを實の證と思つたのである」と仰せられました。世尊、私達は今にして、佛の道を求むる菩薩であることを知りました。いまや佛の說に至るべき日を告げていただき、歡に堪えません。

九。 世尊は更に藥王菩薩に事寄せて、八萬の菩薩に告げ給うよう。「藥王よ、若し人あつて私が世を去つた後、ただ一人の爲に密かにこの敎の一句にても說くならば、この人は正しく佛の使である。佛に遣わされて、佛の事を行うものである、況んや大衆の中において說くならば尙更である。藥王よ、もし惡人があつて、よからぬ心で一劫の長い間、佛を罵るとしても、その罪は猶輕い。然るに人あつてこの敎を說く人を罵るならば、其罪は甚だ重い。故にこの敎を說く者は佛の莊嚴をもつて飾られるもの、佛の御肩に荷われる者である。

藥王よ、私は限りない敎を說いたが、この敎は最も信し難く解り難いものである。之は佛の秘要の藏である、妄りに人に與えてはならぬ。卽ち佛達の守り給う所で、これまで顯わに說かれた事はない。この敎には、佛の世に在る日ですら怨が多い、況んや佛の居らない時には尙更多い。故に佛の世を去つた後は、よくこの敎を持つて人人の爲に說くならば、佛はこの人を衣で覆い他の多くの佛達は護となられることであろう。この人は大いなる信心の力と志願の力と諸の善根の力とをもつ人、佛と共に宿る人である。又この敎を聞く人は菩薩の道を行う人である。この敎を聞いて信し持つものは卽ち無上の覺に近くものである。譬えば高原に渴いて水を求むる人が、大地を穿つて乾いた土を見ると、水のまだ遠い事を知り、更に力をいだすことをやめずに濕うた土を見るまで掘り、やがて泥を見るようになつて、定めて水の近い事を知るようなものである。この敎は實に方便の門を開いて眞實の相を示すもので、深く遠くして到る者はない。佛はいま菩薩達を敎え導き、その心を成就えてそれを開き示すのである。藥王よ、もし菩薩があつてこの敎を聞いて驚き怖れるならば、彼は初めて道に入つた菩薩である。もし佛の聲を聞いた弟子であつて、この敎を聞いて驚き疑い怖れるならば、彼は增上慢の者である。

藥王よ、もし人あつて佛の世を去つた後人人の爲にこの敎を說こうと思うならば、佛の衣を着、佛の座に坐り、佛の室に入つて廣く說くがよい。佛の衣とは、柔和な忍の心である。佛の座とは、すべての法を空と見る事である。佛の室とは、すべての人人に對うての大慈悲の心である。この中に安住い、そして勤め勵む心をもつて、廣く人人の爲にこの敎を說くがよい。

一一。 その時、大地より七寶の大塔が湧き出でて、空に住つた。高さ五百由旬、縱橫二百五十由旬、五千の欄楯をめぐらし、千萬の室、量りない幡幢、寶の瓔珞、萬億の寶鈴をもて飾られて居り、四方よりは栴檀の香が薰り出でて、世界の果果にゆきわたる。又、七寶にて飾られた幡蓋は、高く空に聳え、神神は華を雨ふらし、限りない人人は、華、香、瓔珞、伎樂などを寶塔に捧げて、敬い讃えまつつて居る。

時に寶塔の中から大きな音聲が出て、「善い哉、釋迦牟尼世尊は平等の大智慧であり菩薩の法であり、諸佛の護り給う妙法蓮華の法門を說き給う、まことに世尊の說き給う所はみな眞實である」。

集れる人人はこの奇瑞を見て驚き怪しみ各座より起ち掌を合せて敬い、靜かに一方に坐つた。大樂說菩薩は、人人に代つてこの奇瑞の因緣を世尊に問い奉ると、世尊宣うよう。「この寶塔の中には佛の全き遺骨がある。そして彼の聲は其佛のいだし給うものである。東の方、數數の國の彼方に寶淨とゆう國があり、そこに多寶と名くる佛がいらせられた。この佛が菩薩の道を行われた時、大きな誓をたてられた。『私がこの世を去つた後は、私の全き遺骨を容れる一つの大きな寶塔を造るがよい、そして此塔は、いかなる國にても妙法蓮華の法門の說かれる前に湧き出でて燈明となるであろう』。大樂說よ、この寶塔はこの因緣によつて地より湧き出でたのである」。

大樂說菩薩。「どうぞ、世尊の御力によつて此佛の御身をお示し下さい」。世尊。「此佛には、もし我身を人人に示そうとするならば、その妙法を說き給う佛のあらゆる分身を一處に集めるがよい、その時に私は身を現わすであろうとゆう願がある、故に今私は過去世に十方の國國に殘しておいた私の分身をここに集めるであろう」。

この時世尊が白毫から光を放ち給うと東の方量りない妙なる國國に、諸の佛達が限りない菩薩に法を說きたもう相が顯れた。南、西、北、四維、上下の國も光の行く所皆同じである。是等十方の佛達は、各の菩薩に告げ給うよう。「善き子よ、いまより娑婆世界の釋迦牟尼世尊の御許にゆき、多寶佛の寶塔を拜むがよい」と。時に、この娑婆世界は忽ち淸らかにかわり、大地は瑠璃と澄み、樹樹は寶と輝き、山河、大海、林、市、邑は相をかくして、花は地に布かれ、香は普く薰じた。諸の御佛は各の量りない菩薩を率いてそこにお集りになる。かくすること二度、あらゆる分身の御佛は、みなここに集つて師子の座につき給うた。よつて、釋迦牟尼世尊は座より起つて虛空に立ち給う。あらゆる人人は掌を合せ、心を一つにして世尊を觀たてまつる。世尊は右の指をもつて塔の戸を開き給うに、大いなる音響はちようど關鑰をはずして大城の門を開くようである。集れる人人は多寶佛の遺身を拜み奉り、又、「善い哉、釋迦牟尼世尊は快くもこの妙法蓮華の法門を開き給う、私はその法門を聞こうがために、此處に來たのである」とゆう御聲を聞いた。そして多寶佛は世尊に半座を分ち給い、又世尊は神通をもつてすべての人人を虛空に引き上げ給うた。

世尊は更に會座の人人に告げ給うよう。「汝等の中、誰がよくこの國において、妙法蓮華の法門を說くであろうか、今は正しく說くべき時である、私は久しからずして滅度に入るであろう、私はこの法門を付屬して長くこの世に止めたいと思う」。

第四節　龍女の成佛

一。世尊はまた、諸の菩薩や出家在家の弟子達に告げ給う。「私は過し世、量りない劫の間に法華經を求めて、倦むことはなかつた。そして、いつも國王となつて願を起し、上なき覺を求め、六度の行を滿そうために、國も寶も家族も肉身をも施して少しも惜む所はなかつた。遂に法のために位を捨て、政を太子に委せ、鼓を擊つて四方に告ぐるよう。「もし、私のために大乘を說いてくれるものがあるならば、私は身終るまでその人に仕えるであろう」。その時、一人の仙人が來て申すには、「私は妙法蓮華とゆう大乘の法門をもつておる、私の僕となるならば、その法を說くであろう」。私はこれを聞いて躍り上つて歡び、直ちにその仙人に仕え、果を取り水を汲み、薪を拾い、食を設け、或は身を牀座の代として少しも倦む所はなかつた。かように法の爲に勤め勵んで仕えること千歲の久しきに亙つた。弟子等よ、その時の王は我が身、仙人は今の提婆達多である。私は實にこの提婆達多の善知識によつて正覺を得、廣く人人を救うことを得た。故に私はいま汝等に告げる、彼提婆達多は量りない劫を經て後佛となり、天王佛とよばれるであろう」。

二。その時、多寶佛に申すよう。「本土に還らせられよ」。

世尊、智積菩薩に告げたもう。「善き弟子よ、且く待て、文殊師利に逢い妙なる法を語り合うて後、本土に還るがよい」。

その時、文殊師利は千葉の蓮華に坐り、多くの菩薩達を隨え、大海の底なる娑竭羅龍宮から、自然と湧きいでて虛空にのぼり靈鷲山に詣でて蓮華より下り、世尊を禮し奉ること了つて智積菩薩の許に往き、迭いに禮を述べて坐つた。

智積菩薩問う。「卿、龍宮にあつて、どれだけの人人を敎え導かれたか」。文殊師利答えて、「數えつくせぬほどである、いまその證を示すであろう」。言葉の竟らぬうちに、量りない菩薩は、各寶蓮華に坐つて海より湧きいで、靈鷲山に詣でて虛空の中にあつて大乘の法を說いた。智積菩薩歌うよう。

大いなる智慧勇ましく、限りなの人人救う。
實相の義演べ、一乘の法開き、普く人人を導きて、速かに證を得しむ。

文殊師利。「私は海の中にあつて、いつも妙法蓮華の敎を說きあかしたのである」。智積菩薩。「この敎は妙にして奧深く、諸の敎のなかの寶である、もし勤め勵んでこの敎を修め、速かに佛となる者があるであろうか」。

文殊師利。「娑竭羅龍王の八歲の女が、智慧さとくて刹那の間に菩提心を起し、迷に退かぬ位に入つてあらゆる功德を具え、人人を子のように慈しんでいるが、彼女はこの上ない覺を得るに堪えている」。智積菩薩。「私は釋迦牟尼世尊を念い奉るに、量りない劫に亙つて行い難い行を修め、功を積み德を累ねて覺を求め、且くも息みたもうことがない。そしてこの世の芥子ばかりの地でも、人人のために宿世に身命を捨て給わぬ處とてはない。而もかくして、漸くに覺の道を得られたのである。それにこの女が須臾の間に、覺を得たとゆうことは信ぜられぬことである。

三。その言葉の了らぬ間に、龍女は忽ちに身を現して、世尊を禮し奉り、歌をもつて讚え奉るよう。

いや深く、罪と福との相を知りて、徧く四方を照しまし、妙に淨けき御姿は世に敬わぬものぞなき。
聞いて覺を得るひとは、ただ御佛ぞしろしめす、我は勝れし法を聞き、苦の人人を救わなん。

舍利弗、龍女に語るよう。「汝は久しからずしてこの上ない覺を得ると思うているが、それは信し難い、なぜかと云えば、女の身は穢れていて法の器ではない、どうしてこの上ない覺が得られようか」。

その時、龍女は世尊に價知れぬ寶珠を奉り、世尊は之を受けさせられた。龍女は智積菩薩と舍利弗に語るよう。「世尊がいま妾の捧げまつる寶珠を受け給うよりも早く、妾は佛となるであろう」。

かくて龍女は忽ち男の姿となり、菩薩の行を具えて南の方無垢世界にゆき、寶蓮華に坐つて覺を得、あらゆる人人に妙なる法を說いた。あらゆる人人は、これを見て歡び、それぞれ道を求むる心を起した。

四。此の時多くの菩薩達は、世尊の御前において、此敎を受け傳えんことを誓い、聲を合わせて歌うよう。

（一）願くは、御心煩います勿れ、世尊の世を去りませし後、この恐るべき惡世にて、吾等は廣く說き弘めん。
愚しの人人、惡しざまに罵り、刀や杖を加うとも、吾等は之を耐え忍ばん。
わが行を恃とし、他人を輕しめ利欲のために、法をば說きて、人人の敬いを受くる如き人、好んで吾等の過擧げん。

「この弟子等、利欲名聞のためにして、外道に等しき敎說き、世の人人を惑わす」と。

（二）かくて人人の中にして、我等を謗らんそのために、あらゆる人に向いて、我等を邪見の人と云わん。
されど吾等は悉く、御佛敬いまつるため、これらの惡忍ばなん、濁れるものには惡鬼憑き、我等を罵り辱しめん。さわれ御佛を信しまつる、我等は忍辱の鎧づけん。
この敎をば說かんため、これらの難をよく忍ばん。我等は身も命も愛せず、上なき道のみ敬わめ。

三。われらはながく末の世に、佛の付囑を護らなん、濁りたる世の弟子達はよき方便の法とも知らず、惡しざまにこそ罵りて、吾等をいく度擯けつ、遂には寺よりおい拂わん。

かかるなべての惡をしも、吾等、御佛の仰せ念いて、ひたぶるまさに忍ばなん。

何處の誰にてあらんとも、御法を求むる者あらば、吾等はそこにまかり行き佛の付囑の法を說かん。

我等は世尊の使なり、いかなる人にも畏れじな、よくこの御法を說き弘めん。

世尊、安らい在しませ。

世尊の御前に來ましたる、四方の佛の御前にて、吾等はこのこと誓うなり。

願わくはこれを知ろしめせ。

五。 文殊師利菩薩、世尊に申すよう。「世尊、この菩薩達は世尊を敬い奉るために、この教を說こうと誓うております、後の世において、此菩薩達はいかようにしてこの法華經を說くでありましよう」。

世尊のたもうよう。「後の世、この教を說こうと思うものは、四つの事に心を住めるがよい。第一には、その行である。即ちよく堪え忍び、柔かにして暴しからず、心には恐を懷かず、ものに執著をせず、もものさながらの相を觀て、計を交えぬようにするがよい。

第二には、その親しむ處である。彼等は國王、大臣等に近いてはならぬ。又は道を異にする人人、世の文筆に携わるもの、樣樣の戲に從う者、生物の命をとる生業の者にも近いてはならぬ。是等の人人が近いて來るならば、唯法を說くに止めて、それ等のことに望をかけてはならぬ。又、低い教を求める人人にも近いてはならぬ。婦人については、欲の想を起さしめる相をして法を說いてはならぬ。又は婦人を見ようと思い、處女、寡婦等の家に入って親しみ語ってはならぬ。もし獨り彼等の家に入るならば、心を一つにして佛を念うがよい。婦人のために法を說く場合は、齒を見せて笑ったり、胸を現すようなことをしてはならぬ。法のためにさえも親しうしてはならぬ。

まして餘のことについては尙更である。又年若の弟子を養うことを樂うてはならぬ。常に靜かな處にあってその心を修めるがよい。文殊師利よ、これを初の親しむ處と名ける。

また次に菩薩は、差別ある法を行わず、男女の區別を見ず、すべての法を空と觀「ただ因緣によりてあり、倒ごとによりて生る」と、このように法の相を觀ようと樂うがよい。これを菩薩の第二の親しむ處と名ける。

六。 また文殊師利よ、第三に佛の世を去った後、この教を說こうと思うものは、心を安らかに持たねばならぬ。そして法を說き宣べるならば、餘の法師を慢らず、他人の過や好惡や長所短所を說いてはならぬ。又は劣った道を行う人についても、その過をいたわってやり、決んて貴め讚えたり又は忌み嫌うてはならぬ。かように安らかの心をもつならば、聽く人も逆う意を起さぬであろう。さらば罵る人もなく、擯ける人もなく、刀や杖を加える人もないであろう。それは忍ぶ心にあるからである。もし問う人があるならば、劣った法をもって答えず、勝れた法をもって說きあかし、一切智を得させるがよい。

また文殊師利よ、この教を持つ者は、嫉〔つらい〕詔の心を懷いてはならぬ。また怠惰の佛の道を學ぶ者を輕んじてはならぬ。彼等に向うて「汝等は道を去ることが遠い、一切智を得ることは出來ぬであろう、なぜかと云えば、道を修めるに放逸であるから」などといって、惱し疑わしめてはならぬ。又は徒らに論議をことごとして競い諍うてはならぬ。即ち一切の人人に向うては大悲の想を起し、あらゆる御佛に向うては慈父の想を起し、あらゆる菩薩に向うては大師の想を起すがよい。かように憍ぶる心を破り、一切の人人に向うて等しなみに法を說き、法に順うものにも、法を愛するものにも、偏つて說いてはならぬ。文殊師利よ、この第三の安樂の行をととのえて法を說くものを、惱し亂すものはないであろう。

また文殊師利よ、第四にこの教を持つものは、菩薩の道を求むることの出來ない人人に向うて大悲の心を起し、「これ等の人人は、佛の宜に隨う方便の法を聞かず、知らず、覺らず、問わず、信せず、全くそれを失うている、けれども、私がもし佛の覺を得る時は、何處にあっても智慧と力とをもって、彼等をこの法の中にあらしむるであろう」と想わねばならぬ。文殊師利よ、かようにに第四の法をととのえる者は、あらゆる人人に敬い讃えられ、つねに諸の神や、御佛に護られるであろう。譬えば轉輪王が戰に功のある兵に、象、馬、車乘衣服、財物などを與えて喜ばしめるが、そのうち最も勇しく爲し難いことを爲したものには、その髻のうちの珠をはずして與えるようなものである。佛も亦これと等しい。佛は實に法の王で、大きな忍ぶ力を具えた、智慧の寶藏である。苦にある人人が解脫を求めて、諸の惡魔と戰うのを見ると、彼等のために樣樣の法を說き、既にその人達が力を得たことを知ると、最後にこの法華經を說くのである。即ちかの轉輪王が、髻の珠をはずして與えるようなものである。まことに此教は佛の上ない教で、あらゆる說のうちに最も深いものである。今や正しく說くべき時であるから、汝等のために說きあかすのである。故に汝等は安らかにこの教を說きたいと思うならば、此四つの法に親しむがよい」。

七。 その時、方方の國國から來た夥しい菩薩達は、座を起って世尊に申すよう。「世尊、若し許し給うならば、世尊の世を去り給うた後、私達はこの娑婆世界において、勤めはげんで此經を持ち、廣く說き明すでありましよう」。世尊、告げ給うよう。「善き弟子等よ、汝等はこの教を持つには及ばない、わが娑婆世界には數知れぬ菩薩があって、私の世を去った後に、此教を說くであろう」。

世尊がかように宣うと、大地は一時に振い裂け、その中より數量りない菩薩達が湧きいでて、多寶佛と釋迦牟尼佛とに詣でて禮をなしてたたえ奉った。この菩薩の中に四人の導師があり、一つには上行、二つには無邊行、三つには淨行、四つには安立行と名けられた。彼等は世尊の御前に進み、懇ろに、「聖體安らかに渡らせ給うや」と問い奉った。

八。彌勒菩薩は多くの菩薩達の念を知り世尊に問い奉るよう。「世尊、いま急かに大地より湧き出でたこの數知れぬ大菩薩は一人でも昔から逢うたことはありません、何處から此處へ、何の因緣で集つたことでありましよう、どうぞその本末を御說き下さい」。

世尊は彌勒のために偈を說き給うた。

（一）つとめはげみて、心一つにあれよ、我いまこのこと說かん、疑うことなかれ、佛の智慧ははかり難し。

いま汝、信心の力をいだし、忍の心にあれよかし、未だし聞かざるその法を、いまや聞くこと得るならん。

我今汝等を慰めん、疑懷くことなかれ。佛は虛語るなし、その智慧量るはいとかたし。

得たる第一の敎法は、いと深くして知り難し。我いまそれを說くならん、心一つに聽けよかし。

（二）彌勒よ知れかし朗かに、是等の大菩薩等は、かぎりもしれぬ昔より、佛の智慧を修めつつ、わが導きによりてこそ、大道心を起したれ。

此みな我子ぞ娑婆界に、止まりつねに靜かなる、處に住みて道修め、夜を日についで勵みしが。

われ伽耶城の林なる、菩提樹の下に覺を得、上なき法の輪めぐらしつ、導き道心を發させぬ。

此等は今みな退かぬ、道の位にあるものぞ、みな佛とはなるを得ん。我いま實の語說く、心一つに信せよ。我が久遠の古より、此人人を敎えしを。

彌勒菩薩、世尊に申すよう。「世尊、世尊が正覺を得給うてから、僅かに四十餘年に過ぎません。それにどうして、この間にかような數しれぬ人人を導いて、正覺を得させ給うことが出來ましよう。この菩薩達は實に久遠の古から、量りない御佛の許にあつて、あらゆる善の根を培い、いつも自らを利し、他を利いせしむる道を修めたことでありましよう。されば世尊、これは信し難いことであります。譬えば色美わしく髮黑い年二十五の人が、百歲の人を指して、此は私の子であると、ゆうようなものであります。どうぞ此事を解きあかして私達及び後の世の人人のために、疑を除いてください」。

第五節　佛の壽命

一。その時、世尊は諸の菩薩及び大衆に告げ給うよう。「汝等、佛の說く實の語を信するがよい」。かように宣うこと三たびに及ぶと、人人はまた「世尊、どうぞお說き下さい、私達は世尊の御語を信するでありましよう」と三たび申しあげた。世尊は人人の請うて止まないのを知つて告げ給う。

「弟子等よ、諦かに佛の奇しき力を聽くがよい。すべての世の人人は、釋迦牟尼世尊は、迦維羅城の宮を出でて、伽耶の林に無上の證を得たと思うている。けれども私が佛となつてこの方、實に量りない劫を過ぎて居る。その間私は、いつも此娑婆世界にあつて人人を敎え導いた。その他の量りない國國においても同じことである。かつて燃燈佛の御許に志を發したことなどを說き、或は近く滅度すると云うたのは、みな方便に外ならぬ。弟子等よ、若し人あつて私の許へ來る時は、私は佛の眼をもつて機根の利さ鈍さを見、その宜に隨つて、或は他の名を稱え、或は壽の長さ短さを示し、或は滅度を示すなどして、人人に歡びを起さしめた。また佛は、德薄く垢重うして、小さい法を願う人人のためには、「私は若い時に家を出て佛の覺を得た」と說くが、實は、私は佛となつたのは遠い遠い昔のことで、唯、人人を導く方便のために、かようにいたまでである。弟子等よ、佛の演べる經は、みな人人を迷から離れしめたいためである。その說く所は樣樣であつても何れも實であつて虛ではない。何故なれば、佛は如實に世の相を知るから、生死に迷いこむこともなければ、生死を出ることもなく、世にあることもなければ、世を去ることもない。實ともいえず、虛ともいえず、如ともいえず、その他であるともいえない。この世を見ること全く迷える人の見るところとは異るのである。佛はかようなことを明かに見て謬ることはない。あらゆる人人には夫夫樣樣な性、樣樣な欲、行、憶、分別があるから、佛はそれ等の善の根を培うために、樣樣の因緣、喩等をもつて樣樣に法を說くのである。即ち我が壽には限りはないが、欲を貪つて飽くことのない人人のために方便をめぐらして、佛の世に出で給うことに逢い難いと說いて、彼等をして敬の思、慕う心を懷かしめるのである。

譬えば、多くの子を持つている良醫が他國に赴いた後、子等が毒藥を呑んで悶え苦しみ大地に轉つているとする。其處へ父の良醫が歸つて來て好い藥を與えた。彼等のうち本心を失わぬ者は、その藥を呑んで病を除くことが出來たが、本心を失うたものは、その藥を呑もうとはせぬ。よつて父は方便を設けてゆう。「私は年老いて死に近いた、ここに良い藥を留めておくから、汝等之を呑むがよい」。かようにして再び他國に赴き、使を遣わして、その死を告げしめた。子等は之を聞いて深く悲しみ、「父いませば、私達を慈しみたもうものを、今や遠い他國にあつて喪り給うた、私達は依るべのない孤兒となつた」。そして、遺言を思出してその藥を呑んだが、その病が治つたころに、即ち父が再び歸つて來るようなものである。

弟子等よ、世にこの良醫の虛を責めるものがあるであろうか。私もこの通りである。佛となつて以來、限りない時を重ねたが、人人を救うために、方便して、世を去ることを說くものである。

二。（一）われ佛となりしより、千萬の劫を過ぎつれど、その間もつねに法を說き、限りも知れぬ人人を、佛の道に入らしめき。

また限りなき劫の間も、有情を救わんためにとて、方便し滅度を示せしが、まことは滅度をせしならず、常恒に此處（靈山）にありて法說けり。

げにわれここに止まりて、さまざまに

神力あらわせど、迷える人はそを知らず、まことにわれを死せりとし、みなわが遺骨を供養なし、愛慕の心を起しつる。

(二) 心正しく直く、一心に佛を、見まつらんとねがいて、命をも惜まざるに至れば、われ弟子達をひきいて、靈鷲の山に現われ、その人に語らん。われついに、ここにありて、ほろびず、ただ方便して、滅と不滅を示すのみ。餘の國國にある人も、敬い信ずる心だに起さば、われその處に出でて、こよなき法を說かん。

汝等これを知らずして、われを滅度せりと謂うなり。されど汝等は苦の海にありて、わが法身を見ざるのみ。もし心より我を見んと、愛慕の念の起りたらんに、直ちに我現れて法說かん。

(三) 景なき時を重ねて、我常恒に靈鷲の山と、餘のあらゆる住處に止まれり。劫つきて、人人燒かるることあるも、我が國常に安らぎつ、神神つねに充ちつどい、園も閣も寶に飾られ、寶の樹樹には華と果多く、人人遊び娛しむところ、神神鼓をうちならし、佛と大衆とに華散らさん。

(四) 我が淨土は毀れねど、人人欲の火に燃えて、苦充てりと思うめり。かかる罪ある人人は、その身の惡しき業のため、量りなき劫をふりつれど、三寶の御名ぞ得聞かじ。

されど功德を積み修め、質和かに直きものは、わが身のつねに此處にして、法をば說くを見るならん。

(五) 時にはかかる人のため、佛の壽量りなしと說き、また久しうして漸くに、佛を見奉る人のために、佛にもう値い難しと說かん。

我が智慧力はこの如し、その照すことかぎりなく、その壽には極みなし、これその久しく修めたる、道の功德のたまものぞ。

汝等智慧ある人人は、疑起すことなかれ、佛は虛語りせそ。

三。彌勒菩薩、座より起つて世尊を拜み奉り、歌をもつて申しあぐるよう。

(一) 佛いま、希なる法を說きたもう、そは昔より聞かぬもの。世尊に大いなる力あり、御壽永久にかぎりなし。かぎりも知れぬ世界に住める、數かぎりなき人人も、佛の壽無量と聞き、みなわれ佛とならんとの、めでたき願起したり。

世尊は妙なる法を說き、その御惠のはてなきは、大空にほとりのなき如し。

(二) 神神華をふらしつつ、鳥の如くに舞い來り、栴檀香水そそぎてぞ、御佛を供養し奉るなり。

神世の鼓は空に鳴り、神の衣は舞い下る、千千の歌歌唄えつつ、あらゆる御佛をたたえしまつる。

(三) これ古えよりなきためし、佛の壽無量と聞き、ものみな歡びおどるなり。

御名は十方に聞えつつ、廣く人人をめぐみ給う、あらゆる善の根具えしめ、

菩提の心を育てます。

四。世尊、彌勒菩薩に告げたもう。「彌勒よ、もし人あつて、佛の壽の限りないことを聞いて、一念の信解を起すならば、その人は限りない功德を得るであろう。即ち、佛の道を求める人が限りない劫に亙つて、布施、持戒、忍辱、精進、禪定の五つを行うても、この一念の信の功德に比べると千萬分の一にも及ばぬのである。されば彌勒よ、かかる功德をもちながら、佛の覺より退く筈はない。

彌勒よ、もし佛の壽の極みないことを聞いて、その言のいわれを解るならば、その人は限りない功德を得、この上ない佛の智慧を起すであろう。また彌勒よ、もし人あつて私の壽の限りないことを聞いて、深く心に信ずるならば、その人はいつも佛が、靈鷲山にあつて多くの大衆に圍まれて說法するのを見るであろう。そして彼の人は、また此世界がそのまま瑠璃や黃金の光かがやく淨土であることを見、佛の覺を求める多くの人人をその中に見るであろう。

又、佛の世を去つた後に、此敎を聞いて毀らず、隨喜の心を起すならば、それは深くこの敎を信解る相である。況して之を持つならば、此人は佛を頂き奉る人である。故に彌勒よ、此人は塔寺を建てたり、僧坊を造るなどの功德は要らぬ。何故なれば此經を讀み持つものは、已にそれ等の功德をなした人であるからである」。

五。世尊、常精進菩薩に告げ給う。「若し善き男女あつて此敎を持ち、人人のために說きあかすならば、彼等は眼に諸の勝れた功德を得て、あらゆる世界のあらゆる人人を見ることが出來、耳にも多くの功德を得て、あらゆる世界のあらゆる聲を聞くことが出來るであろう、又、鼻にも舌にも身にも意にも功德を得ることが出來、その云うところはよく義趣にかない、行うところはよく正しい法に叶うであろう」。

六。次に世尊、大勢至菩薩に告げ給う。「久遠の古、威音王とゆう佛が世にいで給い、あらゆる人人を導いて證に至らしめられたが、この佛の世を去られた後、正法の時期がすぎて次の像法の時代になると、增上慢の出家が勢を得ておった。このとき常不輕とゆう菩薩があつて、在家出家の弟子達を見ると、いつも「私は深く汝等を敬います、決んで輕んじはしません、何故かと云えば、汝等はやがて佛となられるでありましようから」とゆう。これがため、常不輕の名を得たのである、此菩薩は經を讀まず只禮拜を行うのみであつたが、人人の中にはこれに心よからぬものもあつて「この愚かの出家は、何處から來て我等のために僞つて證る日を告げるのであるか」と罵つた。けれども、彼は少しも瞋らず、いつも「汝等はやがて佛とならるるであろう」といつた。人人が怒に任せて、杖や石をもつて彼を打ち据えると、避け奔つて而も聲高らかに同じ言葉を繰返えした。かようにして長い年月を經たが、この菩薩は命の終る時、虛空の中に數限りもない法華經の偈を聞いて悉く之を心に憶め、六根を淸めて限りもない長い壽命を增し、そして人人のために法を說いた。大勢至よ、かの時の常不輕

菩薩は實に私であつた。私は過ぎし世にこのように此教を持つて人人に說いたから、速かにこの上ない證を得ることが出來たのである」。

七。その時、かの大地から涌き出でた限りない菩薩達は、一心に掌を合せて世尊に申しあぐるよう。「世尊、私達は世尊の滅くなられた後、世尊に御緣のある國國に生れて、廣くこの經を說き弘めるでありましよう、これ、私達も亦この大法を得て、說き明し寫し持ちたいと思うからであります」。

これを聞き給うと世尊は、集會の人人のために奇しげな神力を現わし給うた。この會にあつた諸の佛方も、これに倣うて同じく神力を示し給うた。人人はみな喜びに心おどつて、掌を合せて拜み種種に供養のものを奉つた。世尊は、上首の諸の菩薩達に宣うよう。

「善男子よ、佛の神力はかように限りなく廣く大きく、かつ不可思議である。けれどもこの神力の力を以てして、限りない劫に亘つて說くとしても、この妙法は說きつくせるものではない。しかしこの經には、すべての佛の持つているあらゆる法やあらゆる神力やまたその法の秘要を藏めた深いいわれが、殘すところもなく說き顯わされてある。ゆえに汝等は佛の滅れた後に一心にこの經を持つて、說き述べ誦み明し又は寫し傳えて、敎の如くに行うがよい。善男子よ、いやしくもこの經のあるところならば、國にもせよ林にもせよ、僧房にもせよ在家の舍にもせよ、いかなるところにもせよ、みな塔を建てて供養をするがよい。何ぜかといえば、この經のあるところはそのままにみな法に嚴られた道場であつて、諸の佛はこのところにあつて、覺を得、法を說き、かつ滅度を示されるからである」。

八。その時、世尊は神通の力を以て、右手をもつて量りない菩薩の頂を摩でて宣うよう。「私は實に量りない劫に亙つて、この得難い覺の法を修めたが、今や之を汝等に授ける。汝等はこの法を心に持つて廣く說き演べ、あらゆる人人に聞かしむるがよい。佛は大慈悲の方であるから、慳しむことなく畏るる所がない。よくあらゆる人人に佛の智慧、自然の智慧を與えるのである。佛はすべての生物のために大きな施の主である。されば汝等は佛の法を學び、慳しむ心を起してはならぬ。もし後の世に人あつて、佛の智慧を信ずる者は、また人人に佛の智慧を得しむるために、この敎を說くであろう。かようにするならば、實に佛の恩に報ゆることができるのである」。あらゆる菩薩達は聞き了つて、身も心も歡に躍つた。

九。かくて世尊は、更に宿王華菩薩の問に答えて、藥王菩薩の過去の事を說き給う。「量りなき古、日月淨明德とゆう佛が世に出で給うた時、一切衆生意見とゆう菩薩がこの佛に隨うて一心に覺を求め、一萬二千歲の久しきに及んで、すべての身を現ずことの出來る禪定を得た。彼は歡んで、かかる身を得たのは偏えに法華經を聞き得たためである、いでや御佛を供養し奉ろうと思いたち、禪定に入つて、空から栴檀の

香をふらし、更に千二百歲に亙つてあらゆる香油を呑み、また之を身に塗り、更にそれをそそいだ寶衣を纏うて、日月淨明德佛の御前に出で、神通をもつて自ら身を燃した。その光は果知れぬ世界を照し、あらゆる佛は之を讚め給うたが、千二百歲の間燃え續いた。彼は命終つて後、再びこの佛の國に生れ、御許に詣でて佛の德を讚えまいらするよう。

御顏妙に、御光十方を照したもう、昔供養し奉りし已、今また還つて親しみ奉る。

その時、日月淨明德佛はあらゆる法を此菩薩に委ね、その夜靜かに滅度に入り給うた。彼はつきせぬ悲を懷いて佛を慕い奉り、やがて八萬四千の塔が建てられると、彼は各の塔の前において、百の德をもつてかざられた臂を燃して、七萬二千歲の長い間供養し奉つた。

宿王華よ、この一切衆生意見菩薩は今の藥王菩薩である。彼はこのように量りない劫に亙つて、身を捨てて施を行うたことである。されば佛の覺を求める者は、手の指、又は足の指を燃して佛の塔を供養するがよい。それは、總べての施に勝るであろう。又たとえ三千大千世界に七寶を布いて佛や聖を供養し奉るとしても、この法華經の四句偈を持つ福に及ばぬであろう。宿王華よ、譬えばあらゆる流や江よりも海が最も勝れておるように、此敎はあらゆる敎の中の最も深く大いなるものである。清い池水が渴ける者を癒し、火の寒い者を暖めるよう、或は、裸の人が衣を得、暗に燈を得たように、この敎は、よく人人のあらゆる苦と迷とを解くのである。

又、宿王華よ、末の世に此菩薩の過去の事を聞いて、その敎のように修めるならば、命の終つた後、安樂世界の阿彌陀佛の御許に往つて、蓮華の寶座の上に生れ、貪、瞋、癡、憍、嫉などに惱まさるることなく、菩薩の神通と法眼とを得るであろう。

九。その時、無盡意菩薩は座より起つて世尊を禮み、申し上ぐるよう。「世尊、觀世音菩薩はどうゆう因緣でその名を得たのでありますか」。

世尊、答え給う。「善男子よ、量りない多くの人人が、さまざまの苦を受ける時に、若しこの菩薩の名を聞いて一心に稱えるならば、觀世音菩薩は直ぐにその音を觀て、その苦より脫れしめることであろう。その名を念うものは、この菩薩の威神力によつて、火にも燒けず、水にも溺れることはない。

又、觀世音菩薩は、この娑婆世界に遊び、佛となる者のためには佛身を現し、國王、長者、異敎の師匠、出家の弟子、在家の信者、さては龍、夜叉など、それぞれの身を示し救うことの出來るものには、それに應うてそれと同じい相を現して法を說くのである」。

一〇。無盡意菩薩偈を以て問う。

（一）妙なる御相の世尊、我は重ねて問いまつる。いかなる因緣の在してか、觀世音とは名けらる。

世尊。また偈を以て答え給う。

汝、觀音の行をきけよ。あらゆる處に

應ろいつ、誓は深く海のごと、劫重ねても量り得じ。
無量の御佛につかえまつり、大きく清き願を發てぬ。我いま御身のためにして、略めてそをば說き明さん。

(二) 御名聞き身を見或はまた、心に思うて空しからねば、あらゆる苦滅びなん。
たとえば害の意より、大火の坑に落さるるとも、かの觀音の力を念いかくれば、火の坑變りて池とならん。
或は海原に漂いて、龍、魚、鬼神の難に逢い、彼の觀音の力を念いかくれば浪も呑み去る力うせん。
或は山の險阻より、押墮さるることあらんに、彼の觀音の力を念かくれば、空にかかりて墮ちざらん。

(三) 或は惡人に逐われて、高き峰より墮されたらんに、彼の觀音の力を念いかくれば、毛一筋さえ損わじ。
怨賊にかこまれ、刀にて脅かされんことあるも、彼の觀音の力を念いかくれば、怨賊みな慈心を起すならん。
また王法の難に逢い、刑のいまわに臨む時、彼の觀音の力を念いかくれば、刄直ちに段段に折れん。
枷と鎖に囚えられ、手枷足枷に縛めらるるとも、彼の觀音の力を念いかくれば
それ等のいましめ頓に解けん。

(四) 呪、咀、毒の藥に、身を害われんとする時も、彼の觀音の力を念いかくれば、その難かえつて本人につかん。
羅刹、毒龍や惡獸や、蛇や蝮に襲われたらんも、彼の觀音の力を念いかくれば、彼等は直ちに棄り逃げん。
雷とどろき電はためき、雹ふり大雨をそそがんに、彼の觀音の力を念いかくれば、やがて跡なく消え失せん。
困厄來りて苦の、この身にせまる時にても、彼の觀音の力を念いかくれば、禍忽ち消えうせん。

(五) 彼にあやしの力あり、智慧の方便をめぐらして、此世の十方の國國に、身を現さぬ處なし。
かくて地獄や餓鬼畜生の、三惡道の苦や、老、病、死の苦を、跡なく滅亡にいたらしむ。
彼には眞と淸けさと、大いなる智慧と慈悲とのある、眼のあり、皆仰げ。
淸く輝く智慧の日は、あらゆる闇を破りてぞ、災の火や風をおさめ、普く照して惠むなり。

(六) 慈悲の身には、戒の雷震い、愛愍の意は雲とおこる。法を甘露の雨とそそぎ、煩惱の焰を消すなり。
訟の廷や戰の場に怖る時、彼の觀音の力を念いかくれば、あらゆる怨みな退かん。
妙なる聲や世を觀る聲や、潮の聲や神の聲、それらのあらゆる聲にも勝る、されば彼をば常に念めよ。

(七) 念えよ念えよ疑う勿れ、觀世音の聖を。苦、厄、死において、よく人人の依たらん。
彼はあらゆる功德を具え、慈の眼もて人を視つ、福の海量りなし、されば禮

しみ禮めよ。
諸の菩薩、弟子達は、みな世尊の御敎を喜んだ。

第六節　思惟

一。それより世尊は、またも舍衞城に入つて祇園精舍に滯まり給うたが、精舍に於ては、ある日、舍利弗が弟子等に語るよう。
友よ、卿等を譏り嘲る人がある時、このように考える。私が今、讒謗を聞いて苦しく感えるのは、耳の感觸に依るのである。聽覺も常なければ、それから起る苦、樂の感情も常ない、想念も常なければ、意念も常なく、識も常ないものである。この心と身を作るものは皆常なしである。こう考えて、心洗まず、和いで堅固になる。
又、卿等を虐げて拳を以て打ち、土塊を投げつけ、杖や劍をもつて打つ人のあつた場合、このように考えるがよい。この身體はそのように出來たものである、世尊は、鋸の譬を說いて、「たとえ、盜人が雙刄の鋸をもつて汝の身體を引き切つても、暗い心になるものは、我が敎を守らぬものである」と敎え給うた、私は撓まずに勵んで、正念を破らず、身體は暢かに、心を一點に集めていよう、この身體の上には、拳の亂打なりとも、杖や劍の亂打なりとも、欲うが儘に來るがよい、この佛の御敎を滿そうためであると。若しこの場合、佛と法と僧伽とを憶念しても、平等な心が顯われて來ないならば、舅を見て新嫁の心のかき亂されるように、その心をかき亂されよう。もし、佛と法と僧伽とを憶念して、平等な心が顯われるならば、彼はこれによつて喜び、得るところが多いであろう。
友よ、材木と蔓と草と土とに取り圍まれたものを家と呼ぶように、骨と筋と肉と皮とに取り圍まれたものを身體と呼ぶ。そして、この身體の上に、根(五官)と境と識との三つが和合して、初めて見る聞くとゆうような働が起るのである。友よ、世尊は、「緣起を見るものは法を見、法を見るものは緣起を見る」と仰せられた。この身と心は、實に因緣によつて出來たものである。この身と心に對うて起す欲望欲求は、苦の因である。この欲望と欲求とを制めなくすることは苦の滅である。友よ、これだけをなし得るものは、多くをなし得たものである。

二。また或る日、舍利弗が世尊に侍つて敎を聞き、歡び歡び歸る途中、補縷低迦とゆう異敎の遊行者に遇うた。補縷低迦は、問うよう。「あなたは、どこから御出でなされたか」。「今、世尊の敎を聞いての歸路である」。
「あなたはまだ乳を呑んでいられるのか、私はとうの昔に師を離れて、獨りで道を修めているのに、あなたはまだ師の敎を聞いていられるのか」。「私はまだ乳を離れない師の敎を聞いて喜んでいるのである、思うにあなたの師は實の覺の方ではなく、その敎は實の法ではないからして、ちようど親牛の乳が惡いか少ないと、犢は早く乳を離れるように、師を離れたのであろう。私の師は實の覺の人であり、その敎は實の敎であるから、ちようど親牛の乳が善い上に豐かであると、犢はいつまでも乳を離れぬよ

うに、私は乳を離れず、師の教を喜んでいるのである」。

三。世尊は引續き舍衛城におわして、弟子等に教え給うた。

「弟子等よ、私は、未だ覺を開かぬ前、菩薩であつた時に、私の思惟を二つに分けて見ようと考えて、貪欲と瞋恚と害う思とを片方に、欲を出で離れることの思と、瞋らない思と、害わない思とを片方に置いて分けてみた。

それで私に、若し貪る思が起る時には、直ちにこのように思つた。「私に貪る思が起つた、これは自らを害い、他を害い、自他を共に害うものである、又、智慧を滅し、破滅に導くものである」。こう考えて來ると、貪る思が消えた。瞋の思、害う思が起る場合もそのようにした。私はこうしてこの三つの悪い思が起ると、直ちに碎き破つて捨てたのである。

弟子等よ、人間の心とゆうものは屢ば思う方へと傾くものである。貪を思えば貪が益す繁くなり、瞋りを思えば瞋が益す甚くなり、害う思を起すと、心は害う方へといよいよ傾くものである。雨期が終つて秋のとり入れの頃ともなれば、牛飼は牛を逐うて牛小屋に閉じこめる。それは牛が縛られたり、殺されたり、或は穀物を荒したとゆう誘を恐れるからである。弟子等よ、私もそのように、善からぬことの禍を見て心を閉じ込め、悪い思を碎き破つて捨てたのである。この私に欲を出で離れることの思、いからぬ思、害わぬ思が起る。私はその時、この思は自らを害わず、他を害わず、自他を共に害わぬものであると知つた。この思をいかに繁く重ねても、そこに恐るべき理由を見出すことが出來なかつたのである。只餘り長く同じ思を結げていると、身體が疲れ、心が病み、從つて心の專注を失うであろうと思つて、心を内に靜め、一點に集めていたのである。

弟子等よ、心は屢ば思う方へと傾くものであるから、こうして欲の出離と瞋らぬことと害わぬこととを思うならば、心はこの思の方へ傾いて、貪と瞋と害う思は、廢れて來る。夏の終の月に、穀物が村の端の田畑に芽を吹き初めると、牛飼は牛の群の行衛を見守り、樹の下にいるか廣場に居るかに注意して、茲に牛が居ると知つているものである。私もそのように、私の心の行衛を見守つて、この思が動いていると知つていた。弟子等よ、私は勇みかつ勵んだ、怖を持たなかつた、常に正念であつた、身體は暢かに、心は靜かに一點に集つていた。

弟子等よ、こうして私は、諸の禪定に進み入つて、靜かな清らかな透明つた、欲を離れ汚を無くし、從順であつていつでも活くる用意があり、堅固であつて他に動かされない心を以て道に進んだ。そして遂に無明を破つて光を生むに至つたのである。

四。弟子等よ、森の高地に續いて大きな低い沼池があつて、鹿の群が住んでいるとする。鹿の不利を計る人は、その平安と愉快へ導く高地への道を塞ぎ、沼池へおろすように計るであろう。鹿はじめじめした濕地に留つて災厄と不幸に遇い、その群の數をきつく減らすようになるであろう。これと反つて、鹿の平安を思う人は、低地への道を閉じて、高地への道を開き、鹿の群をして、その數の增すようにと仕向けるであろう。

弟子等よ、私は物の道理を知らせようために、この喩を說いた。大きな低い沼地とゆうは樂欲のこと、鹿の群とゆうは人人のこと、不利を計るものとは惡魔のこと、低地への道とは八つの邪道のこと、濕地とゆうは樂をあさること、沼、澤とゆうは無明のこと、平安を思う人とゆうは佛のこと平安と愉快への道とゆうは八正道のことである。弟子等よ、このように私に依つて、平安と愉快への道が開かれ、低いじめじめした沼澤への道は閉じられたのである。

弟子等よ、私は同情と愛憐とを以て汝等のために、なすべきことをなした。茲に樹下の蔭があり、空屋がある。靜かに思えよ、放逸であるな、後に悔を殘してはならぬとゆう、これが私の教である。

五。又、或る日、世尊は宣うよう。「弟子等よ、禪定を修めるものは、常にこの五つのことを心掛けねばならぬ。或る相を思うて心に貪欲と瞋恚と愚癡とが生れた時には、直ぐにその相から心を向けかえて、善い思を伴う他の相に向けねばならぬ。他の相に心を轉えるならば、そのために、貪欲と瞋恚と愚癡とは消えるであろう。かくして心が内に收まり靜まり、一點に集まる。これはちようど巧みな大工が太い釘を抜き出すために、細い釘を打ち出すようなものである。

弟子等よ、心を他に向けかえて、なお貪欲瞋恚、愚癡の伴う惡い思が無くならない時には、「この思は不善である、罪の垢がある、苦の結果を生むものである」と、その思の禍を調べねばならぬ。このように調べてゆけば、その惡い思は消え、心は内に收まり靜まり、一點に集まるものである。これはちようど、若い美しい男や女が頭に蛇や獸の腐れ肉を卷きつけられて、厭い嫌うようなものである。

弟子等よ、若しこのようにして、猶その思が止まないならば、今度はその思を思わないようにせねばならぬ。それでその思はとまり、心は内に收まり靜まり、一點に集まることであろう。ちようどこれは、眼のある人が眼の前のものを見ないように、眼を閉じ又は他の方角を眺めるようなものである。

弟子等よ、それでも、その思が續くならば、今度はその思の原因と根本の樣を調べる。それでその思はとまつて、心は内に收まり靜まり一點に集まることであろう。これはちようど、走つている人が、「何で俺はこう急いでいるのであろう、靜かに歩いたらどうであろう」と思つて、靜かに歩くようになり、「俺は、何で歩いているのであろう、立ち停つたらどうであろう」と思つて、立ち停り、「俺は、何で立つて居るのであろう、坐つたらどうであろう」と思つて、坐ると同じことである。

弟子等よ、若しこのように、その思の原因と根本の樣を調べて見ても、猶惡い思が

停まらないならば、齒と齒を合せ、舌を上顎に引きつけ、堅い心を以て抑えつけ、壓しつけて靜めねばならぬ。これはちようど力のある人が、力のない人の首を捕えて壓しつけるようなものである。これでその思は停つて、心は內に收まり靜まり一點に集まることであろう。

弟子等よ、この五つの仕方を以て惡い思を滅すものは、思の仕方と方法をよく知つたものと云われる。何故なれば、彼は欲うが儘に思うて惡い思を離れることが出來、愛の渴を滅し、煩惱の縛を斷つて、苦を全く滅すことが出來るからである。

第二章　王舍城の悲劇

第一節　提婆の獨立

一。世尊は又も遊行に出でて王舍城に歸り、城外の竹林精舍に滯在し給うたが、これより先き、久しく雨が降らないので稻が枯れ、弟子達は食を乞うのに困難をした。勝れた弟子達は別としても、提婆は殊にその儘ならぬをかこつて、それがちようど、自分に神通がないためであるように思いこみ、或る日世尊の御許に詣つて、神通を得る道を授け給うようにと願うた。世尊は、「提婆よ、神通を獲ることを求めるよりは、無常、苦、空、無我の理を思うがよい」と仰せになつて、その願を斥け給うた。提婆はこの御教を喜ばないで、深く心に不平を刻みつけて居た。

その夏、世尊は弟子達を伴うて憍賞彌に赴かれ、そこで安居をせられたが、舍利弗、目連、阿那律、阿難等の弟子達は、互に睦じく道を語り合うのを常としていた。そしてその樣子が、提婆にとつては何となく、我が身獨りを疎んずるもののように思われたので、獨り教團を棄てて王舍城に赴くに至つた。

王舍城に至つた彼は、頻婆娑羅王の愛子で當時十六歲になる阿闍世太子の歸依を得ようと企てた。一日彼は、太子を訪れ、手段を盡してその心を奪い、ついにその歸依を得るようになり、王舍城のほど近くに僧房を建てて、日ごとに多くの車を持つて衣や食の供養を受けることとなつた。

二。かように若い外護者を得た提婆の勢力は日を追うて盛んになつて行き、はては世尊の御弟子の中にすら、彼の許へ赴くものも出て來た。世尊は、彼が利養のために太子の供養を受けていることを聞かれて、弟子等に告げ給うよう。「愚かの者は利養の念を本として惡を增してゆく、しかし、それは利き刀が、忽ち手足その處を異にせしめるように、淸い功德の命を斷ち切るものである。淸い行を修めることを忘れて、徒らに人人を招き寄せ、自らその人人の上に立つて法の主となろうと望んでも、片方に利養のためにするところがあつて、涅槃を得ようとするものは、利養の思が仇になつて、涅槃を求めようとする心すら貪る心とかわらぬことになるものである、そして自らを傷い、他をも傷うて、永く惡道の果を結ばねばならない、汝等必ず、提婆を羨んではならぬ」。

賓をば結びて芭蕉枯れ、花咲く栗も亦

枯るる、騾馬は子を孕みてぞ死し、人は貪のためゆえ滅ぶ。

三。或る日、世尊は王舍城に托鉢せられたが、提婆も亦その巷に行乞していた。世尊は遙かに彼を見て其處を立ち去ろうとせられると、阿難問い奉るよう。「何ゆえ此處を去り給うのでありますか」。世尊。「提婆が此巷にあるから避けようと思う」。「提婆を恐れ給うのでありますか」。「否、彼を恐れるのではない、惡人に遇うてはならないからである」。「それでは、提婆を去らさせたらよいではありませんか」。「去らすにも及ばぬ、彼の思いのままに振舞わせるがよい、阿難よ、愚かの人に遇うてはならぬ、愚かの人と事を共にしてはならぬ、要らぬ論議を交えてはならぬ、愚か者は自ら惡を行い正しい律に背いて、日に增し邪しまの見を募らせてゆくものである。提婆は、今利養を得て心が憍つている、ちようど惡狗を鞭つようなもので、鞭うてば打つほど兇惡しくなつてゆくだけである」。こう、仰せになつて、阿難をつれて他の巷に托鉢せられた。

片方、提婆は進んで世尊に代つて教團を統べようと企てた。この時、目連は支提の國にあつたが、提婆に逆心のあることを聞いて、驚いて竹林精舍に赴き、この趣きを世尊に申上げると、世尊は、「もうとくに知つている」と仰せられた。提婆は、それとも知らないで、腹心の弟子の俱迦利、乾陀漂、迦留羅提舍、三聞達多などを隨えて、竹林精舍へ急いだ。世尊は彼等の來たのを見られ、「愚かな彼等は私に向い、自らを讃めてその企を語るであろう」と仰せになつた。目連は再び支提國へ歸つた。提婆の一行は世尊の御許に詣で、禮をなして申し上ぐるよう。「世尊はもう年老い、力も衰えさせられた、弟子達を教養せられることも痛痛しくおわすことかと思います。今より後は、私が世尊に代つて、弟子達のために法を說くでありましよう、世尊は唯、禪定を御樂しみ下さい」。

世尊、告げ給うよう。「提婆よ、私は舍利弗、目連のような、智慧明かに行圓かなる聖者にすら、まだ此大衆の敎養を委ねてはいない、どうして汝のように、利養のために他の唾を喰うようなものに、此大衆を委ねることが出來よう」。

この嚴しい世尊の御言葉に、提婆は一言を申上ぐることも出來ないで、悄然として御前を退いた。そして心に深く怨を懷き、「世尊は大衆の前で舍利弗と目連を讃め、私を辱しめられた、この怨はいつか報いねばならぬ」。

四。彼はある日、教團の規律の緩んでいることを口實として、五つの新らしい規則を設けたいといつて、世尊に願い出た。

一、林の中に住み町の邊に住んではならぬ。二、戶毎に食を乞い招待の供養を受けてはならぬ。三、終生、糞掃衣を着ねばならぬ。四、樹下に住み屋舍に眠つてはならぬ。五、肉を食べてはならぬ。

然し、徒らに嚴しい規律を設けて行爲を縛ることよりも、心の垢を除くことを主としておられる世尊は、提婆のこの申出を許されなかつた。そして直ちに舍利弗を召し

て仰せらるるよう。「今より、提婆の組の者の處に行つて、彼の五つの則を受けるならば眞の教に違うものであると申し傳えよ」。舍利弗。「世尊、私は先に提婆を讃めたことがあります、今また毀るに堪えません」。世尊。「讃めるも實なれば毀るも實である、謬つたものは正さねばならぬ」。舍利弗は「理ある仰せを畏み、提婆の徒衆の處に赴いてその由を述べた。彼等はみな提婆の一味のものであるから、互に語るよう。「ああ世尊の弟子達も、提婆尊者が手厚い供養を受けるのを見て、嫉を起している」。舍利弗は又王舍城に入り、信者の人達にもこの事を告げた。

然し提婆は、その新しい規則を以て進もうと心を決め、その弟子の中で尤も怜悧しい三聞達多と計り、布薩の日にその新しい規則を唱えて、人人の賛同を求めた。ちようど、其會に新たに出家した五百人の毗舍離の人があつたが、まだ教團の規律を知つておらない爲に、この新しい規則に同意をした。その時舍利弗、目連等の偉い弟子は居なかつたが、阿難は上衣を着けて座から立ち、この新しい規則は世尊の定められた律ではない、諸の長老達よ、もし私の言を認めるならば、上衣を着けてお立ち下さいと申した。六十人の長老達は阿難の言葉に隨うた。然し提婆は五百人の新しい弟子を得たので、諸長老達に、教團を離れることを告げ、弟子等を隨えて、王舍城の西南十數里の處にある伽耶山へ赴き、そこで弟子等の教養をしようと企てた。

五百の新しい弟子達は提婆に拉られて去つたことは、少からず教團の人人の心を動かした。この時、舍利弗、目連は世尊の御許を受けて奪われた弟子達を救い出そうと、伽耶山に赴いた。中には、「ああ、あの兩人の長老達も提婆の弟子となるのであるまいか」と、泣き出すものすらあつた。世尊は、氣遣う弟子達に、「汝等、憂うるには及ばぬ、兩人は必ず彼處において法の威德を現わすであろう」と語られた。

五。舍利弗、目連の兩人が伽耶山へ着いた時は、ちようど提婆の說法の眞中であつたが、彼は遙かに兩人の來たのを見て、喜び迎え、「卿等は先に、私の新しい規則を認めなかつたが、今はよくも私の意を了つて來てくれた」といい、やがて、舍利弗に告げて、「私はいま勞を覺えるから、卿は私に代つて法を說かれるが善い」と、いつも、世尊のせられるような態度に出で、自らは大衣を四つに疊んで右の脇を下にして臥した。その時、目連は先ず神通を現わし、舍利弗は次いで法を說いた。五百の弟子達は夢の醒めたように先の謬を悔い、直ちに、兩人に連れられてこの山を後にした。三聞達多は提婆を呼び覺し、舍利弗、目連が五百の弟子を連れ去つたと叫び、提婆は驚いて覺め、「汝、惡人よ、我が弟子を奪い去つた」と罵り、大地を踏んで怒り狂い、鼻より熱い血を吐いた。

舍利弗、目連が五百の弟子を連れて歸つたことは、餘りに大きな驚を教團に與えたので、世尊はために一つの本生譚を說かれた。

「弟子等よ、古、拘和離とゆう弓術の師があつた。その弟子の散若は、弓の提り方と矢の番え方を六年の間學んだが、一度も射たことはなかつた。或る時試みに大きな樹を射ると、矢は美事に樹を射通して深く土の中に入つた。師は喜んで、『汝は、弓術の奧儀を得た、今より行つて往來の人人を惱ます大賊を夷げよ』と、一挺の弓に五百本の金の箭を添え、更に一人の美しい女と一輛の馬車とを與えた。彼は師の命を畏み、美女と車を同うして賊のいる處に向うた。

五百人の手下を隨えた賊の帥は、往來の人人を待つていた、そこへ、散若の車が來た。賊の帥は手下を制えて手向うことを止めさせた。やがて車より下りた美女は、手に金の鉢を持つて賊に食を求めたが、彼等は美女と金の鉢とを見て欲心を止めることが出來なかつた。然し賊の帥は尙逸る手下を制えて、多くの美味を金鉢に盛らせた。彼の女は重ねてその所得を分けて呉れとゆう。手下は堪え兼ね、車の上の散若に向うて突き進んだ。彼は車を右左に馳せ、一本の箭に一人を仆しつ四百九十九人を仆して最後に一本を餘した。然るに賊の帥の妻が見えぬので、散若は美女を裸にして樹の下に逍遙わせた。すると流石の賊帥も、心を動かして妻を現わし、ついに散若に射殺されるに至つた。

弟子等よ、その時の散若は舍利弗、美女は目連、五百の賊は五百の新しい弟子、賊の帥は提婆であつて、弓の師匠は私であつた」。

六。提婆が教團から分れて後間もなく、世尊は弟子等に語り給うよう。「弟子等よ、私は前に、樹の芯の譬を說いたことがあるが、この我等の惱み苦しむ生、老、死、憂、悲、苦、惱を無くするために出家しながら、供養と尊敬と名譽とを得て、心憍ぶり滿足つて、自らを讃え他を毀るのは、淸かな行の枝葉を取つて樹の芯を得たと思う愚かさであり、放逸に流れて苦惱に陷るものである。又、美しい戒行が淸かな行のめあてではない、堅固した禪定も淸かな行のめあてではない、明かな知見も淸かな行のめあてではない、動かぬ心の解脫こそ淸かな行のめあてである。これが終である。

供養と尊敬と名譽とに心揚らず、美しい戒行に醉わず、堅固した禪定に惑されず明かな知見に憍らず、放逸にならずに益す道に進んで動かぬ心の解脫を得るのが、樹の芯を求めて樹の芯を得たものである。この解脫から退墮するとゆうことはない。弟子等よ、供養と尊敬と名譽とは淸かな行のめあてではない、美しい戒行が淸かな行のめあてではない、堅固した禪定も淸かな行のめあてではない、明かな知見も淸かな行のめあてではない、動かぬ心の解脫こそ淸かな行のめあてである。又堅固した禪定をして、心憍ぶり滿足つて、自らを讃え他を毀るは、淸かな行の內皮をとつて樹の芯を得たと思うものであり、同じく放逸に流れて苦惱に陷るものである。又、明かな知見を得て、これに眩んで心憍ぶり、自らを讃え他を毀るは、淸かな行の樹の肉を切り取つて樹の芯を得たと思うものであり、同じく放逸に流れて苦惱に陷るものである。

七。その頃のことである。頻婆娑羅王の子の無畏王子は、或る日、尼乾陀を訪ねたが、尼乾陀の云うよう。「王子よ、喬答摩の論議をお破りなさい、あなたの名聲は高く天下に響き渡るでありましよう」。「大德よ私のようなものが、どうしてあの恐しい力のある喬答摩の論議を破ることが出來ましよう」。

「王子よ、まず喬答摩の處へ行つて、『佛は他人に快からぬ語を云われるか』とお聞きなさい。若し、それを認めるならば、『それならば、佛は凡俗の人と何の區別があるか』と攻められるがよい。又、そうでないとゆうならば、『佛は何故に、提婆は長い間地獄に沈むべきもの、如何にしても救われないものと、提婆の腹立つ語を語られたか』と詰られるがよい。王子よ、喬答摩はこの兩叉に押えられて、身動きすることが出來ないでありましよう」。

王子はうけごうて世尊の許を訪れたが、時を計つて明日に廻すが善いと心附き、世尊とその三人の弟子とを明日の食事に我が家へ招いた。翌る日世尊が王子の家に赴かれ、食事が終つたとき、王子は低い座を取つて世尊に對い、「世尊は他人に快からぬ語を語り給うか」と尋ねた。「王子よ、これは一概に云うことは出來ない」。「世尊、茲で尼乾陀は敗けました」。「王子よ、それはまたどうしてか」。「世尊、實はこのことは尼乾陀の那吒弗多の入智慧で、世尊の論議を破ろうためでありました」。王子は、茲に昨日からの企を委しく申しあげた。

八。その時無畏王子の膝に、かれの幼い子供が抱かれていた。世尊は仰せられるよう。「王子よ、若しあなたの油斷か、乳母の不注意のために、この幼兒が木片か陶器の破片を口に入れたら、如何になされるか」。「勿論取り出します、一度で出來ぬならば、左手で頭を押え、右手の指を曲げて口に入れ、血を出しても取り出します、それも子供が可愛いからであります」。

「王子よ、その通り、佛は他人に快からぬことで、眞實を缺き、利益にならないことは語らない、假令眞實であつても利益にならないことならば、他人に快からぬことを語らない、佛は眞實であつて利益になる事なれば、よき時を見て、他人に快からぬことでも云うのである。それは、ただ人人の生を愛で憐むためである。」

「世尊、刹帝利、婆羅門、居士、出家など各の階級の賢い人人が、豫め問を設けてお尋ねいたしまするが、世尊はこのように尋ねられたらこのように答えよう。この問に對うてはこの答をしようと前から考えて置かれるのでありますか、それとも、その場で直にお答えになるのでありますか」。

「王子よ、あなたは車のことに委しい知識を持つていられるであろうが、人から車のことに就て尋ねられた場合、あなたは豫め、常に答を設けて置かれるか」。「世尊、私は車のことは委しく知つて居りますから、いかような問にも用意なしに即座に答えることが出來ます」。「王子よ、その通り、佛は法界のことをよく知つて居るから、何人の問にも即座の答が出來るのである」。

無畏王子は、世尊の教を喜んで、生涯信者となることを誓うに至つた。

第二節　阿闍世の簒奪

一。提婆の教團は五百人の弟子を取り返されて、再び盛り返しのつかぬほどの打撃を受けた。今や頼とするのは、阿闍世太子のみである。彼は一日、太子を訪れて申すよう。「太子よ、父王はいつまでも位に卽いて居られるように見える、父王の生きていられる間、御身は位に卽くことは出來ぬ、父王の死なれて後にたとえ王位に卽かれても、その樂は甚だ短い、されば一日も早く父王に代つて王位を繼がれるがよい、私も亦喬答摩を害うて法の王となりましよう。かくて新王と新佛が相並んで、摩竭陀の國を治めることは樂しいではありませんか」。

太子、答えるよう。「父母の恩の重いことは日や月にも勝つている、その長いお育てには報い難い、それに師はどうして、このような逆さごとを勸められるのであるか」。けれども提婆は、言葉を巧みに太子の意を詐かし、ついにその勸に從わせるに至つた。

初め頼婆娑羅王の夫人韋提希は、王の中年を過ぎた時に姙娠になつたが、產前に、王の肩の血が飲みたいとゆう奇しい病に罹り、日毎に瘦せ衰えた。王はその理由を聞いて自ら肩の血を絞つて夫人に飲ませた。相師はこれを占うて、「生れる子は父王を敵とするであろう」といつたので、夫人は、幾度か墮胎そうとしたけれども、王の止める所となつてついに生み落した、それが阿闍世である。この生れぬ先きに父の怨となつたとゆう相師の言葉によつて、阿闍世、卽ち未生怨と名をつけられた。提婆は、このことを語つて、その意を迷わせたのである。

一日、太子は密かに利き劍を帶びて王宮の門に進んだが、しかし、内に懷いた惡逆の心はその五體を戰かさせて、思わず地に倒れた。守門の人人は太子の取り亂した常ならぬ有樣を見て故を問えば、「提婆の勸によつて父王を殺そうと思うのである」とゆう。群臣は驚いてこのことを大王に申し入れ、その指揮を仰いだ。王は一人の太子を殺すに忍びず、子の意に任せて、王位を讓るに至つた。けれども、太子は再び提婆の勸に從うて、父王を捕えて宮殿に押し籠め、その食を絕つに至つた。

二。母后韋提希夫人は浴して身を淨め、蜜を麨に和ぜて身に塗り、牢獄に入つて大王を見ると、面はやつれ肉は落ちて、悲しむすべもないほどに衰え果てている。夫人は涙を揮うて、「まことに、世尊の說き給うように、榮華もつねなく罪の報が襲うてまいりました」と云えば、大王は、「食を絕たれてからこのかた、飢が久しくつずくので、幾百の蟲が腹の中を搔き亂すように苦しい、血も肉も失せはてて命も盡きようとしておる」と云い、絕え入るばかりに、咽び泣いた。夫人は身に塗つた麨蜜を集めて勸めると、王は貪るように食べ了つて、涙と共に遙かに世尊のまします所に向い、稽首いて申しあぐるよう。「世尊の宣うように、世の榮華は久しく保ちがたく、夢幻のようであります」。更に夫人に向い、「私は位にあつた時は、國は廣やかに衣食は意の

ままに足り、何一つ缺くることもなかつたが、今や獄に捕えられて、飢に死のうとしている。我が子は邪の師に迷い、世尊の御教に違うておる。私は、死を懼れることはないが、唯面り世尊の御教を受けず、又舍利弗、目連、大迦葉などの御弟子達と道の話を語りおうことの出來ないのが殘り惜しい。まことに世尊の說き給うように人間の恩愛は、ちようど群鳥が一夜を木の梢に宿つて、曉にはそれぞれ別れ飛び、定めの禍福をうけるようなものである。尊者目連は心の垢が除こり、神通自在の證を得ていながら、某の婆羅門に嫉まれて、撲れたこともある。況して心の垢のある私が、この憂き目に逢うのは普通のことである。殃の人を追うのは、影が身を尋ね、響が聲に答えるようなものである。御佛に遇い奉ることは難く、その御教を聞くことも難い、又、御教によつて仁をしき、民を治めることも難い。私はいま、命終つて遙かな所へゆくであろう。しかし夫人よ、苟も心あるもので、世尊の御教を奉せぬものはない、汝も愼んで教を守り、來るべき禍を防ぐがよい」。夫人は却つて王の教誡を受けて、身も世もあらず泣きくずれた。

三。王は更に掌を合せて、敬しく靈鷲の山に向い、遙かに世尊を禮して申しあぐるよう。「世尊、目連尊者は私の親しい友であります、どうぞ御慈悲をもつて、私に信者としてのなすべき道を教えて下さい」。

その時、目連は隼の飛ぶように王の所に赴き、每日信者の道を說き、世尊は又、富樓那を遣わして王のために法を說かしめ給い、かようにして二十一日の間、王は麨蜜を食い、法を聞くことが出來たので、顏色も穩かに悅びの色が滿ちて來た。

第三節　韋提希夫人

一。阿闍世王は、父王の門を守る者に問う。「父王はまだ生きて居られるか」。答えて云う。「國の大夫人は御身に麨蜜を塗り、瓔珞に漿を盛つて大王に捧げ、目連、富樓那などの佛の弟子達は、空から來て大王のために法を說いて居りますので、どうすることも出來ません」。

阿闍世王は、この言葉を聞いて、母の仕打を怒り、「母とても、國法に觸れた賊と一所にいるならば國の賊である、又、惡い出家達は呪術をもつて、よくもこの惡王を長い間活かしておいたことである」といつて、劍を拔いて韋提希夫人を殺そうとした。

その時、大臣の月光は、名醫の耆婆と共に王を禮し、「私達は吠陀の經典の說くところによつて、天地開けてこのかた、惡王が位を貪るために、その父を殺した者は一萬八千人もあると聞いておりますが、しかし無道にも母を害ねたものは一人もありません、王がこの逆さ事をなさるならば、王族を汚すものと云わねばならぬ、私は聞くに忍びません、かかる業をなすものは惡魔であります、此處にあるべき方ではありません」。

二人は劍に手をかけ後足に退きながら言い切つた。阿闍世王は驚き怖れて耆婆に云うよう。「汝は私のために力を盡さないのか」。耆婆ゆう。「母后を害い奉つてはなりませぬ」。

王は流石にその過誤を悔いて助を求め、劍をすてて、內官に命けて、母后を後宮に押しこめた。

二。その時、韋提希夫人は我が子のために閉じ籠められ、愁に瘦せ衰え、遙かに靈鷲の山に在す世尊を禮し奉つて、申しあぐるよう。「嘗て世尊は、目連尊者、阿難尊者を遣わして妾を慰めて下さいました、妾は今憂に閉されております、世尊は威重くましまして見奉る由もありません、どうぞ目連、阿難の二尊者に逢わせて下さい」。

雨とはふり落つる淚に咽んで、遙かに世尊を禮し奉ると、まだ頭をあげない間に、世尊は夫人の心をしろしめして、空を踏んで王宮に降り給うた。夫人が頭を擧げて見奉るに、世尊の御身は金色に輝き、目連は左に、阿難は右に侍り、神神は空の中にあつて華を雨らした。夫人は自ら瓔珞を斷つて大地に身を投げ、泣きくずれて世尊に申すよう。

「世尊、妾はどうした罪の報で、このような惡い子を生み、また世尊は、どうした因緣で、あの提婆と親戚であらせられるのでありましよう。世尊、どうぞ妾の爲に、憂惱のない道を教えて下さい、妾は、この淺ましい惡い世の中が嫌になりました、この世は地獄、餓鬼、畜生のみちみちた善くないものの聚であります、この後、妾は惡い聲を聞いたり、惡い人を見たりいたしとうはありません、妾はいま、世尊に向い奉り、このように身を大地に投げ出して、哀を求め懺悔に咽んでおります、どうぞ世の光に在ます世尊、妾に淸らかな御國を見せて下さい」。

三。その時、世尊は眉間より光を放ち給うに、その光は金色に照り映え、普く十方の量りない國國を照し、再び御頂に還つて金の臺と輝き、あらゆる佛の淸らかな國國が、その中に現われた。或ものは七つの寶にて造られ、或ものは蓮華と美しく、或ものは玻璃の鏡とあざやかに輝いた。夫人は之を見了つて、世尊に申すよう。

「世尊、是等の國國は何れも淸らかな光に滿ちておりますが、妾は極樂世界の阿彌陀佛の御許に生れたいと願います、妾に思惟することを教えて下さい、妾に正しく受けることを教えて下さい」。

その時、世尊がほほ笑み給うと、五色の光がほとばしりでて頻婆娑羅王の頂を照し王は閉じこめられてありながら、心の眼は障なく遙かに世尊を見奉り、恭しく禮をなしたが、迷の絆は自らに解けて、證に至る身となつた。

世尊、韋提希夫人に告げ給うよう。「汝は知らぬか。阿彌陀佛はここより遠くにはましまさぬ。汝は諦かに淨らかな業から出來上つている阿彌陀佛の極樂世界を念い浮べるがよい。彼の國に生れたいと思うならば三つの福業を修めよ。一つには父母に孝に、師に仕え、慈ぶかくて、殺生、偸盜、邪婬、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見の十の不善をなさぬこと、二つには、佛と法と僧伽とに歸依し、すべての戒を守り、威儀をただしくすること、三つには、道を求むる心を起し、ふかく因果の理を信じ、

經を讀んで人に道を勸めること、夫人よ、この三は淸き御國に生れる淸き業である。過去現在、未來の佛達もみなこの三を正しい因として證を獲られたのである。

四。世尊は更に、阿難及び夫人に告げたもう。「汝等諦かに聞き、善く思うがよい。私はこの世後の世の、すべての、煩惱の賊にそこなわれる人人のために、淸い行を說くであろう。まことに夫人はよくもこの事について問を起したことである。阿難よ、御身は佛の語を持つて廣く人人のために宣べるがよい。私はいま夫人をはじめ後の世のすべての人人に、西の方、極樂世界を觀せしめ、佛の力によつて、あの淸らかな國を、ちようど明かな鏡にその面影を見るように見せしめるであろう。そしてその國の妙なる樂を見る時に、心は歡に滿ち、ものみなに生死なしと說く法に、信心を起すことが出來るであろう」。

世尊は更に、韋提希夫人に告げ給う。「御身は心弱くかつ劣つている、まだ天眼を得ていないから、遠く觀ることは出來ぬ、しかし佛に奇しき方便があるから、今汝をして見せしめるのである」。

夫人申す。「世尊、妾はいま佛の御力によつて、彼の安樂淨土をおがみましたが、後の世、佛の光を失うて惡に濁り、老に惱み病に苦しみ、死を怖れ別を悲しむ人人はどうして、彼の御國を見奉ることが出來るでありましよう」。

世尊、のたもう。「汝等、諦かに聞き、よく心に思え、私はいま汝等のために、苦を除く法を說くであろう、汝等、之を持つてすべての人人に說きひろめよ」と仰せらるると共に、阿彌陀佛は空の中に現われ給い觀音、勢至の二菩薩は左右に立たれ、御光の嫩んなことは、紫金の光も比ぶるには足らぬ。夫人申すよう。「世尊、妾はいま佛の御力によつて阿彌陀佛と二菩薩とをおがみ奉りました、後の世の人人は、いかようにして觀たてまつるでありましよう」。

五。世尊告げ給う。「まず、阿彌陀佛の身相を心に浮べよ。千萬の金色に輝き給い、御身の高さは濱の眞砂の數程にも高く、御眼は大海の水も比べものとならず、御身に八萬四千の相好あり、一つ一つの相好に、八萬四千の光あり、一つ一つの光は偏く十方の世を照し、念佛する人をばみそなわして、攝めとつて捨て給わない。

この佛の御身を見奉ることによつて、佛の御心を見奉るのである。佛の御心とは大いなる慈悲そのものである。あらゆる緣とゆう緣によつて人人を攝め取られる。其故佛を想い奉れ、佛は法界に滿つる御身に在ますから、すべての人人の心の中にも入られる。されば汝等が、心に佛を想いたてまつる時、その心はまことに圓かな相好を具えた佛である。その心佛となり、その心そのままに佛なのである。すべてに行き亙る正しい智慧の海は心から生れる。故に汝等、心を一つにして彼の阿彌陀佛を明かに思い浮べるがよい。

また、阿彌陀佛には量りない化身がましまして、つねに觀音、勢至の二菩薩とともに、念佛する人の許に來り給わる。まことに阿彌陀佛の御身は法界にみちたもうて邊

りなく、凡夫の心では思い及ぶ所でないがその本願の力によつて、憶い奉るものは、必ず拜むことが出來るのである。ただ假の相好を想うさえも量りない福を得る、まして相ととのう眞の佛を觀たてまつるにおいては、尙更である。そしてかの佛の神通は心のままにていらせられ、或る時は大いなる身にて虛空に滿ち、或る時は小さき身にて一丈六尺の御姿と現われ給い、十方の國において量り知られぬ自然の力を現わし給うのである」。

六。世尊は更に、阿難及び韋提希夫人に告げ給う。「彼の阿彌陀佛の御國に生れる者に九種の品別がある。その上の上の人は、彼の國に生れたいと願うて三つの心をおこせば、直ちに生れることが出來る。三つの心とは、一つには至誠の心、二つには深く信ずる心、三つには思をめぐらして生れたいと願う心である。この三つの心を具えたものは、必ず彼の御國に生れる。又、三種の事がある。一つは慈ふかく、ものの命をとらず、戒を守ること、二つは佛の說いた經を讀むこと、三つは佛と法と僧とを念い、戒と施と勝れた果報とを念うこと。是等の功德を具えて一日より七日に亙り、彼の御國へ生れたいと願うならば必ず生れることが出來る。かかる人は勇しく勤め勵むので、阿彌陀佛は觀音、勢至の二菩薩をはじめ、多くの伴人を隨え、大きな光を放つてこの人の身を照し、御手を授けて迎え給い、多くの菩薩は又、ひたすらに讚めたたえてその心を引き立てる。この人歡に勇んで忽ち彼の國に生れ、御佛を見奉り、輝く寶の林から說きいでる自らなる御法を聞いて、ものさながらの相を悟り、暫くの間に十方の佛達にめぐりつかえてその身の證ることを聞き、還つて數しれぬ敎の主となる。

上の中の人とは、必ずしも經を讀み諳んずることは出來ぬにしても、善くその意味を解り、奧深い眞諦の理に向うても心驚かず、深く因果の理を信じ、佛の敎を謗らない。これらの功德をさしむけて彼の安樂淨土に生れたいと願うならば、此人の命終る時に、阿彌陀佛は觀音、勢至の二菩薩を初めとし、多くの伴人に圍まれて現われ給い、紫金の臺に此人を坐らしめ一念の間にかの御國に生れしめ給い、生れたものは光の中に眼開け、ものみなの聲を深い眞諦の理と聞き、七日を過ぎると佛の證を退かぬ身となり、直ちに佛達にめぐりつかえてその御許に思を凝らし、ものさながらの相にめざめて、其身の證るべき日を聞く。

上の下の人とは、因果の理を信じ、佛の敎を謗らず、ひたすら證を獲たいと願う。是等の功德をさしむけて彼の國へ生れたいとねごうならば、この人の命おわる時、阿彌陀佛は觀音、勢至の二菩薩をはじめ、多くの伴人を隨えて來り迎え、金の蓮華に坐らしめて彼の國に生れしめ給い、七日にして蘭げに御佛を見奉り、三七日の後明かに御佛を仰ぎ、あらゆる聲とゆう聲の盡く法を說くのを聞かせられる。そして、十方の佛達にめぐりつかえてあらゆる敎を明かにし、盡きせぬ法の悅に入るのである。

七。次に中の上の人とは、殺生、偷盜、

邪婬、妄語、飲酒の五つの戒を守り、五つの逆罪や、さまざまの過をなさず、是等の善根をもつて彼の御國へ生れたいと願うならば、此人の命おわる時、阿彌陀佛は多くの伴人を隨え、金色の光を放つて來り迎えたまい、世は苦にして空であり、常なくて無我であることを說き給うと、此人歡に心おどり、輝く蓮華につつまれて彼の國に生れ、その華の開くとき、聲聲は皆四聖諦の法をとき、直ちに獨覺りの證に入つて、神通自在なる身となられる。

中の中の人とは、僅かに一日一夜に亙つて樣樣の戒を守り、威儀を亂さず、これ等の功德をもつて彼の國に生れたいと願うならば、戒の香はその身に匂うであろう。此人命おわる時、阿彌陀佛は多くの伴人を隨えて金色の光を放ち、來り迎え給い、寶の蓮華につつまれて直ちに彼の國に生れ、七日の後華が開くと、掌を合せて御佛を讃え、法を聞いて歡に心おどり、遂に獨覺りの證に入る。

中の下の人とは、父母に孝をつくし、すべての人人に慈を施し、命終る時に善き友によつて、阿彌陀佛の國の樂と、佛の本願のこころを聞き、直ちに彼の國に生れて、七日の後、觀音、勢至の二菩薩に遇いたてまつり法を聞いて歡び、遂に獨覺りの悟に入る。

八。下の上の人とは、佛の敎は謗らないが、愚のために多くの罪を造り、少しも慚愧の思をいだくことはない。命終る時善き友によつて、樣樣の經の名の讚歎を聞いて重い罪を除き、更に又その友の敎によつて手を合せて南無阿彌陀佛と稱える。かように佛の御名を稱えることによつて迷に導く罪を滅し、彼の佛のつかわし給う化佛と化菩薩の迎えを受け、室に輝く光を觀て心歡び、命終つて彼の御國に生れ、七七日を經て、觀音、勢至の二菩薩の敎を聞いて信心を起し、遂に多くの法門の主となつて歡び多い位に入る。

下の中の人とは、愚のために種種の戒を犯し、敎團の所有物や供物さえも盜み、自分の利益や名譽のために法を說いて少しも慚愧の思がない。此人命おわるにあたつて八の方から迫り來る地獄の猛き火に戰くとき、善き友の慈によつて、阿彌陀佛の大きな力と德と光とを讚えるのを聞いて信ずると、長い迷に入るべき重い罪が除こり、地獄の猛き火は淸しい風となり、化佛化菩薩に迎えられて、一念の間に彼の國に生れ、長い時の後に法を聞いて悟に至るべき心を起すようになる。

下の下の人とは、愚のために五つの逆罪十の惡罪などあらゆる罪をつくり、惡業にひかされて盡きぬ惡道の苦を受けるに定まり、命終る時、善き友來つて懇ろに、『御身苦せまつて佛を念い奉ることが出來ないならば、ただ南無阿彌陀佛と稱えよ』とゆう。此人、心を一つにして御名を稱えると、一聲一聲の中に、はてしれぬ迷に入る罪を除いて、一念のあいだに極樂世界に生れ、長い長い時の後、敎を聞いて證に至るべき心を起すようになる」。

世尊の說き給うこと終ると、韋提希夫人をはじめとして多くの侍女達は、みな極樂世界と阿彌陀佛及び二方の菩薩を見奉り、心は歡に溢れ、大きな悟は自からに開けて、ものさながらの相を見る事が出來た。そして世尊は、悉く彼等の證に至るべき日を告げたもうた。

九。世尊は、更に告げ給うよう。「若し人あつて、阿彌陀佛の御名を聞くならば、盡きぬ迷に入る罪を除くであろう、況して憶い奉るに至つては尙更である。げに、念佛する人は人の中の白蓮華である、觀音、勢至の二方の菩薩はその友となり、つねに道と離れず、はては淨土に生れるであろう」。

更に阿難に告げ給うよう。「汝、この語を持てよ、この語を持てとは、阿彌陀佛の御名をたもてとゆうことである」。

法を說き了つて世尊は、靈鷲の山に還り給い、阿難は廣く人人のために此敎をといて、聞く人人をして悉く信じ歡ばしめた。

第四節　阿闍世の煩悶

一。一方、提婆は阿闍世王に請うて六十四人の兵を選び、初めに二人を遣わして、世尊を殺さしめ、餘の道から歸り來れといい、更に四人を遣わして、その二人の歸路を要えて殺さしめ、次に八人を遣わして、先の四人を殺し、乃至その數を倍にして、六十四人として先の三十二人を殺し、かように知らしめないようにしようと企んだ。

この時、世尊は靈鷲の山の崛を出でて遊歩しておられた。二人の兵は鎧をつけ刀を執つて世尊に近ずこうとしたが、威神に打れて進みかね、驚いて尊顏を仰ぐと、御態の寂まり給うこと、馴された大きな象のよう、御意は澄んだ水のようにいらせられる。二人は思わず隨喜の念に打れ、刀を捨てて御前に進み、樣樣に御敎を受けて法の眼が開け、却つて三の寶に歸依するものとはなつた。やがて別の道から提婆の許へゆき、世尊の威神力を告げて、害い奉ることは出來ぬといつた。かくして提婆の企は、全く水の泡となつた。

彼は怒つて、自ら靈鷲の山に登り、大きな石を執つて、遙か山の上から、崛の邊りを歩かせ給う世尊を目掛けて擲つたが、その破片が世尊の御足に觸れて皮肉が破れ血は大地に流れた。しかし世尊は徐ろに崛に入り給い、大衣を四つに疊んでその上に右を脇にして臥され、一心に痛を忍ばれた。更に、驚き騷ぐ多くの弟子等のために崛の外に出で給い、「汝等、漁師のような喚を出してはならぬ、各その所に歸つて、意を專らにして道を修めるがよい、諸の佛は、あらゆる怨に打勝つている、かの轉輪王のいかなる敵にも害われることのないようにどのような敵でも佛に向つてその惡を加えることは出來ぬ」と仰せ給うた。その後、世尊の傷口は容易く治らないので、耆婆は傷口を切開いて、惡血を出して治し奉つた。

二。提婆は更に阿闍世王に請うて、大きな象を放つて世尊を害おうと企てた。象師に語るよう。「明日、喬答摩の來る道に、象を醉わせて放つがよい、彼は慢心をもつているから、避けることはないであろう、さすれば踏み殺されるに相違ない」。翌る朝、世尊は衣を着け、鉢を持つて城に入り、食

を乞い給うと、象師は遙かに之を見て、醉うた象を放つた。人人は世尊に餘の道を行かれるようにと請うたが、世尊は徐ろにその道を行き給うた。醉うた象は遙に世尊を見かけ、耳を奮い鼻を鳴して馳けて來た。しかし世尊は慈に心を浸して歌い給うた。

汝大龍を害う莫れ、大龍の世に出でるや難し、若し大龍を害わば、後の世、惡道に墮つるならん。

大いなる御慈の力に打れて、象は跪いて世尊の御足を抱き、退いて立ち去つた。見るもの、讃め歎えぬ者とてなかつた。

三。 頻婆娑羅王は夫人が押込められてこのかた、食を絶たれたので、僅かに窓を通して靈鷲の山の桑綠を仰ぎ、それを心の慰安としていたが、阿闍世はこれを聞いてその窓を塞ぎ、足裏を削つて立つことの出來ぬようにした。その頃阿闍世の子優陀耶が指先に瘡を患つて苦しんでいたので、王は懷に抱きかかえ、その膿を吸い取つた。丁度その時、傍らにいた韋提希夫人は之を見て、追想に堪えずしてゆう。「王よ、卿の幼い頃、之と同じ瘡を病み、父の大王は今の卿のように、その膿を吸われたことがあります」。阿闍世はこれを聞いて、父王に對うての瞋が頓に愛慕の念と變り、臣達に告げるよう。「もし、父王の生きておられることを告げる者があるならば、この國の半ばを與えるであろう」。人人は競うて、父の王の許へ奔つたが、王は遙かに躁がしい足音を聞いて、「彼等は私に重い刑を加えるのであろう」と驚き懼れ、苦しみ悶えて床に倒れ、そのままに息絶えた。

四。 世の樂に心眩んで、罪もない父王を死に至らしめた阿闍世は、いまや悔に心を嚙まれ、身は熱を病み、全身に瘡が出來、膿汁流れて、臭くて近ずき難いようになつた。自ら思うよう。「私は今この世に地獄の報を受けている、やがて眞の地獄の報がくるであろう」。母の韋提希は悲しんで、樣樣の藥を塗つたが、少しも癒えない。王は母に語るよう。「この瘡は心から出たもので、身から出たものではない、人間の力では治すわけにゆきません」。

阿闍世の病を聞いて、大臣達は代るがわる王の病の床を訪れた。月稱大臣は申すよう。「大王は、何故に顏容衰え、愁に鎖されていらせられるか、身の痛か、ただしは心の痛でいらせられるか」。王答えて、「傷しくも罪なき父王を傷うた私の身や心が、どうして痛まずにおられよう、前に智慧ある人から聞いたことがある、世に父母を殺すなど五つの逆罪を犯したものは、地獄を免れることは出來ないと、私はいま限りない罪を負うている、世に私の身と心を治してくれる良い醫はない」。大臣は云う。

愁苦しめば、愁は更に增しゆかん、眠りの滋きごと、色を貪り酒を嗜むも、同じことかし。

とゆう歌があります。大王よ、五つの逆罪を犯せば地獄に落ちると申されますが、誰が地獄を見てそのように申しました。凡そ地獄とゆうは、此世のことであります。王は世に良い醫がないと仰せられるが、富蘭那迦葉とゆう人が居ります。その人は勝れた智慧と禪定とをもち、淸らかな行を修め、限りない人人に證の道を說いて居られます。卽ち、世に惡業もなければ惡業の報もない、善業もなければ善業の報もない、上業も下業もないと說いておられる。大王よ、此師はいま王舍城に居られます。どうぞ、此師について身と心の痛をお治し下さい」。王は「もし、その樣に私の罪を治して吳れるならば、私はその人に歸依するであろう」と答えた。

五。 更に、德藏大臣が王を訪れて云う。「大王よ、何故に頰こけ、唇乾き、聲も皺枯れ、ちようど世を恐れる人のような、又は怨敵に襲われた人のような、淺間しい顏色をしておられまするか」。王云う。「私は今、どうして身も心も痛まないで居られよう。私は愚かにも心眩んで、惡人提婆の語に誑されて正しい王を傷い奉つた。私は嘗つて聞いたことがある。

父と母と、御佛と弟子達に、善からざる心もて、惡しき業を行わば、無間の地獄を免れじ。

私の心は地獄の怖に戰いている」。

大臣、申すよう。「大王よ、怖れ給うに及びません。世に出家の法と王の法の二種があります。王の法から申せば、父を害うて國の王となつても罪とはなりません。迦羅羅蟲は母の腹を破つて生れるけれども、それは生る法則のことゆえ、母の腹を破つても罪とはいえない。國を治める法もこれと同じく、よしや父や兄を殺しても罪とはいえません。然し出家の法から云えば、蚊や蟻を殺しても罪となります。それゆえ大王よ、愁え給うに及びません。茲に末伽梨拘賒梨子とゆう師があつて、一切智を備えて人人を我が子のように愍み、よく人人の心の惱を拔き取られます。この師の敎によると、人の身は、地、水、火、風、苦、樂、命の七つに分れ、此七つは變り行くものでもなく作られた者でもない、伊師迦草のように毀つことは出來ず、須彌山のように動くことはない。乳酪のように捨てられず、また、七つの各は諍うこともない。苦も樂も、善も惡も、または刄の力も、傷けられるものではない。何故かと云えば、此七つは、虛空のように礙えられることがないからである。命も亦害われることはない。何故かと云えば、害う者も、害われる者も、作る者も、受ける者も、說く者も、聽く者も、念う者も、敎を持つ者もないからである。大王よ、彼の師はいつも此樣に法を說いて、人人のあらゆる重い罪を除でおられます。大王がもし、此師の許にゆかれるならば、凡ての罪は自らに消え去りましよう」。

王は、始の大臣に答えたように答えて、その師を訪ねようとはしなかつた。

六。 更に實德大臣は申すよう。「大王よ、何故に瓔珞を脫ぎ、髮を振り亂し、風に吹かれる花樹のように、怖と不安に慄え戰いておられるのでありますか」。王は又、前のように答えた。

大臣ゆう。「大王よ、もし父王が出家で在したならば、害うて罪ともなりますが、國の治めのために害われたことゆえ罪とはなりません。大王よ、どうぞ意を留めて御聽き下さい。あらゆる人人は餘業によつて生死を受ける。卽ち、先王は自らの餘業

によつて殺され給うたので、大王には何の罪もありません。今、刪闍耶毘羅胝子とゆう師が、海のような智慧を以て人人の疑を斷つて居られます。其師の說く所によるとあらゆる生類の中で、人の王は意のままに何事をなしても差支えない。いかなる惡を行うても罪とはならぬ。さながら火が淨いものも穢いものも擇ばず燒くように、又大地が淨いものにも穢いものにも、喜も瞋も持たないように、人の王の所行は全くこれと同じい。又秋に切られた樹が再び春になつて芽ぐめば、この切ることに罪が成立つ筈がない。人の命もこれと同じく、此處に生れて此處に生れる、再び生れるものに何の罪があろうか。人の禍福は此世の業に依るものでなく、ただ過去の業を現在に受けるだけである。現在には因がなく又未來には報がないと。大王よ、願わくは此師の許に赴いて、身と心の病を御治し下さい」。

七。更に、悉知義大臣は申すよう。「大王よ、なにゆえさように淺ましい御姿とならせ給うたか。御身の痛か、または御心の痛か」。王は又前のように答えると、大臣はゆう。「大王よ、愁をお捨て下さい。古、羅摩王は父を害うて位を紹ぎ、また拔提大王、毘樓眞王等の多くの王者も、皆その父を殺して位を紹いだが、一人として地獄へ落ちた者はない、又、今の毘瑠璃王、優陀耶王等もその父を害うて位に卽いたが、一人として惱み煩うたものはありません。凡そ、地獄とか天界等とゆうても、誰も覓て來たものはありません。唯あるものは人間と畜生との二道であります。而もこの二つとても因緣によつて生れたものではない。因緣がなければどうして善惡とゆうものがあり得ましよう。今、阿耆多翅舍欽婆羅とゆう師があつて、最上智をもち、金と土を等しなみに見、刀にて右の臂を刳る人にも、栴檀を左に塗る人にも、同じ親みの心をかけられます。此師こそ世の良き醫であります。立居にも臥すにも禪定にあり、弟子達に語るよう。自ら作すにも他に作さしむるにも何の罪もない。恒河の南に大きな施をなし、恒河の北に人人の命を取つても、福も來なければ、罪を招くこともないと。此師はいま王舍城にいられます。どうぞ此師の許に赴いて敎をお受け下さい」。

八。又、吉德大臣は申す。「大王よ、どうして面に光澤なく、國を失うた君のようにいらせられますか。今や國の四境には敵の憂はない。何故に愁に沈み給うか。多くの王子達は、何時になつたら王位に昇つて自在の力を振うことが出來るであろうかと考えているのに、大王はいま其願足り、この大きな摩竭陀の國を領め、その上、先王の遺された寶は、藏に滿ち滿ちております。只、縱に樂に浸り給えばよろしい。何を好んで苦を懷かれるのでありますか」。しかし、王の答を聞いて申すよう。「誰が地獄のことを申して大王を誑したのであろう。水は潤し石は堅く、風は動き火は熱い。もの皆は、自ら生れて自ら死ぬので、誰の所作でもありません。地獄とは賢しい人の作つた言葉で、地は地、獄は破ること、卽ち地獄を破れば罪の報はあり得ない。また地は人、獄は神で、生類を害うて天界に到るの意味、故に婆藪仙人は羊を殺して神祭の樂を得たと傳えます。又地は命、獄は長いこと、生類の命を取れば長い壽を得るとゆう意味であります。故に地獄なるものは實際はありません。大王よ、麥の種によつて麥を得、稻の種によつて稻を得、地獄を殺せば地獄、人を殺せば人を得るでありましよう。大王よ、私はいま殺すとゆうことを證明するでありましよう。若し、人に我があるとすれば、我は常に變ることのないものゆえ、殺すことは出來ぬ。それは壞れず縛られず、瞋らず喜ばぬこと虛空のようなものであります。さすればどうして殺すとゆうことがあり得ましよう。又若し我がないとすれば、もの皆は常なく一念毎に滅びつつあるわけであるから、殺さるる人も殺す人も、互に誰が罪を擔い得ましよう。大王よ、燒く火にも罪なく、樹を斫る斧にも、草刈る鎌にも、人を殺す刀にも、みな罪がないとすれば、どうして人にのみ罪があり得ましよう。大王よ、いま迦羅鳩馱迦旃延とゆう師が王舍城におります。一切智をもつて三世を見わし、恒河の水のようにあらゆる人人の罪を淸められます。今この師の敎によると、人を殺しても慚愧がないならば、虛空が濁り水を受けないように、惡獄に墮ちることはない。只慚愧があれば水が大地に入るように、地獄に入るであろう。あらゆる生類は自在天の造るところで、自在天が喜べば生類は安らかに、自在天が瞋れば彼等は惱むのである。その罪も福も自在天の造る所とすれば、どうして人に罪や福があり得よう。譬えば、工匠の造つた操人形の、行くも住るも坐るも臥するも、ただ一言さえ言うことはできぬようなもので、生類も之と異ることはない。こうした造化に誰が罪を擔い得ようと。大王よ、どうぞ此師の敎を受けて下さい」。

九。更に、無所畏大臣は申すよう。「大王よ、世に愚か者があつて、一日に百度喜び百度愁え、百度眠り百度寤め、百度驚き百度泣く。賢い人にはこうしたことはない。大王は何故に、侶を失うた旅人のように、導き手のない迷人のように、惱み苦しんでも來なければ、罪を招くこともないと。此師はいま王舍城にいられます。どうぞ此師の許に赴いて敎をお受け下さい」。

八。又、吉德大臣は申す。「大王よ、どうして面に光澤なく、國を失うた君のようにいらせられますか。今や國の四境には敵の憂はない。何故に愁に沈み給うか。多くの王子達は、何時になつたら王位に昇つて自在の力を振うことが出來るであろうかと考えているのに、大王はいま其願足り、この大きな摩竭陀の國を領め、その上、先王の遺された寶は、藏に滿ち滿ちております。只、縱に樂に浸り給えばよろしい。何を好んで苦を懷かれるのでありますか」。しかし、王の答を聞いて申すよう。「誰が地獄のことを申して大王を誑したのであろう。水は潤し石は堅く、風は動き火は熱い。もの皆は、自ら生れて自ら死ぬので、誰の所作でもありません。地獄とは賢しい人の作つた言葉で、地は地、獄は破ること、卽ち地獄を破れば罪の報はあり得ない。また地は人、獄は神で、生類を害うて天界に到るの意味、故に婆藪仙人は羊を殺して神祭の樂を得たと傳えます。又地は命、獄は長いこと、生類の命を取れば長い壽を得るとゆう意味であります。故に地獄なるものは實際はありません。大王よ、麥の種によつて麥を得、稻の種によつて稻を得、地獄を殺せば地獄、人を殺せば人を得るでありましよう。大王よ、私はいま殺すとゆうことを證明するでありましよう。若し、人に我があるとすれば、我は常に變ることのないものゆえ、殺すことは出來ぬ。それは壞れず縛られず、瞋らず喜ばぬこと虛空のようなものであります。さすればどうして殺すとゆうことがあり得ましよう。又若し我がないとすれば、もの皆は常なく一念毎に滅びつつあるわけであるから、殺さるる人も殺す人も、互に誰が罪を擔い得ましよう。大王よ、燒く火にも罪なく、樹を斫る斧にも、草刈る鎌にも、人を殺す刀にも、みな罪がないとすれば、どうして人にのみ罪があり得ましよう。大王よ、いま迦羅鳩馱迦旃延とゆう師が王舍城におります。一切智をもつて三世を見わし、恒河の水のようにあらゆる人人の罪を淸められます。今この師の敎によると、人を殺しても慚愧がないならば、虛空が濁り水を受けないように、惡獄に墮ちることはない。只慚愧があれば水が大地に入るように、地獄に入るであろう。あらゆる生類は自在天の造るところで、自在天が喜べば生類は安らかに、自在天が瞋れば彼等は惱むのである。その罪も福も自在天の造る所とすれば、どうして人に罪や福があり得よう。譬えば、工匠の造つた操人形の、行くも住るも坐るも臥するも、ただ一言さえ言うことはできぬようなもので、生類も之と異ることはない。こうした造化に誰が罪を擔い得ようと。大王よ、どうぞ此師の敎を受けて下さい」。

九。更に、無所畏大臣は申すよう。「大王よ、世に愚か者があつて、一日に百度喜び百度愁え、百度眠り百度寤め、百度驚き百度泣く。賢い人にはこうしたことはない。大王は何故に、侶を失うた旅人のように、導き手のない迷人のように、惱み苦しんでおられますか。大王よ、どうぞ愁の毒を生み給うな。抑も王者として、國のため民草のために、人の命を取つたとしても決して罪とはなりません。先王は出家を敬われたけれども、婆羅門に承える事はなかつた。その心は平等でない。心の平等を失つたものは王者とは云われぬ。今大王は、諸の婆羅門を供養するために先王を殺されても、何の罪がありましよう。又大王よ、世に殺すとゆうことはありません。元來殺すとは命を害うことでありますが、命は風氣のことで、風氣の性は害うことはできません。されば命は殺すことは出來ない、どうして罪となり得ましよう。いま王舍城に尼乾陀若提子とゆう師があつて、よく人人の機根を知りあらゆる方便に達して、世の盛衰に煩わされることはありません。淸い行を修めて、弟子達に說くよう。世に施もなく善もなく、この世もなく後の世もなく、父母もなく德者もなく、道もなく修めるとゆうこともない。ただ人は八萬劫を經れば生死が自らに止んで、罪ある者も、罪ない

者も、自ら等しなみに、解脱を得られるのである。ちようど四の大河が流れ流れて、自ら大海に入つて一つの潮となるように、人人も亦、解脱の境に入ると、あらゆる差別は失せるのであると。大王よ、願くは此師の教を受けて下さい」。

一〇。其時、耆婆とゆう大醫があつた。此人も亦、王の病の床を訪れて申すよう。「大王、安らかに眠ることが出來ますか」。王。「耆婆よ、私はいま、重い病に罹つている。正法を護り給うた父王に邪まな逆害を加えた。それから起つて來た重い病である。この病は、どんな大醫でも、呪法でも、また巧みな看病でも、療すことは出來ない。何故かと云えば、先王は法の如くに善く國を治められ、少しも罪の在さぬのに、私は邪まに逆害を加え奉つた。丁度水の中の魚を陸へ引き上げたような仕業である。私は嘗て智者から、身口意の三業の淸らかでないのは、必ず地獄に墮つるとゆうことを聞いたことがある。私は今、それである。どうして安らかに眠ることが出來よう。私には今、法の藥を說いて此病の苦を治してくれる妙じい醫が居ない」。

耆婆は之に答えて、申すよう。「善い哉、善い哉、大王は罪を犯し給うたけれども、今重い悔を起して、大きな慚愧の心を懷いていられます。大王よ、諸の御佛方は常に仰せられます。「二つの善い法があつて、人人を救う、一には慚で、二には愧である、慚とは自ら再び罪を造らぬようにする心、愧とは他人をして再び罪を作らしめぬようにする心である、又、慚は自ら內心に省みて恥る心、愧はその心が外に露われて他人に對うて愧ずることである、又、慚とは人前を恥じ、愧とは神に恥ずる心である、これが慚愧である、この慚愧の心のない人は人ではない畜生である、慚愧の心があるから、父母師匠を敬う心も起り、兄弟姉妹の秩序が結ばれるのである」と。大王が、今この慚愧を起させられたことは誠にうれしく思います。大王よ、今私の重い病を癒して呉れる賢者がいないと仰せられることはその通りであります。然し大王よ、よくお考え下さい。大聖の世尊こそ、世に最も尊むべき方であります。よく障を破ること金剛のような智慧をもち、人人のすべての罪過を滅して下さいます。この御佛世尊こそ、大王の重い病を治して下さらぬとゆう筈はありません」。

一一。その時、空の中に聲あつて云う。「大王よ、一つの逆罪を作ればそれに相當る罪を受ける、三の逆罪を作れば三つ倍になり、五つの逆罪を作れば五倍になる、大王の今迄の罪は、到底地獄に墮つることを免がれぬ、されば、一時も早く世尊の御許に赴け、世尊を除いては、卿を救うて下さる方は決してない」。

阿闍世は、この空の聲を聞いて大いに怖れ、さながら芭蕉の葉のように身をあげて慄い戰き、空を仰いでゆう。「おん身は誰方であるか」。空の中からは、元のように奏を顯わさないで、聲のみ聞こえた。「私は御身の父、頻婆娑羅である、耆婆のすすめに隨つて早く世尊の御許に行くがよい、ゆめゆめ邪見な六人の大臣の語に迷わされては

ならぬ」。

これを聞くと、阿闍世は悶絕れて大地に倒れた。すると身體中の瘡が一時に增して、その臭いことは以前にも倍すようになり、冷藥を塗つて治療をしても、瘡は華を開いたように割れて益毒の熱を吐き、少しも輕まることはなかつた。

一二。世尊は遙かにこの樣を觀わして、側らにあつた迦葉童子に告げたもうよう。「善男子よ、私は阿闍世王の爲に、命を延べて滅度に入らぬであろう。迦葉よ、汝にはこの秘密の意味がまだ解らぬであろう。何故かと云えば、私が『爲』とゆうのは、一切の凡夫のためとゆうことで、阿闍世は、すべて五つの逆罪を作つた人達の代りに出した迄である。私は、證り得た人人のためにこの世に生きているのではない。阿闍世とゆうは、ひろくあらゆる煩惱を具足えている凡夫を指すのである。また、『爲』とゆうは、いまだ佛性を見ることの出來ない人人のためのことである。佛性を見た者のために、私はこの世に生きているのではない。何故ならば、佛性を見たものは既に迷える人でないからである。阿闍世とゆうは、いまだ上なき菩提心を起さないすべての人人をひろく指すのである。また、『爲』とゆうは、佛性のことである。阿闍世は未生怨とゆう意味で、佛性の芽を生まないから、一日中いろいろの煩惱の怨を生むことである。煩惱の怨が起るゆえに佛性は見られない。もし煩惱を起さぬようになれば、本有の佛性を見ることが出來、從つて大般涅槃の證に住み得るようになる。これを未生とゆう、それで阿闍世と名けるのである。善男子よ、又、「阿闍」とは未生とゆうこと、未生とは、生れず滅びぬ涅槃の事である。また、「世」とは世の八法（利、衰、毀、譽、稱、譏、苦、樂）のことである。また、『爲』とは汚されない世の八法に汚されずに、限りもない永劫の間、滅度に入らぬ。この故に私は阿闍世の爲に、限りない時の間世に住まるとゆうのである。善男子よ、佛の秘密の語は思い識ることは出來ぬ。佛法僧の三寶も亦、思い識りがたいものである」。

一三。かくて世尊は、阿闍世のために、月愛三昧に入つて大光明を放ち給うと、この光明は淸らかに凉しく、遙かに阿闍世の身を照すに、全身の瘡は一時に跡形もなく癒えた。

阿闍世王ゆう。「耆婆よ、彼の世尊は神の中でも、最も勝れた神である、どうゆう理由で、この光明を放ちたもうたのであろうか」。耆婆答う。「大王よ、今この光明の瑞相は、王のためになし給うのでありましよう、王が先に私の病を治す醫師はいないと仰せられたから、世尊はまずこの光明を放つて王の身の病を療し、次に、心の病に及ぼさるるのでありましよう」。王。「耆婆よ、世尊も亦、私を見たいと思い給うであろうか」。耆婆答う。「譬えば七人の子供は皆變りなく可愛いが、その中の一人が病めば、親の心はとりわけ病む子に引かれるように佛も亦一切の人人を一子のように、平等に愛しみ給うけれども、わけて罪の重いものに眼をかけられる。佛は放逸のものに對う

て慈悲深く、却つて道に勤め勵むことの出來るものには御心をお緩めになる、勤め勵む人とは高い位の菩薩の事であります、大王よ、諸の佛は人人の氏や姓や、貧しきと富めるとの區別や、その生れた月日、星宿又は彼等の巧みな藝等を觀給わずに、ただ善心のあるものがあれば、愛憐の念を垂れ給うのであります、大王よ、かような瑞相は、世尊が月愛三昧に入つて、それから放ち給うのであります」。王問う。「月愛三昧とは何のことであるか」。耆婆答う。「譬えば月の光には、すべての青蓮華を鮮明に花咲せるはたらきがあるように、この三昧には人人の善心を起さしめるはたらきがあるから、月愛三昧と名けるのであります。又譬えて申せば、月の光は、すべての路行く人に喜を與えるように、この三昧も、涅槃の道を辿るものに喜を與える、それで月愛三昧と名けます、又、この三昧はあらゆる善の中の王で、甘露の味があり、すべての人人の喜び願うものであるから、月愛三昧と名けます」。

一四。 その時世尊は、會座の大衆に告げ給うよう。「すべての人人が覺を得るのに、尤も近い因緣となるものは善き友である、何故かと云えば、阿闍世王が耆婆のすすめに隨わなかつたならば、王は永久に救われるとゆうことはなかつたのである、それであるから、證を得る近い因緣は、善き友である」。阿闍世は又、世尊の御許へ參ろうとする途中、耆婆から毘迦離比丘が生きながら、大地が裂けて無間地獄に墮ちたことと須那佐多はいろいろの惡事を積んだが、世尊の御許へ走つてすべての罪の消えたことを聞いて、耆婆に語つて云うよう。「私はいま、この二つの事柄を聞いたけれども、私は猶迷つている。耆婆よ、汝と一緒に、同じ象に乘ろうと思う、そうすれば、たとえ私が無間地獄へ落ちようとしても、汝が押えて墮さしめぬであろう、何故ならば、私は曾て、道を得た聖者は決して地獄に墮ちないと聞いて居るからである」。

時は十五夜滿月の夜、數百の象の車は炬火を先頭として、靜かに靜かに林へと向うた。やがて林に入ると、阿闍世王は急かに恐怖を覺え、戰きながら耆婆に云うよう。「耆婆よ、汝は恐らく、私を裏切つて敵に渡そうと云うのではあるまいか、何とゆう氣味の惡い靜けさであろう、千數百人の弟子達が居るとゆうのに、嚏の音もなければ咳一つ聞えぬではないか、何か企が、あるように思われてならない」。耆婆云う。「大王よ、恐れず御進みなさい、あの林の中の阿屋に光が點されて居りますが、あそこに世尊が在すのであります」。王は、耆婆の語に勵まされて、象を下りて林に入り、世尊に近ずき禮をなして敎を乞うた。

第五節　世尊の說法

一。 世尊は阿闍世に、種種に敎を垂れて宣うよう。「大王よ、懺悔の心のある人には、罪はもはや罪ではない、懺悔の心のない人には、罪は永しえにその人を呵むるのである、汝は既に懺悔の人である、罪は淨められ、恐るることは少しもいらぬ」。

二。 御敎誨を受けて、阿闍世は、世尊に申しあげた。「世尊、私は世間を見渡しますに、伊蘭とゆう毒樹の實から伊蘭の樹が生え、伊蘭の實から栴檀の樹の生えたことを見た事はありません。然るに今私は、初めて伊蘭の實から栴檀の樹の生えたのを見ました。伊蘭の實とゆうは、私の事であります。栴檀の樹とゆうは、私の心に生えた根のない信心のことであります。根のない信心とゆうは、私は今まで恭しく佛に事えたこともなく、御法も僧伽も信じた事がなかつたのでありますが、今急かに信心が生れましたから根のない信心と申じたのであります。世尊、もし、私にして佛に御遇い申すことが出來なかつたならば、私は量りない劫の間地獄へ墮ちて、限りない苦を受けねばならぬのでありました。私は現り佛を拜み奉つていますが願くは、このあらゆる功德をもつて、未來の人人の煩惱を破りたいと思います」。

世尊宣うよう。「大王よ、善い哉、善い哉。汝のその功德をもつて人人の煩惱を破り、惡心を除き得ることは、今私の見透している所である」。阿闍世は申しあげた。「世尊、私が、人人の惡心を破ることが出來るならば、私は無間地獄にあつて量りない劫の間、人人のために、大きな苦を受けても苦しいとは思いません」。

この阿闍世の語をきいて、摩竭陀の國の多數の人人は、一時に大きな菩提心を起した。そして阿闍世は、このために重い罪を薄らげることが出來た。

三。 その時、阿闍世は耆婆に語るよう。「私は近い中に死ぬべき身でありながら死を免がれて王の身を得、短い命を捨てて長い命を得た、その上私の事が緣となつて、多くの人人をしてこよない菩提心を發さしめた、卽ちこれが神の身、長い命、永えの身である、そして、諸の佛の弟子である」。

かくて、いろいろの寶の幢を以て世尊を供養し奉り、更に次の偈を以て、世尊を讃歎え奉つた。

あらゆる人人のため、佛は常に、慈の父、悲の母となり給う。さればものみな、佛の子なれ。

佛大いなる慈悲により、魑魅に着かるる人のごと、なべてこの世の人のために、狂うが如く苦行し給う。

いまぞ我、御佛見まつりて、得たりし善と功德をば、うえなき道に捧げなん

いまぞ我、三つの寶に供養して、得たりし善と功德もて、つねにこの世に三の寶の、在さんことを願いまつらん。

更にこの得し功德もて、人人のため、あらゆる魔を破らん。

四。 その時、世尊は阿闍世を讃めて宣うよう。「もし一人でも、菩提心を發すものがあるならば、この人は、諸の佛の會座に集う大衆を飾るものである、大王よ、今より後、常にこの菩提心を失わないようにつとめねばならぬ、何故ならば、この菩提心に依つて、量られぬ程の多い罪惡を滅すことが出來るからである」。この說法を聞いて、阿闍世王及び摩竭陀の國の民達は、各その座より立つて、三度世尊を繞り、恭しく世尊を拜んで、この會座から辭つた。

五。 かくて、阿闍世王は臣達に告げるよ

う。「私はいまより後、世尊とその御弟子達に歸依する事となつた、汝等今より世尊とその御弟子達とを宮殿に迎え、提婆とその徒衆とを門内に入れてはならぬ」。

かくとは知らず、提婆達多は或る日宮門に至ると、門を守る人は王の仰せを述べて彼を遮つた。彼が怒の情を懷いて門外に立つていると、門内から蓮華色比丘尼は行乞を終えて出て來た。提婆は彼の尼を見ると一時に怒を發し、「汝は私に何の怨があつて、私をして此門内に入らしめないようにしたのであるか」と罵りながら、拳を固めて尼の頭を打つた。尼は苦を忍び、その謂れないことを述べたが、提婆は遂にその頭腦を打ち破つた。蓮華色は痛を忍んで、その精舍に歸り、驚き悲しむ尼達に告ぐるよう。「姉妹よ、人の命ははかり知られぬ、諸法みなは常ない、煩惱のない寂かな所こそ涅槃である、汝等勤め勵んで善き道を修められよ」。語り終つて滅度に入つた。

六。提婆は遂に、十の指の爪に毒を塗つて、祇園精舍に在せる世尊の御許へ近ずこうと企てた。弟子等は提婆の姿を見て、世尊の御身を慮り、大きな怖を懷いた。しかし世尊は、「汝等怖れることは要らぬ、提婆達多は、今日私を見ることは出來ぬであろう」と仰せになつた。そのうち、提婆は精舍に近ずいて弟子等の足を洗う池の邊りに來て、暫時木蔭に憩うた。世尊は尙、前の言葉を繰返して怖れる弟子等を制め給うた。この時提婆の居る大地は自ずと沈んで炎と燃え上り、忽ち膝を埋め、臍に及び、肩に及んだ。彼は火に燒かれて、我が逆罪を悔い、南無佛と叫びながら沈んだ。この時二つの金挺は彼を前後から挾み、そのまま燃え盛る大地に捲き込み、無間地獄に引き込んだ。

第三章　殉　道

第一節　道に身を捧ぐるもの

一。世尊は又も諸方をめぐつて舍衞城に歸り、祇園精舍に入り給うた。舍衞城の給孤獨長者は世に名高い富豪である。金銀財寶は數え得ぬほど倉倉に滿ち、召使う男女の數も多くあつた。其頃、滿富城に滿財と云う長者があつて、その富も山の如く、給孤獨長者とは幼い時からの友達で、常に親しく、忘れ得ない間柄であつた。給孤獨長者はその商品を滿富城で賣拂い、滿財長者は舍衞城において商いするのを習慣としたので、常に往來して居たのである。

或る時滿財長者は、用事があつて舍衞城に赴き、給孤獨長者の家に宿つたが、給孤獨長者の娘須摩提は、天成の麗しさ桃の華のよう、世にも稀な美しさを具えていた。客來と聞いて靜かに室に來つて父母を拜み賓客の滿財長者に挨拶して、復自分の室に歸つた。滿財長者は主人の娘と知つて云うには、「私に男の子があるが、まだ定まる妻もないのであるから、迎えて悴の嫁に致したい」。「それは御斷り致しましよう」。「何故でありますか、氏や性が違うからと仰せられるか、または財產が比べものにならぬと仰せられるか」。「氏や性や財產のことは申しようもありませんが、何より要めな宗

教が違います、私の娘は、釋迦牟尼世尊の御弟子であるが、貴方は異教を信じていられますから、御斷りするのであります」。

「それは何でもないこと、宗教が違うても、何も強いることは致しません、銘銘が別別に崇めて居れば善いことであるから、どうか枉げて御娘を賜わりたい」。

給孤獨長者はこういわれて、斷る辭に窮り錢金のことで斷ろうと思い、仕度の金として甚だ大きな高を求めたが、滿財長者が直ぐに承諾うたので、今はどうすることも出來ず、このことは一應釋迦牟尼世尊に御伺いしてからと、一時、返答の猶豫を願い、直ちに世尊の御許に詣でてこの事を御計り申した。世尊の仰せられるよう。「長者よ、もし、汝の娘須摩提が、滿富城に嫁いだならば、人人を救うこと、この上もないであろう」。

この御語を聞いて、給孤獨長者も心をきめて家に還り、更に、宴を新たにして滿財長者を饗應し、その要求に添う旨を答えて茲に婚約を結ぶこととなつた。

二。善は急げと直ちに婚儀の仕度をして定められた日に、滿財長者は寶の羽の車に息子を乘せて、嫁を迎えに出した。給孤獨長者も亦今日を晴と須摩提を飾らせ、七寶をちりばめた美しい車に乘せ、中途で迎えの者に遇わせるように計らつた。それで芽出度く道中に遇うて滿富城に歸り、盛んな婚儀を擧げた。

その頃、滿富城には一つの掟があつて、他國の者と結婚することを禁め、もしこの禁を犯せば、數千の婆羅門の行者を迎えて盛んな宴をして披露をせねばならぬとゆう罰則が設けてあつた。然し、限りない富をもてる滿財長者には、もとよりこれほどのことは何の苦でもないから、直ちに、多くの行者を招いて宴を開く事となつた。

その日が來ると、行者達は相續いで長者の家に集つた。彼等はみな裸體であつた。長者は彼等を迎えて座を請め、饗應をして後、須摩提を呼ばしめて云うよう。「汝、身の粧裝を濟ませて、この室に來り、私達の師に禮拜をするが善い」。須摩提は之を却けて云うよう。「妾は裸體の人を拜むことは出來ません、慚を知らぬ人人を、師として拜むことは出來ません」。長者は、云うよう。「何も此人達は、慚を知らないで裸體で居るのではない、法服を身につけて居るだけである」。「裸體であるものを法服とゆうことは出來ません、妾の世尊は、二つのことが最も世の中の尊いことだと敎えられて居ります、それは慚と愧で、この二つがなければ、父母、兄弟、姉妹、親族の區別もなく、鷄や、犬と擇ぶ處がないと云うのであります、今これらの人達は、この慚と愧の二つがなく、裸體であるから、鷄や犬と擇ぶところのない人達であります、妾はどうして、そこに行つて拜むことが出來ましよう」。夫も頻りに、挨拶に出るようにと勸めもしたが、然したとえ八裂にされても、この邪見の中に墮ちることをしないと云つて肯おうとしない。

この樣を薄薄知つた多數の行者達は、大いに腹を立てて聲高らかに云うよう。「長者よ、止めよ止めよ、この卑しい女に徒ら

に、罵りの語を放たしめるのは何の故であるか、我我は既に招かれて來たのであるから、先ず供養のものを出すが善いではないか」。茲において、長者も止むを得ず、須摩提のことは止め、善美を盡した食物を出して行者達を供養した。彼等は思うままにその供養を受けて、その家を立ち去つた。

三。長者は心樂しまず、獨り高樓に昇つて、「噫、とんでもない嫁を迎えたものだ、これでは家を齊えるのでなく、家を破ると云うものだ。今度ほど、我が一門を辱めたことはない」と悲んで居た。その頃、滿富城に須跋とゆう行者が居た。五つの神通を具え、諸の禪定を得た人であつたが、久久に長者に遇おうと訪ねて、長者は獨りで高樓に昇り何事か深く心配している樣であると聞き、急ぎ長者の所へ來て、其心配の譯を問いただした。「何をそんなに心配つていられるか、何か官憲から無理でも云いかけられたのか、又は盜賊か火水の害でも受けたのか、或は家庭に面白くないことでも出來たのか、その譯を云つて見たら宜かろう」。

「御親切は誠に有り難いが、官憲や、盜賊の害を受けたわけでもなく、火水の災のあつたわけでもありません、只少し家庭に面白くないことが起つたのであります、と云うのは、近頃、息子に嫁を迎えましたところ、そのために國の掟を犯したとゆうので、婆羅門の師匠方を招いて御饗應をすると、嫁が私の言いつけを守らず、どうしても、師匠方に禮拜をしないのであります」。

「それは、誰の女でありますか」。「舍衞城の給孤獨長者の女であります」。これを聞くと、須跋は飛び上るほどに驚いて、兩手で耳を覆うようにして云うには、「嫁君は、その云い付けを聞いて、高樓から身を投げて死のうとはしなかつたのでありますか、嫁君の師は實に勝れた清かな行を守る人、偉い威神力のあられる御方であります」。

「あなたが又、教を異にしている喬答摩を、そのように賞めるとゆうは、可笑いことではありませんか」。「どうして、どうして、喬答摩の威神力は、我我如きの想像も及ばぬことであります。私の見ただけを御話し申そう。少し前のことであるが、私が雪山の北に入つて托鉢した後、阿耨達の池の畔に到ると、其處の神神が顯われて、私に刀劍をつきつけて云うよう。『須跋よ、この池の畔に留つて池の水を汚してはいけない、若し命令に順がわなければ氣の毒ではあるが、生命を取らねばならぬ』。私は此語におびえて、池の傍を離れて食事しながら見ていると、釋迦牟尼の最も少い弟子の周那が、手に汚い塵溜から拾うて來た衣を持つて顯われた。すると、先に私を威した神神が、恭しく出迎えて、下にも置かぬ待遇をする。池の中に黃金の臺があつたが、周那は先ずその汚い衣を水に着けて置き、食事をなし鉢を洗うて後に、その臺の上で禪定に入つた。やがて禪定から出て、衣を洗いに掛つた。すると神神の或る者は一緒に衣を洗い、或る者は水を潑ぎ、かくして洗い終り、その衣をもつて空を飛んで住所に歸つたのである。私はこれを見ていながら、どうしても近ずくことが出來ない

のである。長者よ、嫁君の師の最も少い弟子でさえ、このような奇しい力があるのであるから、覺を開かれた釋迦牟尼佛の威神は想像も及ばぬことであろう。その嫁君に今日、教を異にする出家達を拜めと强いたのであるから、嫁君が身を投げて死ななかつただけでも、大きに喜ばねばならないことであります」。

「私どもはその、私の嫁の師とゆう方を拜むことが出來ましようか」。「それは私に尋ねるよりも、嫁君に聞かれたが宜しいと思います」。

四。茲において、長者は須摩提を呼ばしめて、汝の師を拜みたいと思うが、茲に招きすることが出來ようかと尋ねた。須摩提は大いに喜び、長者の請う儘に、香爐を手にして高樓の上から合掌して申すよう。

「世尊、世尊は何事をも知ろしめします、今妾は茲に困厄の間にありますから、どうぞ哀憐を垂れて垂迹下さい。

あまねく、世を觀わし、鬼神を降し、鬼子母を教え、母を斬らんとする指鬘を救い、王舍の城に、醉いたる象を化し給う。わらわ、今、苦にあれば、願くは駕を枉げて、救わせ給え。

この歌を歌うと、異しくも香は雲のように祇園精舍の林を籠め、神神は喜んで花を雨降らして須摩提の願を讃歎え、佛は此有樣をみて微笑を洩し給うた。阿難も亦、林を籠めた妙じの香の雲を見て、稀有であると思い、世尊の處へ行つてこの謂を尋ね、須摩提の明日の招待と云うことを知る事ができた。世尊は仰せらるるよう。

「そうゆう譯であるから、煩惱を盡して覺を開いた聖者のうち、明日は闍を引いて、滿富城に行くことにいたそう」。阿難は、仰せを受けて弟子等を集め、そのことを傳えた。

この弟子の集の中に、鳩吒陀那とゆうものが居たが、自ら思うよう。「私は出家して既に久しいにかかわらず、まだ煩惱を盡して覺を開くことが出來ない、周那はこの僧團の最も年少であるに拘らず、煩惱を盡して覺を開き、明日は世尊と共に滿富城に行くことが出來る、今日こそ勤め勵んで涅槃の地に入ろう」。果して、その望の如く覺を得、その日闍を取つて第一に當つたので、世尊は我が弟子の中闍を得る第一は鳩吒陀那であると仰せになつた。

五。翌る日、世尊の命を受けて、目連、大迦葉、阿那律、離波多、須菩提、優留毘羅迦葉、羅睺羅、朱利槃特、周那などの神足ある人人は、神通によつて滿富城に向つた。寺男の乾茶とゆうものも、自ら大釜を負うて最先に城に赴いた。長者をはじめ多くの人人は高樓にあつて遙かに世尊の近ずかせ給うのを拜んでいたが、乾茶を見て須摩提に尋ねるよう。「あの、白衣を着て髮をのばし、大釜を負うて疾風のようにやつて來られるのが汝の師か」。「さようではありません、彼の人は乾茶とゆう寺男でありますが、證りを開いていられます」。

周那は又、色さまざまな、五百本の華の木を作り、それに取圍まれてやつて來た。「何とゆう夥しい華であろう、空一杯に滿ち滿ちている、あれが、汝の師であるか」。

「さようではありません、須跋仙人が御話なされた周那と云う人で、舍利弗尊者の弟子であります」。

朱利槃特は毛色の青い五百の牛をつれ、自ら牛の上に坐禪を組みながら來た。「あの青い毛並の數多の牛を連れて、坐禪のままでやって來られるのが汝の師であるか」。

「そうではありません、あれは、朱利槃特と申す方であります」。

羅睺羅は五百の孔雀を率い、摩訶劫賓那は五百の金翅鳥を率い、優留毘羅迦葉は五百の大龍を、大迦旃延は五百の白鳥、離波多は五百の虎、阿那律は五百の師子、大迦葉は五百の馬、目連は五百の白象を率いてやって來た。白象には各六の牙があって、金銀を以て飾りちりばめて光り眩ゆく、空には伎樂、地には花叢、まことに美しさゆうばかりない。長者の間に對えて須摩提は、一人一人の名と功德とを說き敎えた。

六。暫くすると、世尊は右に憍陳如、左に舍利弗、後に拂子をもった阿難を從えて諸の神神に護られ、空を飛んで來られた。五髻童子は瑠璃琴を搔き鳴して佛を讃え、神神しい華は雨と降つて佛の上に散り、舍衞城の波斯匿王、給孤獨長者、其他の人人はよろこび極りなく、各妙じい香を燒いて供養し奉った。給孤獨長者は、歌うて云うよう。

御佛の力はかりなし、子のごと民をいつくしみ給う。たのしきかな、我が子須摩提、御佛の敎うけよかし。

五髻童子は空にあつて、一きわ瑠璃琴の糸の音をかき立てて歌う。

迷の惱、永く盡き、心みだれず、穢の障離れて、御佛はいま行きたもう。心きよく、邪の思離れ、功德海のごと。御顏妙に、惱ながく起らず、愛によりて自らとどまらず、御佛はいま、行きたもう。

御佛は今、ゆきたもう。欲の流れ渡りて、生死はなれ、迷いの根をたち給いつ、御佛はいま、ゆきたもう。

滿財長者は忙も須彌の山が光り輝いて動いて來るような大きな光景にうたれて、ただうつとりとしてしまつた。「あれは、日の光か、生れてまだ見たこともない、數も知れない光が輝いて、見つめることさえできぬ」。「日の光ではありません、と云うて日を除いて何と喩えましよう、あの數知れぬ光は、皆諸人のためであります、あれこそ、我が師、御佛に在ます、聞ゆるは御佛の功德を讃える聲、さあどうぞ、懇ろに供養をなされて大きな果報を得て下さい」。

七。滿財長者は右の膝を大地につけ、掌を合せて、世尊に歸依申しあげた。

十方の御佛に歸依し奉る、まどかの光、こがねの色、諸神も讃うるところ、我いま歸依し奉る。

御佛は、日の光、星のなかの月の光、すくいたまわぬものはなし、われいま歸依し奉る。

御委は帝釋の神のごと、慈悲また梵天の神のごと、自らさとり、また人を覺らしめます、我いま歸依し奉る。

人の中の人、神のなかの神、外道をば降し給う、我いま歸依し奉る。

須摩提も跪いて、手を合せ歌うよう。

自を調えて、他を調え、自をば正して他をば正し、自らさとりて人をば覺らせ、自ら心の垢を去り、而して他にも去らしめつ、自ら照して他をも照し、すべてを救い給わぬぞなし。

爭をとどめ、鬪をなくし、思すましてきよくまし、心動がぬ大み佛、げにやこの世をあわれみ給う、我いま重ねて歸依しまつる。

世の最尊に在ます御佛に、長者も須摩提も、心も身も擧げて歸依したので、今は外道の出家達もなす術がなく、國中の民の信賴を失うて城を去ること、丁度獸王の師子が谷間を出でて、四方を見廻し三度吼えると、すべての鳥獸や力すぐれた象までが逃げ走つて、麥をかくすのと異らない。世尊は茲において、空より下つて常の法のように滿富城に入り、城の門の閾を踏み給うと天地は震い動き、美しい華が雨のようにはらはらと散り布いた。人人は世尊の澄み切つて崇高い御相を見て、音を一つに歌うた。

御佛は尊し、異敎の師も適わじ、われら眼昏くして、仕うる處を過ちし。

八。世尊が長者の家に入り給うと、人人は我勝ちに世尊を見奉ろうとひしめきあい堅牢な家も壞れて仕舞う有樣であった。世尊は、人人の心の思を押し量り、急かに長者の家を化えて玻璃殿となし、澄明と隈なく見透すことの出來るようになし給うた。須摩提は、今や喜と悲に堪えられず、世尊の御前に歌うよう。

一切の智慧をそなえ給い、迷を離れ、惱を捨てたまえる御佛に、我いま歸依し奉る。

悲しや我、正法の家を離れて、異敎の家に嫁ぎ、邪見の人人に交わる。

願うは御佛のめぐみ、何の緣ぞ、敎異る處に嫁ぎ、霞にかかれる鳥のごとなる、願うはただ、御佛のおんなさけ。

世尊も亦、歌をもつて慰め給うた。

息をはらし、心をかるめよ、罪の報にて、この家に嫁ぎしにあらじ。

すべては、もとの願を、滿さんためぞ。御身、昔、この人人と緣結びて、今そのこのみを、擧げんがためぞ。

須摩提はこの御歌を聞き、躍り上るほどの喜を得た。やがて、長者は家族や婢僕を從えて、世尊初め弟子等に供養をいたし、食事終つて後、世尊の御前に低く坐った。世尊は茲に感謝の法話をなし、布施の功德を說き、世の欲の穢れを說き、逐次に聽く人人の心を調えて、最後に四聖諦の妙じい理を說き給うた。滿財長者、須摩提を初め、數多の聽衆は皆心の垢を離れて法の眼を得、疑を絕つて三の寶に歸依する者となった。

御佛の御耳は淸くほがらかに、我が願をきこしめし、駕を枉げて、御敎を垂れたまい、諸人、法の眼を得たる。

須摩提は、この歡喜の歌を歌うた。

九。この時弟子等、世尊に申しあぐるよう。「この須摩提は何の因緣によつて、給孤獨長者のような富貴の家に生れ、敎を異にする邪見の家に嫁ぎ、いま又この覺を自らも得、又多くの人人にも得させることが出

來たのでありますか」。世尊、教えたもうよう。「弟子等よ、昔、迦葉佛の御世にベナレスに哀愍とゆう王があり、その王女を須摩那と名けた。王女は、迦葉佛に歸依し、常に清らかな行を守り、布施、愛語、利行、同事の四攝法を修め、高樓にあつて經典を讀み、常にこの願を立てて居た。『この四攝法を修め、經典を讀むことに、微かでも功德がありましたならば、この功德によつて、常に貧しく生れることなく、未來には御佛に遇い奉り、女人の身を轉えることなしに、淨い法の眼を得たいものであります』。

城内の人人はこの王女の願を聞いて、高樓の下に集り、若し王女にその願の契う日があつたならば、私達も同じく、王女と共にその功德を得たいものであると願つた。王女は承知をして、その功德を平等に他にも施し、同じく覺を得ることを誓つたのである。弟子等よ、その時の哀愍王とは今の給孤獨長者であり、須摩那は卽ち須摩提である。須摩提は昔の誓によつて私に遇い、その時の城内の人人と共に、今日淨い法の眼を得たのである。弟子等よ、四攝法は最も勝れた福田である。佛の弟子にしてこの四攝法に親しめば、四聖諦の理を悟ることが出來る、それ故に弟子等よ、この四攝法を成就げることを忘れてならぬ」。世尊は、弟子等を連れて座を立ち、再び祇園精舍に歸り給うた。

第二節　菩提王子

一。それより、世尊は弟子等を伴い、跋伽の國に入り給うたが、ちようど、その國の菩提王子の住居である紅蓮殿が出來上つて間もない時で、まだその落成式を擧げるに至らなかつた。菩提王子は世尊が跋伽へお着きになつたと聞いて、大いに喜び、サンジカーブツタを使として世尊に申上げた。「世尊、菩提王子は世尊の御足を押頂いて、世尊の御健かに在ますか否かを御伺い申します。世尊、明朝、御弟子衆と共に私の施食を受けたもうよう御願い申します」。世尊は打ち肯いて之を受け給うた。

菩提王子は其夜を過ぎて食事を用意し、世尊に時の御知せを申しあげると、世尊は鉢を手にして弟子衆と共に紅蓮殿に赴き給うた。新らしい木の香のする宮殿の階には白布が敷いてある。世尊は、暫し立ち停り給うた。菩提王子は申し上げるよう。「世尊、どうぞ白布を踏んで下さい、私の永久の利益と幸福のために」。世尊は、阿難を顧み給うた。阿難は菩提王子に向い、「王子よ、白布を取り除いて下さい、世尊は末の世の人人を憐んで、飡を垂れ給うがために、布氈を踏むことはなされませぬ」と云つた。王子は白布を取り除かしめた。世尊は階を昇つて、宮殿の座につき給うた。王子はいろいろの珍味を調えて御饗應申した後、世尊の食事を終り給うのを見て、自らも低い座を運んで世尊の傍らに坐り、世尊に申しあげた。「世尊、私は樂に依つて樂を得ることは出來ない、苦に依つて、樂を得るものと思います」。世尊は長長と自分の出家する前から、出家して後の求道生活の物語をなされ、自分も太子であつた時は、樂は樂によつて購われず、苦に依つて得られるものと思つていたが、まことは、正しい樂は樂しい道によつて得られるものであることを話して聞かされた。

二。菩提王子。「世尊、佛を師として、幾年かかりましたら、家を出でて出家となつた目的をはたすことが出來得ましようか」。「王子よ、それでは私の問に對うて、思いの儘に答えるがよい、王子は巧みに象を使われるか」。「かなり巧みに、使いこなせます」。「王子よ、例えば或る人が王子から象を御する術を學ぼうとする、而もその人は信もなく身が弱く、虛僞多く怠惰であり、智惠がない、王子よ、斯る人は王子の傍で象を御う術が學べるであろうか」。「その一つの性質があつても術を呑み込むことは出來ません、まして五つの性質を具えていては、固より駄目であります」。「王子よ、もしまた或る人が王子から象を御う術を學ぼうとする、彼には信があり、病氣がなく、虛僞がなく、勤勉で智惠がある。王子よ、この人は王子の傍で調象の術を得るであろうか」。「世尊、その一つの性質があつても術を呑み込むことが出來ます、まして五つの性質を具えて居れば、固より出來るに相違ありません」。

「王子よ、丁度その通りである、若し佛の弟子で信、病なし、虛僞なし、勤勉、智惠とゆう五つの勤めがあつて、佛を師とすれば、七年又は一年、否、一月、又は一日にして、さとりを開くであろう、否否一日ではない、朝に聞いて夕に、夕に聞いて朝にさとりを開くであろう」。

この御話が終つた時に、王子は、「おお、御佛よ、おお、御法よ、おお、朝に聞いて夕に、夕に聞いて朝にさとりを開くとゆういみじくも說かれたる御法よ」と、讃歎の聲を放つた。

三。サンジカーブツタが喙をさしはさんだ。「王子よ、あなたは『おお、おお』と讃えられたが、佛と法と僧伽に歸依せられるが善いではありませんか」。「サンジカーブツタよ、云うな云うな、私は私の母上から聞いていた。世尊がずつと以前に憍賞彌に御出でなされて、瞿師多園に御逗留の時、私を腹に宿した母上は世尊の御許に詣でて申しあげた。『世尊、妾のお腹の子が男でも女でも、三寶に歸依いたします、世尊、どうぞ一生涯歸依いたしまする信者として受けいれて下さい』と。サンジカーブツタよ、又これも以前、世尊がこの跋伽にお出でなされた時、乳母が私をつれて世尊のお傍にて同じように歸依の言葉を申上げた。サンジカーブツタよ、これは私の三度目の歸依である。世尊、私は三寶に歸依いたします。どうぞ生涯信者として受け入れて下さい」。

第三節　質多長者

一。マッチカサンダの質多長者は、アンバータカの林に住む弟子等を屢ばその家に招待した。或る日も弟子等を招待して、上座のものに尋ねるよう。「尊者よ、世の中にはいろいろの異見が行われています、例えば世間は常住であるとか、常ないものであるとか、限があるとか、限がないとか、

人人は死んで後も在るとかないとか、又は在るが而しないともいえるとか、在るともいえぬしないともいえないとか、或は靈魂と肉體とは一つであるとか別であるとか、いろいろの異見があり、世尊は總て六十二種の見解を梵網經に示して居られます、ところでこれらの異見はどうして起るのでありましよう、何に基いてあるのでありましよう」。

この質問について上座の弟子は沈默つていた。二度三度同じ問をせられても沈默つていた。するとその弟子の中最も年若なイシダッタが進み出でて、上座の許しを受けて答えた。「長者よ、それは身に執わるる考があるから起るので、その身見さえなければ起らないのである」。

「大德よ、その身見とは如何なるものでありますか」。「長者よ、それはこの身體をこしらえている身と心について、『我』があると見ることである、敎に昏い凡常のものの起す考えである、佛の敎に慣れ佛の敎に心を磨くものは、身と心に、『我』を見ないのである」。

「大德よ、あなたは何處から來られましたか」。「私は阿盤底の國から來たのである」。

「大德よ、阿盤底には、私の見知らぬ友でありますが、イシダッタとゆう人が出家いたしましたか、大德は彼に御遇いなされたことがありますか」。「長者よ、私は遇いました」。「彼の尊者は今何處に住まつていられますか」。こう問われて、イシダッタは口を默んで答えなかつた。

「大德よ、あなたはイシダッタと云われますか」。「そうです」。「大德よ、どうぞ、長くマッチカサンダの樂しいこの林にお住い下さい、私は及ばずながら、大德の衣食坐臥湯藥の心配を申しあげます」。

「長者よ、お言葉はうれしく頂きます」。

質多はイシダッタの語を心から喜び、弟子等に食事を供養した。林に歸つて後、弟子等はイシダッタの勞をねぎろうたが、彼は坐具を收め鉢を持つて、何處ともなく去つて、再びマッチカサンダに戻つて來なかつた。

二。裸形外道の迦葉は質多とは家にあつたころの朋友であつた。迦葉がマッチカサンダに來たとゆうことを聞いて質多は迦葉を訪ねて挨拶し終り、家を捨ててから何年になるかと尋ねた。「居士よ、もう三十年になります」。

「大德よ、この三十年に依つて、何か人に勝れた法を得、勝れた知見を開き、平安な心境を得られましたか。「居士よ、三十年は過ぎたが、裸體と禿頭と論議に巧みになつただけで、何も變つたことはありません」。

「大德よ、三十年も出家となつていて、裸體と禿頭と論議に巧みになつただけとは大德の法は誠に珍しいものであります」。

「居士よ、あなたは、佛の信者になられてから何年になられますか」。「三十年になります」。「その三十年に、何か超人の法を得、勝れた聖らかな知見を開き、平安な心境を得られたか」。「大德よ、得なくて何としましよう、私は禪定に自由に入ることが

出來ます、又、私が私の世尊よりも早く死ぬならば、世尊は私のことを、この世に再び歸つて來る煩惱のなくなつたものと說明して下さるでありましよう」。「居士よ、在家の身でその樣な勝れた結果を得るとゆうのは、何とゆう勝れた法であろう。私もその敎の下に弟子となることが出來るでありましようか」。

質多は、迦葉を連れて、御弟子等の處へ行き、敎を聞いて因緣を結ばしめた。

三。この時、世尊は、ウチユンニヤーの國、カンナカツタラの鹿野苑においでなされた。裸形外道の迦葉は世尊を御訪ねして申しあぐるよう。「尊者よ、あなたはあらゆる苦行を嫌い、苦行者を誹られると私は聞いて居ります、それは眞實でありますか」。

「迦葉よ、それは私の意見ではない、又、私を正しく傳えて居るものでもない、迦葉よ、私は天眼をもつて、苦行者が死んで後地獄に墮つるのも見、天界に生れるのも見る、又、少しく苦行する者が死んで地獄に墮つるのも天界に入るのも見る、斯ように苦行者の結果を知つていて、どうしてひたすら苦行を嫌い苦行者を謗ることが出來ようか」。

迦葉申すよう。「尊者よ、裸體でいると食を斷つとか、供養の食を受けないとか、月の半ずつの皮や獸の皮を衣とするとか、常に立つている行を守るとか、夜三度水浴するとか云う苦行は出家に相應しいもの、婆羅門に相應しいものと云われて居ります」。

「迦葉よ、たとえこれらの苦行をしていても、その人に戒と禪定と智慧との心得がなければ、眞の出家、婆羅門となることとは遙かに隔たつているのである、瞋なく害意なく、慈心を修め煩惱を盡し、現在さとつているならば、それこそ出家、婆羅門と云われるのである」。

「尊者よ、出家となり、婆羅門となるとゆう事は、何とゆう難しいことでありましよう」。「迦葉よ、その難しいとゆうことは、苦行を修めるとゆうことではない、苦行ならば水瓶を腰で運ぶ下女でも出來ないことのないものである、瞋なく害意なく、慈心を修め煩惱を盡し、現在さとるとゆうことが、實に難しいことなのである」。

「尊者よ、それでは出家であり、婆羅門であることを知ることが難しいことであります」。「迦葉よ、その知るとゆう困難も、苦行に依つて、出家であり婆羅門であることを知るのは難しくはない、苦行ならば水瓶を腰で運ぶ下女も出來ないことはないのである、瞋なく害意なく、慈心を修め煩惱を盡し、現在にさとるとゆう事について、出家、婆羅門を知ることが難しいのである」。

四。「尊者よ、ではその戒と禪定と智慧との心得とはどんなものでありますか」。「迦葉よ、戒を得るとは、佛がこの世に顯われて自らさとつて他を敎える、茲に人あつてその敎を聞いて信心を起して家をすて、戒に從うて身を守り、正しく行うて樂となし、小さな罪にも恐を見、五官を守つて正しい智慧を具え、殺生を止めて仁を持ち、偷盗を止めて心を清め、婬を離

れ妄語をいわず、粗暴な語を吐かず正しい生活を營むことである。禪定を得るとは、眼を以て物を見る場合にも、その五官をよく守つて相に執れず、往くにも還るにも留まるにも臥するにも、心の眼を明かに開いて心も念も正しくし、鳥が身に付けた翼の外何も持たないで飛ぶように、身を包むだけの衣と腹を滿すだけの食で喜び、樹の根、洞穴、林、廣野、墓地の閑居を擇んで靜かに坐り、貪欲と瞋恚と惛眠と悼悔と疑とを離れ、健かの人、自由の人、安全の人となり、喜と樂とを得て禪定に入ることである。智慧を得るとは、この禪定によつて靜かに淸らかに透つた心になり、何物にも煩わさるることのなくなつた心でこの身は常なく無我であると知り、五つの神通を得、四聖諦の道理を知り、煩惱を滅ぼして覺を開き、自ら解脫れたとゆう明かな自覺を生むことである。

迦葉よ、これよりも勝れた修養の到りようはない。戒と苦行と厭離と智慧と解脫とを讃歎える出家や婆羅門がある。然し私ほど淸くして高い戒と苦行と厭離と智慧と解脫とを具えたものはない。それらの最も上に達いたものが私である。

迦葉よ、私のこの說くことについて或る者は云うかも知れない。「喬答摩は人の居ない所で吼えるが、そのゆうところは信念を以てするのでない、人はその說く處を聞いて問をかけない、問をかけられて答えることが出來ない、よし答えることが出來ても人をして喜ばせ、信させる事が出來ない」と。迦葉よ、かように考えてはならない。私は群衆の前で正しい法を叫び、信念を以て道を說く。人人の問に答えて喜ばせ、よく信ぜしめる。迦葉よ、嘗て王舍城の靈鷲山において、汝と同じ苦行者の尼拘盧陀は厭離の最も高い形式について私に尋ね、私の說明を聞いて、この上なく喜んだことがある」。

五。「世尊、世尊の御說明を聞いてこの上なく喜ばないものがありましようか、私も今上なき喜を得ました、世尊、私は今三寶に歸依して世尊の御許に御弟子となりたいと思います、どうぞお許し下さい」。「迦葉よ、前に他の敎派に屬いていたものが、私の敎において弟子となり、敎團に入りたいと願えば、四箇月の間別住をし、四箇月を過ぎて敎團に加える事になつている、勿論、特別の場合も考えてはあるが、それが規則である」。

「世尊、四箇月の別住が規則とすれば、私は四箇月の間別住をいたしましよう、どうぞ四箇月の後、私を敎團に御加え下さることを願います」。迦葉は、かくて御弟子となり、敎團に加えられて間もなく、熱心と精勵とによつて覺を開くに至つた。

六。また或る日、佛弟子のカーマブーは質多長者に招かれて、その家に行いて云うよう。

「長者よ、

汚なき白の天蓋ありて、輻一つにて行く車、流を斷ち、縛られず、惱なく、行けるを見よ。

とゆう偈文の意味を知つて居られるか」。

「大德よ、それは世尊の偈でありますか」。

「その通りである」。「それでは少し御待ち下さい、考えて見ましよう」。

長者は暫らく考えて口を開いた。「大德よ、汚れなきとは、戒の名、白き天蓋ありとは解脫の名、輻一つとは正念の名、車とはこの身體、流を斷つとは愛の渴を離れて煩惱のないこと、縛られずとは貪欲、瞋恚、愚癡の縛を離れること、惱なきとは煩惱の煩のないこと、行けるとは目的を果した覺のことであります」。「善い哉、長者よ、長者の智慧の眼は深く佛の御語をさとつていられる」。

長者が死の病に臥していた時、林の樹の神が顯われて、「長者よ、未來には轉輪聖王となるよう願われよ」と勸めた。「それも常ないもの、壞れるものである、捨てて行かねばならぬ」と長者は答えた。枕邊に控えていた親類や朋友はこれを聞いて、「主人よ、氣を確かに持つて下さい」と云つた。「人人よ、私を氣狂あつかいにして呉れるな、今、林の樹の神が顯われて、未來には轉輪聖王となるように勸めたから、それも常ないもの、壞れるものである、捨ててゆかねばならぬと答えたのである、人人よ、汝等、佛と法と僧伽とに壞れぬ信心を抱き、いかなる供養も、戒を持つ正しい心、平等の心でせねばならない」。長者はかように、人人に三寶の信心と布施の心とを與えて死んだのである。

第四節　喩のいろいろ

一。世尊は王舍城に滯在なされる中、時時弟子等に語り給うた。

弟子等よ、遠い古、老人を棄てる國があつた。國の中の人人は、老人と見れば遠い處へ驅り立てて棄てねばならないのであつた。時に一人の大臣があり、國法に依れば、その老いたる父を棄てねばならぬのであるが、親を思う心が深いので、どうしても棄てるに忍びない。そこで、深く大地を掘つて家を作り、そこに忍ばせて孝養を盡した。

その時神が現われ、二疋の蛇を取つて殿の上に置き、王に命つけるよう。「若しこの蛇の雌雄を別つことが出來ないならば、七日の後、王を初め此國をあげて滅して仕舞うであろう」。王は憂え惱み、群臣を集めて其事を議つたが、誰も答えることは出來ぬ。國中にふれて、能くそれを見分けるものには、厚く賞を與えるであろうと告げ知らせた。

かの大臣は家に歸つて此事を父に尋ねると、父のゆうよう。「それは易いことである、軟いものの上にその蛇を置くがよい、躁しいのは雄、動かないのは雌である」と。その通りにすれば、果して區別がついた。

神又問う。「睡れるものに對うては覺めたといわれ、覺めたものに對うては睡るといわれるは誰を指すか」。群臣は又解くことは出來ぬ。大臣の父、子に語る。「それは道を修めている人を指す、常並の人と比べては覺めているが、證を得た聖者と比べては睡つているからである」。

神又問う。「大きな象の重さは何斤あるか」。大臣の父ゆう。「その象を舟に乘せ、水際に線を引いて次に石をのせ、その水線に及んだところで、石の重さを量れ」。

神又問う。「一掬の水が、大海よりも多いとゆうは、何をゆうか」。大臣の父ゆう。「それは清らかな信心をもつて、一掬の水を三寶や父母や病人に施せば、その功德は永久に消えない福を受ける、海水は多いとゆうても一劫を超えることは出來ぬ」。

その時神は、骨もあらわな餓えた人を作つていわしめるよう。「世に私よりも餓に苦しんでいるものがあろうか」。大臣の父は語る。「人もし慳み妬んで、三寶を信せず、父母や師長に供養せぬならば、後の世餓鬼道に墮ち、百千萬歲に亙つて水や食物の名さえ聞かずに、身は山のよう、腹は谷のよう、咽は針よりも細く、髮は針のように脚に及び身に纏わり、身體を動せば支節は焰と燃えよう、此人の苦は今の餓えた人より、も幾萬倍かわからぬ」。

神また手械足枷に縛められ、頸も腹も鎖に繫がれ、身の中より火を出して焦げ爛れた人を作つていわしめるよう。「世に私よりも苦にある人があろうか」。大臣の父語る。「人もし父母に孝えず師長を害い、王獄に叛き、三寶を謗るならば、後の世、地獄に墮ち、刄の山、劍の樹、火の車、又は焰の爐、沸きたつ尿の河等の限りない苦を受けること、今の人よりも幾萬倍でかあろう」。

神また世に比びない美しい女を作つていわしめるよう。「世に妾より美しい人があろうか」。大臣の父は語る。「人もし父母に孝え、三寶を信し敬い、施を好み、戒を持ち、よく忍び、勤め勵むならば、後の世天界に生れて、今の人よりも幾萬倍の美しさであるであろう」。

神は又、眞四角な栴檀の木を取り出して「どこが先きで、どこが根の方であるか」。大臣の父語る。「それを水の中に入れよ、根の方は沈むであろう」。

神は最後に、同じ形をした二頭の白馬を作り、どれが母であるか子であるかと問う。大臣の父又その子に教えた。「その馬に食を與えよ、母は必ず草を推して子に與えるであろう」。

かように大臣の父の教えが盡くそれ等の問を滿したので、神は大いに喜んで、王に多くの寶を與えて、「私は今より此國を護り、あらゆる外敵を侵し入らしめぬであろう」と約つた。王は悅に踊つて大臣の才智を讃えた。大臣申すよう。「王よ、これは私の智慧ではありません、もし大王の御許を得るならば、具さに申しあぐるでありましよう」。王曰う。「死を免れぬ罪があつても問わぬ」。大臣ゆう。「國法によりますと、老の父を養う事は出來ぬのでありますが、私は父を棄てるに忍びないので、密かに國法を犯して穴藏に養うて置きました。これまでの應答はみなこの老の父の智慧でありますが、どうぞ大王よ、今日よりは國にて老人を養うことをお許し下さい」。

王は心から悅び、その父を尊んで國師と仰ぎ、普く國の内にふれて老人を棄てることを禁めて孝養を盡させ、もし父母を輕んじ、師長を敬わぬもののあるときは、重い罰を加えるであろうと告げ知らせた。

二。又、遠い古のことであるが、波羅奈の國に慈童とゆう長者の子があつた。その父は早く世を去り、財物も盡き果てたので、慈童は日毎薪を賣つて二錢を得て母を養い、追追所得を增してやがて日日四錢八錢十六錢と得るようになり、いよいよ手厚く母を養うた。人人は彼の性質聰く、福分を備えているのを見て、「卿の父はいつも海に入つて寶を採つた、卿は何故父の業を受け繼がないのか」と勸めた。慈童は之を聞いて家に歸り、母に海へ入る許を請うた。母はその子が孝順に生れついているので、海へ入ることは出來まいと思い、戲れに、「入つてもよい」と許した。

彼は母の許を得たので伴侶を集め、樣樣の準備をして、改めて母に訣を述べた。母は今更のように驚き悲しみ、「どうして一人子の御身を手放すことが出來よう、どうか妾の死ぬまで待つてくれ」。「母上は先に私の願を許されました、今となつては思立を破ることは出來ません」。母は子の意の動かし難いのを見て、その脚をかい抱き、「思い止つて」と泣きくどいたが、慈童は意をきめ、母を突き除けて海に入つた。その時母の髮の毛數十筋を切つた。やがて寶の岸について多くの寶をとり、陸路によつて歸りを急いだ。時にその國の法として、賊に襲れても商主さえ捕えられなければ得た財は商主に返さねばならぬが、もし商主が捕えられる時は、財は殘らず賊の所有となる事に定められていた。それゆえ慈童は夜毎伴侶を離れて別に宿り、曉に早く伴侶の迎を受けて旅をつずけたのであつた。一夜大風が吹いたので、伴侶は卒かに起きいでて彼を迎えることを忘れた。彼は伴侶と離れて行手の道も知らず、宛もなく辿りつつ一つの山を登りつめると、そこに紺瑠璃の城が見えた。饑と渴に惱み果ててそこに入ると、四人の美しい女が、各如意珠を持つて喜び迎え、伎樂の快樂の中に四萬歲を過した。しかしそうした快樂もいつか厭わしくなり、一度は彼等に訣を告げたが、又理もなく引き止められて、更に四萬歲を送り、漸く其處を立ち出でて頗梨の城に入り、八人の美女と共に八萬歲の樂を共にし、更にそこを去つて銀の城に赴き、十六人の美女とともに十六萬歲の樂を共にし、更に黃金の城に行つて、三十二人の美女と三十二萬歲の樂を共にし、やがては其處をも厭い捨てて去ろうとすると、女達は、「卿は是迄は善い處を經ることが出來たが、これから先は好い處はない、いつまでも此處に居られるがよい」と止めた。けれども、「此女達は私を戀い慕うてかように語るのであろう」と思い　更に行手を急いだ。遙か向うに嚴しい鐵の城が聳えている。その中へ入ると、城門の傍らに一人の男が頭に火の輪を頂いて居つたが、慈童を見ると、その火の輪をその頭へ移して立ち去つた。慈童は驚き怖れ、獄卒に「いつになつたら、この恐ろしい輪がとれるであろう」と尋ねた。「ちようど、汝のような行をした者が、汝のような徑路を經て此處へ來るまでである」とゆう。更に、その理由を尋ねると、「汝は世にあつた時、日に二錢をもつて母に供養したので、瑠璃の城において四の如意珠と四人の美女と四萬歲の樂を受けた。日毎の四錢は頗梨の

城に八萬歳、八錢は銀の城の十六萬歳、十六錢は黄金の城の三十二萬歳の樂を得たのであるが、今やその果報がつき、母の髪を絶ち切つたために、此鐵の火の輪を頭に載せなければならぬ」との答を得た。更に私の外に之と等しい苦を受けているものがあるかと問えば、「限りないほど多い」と告げられた。此に至つて慈童は深く心に思うよう。「もう私は免れることは出來ぬ、よし、それならばみなの人達の苦を、私一人で引き受けよう」と意を決めると、奇しや火の輪はばたりと地に落ちた。獄卒に向い、「落ちないといつた火の輪が、何故落ちたのであるか」と云えば、獄卒は瞋つて鐵叉を持つて一打ちに慈童を殺したが、慈童は直ちに天界に生れた。

弟子等よ、その時の慈童は私である。父母に仕えるの罪と禍とはかようなものである。

三。舍衛國の或る長者の家に生れた一人の女兒は、生れると直ちに、「よからぬ所作、恥知らぬ所作、恩に背くわざ」と語つた。こうした福德があつたので、賢と名けられた。此子、大きくなつて袈裟を敬うこと篤く、之が動機となつて世を捨てて尼となり勤め勵んで證を開き、長く世尊の御許へゆかなかつた事を思い出し、直ちに行いて「どうぞ妾の懺悔をお受け下さい」と申し上げると、世尊は、もう前に汝の懺悔を受けているとて、次の話を語り給うた。

昔、六の牙ある白い象があつて、賢と善賢とゆう二人の妻をもち、多くの象の群を連れて林の中を歩いている中、偶ま一本の蓮華を得、之を賢に與えようと思うていると、善賢が之を奪い取つた。賢は華を奪われて妬の心を起し、夫が善賢を愛でて自分を愛でておらぬと思い込み、いつも花を捧げている山中の佛塔に詣でて、願を起してゆう。「妾は人と生れて昔のことを知り、あの白い象の牙を抜き取るであろう」と誓い、自ら山の頂から落ちて死し、毗提醯王の女と生れ、大きくなつて梵摩達王の妃となり、或る時、前生のことを思い出して王に申すよう。「大王よ、どうぞ妾のために象の牙の牀を造つて下さい、もしそうでなければ、生きている效もありません」。

王は妃の切なる願を納れ、獵師を募つて多くの象の牙を持つて來る者には百金を與えようと命けた。かねて六の牙ある白い象を知る獵師は詐つて袈裟を着け、毒箭をもつて彼の白い象の住む林に向うた。妻の善賢から獵師の近ずいたことを告げられながら、彼の象は、「袈裟を着けている」と聞いて、「それならば、悪い事をする筈がなかろう」と心をゆるめていると、獵師は易易と近ずいて、深く毒箭を射込んだ。「袈裟を着けているならば悪いことは起らぬとのことであつたが、これはどうしたことであろう」と善賢の泣くを慰めて、「それは袈裟の過ではない、心の煩惱の過である」と答えて、善賢が獵師を殺そうとするのを禁め、更に五百の象の群が、怒つて獵師を殺すのを畏れて、獵師を肢の間に藏し、象の群を去らしめて後、「何故に私を射たのであるか」と問い、「大王が牙を求めるため」と云う理由を聞いて、「疾く此牙を抜き取るがよい」と

といって、これを許した。然しながら、さすがの獵師も此象の慈愛に打れて、手を下すことが出來ないのを見て、かの象は大きな樹によつて自ら牙を抜いて獵師に與え、「私は後の世、あらゆる人人の三毒の牙を抜くであろう」と誓を立てた。

さても、牙を得た妃は漸うに後悔を覺え「妾は今どうして此勝れた戒を持つたものの牙を取ることが出來よう」と、それより大いに功德を修め、「後の世、彼の下に道を學んで證を得よう」と誓を立てた。

賢よ、其時の白い象は私、獵師は提婆達多、賢は今の汝、そして善賢は耶輸陀羅である。

四。弟子等よ、過ぎし世、雪山の麓にある一面の竹林に、多くの鳥や獸が群れ遊んで居つた。その中に一羽の鸚鵡がいたが、或る時、大風が遽かに吹き起つて、竹と竹と相摩れ、そのために火が起つて、竹林を燒いた。鳥や獸は驚き怖れて逃げ場を失い、猛る火の中をかけ廻つた。かの鸚鵡は深い慈愛の心に動かされて、彼等の苦を愍み、水に双羽を浸して空に翔け上り、その水滴を猛る火の上に濺ぎかけ、限ない慈の念で、撓まず之を續けた。その力は帝釋の神の宮殿を震い動かしたので、神は驚いて空より下り、鸚鵡に語るよう。「この竹林の大火は數千里に亙つて燃え猛つている、どうして汝の翅の滴りで之を消し止めることが出來よう」。鸚鵡答えて云うよう。「私は弘い心をもつている、勤め勵んで懈らなければ、きつと此大火を消し止めることが出來るに違いない、若し此世で出來ぬならば、後の世にかかつてもこのことを仕遂げよう」。帝釋はその志に心動かされて、大雨を降らして其火を消し止めた。

弟子等よ、その時の鸚鵡は私である。今私があらゆる人人の三毒の火を消そうとするように、過ぎし世にも同じ志に人人を憐んだことである。

五。古、二人の兄弟があつて、ともに佛の教を樂しみ、家を出でて道を學んだ。兄は勤め勵んで善を行い、森の中に思を凝して證を得たが、弟は生れつき聰く、廣くすべての經を誦んじ、大臣の委託を承けて精舍を造つた。やがて、僧房、講堂、塔など嚴しく立ち並び、その意匠の巧みさは、大臣をして益深く敬わさせた。

弟は、大臣に兄のことを語り、新たに建てられた精舍に兄を招きたいと申しいでた。大臣は快く諾い、人を遣わして懇ろに兄の聖者を迎え、厚く供養した。或る時大臣は千金に價する氈を兄の聖者に捧げたが、兄は止むなくこれを受けて、弟が樣樣のことを營むので、財物も要ることと思い、直ぐに彼に贈つた。大臣は又弟に麁末な氈を與えたので、彼は心に深く瞋りを含んだ。後又大臣は再び價高い氈を兄の聖者に贈ると、兄は又之を弟に與えた。弟は妬ましさに堪えず、その氈をもつて豫ねて言いかわした大臣の娘を訪れ、「御身の父は、先には私に厚かつたが、兄が來てからは、全く心を誑かされて、兄ばかりに厚くして私には極めて薄い、御身は此氈で衣を造り、あの兄が妾に贈つてくれたと父に申すがよい」。

娘はその父の信敬する人を悪しざまに申すことは出來ないといつたが、弟は「もし私のゆう通りに致さぬならば、永く御身と誼みを斷つであろう」と脅かすので、娘は弟のゆうがままに行うた。父の大臣は娘のゆう所を聞き、「貴い贈物で婦女子を許わすとは、何んとゆう惡い出家であろう」と瞋り、それより兄が訪れても、いつものように起つて迎えず、色をなしているので彼は逸くも、何者かが自分を誘つたのであろうと思い、直ちに空に昇り樣樣の神通を現わした。ここに大臣は深く悔改め、直ちに弟の出家と娘とを國の外に放逐つた。

弟子等よ、その時の弟は私であり、他を誘つた報によつて劫長く限りない苦を受け、今また孫陀利女のために誘られたのである。

六。弟子等、世尊に申すよう。「世尊、提婆達多は世尊の從弟であるのに、何故怨を呑んで世尊を害い奉ろうとしたのでありましよう」。

世尊、告げ給うよう。「昔、雪山に共命と名ける鳥が棲んでいた。身は一つで頭は二つであつたが、一つの頭はいつも美しい果を食べ、身を安らかにしようとしたが、他の一つは妬を起し、私は一度もあのような甘い果を食べたことはないといつて、毒の果を食べたので、二つの頭は共に命を失うた。

弟子等よ、その時甘い果を食べたのは私毒の果を食べたのは提婆達多である。彼は昔は私と身を一つにし、今亦私と血を同じうして、このように私を害おうとしたのである。

七。王舍城に一人の長者があつて、毎日のように世尊の御許に詣でて御教を聞いた。妻は他に隱し女をもつているのであろうと怪しみ、夫にその譯を問うと、「日日世尊の御許へまいる」とゆう。「さらば世尊はどのように勝れておられるか」と問う。夫は樣樣に世尊の德を說き聞かせたので、妻は心喜び、直ぐに車を同じうして世尊の御許へまいつたが、國王や大臣等の多くの人人が御前に集つて所狹く、近く進むことは出來ないので、只、世尊を禮んで家に還つた。その後妻は此世を去つて神の世に生れた。ありし世の恩を思い出でて、空より下つて世尊の御前に詣で、法を聞いてさとりを開いた。

八。古、ガンダラ國に嗣那とゆう畫師がいた。三年の間、他處に客となり、三十金を得て家に歸ろうとする時、他の人が僧のために法會を設けているのを見て、思うよう。「私はまだ福業を種えたことはない、今幸に此福田に逢うた、どうして見過すことが出來よう」と、法會を司る人にその費用を問い、「どうぞ私のために椎を鳴らして僧達を集めて下さい、私は供養の會を設けたいと思います」と請うて、その三十金を投げ出した。

やがて法會が終り、畫師は歡に溢れて家に歸つた。妻の問うよう。「三年の間で、いかほどの財物を得られましたか」。「私の得た財物は、堅固な藏に貯えて置いた」。「その藏はどこにありますか」。「それは尊い僧達の中にある」。妻は呆れて親族の人

を集めて、夫を縛り、官に訴えて出た。「私共母子は貧しさに苦しみ、衣も食もありません、それに夫は濫りに得た財を費して了いました」。訴を聞く人がその理由を問うと夫は、「私の命は電光のようで久しく止まることは出來ません、又は朝の露のように須くの間に消えてゆかねばなりません、前生に福業を植えなかつたために、今こうした貧しい身となり、衣食に苦しむのであると深く考えてみると、弗迦羅城の清らかな法會を見て心歡び、信の念内に眼覺めて、三年に働き得た三十金を捧げて多くの僧達の一日の食としたのであります」。

訴を聞く人は之を聞いて深く喜び、自ら纏うている多くの飾の寶を與え、更に一村を與えた。彼の現在の報はかように豐かであつた。

九。昔、嗣羅夷とゆう男が、その妻と二人、他人に傭われて貧しい生活をしていた。或る日、彼は長者の人達が寺へ往つて大きな施の法會を營むのを見て家に歸つて熟考えるよう。「あの長者達は前生に福を植えたので、あの人の上になれたのであるが、私は福分が薄いので今のような劇しい貧しさの苦にもがいている」と、思わず落涙した。妻は怪しんでその譯を尋ねると、彼は今の思を告げた。妻は云う。「泣いていても所詮はありません、妾の身を、婢に賣つて財物を得、それで福を植えてください」。夫は、「汝の身を賣るならば、どうして活きてゆくことが出來よう」。「それならば、二人で身を賣りましよう」と、打ち連れて富める家に赴き、「どうぞ十金を貸して下さい、若し七日目までに返すことが出來ないならば、私達夫婦を召使にして下さい」と賴み、其約束に從うて十金を借り受け、直ちに寺へ行つて七日の後に施の法會を營むことを約り、二人は力を協せて、夜を日についで米を搗いた。若その日までに返すべき金を得られぬならば、身のはつるまで他の家に使われねばならぬと、勵みつずけた。

ちようど六日目に、國王が寺へ詣で、その翌る日に法會を營みたいとゆう。僧は、貧しい人との約束を述べて王の申し出でを斷つた。王は直ぐに嗣羅夷を呼び、その他の日に法會を營むようにと云えば、彼は、「その日を過せば、一生涯、奴婢になる外はない」と、事の由を申し上げた。王は、之を聞いて深く憐み、「良に珍らしい話である、汝こそ、眞に貧しさの苦を解つたとゆうものである、堅からぬ身を堅い身に、堅からぬ財を堅い財に、堅からぬ命を堅い命にかえた」と讃め、自身をはじめ夫人の衣服や瓔珞を脫いで嗣羅夷の夫婦に與え、更に十村を分ち與えた。

一〇。月氏國の王栴檀嗣尼吒は、三人の賢人に親しんだ。その第一は馬鳴菩薩で、王にゆう。「大王よ、若し私の語を用いられるならば、心常に安らかに、後の世も善と俱に永えに惡道を離れるでありましよう」。次を摩吒羅の大臣といい、王にゆう。「大王よ、もし私の秘密の言葉を用いて漏し給うことがないならば、天が下の國國を領ることが出來ましよう」。三人目を名醫の遮羅迦といい、王にゆう。「もし大王が

私の云う所を用いられるなら、一生涯、病に侵されることがなく、百味の飲食は心のままに味われるでありましょう」。そして王はその言葉を守ったので、かりそめの病にも襲われなかった。

王は更に大臣の言を納れて軍威を四海に輝かしたが、唯東の國が歸伏わないので、軍備を嚴かにして討伐うた。先ず歸伏うた胡と白象とを先導として、王は其後につき、葱嶺に到つて嶮しい關を越えようとすると乘る所の馬が俄かに止つた。王は驚いて馬に口走つた。「汝は是迄、私を乘せて幾度も征伐に從い、今三方既に定つて東方だけを餘している、それになぜ進まないのか」。その時大臣ゆう。「私は先に大王に申しあげたことを必ず漏し給わぬようにと約束して置きました、それに王は今夫れを漏されました、大王の命も遠くはないことと思われます」。王も亦大臣の言のようにその身の死期に近ずいたことを知り、長い間の征伐で限りない人の命を屠つたことを考え、深く罪の重いことを悔い、國に歸つて寺を建て、僧に供養し、自ら懺悔の念にひたり、戒を持つた。

群臣は互に語るよう。「大王はあれだけ多くの人を殺された、今遲ればせに福を修め給うても、どうして往時の罪を消すことが出來ようか」。大王これを聞いて、彼等の疑を解こうために、臣達に勅して大きな鑊に水を滿し、七日七夜に亙つて沸らせ、王は自ら指環をその鑊の中に投げ入れ、群臣を顧みて、その指環を取り出せと命けた。

彼等は誰一人命に應えるものはない。王は更に語る。「然らば何かの方便を設けて取り出すがよい」。臣達の一人が申すよう。「火をとめ、更に冷水を鑊に入れるならば、手を傷めないで取り出すことが出來ます」。王は容を改めて群臣に語るよう。「私が先に悪を行うたのは、言わば熱つた鑊のようなものであり、いま、慚愧の念を發して善を行うのは、火を止めて冷水を濺ぐようなものである、こうして悪道の苦はやみ、善き國は得られるであろう」。

群臣は之を聞いて歡び、第一の智者の言葉を用いる王の德を讃えた。

一一。拘尸彌國に宰相の役を勤める婆羅門があつたが、生れつき暴く、ややもすれば無道の行をなした。その妻も亦心のまがつた女で、夫と行を同じうした。或る時、夫は妻に「いま喬答摩が此國へ來た、もし此家へ來たならば門を閉じよ、入れてはならぬ」と命けた。然るに或る日、世尊は急かにその家を訪れ給うた。婆羅門の妻は挨拶もせず、默つておる。世尊は、「汝等は愚で邪まの見をもち、三寶を信することはない」と仰せになつた。彼の女は之を聞いて怒り、自ら瓔珞を斷ち切り、垢ずいた衣をつけて地に坐つた。夫は外から歸つてこの樣を見、故を問うと、喬答摩に罵られたと語る。翌る日になつて門を開くと、世尊はその家に入られた。之を見た婆羅門は、兼ねて用意の劍を提つて切ろうとしたが、世尊は忽ち虛空にいたもう。彼はこの神通をみて大いに悔い身を地に投げて叫ぶよう。「世尊、どうぞ地に下つて私の悔を御受け下さい」。世尊はその請を容れ、夫婦に法を說き聞かせ道に入らしめられた。

弟子等が、世尊はどうして、あのような悪人を降し給うたのであろうと怪しく思うたので、世尊は昔の因緣をとかれた。

昔、迦尸の國に悪受とゆう王があつて、あらゆる非道を行うて民達を惱まし、四方から集る商人に對うては、彼等の持つている珍しい品品を稅として押收めた。そのために、國の中の寶物はみな王の手に收められた。王の悪名はあらゆる人人の口からロへと傳えられた。

その時、一羽の鸚鵡があつて、林の中から道ゆく人達の王の悪事を語り合うのを聞き、王を諫めようと思い、空高く飛んで王の園の中に下り、とある樹の枝に止つて、王の夫人の園に入り來るのを見ると、翼をたたいて語るよう。「王はいま非常の行をなして民を虐げ、その毒は禽獸にまで及んでいる、憤りと嘆きの聲が國に滿ちている、夫人も亦王と同じように苛酷しいこれが民の父母と云われようか」。

夫人は之を聞いて大いに怒り、人を遣わして捕えしめたが、鸚鵡は恐氣もなく捕えられ、直ちに王の前に引き出された。王は、何故に私を罵るかと問うと、鸚鵡は、王の七つの罪を數えた。

「女色に耽り、酒を嗜み、賭博を事とし、殺生を好み、悪言を擅にし、苛い稅を取りたて、横しまに民の財物を奪う。この七つの罪が王の身を危うする。更に國を傾ける三つのものがある。佞り諂う悪人を近ずけ賢者の忠言を受けず、好んで他の國を攻めて民を養うことを忘れている。此三つの悪事を除かぬならば、遠からず國が滅びるであろう。抑も王者は、國をあげて仰ぐところで、萬ずの民を渡す橋であり、親しいものにも疎い者にも秤のように平等であらねばならぬ。先聖の道を踐んで違わず、日のように普く世を照し、月のように涼しさを與え、父母のように惠み、天のすべてを覆うよう、地の萬ずの物を載せるよう、又は火の悪を燒きつくし水の物を潤すようであらねばならぬ。過ぎし世の聖王は、みなこのように十善の道をもつて人人を敎え導かれたのである」。

王は之を聞いて、深く自らの行を愧じ、鸚鵡の敎を受けて正しい政を行うたので、敎は國の内に弘められ、忠良の人人は左右に集り、民達は歡び勇んだ。

弟子等よ、その時の鸚鵡は私、王は今の宰相の婆羅門、王の夫人はその妻である」と說かれた。

一二。ものは求むべきところに方便を用いれば得られるが、求めてならないものを強いて得ようとしても、得られるものではない。譬えば、砂を厭して油を求め、氷を鑽つて酥を求めるようなものである。

昔、波羅奈の國に梵摩達とゆう王がいたが、或る時、夜中になると遠い墓場から、「王樣王樣」とゆう聲を聞いた。それは一夜に三度に及んだ。王は少からず怖れ、諸の婆羅門や占師を集めて、「いかなる處置を取つてよいか」と尋ねた。彼等は答えて、「それは墓場にいる妖怪の仕業に相違ない、膽力のある者を選んで、聲をしるべに其所に遣すが宜い」とゆう。王は國中にふれて、

「墓場の聲を見屆ける者には五百金を與えるであろう」と告げしめた。その時貧しい獨身者で膽力のある男が、その召に應えて甲冑を着け、劍を執つて墓場の聲を尋ね、「汝は何者であるか」と問うた。聲の主答えて「私は大地に藏されている寶である、夜毎に王を喚んだが、王は怖れて應えてくれない、若し王が此處へ來るならば、私は寶庫に導くであろう、然し汝には實に勇氣がある、寶は汝に贈ろう、私に七人の伴人があるから、いずれ明る朝彼等と共に出家となつて汝の家へ行くであろう」。その男問う。「どうして待遇すればよいか」。曰く、「唯、室を清め、美しく飾り、葡萄の汁や乳糜を八つの器に盛つて飲食させればよい、食事が了つたら、枕をもつて主席の出家の頭をうち、角の室へ入れとゆうがよい、さすれば寶は得られるであろう」。

男はそのまま家に歸り、翌る日、王宮へ赴いて、「聲の主は妖怪であつた」と語り、五百金を貰い受け、家に還ると、理髮師を賴んで、自ら身を整え、室を清め、食物を設け、やがて八人の出家を迎えて、食事が終ると、上座の出家を驅つて角の室へ入れると、そのまま黃金の瓶と變つた。同じ仕方で次の七人の出家も亦同じ七つの黃金を盛つた瓶と變つた。理髮師は之を見て、己も同じ仕方で寶を得ようと思い、凡て前の男のように準備をして、やがて八人の出家を招いて、食事をすすめ、門を閉じて上座の一人を打つたが、その頭は破れて血が流れ、やがて角の室へ追い込むと、彼はあわてて糞を漏した。逐次に七人の出家も代る代る打たれて床の上にのたくり廻つたが、中に力のある一人は、戶を破つて外に出で人殺し人殺しと叫んだ。やがて理髮師は役人に取り押えられ、事の由を具さに王に申した。王は直ちに人を遣わして、先の男の得た黃金の瓶を官に沒收めようとしたが、夫等の瓶は毒蛇となつて役人に向うた。

王は之を聞いて、先の男に語るよう。「その寶は凡て汝に與えられたものである、與えられぬ寶は何人も取ることは出來ない、ちようど戒を守り、勤め勵んで道を修めれば善い報は得られるが、愚者はその果報だけを見て、外に戒を持つても內に誠の信心がなく、徒らに和樂を求めても得られないようなものである」。

一三。 狡い者は外面は正直そうであるが內心には邪を懷いている。昔、年老いた婆羅門あり、年若い後妻を貰つたが、彼女は夫を嫌うて他し男を樂しもうと思い、夫に勸めて若い婆羅門達の會合を催おそうとしたが、夫は妻を疑い事に託けてその會合を延した。或る時、先妻の男の子が誤つて火の中へ落ちたが、妻は之を救おうともせない。故を問うと、「妾は他し男の子は取りませぬ」とゆう。老婆羅門は之に動かされて、延しておいた若い婆羅門達の會合を開いた。若い妻はこの機會に思のまま樂に耽ることが出來た。夫は之を知つて苦しみ惱み、遂に寶をもち身獨り家を逃れた。道に一人の婆羅門と逢い、打ち連れて宿を共にし、翌る日その家を立ちいで可成り遠く歩いた頃、伴の婆羅門は思い出したように語るよう。「私はこれまで、他の物

つ取つたことはない、然るに昨夜の宿に、一枚の草葉が私の衣服に着いていた、私は之を宿の主に返さねばならぬ、暫くお待ち下さい、急いで還るから」と云い捨て、元來た道へ取つて返えした。老婆羅門は之を聞いて心から敬の思を起し、この人こそ敬い侍るべき方であると思うた。然るに前の婆羅門は道の傍らにある溝の中へ入つて腹這いになつて憩い、やや暫くして老婆羅門の許へ還つた。その時、彼は汚物を洗うために、何の疑も挾まずもつている寶を伴の婆羅門に託けたが、寶は此の機會に彼の手から失われて仕舞つた。

老婆羅門は悲しみ傷んで、魂を失うた人のように行くとはなしに歩みいつて、とある樹の下へ憩うと、一匹の鵝が、口に草を銜んで、多くの鳥達に語るよう。「みな互に助け合うて一處に住もうではないか」。鳥達は彼のゆうことを信して、みなそこへ集つた。やがて鳥達が飛び去つたのを見て、彼の鵝は巢とゆう巢を覘い、卵を啄みその汁を吸い、多くの雛を喰つた。そして多くの親鳥が還つて來ると、彼は何喰わぬ顏をして前のように草を銜んでいた。

稍や暫く其處にいると、一人の修道者が破れた衣を着け、「蟲共や、危いぞ危いぞ」と云いながら、靜かに歩いて來た。老婆羅門は奇しく思うてその譯を問うと、「私は何物にも氣の毒でならぬ、蟲共を踏み殺そうかと思うて、こうして歩いているのだ」とゆう。老婆羅門は深くそのゆかしい人格を慕い、その後を逐うて日暮にその修道者の家に宿つた。離れ屋に臥しながら、眞の道を行う人に逢うた喜に浸つていると、眞夜中頃、不圖絃歌の聲に旅寢の夢を破られた。驚き怪しんで聲をたよりに行いて見ると、晝の嚴しい修道者は、若い女と遊び戲れている。女が舞えば男は琴を彈き、男が舞えば女は樂を奏でる。老婆羅門の心は氷のように冷え渡つた。「ああ、世をあげて信すべきものは一つもない」。

國に一人の長者がいたが、或る夜多くの寶がなくなつたので、王に訴え出でた。「なにも怪しい者は居りませぬ、只一人の婆羅門が出入しているが、この人は草の葉を衣として清い生活を送つている」とゆう。王は之を聞くと直ちにその婆羅門を捕え、深く問い訊して、遂に彼の仕樣であることを自白らせた。

一四。 世尊、祇園精舍に在した時、舍衛城の中に、如願とゆう男があつて、他人の物を盜み、人を殺し、邪婬に耽り、遂に官に捕えられて巷を引き廻された後、刑場へ運ばれた。この男ゆくりなくも死に臨んで世尊に逢い奉り、具さに我身の罪を申しのべてゆう。「世尊、私の命は迫つております、どうぞ大きな御慈悲を垂れ給い、大王に請うて、私を御弟子として下さい、さすれば直樣死についても恨む所はありません」。世尊はその願を容れ給い、阿難を遣わして波斯匿王に事の由を申し、此の罪人を弟子の數に入れることを請わしめた。やがて、王の許を得て、彼は世尊の弟子となり、勤め勵んで證を開いた。

一五。 王舍城の浮海とゆう商人が、多くの人人を伴うて海へ入り寶を求めた。その

婦は少く美しくあつたが、日に夜に、海にある夫の身の上を思い、果ては神の祠に詣てて願言をかけた。「神よ、もし妾の願を容れて、夫を恙なく還して下さるならば、金銀の瓔珞を捧げます、もし此願を叶えて下さらないならば、汚いもので此祠を穢します」。

程經て夫が安らかに家へ還つたので、妻は歡び、金銀の瓔珞を持ち婢を伴うて家を出たが、まだ祠へ到らぬ前に、ちようど世尊が多くの弟子を連れて王城へ入られるのに出逢うた。その崇高い御姿は大空の日も愧ろう有様であつた。女は威神を仰いで喜び、思わず手にせる瓔珞を世尊の上に投げかけたが、瓔珞は寶の蓋と變つて空にかかり、世尊の御歩みと共に隨い動いた。彼女は此奇しき樣を見て深い信を發し、身を大地に投げて、「どうぞ、此因緣によつて妾も世尊と同じような身にしていただきたい」と誓を立てた。世尊は之を見て、打ち笑み給い、御意に此女の願を許したもうた。

一六。或る時、世尊は諸の弟子達を連れて摩竭陀の國を遊行し、恒河の畔にて、川邊に船を繫ぐ船師に宣うよう。「どうか、私達を向うの岸へ渡して貰いたい」。船師は「船賃さえ出して下されるならば」とゆう。「船師よ、私も亦船師である、世の迷の海を超えて、多くの人達を度した。こうして互に人を度すことは快い事ではないか。私は指鬘のように多くの人を害うた者や、摩那答陀のように無暗に橋つて人を見下した人を、みな船賃を取らずに度してやつた、それゆえ汝も船賃を取らずに私達を彼方へ渡して貰いたい」。然し船師は應えない。川下に居た他の船師が、世尊の御語を聞き、歡んで船を寄せ、世尊の一行を迎えたが、此時弟子達の内に神通を現わして、向うの岸へ渡つたものや、川の中流を歩いているものもあつた。前の船師はこの神通を見て大いに悔い、身を地に投げて世尊と弟子達に歸依し、御許を受けて家に世尊の一行を招いて、美味を捧げて教を受け、法の喜びを得るに至つた。

一七。王舍城の長者の婢で生れつき素直で、佛法を信するものがあつた。彼女は時時主人の云いつけで、栴檀香を磨らせられたが、或る時、又香を磨つた後で門外へ出ると、城に入つて食を乞われる世尊の御姿を拜み、喜びに心躍つて、思わず家に入り、少しばかりの栴檀香を取り出して世尊の御足に塗つた。世尊は彼女の心を嘉し、神通をもつて此香を香の雲となし給うと、たなびき流れて王舍城を覆うた。彼女は此奇瑞を見て、ますます信心を深くし、「世尊と同じ證の身になりたい」と誓うた。世尊は快く此願を許された。

一八。舍衛城の富める人達が、或る日善き衣に身を飾り、香や花を手にし、伎樂を作して城外にいで、一日の行樂を擅にしようとゆうので、城門まで來ると、多くの弟子達を連れて城に食を乞い給う世尊に逢い奉つた。彼等は光り輝くような世尊の御姿を仰いで歡の心溢れ、思わず御足を禮し、伎樂をなして一行を慰めまつり、手にした樣樣の花を世尊の上に撒き散すと、世尊の神通によつて美しい花蓋となり、自ら擴つて舍衛城を覆うた。彼等は此奇瑞を見て同じ樣に、「世尊と同じ證りの身になりたい」と誓うた。世尊は快く彼等の願を許させられた。

一九。遠い古、善面とゆう王が波羅奈の國を治めたが、國豐かに民榮えてあつた。王は智慧明かに深く道を求め、寶を巷に置いて、何人にても妙なる法を說いてくれるものがあるならば、此寶を與えるであろうと聲言した。この至誠に心動いて神の宮殿は盡く震い動いたので、帝釋は王の心を試そうと思い、鬼の相を現わして王の宮門に來り、「私は妙なる法の持主である」といつた。王が喜び迎えると、双のように恐ろしい牙を嚙んでいる鬼は、「俺は今飢えているから、法を說くことは出來ない」とゆう。王が樣樣の食事をあたえると、「俺は熱い血と新らしい肉でなければ、飢を滿すことは出來ぬ」と喚めく。

この時、王の太子の孫陀利は、進んで父に申すよう。「法を得ることは難いと聞いております、いま私はこの身を鬼に捧げようと思います」。王は、身命を惜まぬ太子の大きな志を知り、「私は遠い昔から恩愛に縛られ、迷から迷に流れて盡くることはなかつた、今や法のために愛子を捨てるときである」と心に定め、太子の請を許した。

太子は健氣にも鬼の許へ進むと、彼は王の面前に太子を引裂いて床に仆し、血を飲み肉を食うたが、まだ飢えた腹は滿されぬとゆう。王の夫人は、勇ましく法のために命を捧げた太子の心に勵まされ、王の許を得て更に鬼の餌に身を捧げた。鬼は更に飢を滿たすために王の身を求めた。王は靜かに、「私は、命を惜しむことはないが、只此身が死ねば、法を聞くことは出來ぬ、汝が法を說くならば、此身を與えるであろう」とゆう。鬼はその誠心を知り、王のために一つの偈を唱えた。

愛欲により、憂は生れ、愛欲により、
怖は生る、よく恩愛を離るる人ぞ、永く怖の根を斷たん。

唱え了ると鬼は忽ち帝釋の相にかえり、太子も夫人も元の姿を現わした。王はただ喜び踊つた。

かように說かれて、世尊宣もうよう。「そのときの善面王は私、太子は阿難、夫人は耶輸陀羅である、私も亦遠い古から、かように、愛着を捨てて道を求めたことである」と仰せられた。

二〇。或る朝、世尊が多くの弟子等を連れて舍衛城に入り、食を乞いつつ、とある巷において一人の婆羅門に逢われた。婆羅門は指もて地を指し、世尊を遮つて叫ぶ。「汝は私に五百金を拂わねばならぬ、さなくば、此處を通すことは出來ない」、世尊は其處に默つて立つていられた。此事は諸人を驚かし、波斯匿王に聞えたので、王は直ぐに人を遣わして財を與えたが、婆羅門は容易に肯き入れない。その時須達長者が五百錢を持つて來て與えると、婆羅門はそれを受け收めて、世尊に通ることを許した。この事に不審を懷いた弟子等の意を知しめして、世尊は語り給う。

遠い古、波羅奈の國に善生とゆう太子があり、或る日親しい友達と共に遊んだが路に宰相の子が戲人と博奕して五百金を負債したのを見て、戲人に語るよう。「若し、宰相の子が拂い得ぬならば、私が拂うであろう」。宰相の子は勢を恃んで、遂にその金を拂わなかった。かくてその負債は量りない世を重ねて今日に及んだが、その時の太子は私、宰相の子は須達長者、戲人は今の婆羅門である。されば弟子等よ、負債は必ず償わねばならぬ。もし償わないならば、證を得てもその難を免れることは出來ぬ。

二。世尊が祇園精舍に在した時、舍衛城に樓陀とゆう盜賊があつた。利き劍を帶び、弓箭を把つて往來に出沒れ、道行く人を脅すことを仕事としていた。或る時、幾日も幾日も飢に過られたが、遙かに一人の出家が鉢を持つて樹の下にあるのを見て思うよう。「あの鉢の中には、きつと食物があるに相違ない、奪い取つて食べよう、若し彼が食べ了つているならば、殺して腹を割いても食べなければならぬ」。靜かに近ずいて程遠からぬ所に停つた。出家は彼の意を知つて思うよう。「若し私の方から食物を與えなければ、きつと私を殺すに相違ない、さすれば彼をして恐しい罪を犯させることとなる」。よつて、直ちに彼に言葉をかけて食物を與え、飢を滿させ、彼が歡の心を起した時、さまざまに法を說いた。彼は直ちに信心を起して出家となり證を開いた。

三。世尊、王舍城の竹林精舍に在した時、市の長者達が大きな節會を催し伎樂をして樂しんだ。其中に南方から來た夫婦の舞踊師があつて、青蓮華とよぶ美しい娘を連れていた。娘は容色の美しいのみでなく婦人として心得る六十四の技藝において何一つ缺くる所はない。その樂につれて舞い出る姿態のゆかしさは、類い罕なるものであつた。そして、「此市において、妾のように能く舞うもの、妾のように經論に明かなるものがあろうか」といつた。人人が、竹林精舍にいます世尊のことを語ると、彼女は多くの人人を連れて歌いつ舞いつ、ざんざめいて竹林精舍に着いたが、はしたなく笑い興じて、世尊を拜もうとしない。世尊これを觀わし、神通をもつて彼女を百歲の老婆に變えられた。髮は白く面皺み、齒落ち腰曲み、這うようにして歩かなければならなかつた。彼女は我が姿の衰に驚き悲しみ、世尊の御力に思い至つて深く悔いの念に浸り、御前にひれ伏して今迄の憍と過を悔い、ひたすら御許を請うた。

世尊は舞女の心を知り、再び神通をもつて元の姿となし給うと、並みいる人人は、老と壯さの定めなきを目前に見て、法を聞く眼を開く者が少くなかつた。そして舞女もその父母も世尊の御許を得て御弟子となり、證を開いた。

第五節　蟻蛭

一。世尊は又も舍衛城に歸り、祇園精舍に入り給うた。その時鳩摩羅迦葉は闇林に滯つていたが、或る夜、一人の神がその輝きをもつて林全體を輝かして、彼の傍に

來てこのように云つた。

迦葉よ、或る人が或る婆羅門に、「この蟻蛭は夜は煙つて晝は燃える」と云うたことがある。その時その婆羅門は、「それでは劍をとつて深く掘れ」と命けたが、その命のとうり深く掘ると門が出た。婆羅門は更に、「門をとり除けて深く掘れ」と命けた。今度は水泡を見た。「水泡をとり除けてもつと深く掘れ」。今度は刺叉を見た。「刺叉をとり除けて更に深く掘れ」。今度は箱を見た。「箱をとり除けて更に掘れ」。今度は龜を見た。「龜をとり除けて猶深く掘れ」。今度は屠牛者の刀を見た。「それを取り除けてもつと掘れ」。今度は一片の肉を見た。「その肉を取り除けて更に掘れ」。今度は龍を見た。時にかの婆羅門が、「賢者よ、龍をその儘にして置け、龍を妨げるな、龍に歸依せよ」と云うたことがある。汝は世尊の御許へ行き、この問答のことを尋ねて、世尊の說明し給うように記憶えるがよい。すべての人人の中に世尊と、世尊の御弟子と、及び世尊の御敎を聞いたものを除いて、この謎を說明し得るものはないのである」。こう話つて、その神は姿を消した。

二。鳩摩羅迦葉は、その夜を過ぎて世尊の御許に行き、世尊にその事を申しあげ、一つ一つの說明を御願した。

世尊はこれに答え給うよう。「迦葉よ、蟻蛭とゆうは、この身體のことである。晝になしたことを夜になつていろいろ考えることが夜に煙るといい、夜いろいろ考えたことを晝になつて、身に口に行うのを晝燃ゆるとゆうのである。婆羅門とゆうは佛のこと、劍とゆうは修道者のこと、龜とゆうは聖き智慧、深く掘るとゆうは精進のこと、門とゆうは無明、門をとり除けるとゆうは、無明を捨てることである。迦葉よ、劍をとつて深く掘れとゆうは、聖い智慧をもつて大いに精進し、無明を除けと云うことである。

次に水泡とゆうは、忿と惱とのことであり、刺叉とゆうは狐疑不安のことであり、箱とゆうは貪欲と瞋恚と懶眠と心の掉悔と疑惑との五つの心の覆蓋のことであり、龜とは身と心のことであり、屠牛者の刀とゆうは五欲のことであり、一片の肉とゆうは樂を貪る欲の事であり、この忿と惱、五つの心の覆蓋、身と心、五欲、及び樂を貪る欲を捨てよとゆうのである。

迦葉よ、龍とゆうは煩惱の盡きたことを云うのである。龍をその儘にして置け、龍を妨げず、龍に歸命せよとゆうは、煩惱が無くなつたならばその儘にせよ、煩惱なき人に歸命せよと云う義である」。

この說明を聞いて、鳩摩羅迦葉は大いに歡んだ。

三。世尊は又も王舍城に歸り、その西南に當る溫泉園に入り給うた。左彌提が曉の猶暗い中に溫泉に浴し、身體を乾かしていると、光りを林一面に輝かして、一人の神が降つて來た。「御弟子よ、汝は良き一夜の偈と云うものを知るか」。「友よ、私は知らない、汝は知つているか」。「私も知らぬが、その偈と意味とを知ることは大きな利益であるから、善く記憶えるが善い」。

左彌提は神が去り、夜が明け離れると、

世尊の御許へ行いて此事を申し上げ、「良き一夜の偈」を教えて下さるようにと願うた。世尊は、

過去を逐わざれ、未來を待たざれ、過去は過ぎ去り、未來は來るなし。ひたすらに、ただ、現在の法を觀よ。
奪われず、動かさるなく、そを知りつ繰り返せよ。今日の時熱心になせよ。明日、誰か生死を知らめ、死の軍に、待つことなければ。
かくて、つとめつ撓まず、日と夜をおくるを、善き一夜とこそ、尊き聖者は說けるなれ。

と偈を教えて、自分の室へ入り給うた。

在彌提を初め、弟子等はこの偈を聞いて意味を聞かない中に世尊が座を立ち給うたので、摩訶迦旃延の處へゆき、この偈の說明を願うた。迦旃延は云うよう。「友等よ、丁度樹の芯を求める人が林に入つて芯のある樹を見付けながら、根本も幹も超えて、枝や葉に芯を求めるようではないか、世尊にお尋ねして、仰せのように記憶えるが善い」。

「迦旃延よ、あなたの仰せの通りであります、然しあなたも世尊に讃えられ、同學のものに尊ばれ、この偈の義を說く力ある方でありますから、どうぞお說き下さい」。

「それでは說明をするから、よく聞いて下さい、過去を逐わざれとは、過ぎ去つたものを逐うて貪欲に囚われるなと云うこと、未來を待ち設けざれとは、未だ來らぬものに願を起すなと云うこと、現在の法を觀よとは、今眼の前に見ているものに心を止めて、よく、佛の教を味えよとゆうことである。友等よ、これが私のこの偈の說明であります」。

弟子等はこの迦旃延の說明を聞いて、大いに喜んだ。

第四章　法塔

第一節　尼乾陀の死

一。波斯匿王はその晩年の或る日、世尊を祇園精舍に訪れて教を受けていると、計らずも末利夫人の死が報らされた。王は過ぎし日を思い出でて、この悲しい別れに氣落し、肩をすぼめ、頭を垂れ、語もなく坐つて居られた。世尊は懇ろに、悲しむ王を慰められた。

王よ、いかなる世界においても、避け難いことが五つある。それは老と、病と、死と、盡きることと、滅びることである。この五つは、いかようにしても避けることの出來ないものである。

王よ、智慧の乏しい、凡常の人人は、その老ゆべきものが老い、病むべきものが病み、死すべきものが死し、盡くべきものが盡き、滅ぶべきものが滅びた時、徒らに泣き悲しみ、迷亂に陷入るが、智慧の豐かな佛の弟子はこの場合、次のように考える。

「これ等老や病や死などは、私の上にばかり來るのではない、若し、私が之について泣き悲しみ迷亂に陷入れば、食は進まず、身體は衰え、仕事は出來ず、敵の惡魔は喜び、味方は悲しむであろう」と、かく考えて泣き悲しまない。凡常の人人は毒矢に射

られて自ら苦しみ、佛の弟子は毒矢を避けて憂なく、自ら煩惱のない寂靜の境に入るのである。

二。世尊はそれより釋迦族の國に入り、**ヱーダンニヤ**の樹林の講堂に滯在された。

この時、純陀は、波婆に安居して居り、眼の當り、尼乾陀の死に依つて、その徒が兩派に分れて相爭うのを見た。純陀は安居を濟ませて、**サーマ**村に滯在する阿難の許に赴いてこの事を語ると、阿難は直に純陀を連れて世尊の跡を逐い、世尊に詣でて申しあげた。

「世尊、純陀は、この安居を波婆に送りましたが、この樣に申します、尼乾陀が、この頃波婆に死にました、その後で尼乾陀の徒は二派に分れて、汝は敎も戒も知らない、汝の說は邪である、汝は既に破れて居ると、互に攻め合い、このために出家の弟子も在家の弟子も敎を嫌うようになり、甚く勢力が衰えました」。

世尊仰せられるよう。「純陀よ、涅槃と寂靜とに導かず、正しく覺を得てないものに說かれた敎の最後はそのようなものである。純陀よ、師が正しい覺の人でなく、從つてその敎が誤つている場合、弟子がその敎の通りに道を修めず、敎を去ろうとするのはよいことである。師と法とは批難さるべきもの、その弟子は賞讃えらるべきものである。却つてその弟子に「留つて師の敎を守れ」と勸むる人と、その勸めに依つて師の敎を守る人とは、不德を生み出すのである。

純陀よ、師が正しい覺の人でなく、從つてその敎が誤つている場合、弟子がその敎の通りに道を修め、その法を固く持つて守つているならば、勤めてその弟子をして、敎より去らしめねばならぬ。その敎に留まることを賞讃えるならば、賞讃える人も、賞讃えられる人も、共に不德を生むのである。純陀よ、師が正しい覺の人であり、從つてその法が眞實であるならば、弟子はその敎に留まり、敎の通りに道を修むるよう勸められねばならない。

純陀よ、茲に正しい覺の師が顯われて法を說く。未だ弟子がその法を解らず、廣く人間の間に弘まらない中に、師が死ぬならば、それは實に弟子の悲である。弟子がよくその法を解り、その法の通りに行い、廣く人間の間に弘まつて後、師が死ぬならば、それは弟子の悲ではない。

純陀よ、若し敎が、それを說く師は出家して久しく、敎の世の耆宿であり、その弟子は出家も在家も賢くして心を練り鍛え、畏れなく安穩に到り、法を正しく說き、同門の間に起つた爭論を靜める能力がありその敎は廣く弘まり、よく世に知られ、利得も名譽もこよなきに到つたならば、缺目なく圓滿であると云われねばならぬ。その中の一つを缺いても、その敎は圓滿ではない。

三。純陀よ、私は覺を開いた人と世の師として顯われて、涅槃の寂靜に導く法を說いた。私の弟子は正法を善く解り、淸らかな行を圓かに修めて居る。私は又世を捨てて久しい敎の世の長老である。私の弟子は在家も出家も、賢くして心を練り鍛え、畏れなく安穩に到り、法を正しく說き、

同門の間に起る爭論を靜める能力があり、私の敎は廣く弘まり、よく世に知られている。又この世にありとあらゆる師の中で私ほど、僧伽の中で私の弟子の僧伽ほど、こよなき供養とこよなき名譽を得て居るものはない。誰でも缺目なく圓滿な敎があると正しく云うものがあるならば、それは私のこの敎のことでなければならぬ。

純陀よ、羅摩の子鬱陀迦は、よく、見て見ないとゆう語を使つたが、これは鋭い剃刀の平を見て、刃を見ないとゆう意味に用いたので、つまらないことであるが、然しこの語を正しく用いると、圓滿な缺目のない敎を聞いて、それをもつと明かにしよう、もつと圓滿にしようと思つて見ても、何處にも補う場所を見つけられないと云うことに使われるのである。

それであるから純陀よ、汝等は私の說いた法を相集つて誦合い、爭をしてはならぬ。人の世の利益と幸福とになるために、永久にこの法を傳えるよう、文と義を明かにせねばならぬ。

純陀よ、汝等の相集る時、若し一人が法を說くのに、汝等はこれを文も間違い義も邪であると思つても、直ぐにそれを、善しとし惡しとしてはならぬ。靜かにその弟子に向い、「その義には、この文句とその文句と孰れが適當であるか、この文句についてはこの義とその義と孰れが適當であるか」と問わねばならぬ。その弟子がこの文句とこの義が適當であると云つても、直ちに排斥け批難らないで、更に懇ろにその文と義について知らしめねばならぬ。

文句は正しく、義が間違つて居ることを云う弟子に對うても、義は正しく文句の違つて居ることを云う弟子に對うても同樣である。若し文も義も正しいことをゆう弟子には、善い哉、善い哉と隨わねばならぬ。

四。 純陀よ、私はこの現在の煩惱を滅すためにのみ法を說くのではない。又未來の煩惱を滅すためにのみ、法を說くのではない。未來と現在の煩惱を滅すために法を說くのである。純陀よ、それ故に私の許した汝等の衣は、只寒暑を防ぎ蚊や虻を防ぎ慚愧のために身を覆うだけで足りるのである。汝等の食はこの法の器を支え、淸い行を修める助けになるだけで足るであろう。住居も亦寒暑を防ぎ蚊や虻を防ぎ、氣候の危險を防いで閑居の樂をなすだけで足るであろう。藥も亦病の苦を除いて健康を得るだけで足るのである。純陀よ、異敎の人人は、釋子の徒は樂に耽つているとゆうかも知れぬ。この場合汝等は異敎の人人に問うがよい、「樂に耽るとゆうは何れの種類をさして云うのであるか、それにはいろいろの種類があるから」と。

純陀よ、四種の卑しい樂に耽ることがある。一つは或る愚かな人が生物の生命を取つて樂とすること、二つは人の所有を奪つて樂とすること、三つは妄語を吐いて樂とすること、四つは五欲に耽つて樂とすることである。この四種は汝等の避けて居る所であつて、若しこの一つを以て批難するものがあれば、それは信なく實のない批難である。

純陀よ、この外になお寂靜と涅槃に導く樂がある。それは欲を離れ、惡を離れて入る禪定である。この樂に耽るものは、聖の道の證を得る利益があるのである。

五。 純陀よ、異敎の人人は、汝等の智慧を以て、多く過去を語り、未來を云う事の少いものとするかも知れない。純陀よ、佛は遠い過去に對うては心に欲うだけ正念に伴う智慧を有ち、未來に就ては、之は最後の生で、この外に迷の生はないと云う、菩提から生れる智慧を有つだけである。

純陀よ、佛は過去の事で眞實であり、利益になることならばよき時に說明するであろうが、虛僞のことは云わない。眞實であつても利益にならないことは語らないのである。未來のことについても同じことであり、現在についても亦同じことである。

純陀よ、佛とは一切の事を證つたもののことである。又正覺の曉より、滅度の夕まで、その語る所すべて眞實なるものの義である。又云うが如く行い、行うが如く云うものの義である。一切の世界において何物にも敗られることのない、勝者、全見者、統治者であるものの義である。純陀よ、佛は覺のためにならないことを云わない。只これは苦である。これは苦の集である、これは苦の滅である、これは苦の滅に至る道であると云う、四つのものを說くだけである。何故なれば、これのみが覺のためになるものであるからである。純陀よ、佛は、世界が常住であるか常ないか、世界が限があるか限がないかなどとゆう覺のためにならないことは說かない。過去に就て、未來に就て、いろいろの邪見を破つて、只身を觀め、感覺を觀め、心を觀め、法みなを觀めて、世間の貪欲と悲苦とに打ち勝つことを說くのである」。

その時優波婆那は、世尊の後にあつて、世尊を扇いでいたが、申し上ぐるよう。「世尊、誠にこの敎は歡ばしいものであります、この敎を何と名くべきでありましようか」。「優波婆那よ、これを歡喜の敎と呼ぶがよい」。

第二節　雨行大臣

一。世尊はそれより又王舍城に歸り、その竹林精舍に御いでなされた。或る日、摩竭陀の國の大臣雨行は、世尊を訪れて申し上ぐるよう。「世尊、私共は四つの質を具えたものを智慧の人、偉い人と申します、すなわち一つには博覽であり、聞いたこと、の意味合を善く解つて、この話の意味はこう、この所說の意味はこうと知りわけること、二つには記憶が正しく、ずつと前になしたこと、云つたことをよく心に留めて居ること、三つには家業その他なさねばならぬ仕事に巧者であつて懶惰でないこと、四つには手段方法を考え出すに巧みなことであります。私は、この四つの質を具えた人を、大きな智慧のある人、偉い人と申しますが、御考はいかがでありますか」。

「雨行よ、私は汝の云う所に贊成もせぬし否定もしない、私も四つの質を具えたものを、大きな智慧のある人偉い人と云うが、私の四つの質とゆうは、一つには多くの人の利益幸福を計り人人を神聖しい道に立たしめること、二つには考うべきことを考え

考えてならぬことを考えないこと、三つには考の道において、心を素直に御え得ること、四つには困難なしに禪定に入つて現在その味を得、煩悩を滅して解脱を得ることである、この四つの質を具えた人を大きな智慧の人、偉い人とゆうのである」。

「世尊、まことに勝れた御説であります、私は世尊をその御説の四つの質を具えた人と見るのであります」。「雨行よ、汝は私にからかつて、そのように言つているように見える、しかし私は云う、私は、多くの人人の利益幸福を圖り、人人を神聖しい道に立たしめるものである、考うべきことを考え、考えてはならぬことを考えないものである、考の道において、心を素直に御えることの出來るものである、困難なく禪定に入つて現在その味を得、煩悩を滅して解脱を得たものである」。

二。或る日また雨行大臣は、世尊を竹林精舍にお尋ねして申しあげた。「世尊、私はこうゆう考をもつて居ります、何事に依らず、見たものを見たといい、聞いた事を聞いたといい、考えたことを考えたといい、知つたことを知つたと云うことには罪がない、私はこうゆう考えをもつて居ります」。

「雨行よ、私は見たことを凡て話さねばならぬとは云わない、又見たことをすべて話してはならぬとか、聞いたこと、考えたこと、知つたことでも同じ樣に、すべて話さねばならぬとは云わぬ、すべて話してはならぬとも云わない。雨行よ、話をして、若し悪いことが増し、善いことが姿をかくすことは、見たことでも話してはならず、又話をして、悪いことが姿をかくし、善いことが増して來るようなことは話さねばならぬと私はゆうのである、聞いたこと、考えたこと、知つたことでも同じ樣に、話をして悪いことが増し、善いことが減ることは話をしてはならず、悪いことが減つて、善いことが増して來るようなことは話さねばならぬと私は云うのである」。

雨行大臣は、世尊のこの御語を聞いて歡びながら家に歸つた。

三。又或る日、雨行大臣は世尊を御尋ね申しあげた。「世尊、悪人は悪人を知るでありましようか」。「雨行よ、悪人が悪人を知る筈がない」。「世尊、悪人は善人を知るでありましようか」。「雨行よ、悪人が善人を知る筈がない」。「世尊、それならば善人は善人を知るでありましようか」。「雨行よ、善人は善人を知ることが出來るのである」。「世尊、まことにいいお説であります、仰せのように悪人は悪人をも善人をも知ることがなく、善人は善人をも悪人をも知ることが出來るのであります、或る時、トーデイヤの婆羅門についている人人が、他のことを罵つて、このヱレイヤ王は出家の羅摩弗多を大いに尊んで禮み、跪いておられるが愚かなことである、また王の近侍のヤマカ、目連、ウツガ等の六人の人人も、羅摩弗多を信し過ぎて、禮み、跪いて敬をせられるが愚かなことであると、いつたことがあります。

その時、トーデイヤ婆羅門はその人人に申しますよう。「あなた方はどう考えられ

るか、ヱレイヤ王はなさねばならないことと、云わねばならないことを、よく知つて居る賢い人であると思われますか」。「それはその通り、王は賢しい人であります」。「出家の羅摩弗多は、なさねばならないことと云わねばならないことについては、ヱレイヤ王よりも賢く、義理を知る智慧がある人であるから、王は尊んで、禮み跪いて敬をなされるのであります。又、王の近侍のヤマカ、目連等の六人の人人も、大きな尊信を拂われるのであります」と。世尊、このようにして、トーデイヤは、自分の善良い性質から、ヱレイヤ王をも、王の近侍をも、出家の羅摩弗多をも賞讃えました。まことに御説の通り悪人は悪人をも善人をも知ることが出來ず、善人は善人をも悪人をも知ることが出來るのであります」。

雨行大臣はその日も世尊の御教を喜び、國事が忙しいとゆうので御暇を願い、その儘家へ歸つた。

第三節　跋提長者

一。その頃、王舍城に跋提とゆう長者があつた。富み盛えて金銀珍寶が限りなく、穀物は倉に滿ちていた。それにも拘らず、極めて慳貪の強い男であつて、布施を知らず、功德を積むことを知らないで、「世には布施もない、功德もない、業も報もない、敬うべき父母もなければ、覺を開くとゆうこともない」とゆう邪見を抱いていた。七重の門を作つて乞食の家に入るのを防ぎ、金網を張つて鳥の庭に來て餌をついばむのを阻むほどであつた。難陀とゆう姉があつて、これも主人に劣らぬ邪見を持つていた。

或る日、目連、迦葉、阿那律、賓頭盧の四人が相集り、この城の中において三寶を尊信しないものを導き入れようと相語つて、跋提長者を選んだ。長者が人に知れないように、密かに自分の室で餅を食べていると、空より降つたか地より湧いたか、阿那律が鉢を指出して施を求め、長者の前に立上つた。この思わぬ侵入に驚いた長者は、要求を拒むことが出來ない。心進まず、僅かの餅を阿那律に與えた。阿那律は施を貰て歸つた。長者は門番を呼んで、どうして出家を家に入れたかと責めたが、門番は門が嚴しく閉ざされているから、出家が家に入る筈はないと答えた。

二。長者は次に煮肴の皿を味うていると、大迦葉が突然にその前に顯われたので、長者は仕方なく魚の少しを分けて施し、迦葉の去つた後に門番を呼んで責めたが、答は前のとうりで、何處から入つて來たのか知る事が出來ないので、大いに腹立て、出家は幻術を使うて人を誑かすと罵つた。長者の妻は佛弟子の質多長者の妹であり、摩師迦參陀村から來ていた人であるから、之を聞いて長者を押え、「さように悪口を云つては宜しくありません、あなたはあの二人の御方が、誰であるかを御知りでありますか、先に見えた方は、迦維羅城の斛飯王の御子阿那律とゆう方であります、御生れなされる時、地が震うて、限りない富が家をめぐつて湧き出たとさえ云われております」。「成るほど、そう云われると阿那律

とゆう名は聞いたことがある」。「その方が出家となられて覺を開き、天眼第一と呼ばれ給うのであります、次の方は、この御城の近くの大金持、迦維羅家の一人息子、畢波羅耶那と呼び、美人で名高い妻を迎えて、而も一緒に出家して覺を開き、頭陀を守つて、世尊から頭陀第一と御讃めに預つた名高い方であります、今この尊い御二人が神通に依つてこの家にお出で下されたと云うのは、實に喜ばしいことであります、幻術を使うなどと譏つてはなりません」。

三。こうして話している所へ、目連は空から下つて金網を破り、地の上から高くない空の中に跏を結んで坐つた。長者は驚いて怖を覺え、神か鬼か人を喰う者かと尋ねた。目連は「神でもない、鬼でもない、人喰でもない、佛の弟子の目連と云うもの」と名乘り、法を說くために顯われたと答えた。長者は出家と聞いて直ぐに、布施を求める乞食を思出し、假令要求があつても、施すものがないと斷ろうと思つていると、御佛は法と財の、二つの施を說き給う、いまわれ、法の施を說かん、心傾けて聞けよかし。

長者は先ず、此法の施とゆう語を聞いて喜び、初めて說法に耳傾ける心を起した。目連は說くよう。「長者よ、法と財の施のうち、私は今法の施を說くのである、佛はこの法の施に五つの大きな施を說かれる五つとは、一つには殺生せず、長者は此大きな施を生涯守らねばならぬ、二つには偷盗せず、三つには邪婬せず、四つには妄語せず、五つには酒を飲まず、長者はこれらの大きな施を生涯守らねばならぬ」。

長者は、先ずこの五つの法の施が何物をも用いないで出來ることを喜んだ。殺生しない、これは自分に取つて容易いことである。盗まない、これは富む自分にとつて成し易いことであり、また他が自分の富を盗まなければ猶有難いことである。邪婬と妄語をしないとゆうことも大切であるが、酒を飲むなとは富を減らさない要訣である佛の敎とは斯うゆうことかと喜んで、五つの戒を守ることを誓い、目連を招いて初めて自ら食を施し、食事の後で一反の衣を供養しようと思い、倉に入つて氈を探し、好くないものを選ぼうとするが、自ずと手がよい品物に移つて仕方がないので、取つては捨てつ、心の爭を續けて居ると、目連の聲がした。

施さばやとて心と鬪うは、賢き人のなさざるところ、施すは鬪うに非ざれば、こころの儘になせよかし。

長者はこの歌で、自分の心を見拔かれたことを知り、白氈をとつて、目連に奉つた。目連は之を受けて、更に法を說き、布施の話、持戒の話、神の世に生るる話、世の中の實相とそれを解脫れる道の話と追追に長者の心を導いて、その場において長者の心の眼を開かしめた。長者は大いに喜び、生涯五つの戒を守つて、佛の信者となることを誓うに至つた。

四。賓頭盧は、長者の姉の難陀の敎化に向うた。難陀も彼に導かれ、世尊に見えて慳貪の自性に眼が覺め、敎誨に依つて白氈の色に染り易い樣に、心の眼を開き、三寶に歸依する信者となつた。

長者の弟、優婆迦尼は、兄と姉とが同じく佛の敎に歸依するに至つたことを心から喜び、阿闍世王の處へ行つてこの話をし、我が家の喜を傳えた。阿闍世王も大いに喜び、我が法の兄弟を增すことが出來たと御佛の御德を讃歎えた。

第四節　波斯匿王の晩年

一、世尊は一日鹿子母講堂に、その日中の暑さを過し、夕暮禪定を出でて沐浴の後、脊を乾かすために坐つて居給うた。阿難は手で御身體を摩でて申しあぐるよう。

「世尊、世尊のあの御麗しい膚の色は失せ、滑かな御身體に皺が顯われ、御腰が前に曲み、御眼も御耳もお變りになりました」。

「阿難よ、汝の云う通りである、青春に老があり、健康に病があり、生存に死が具つているのである、私も齡八十歳になつて、膚の色は失せ、皺が顯われ、眼や耳の樣子が變つて仕舞つた」。

老に咀あれかし、老は美しきを害い、見る目善き形を、踏みにじる。百年の壽重ぬるも、死は免れじ、何ものも除くことなく、みな踏みにじる。

二。この敎を垂れて居給うた處へ、波斯匿王は美しい車を裝うて、世尊を精舍に訪い、車を下つて世尊の御傍に進み申しあぐるよう。「世尊、生きものの中で、老と死とを免がるるものがあるでありましようか」。

「大王よ、老と死とのない生物はない。大王よ、家富み繁え、何事も思のままになる婆羅門でも、また刹帝利でも、老と死とを離れて生きることは出來ない、煩惱を盡く滅し、なすべきことをなし終り、罪の重荷をおろし、淨らかな目的を果し遂げた聖者の身體でも、この破滅を免れることは出來ず、やがて捨てられるものである」。

世尊は、王の乘り捨てた美しい車に眼をやつて、次の樣に仰せられた。

美しき王車もこわれ、この身も老いゆく。ひとり正法は老いず、これ世世の佛の宣うところ。

波斯匿王は、世尊の御語を喜び、御禮を述べて歸つた。世尊は弟子等を呼んで敎え給うよう。「弟子等よ、世間の人人は四つの事を喜び、四つの事を惡んでいる、彼等が喜ぶ四つの事とは、青春と健康と生存と愛ずる人人と共に住むことである。惡んでいる四つの事とは、青春に老が變り、健康が病氣に變り、生存が死に變り、愛ずる人人と別れることである。弟子等よ、茲に又四つの事があつて、之を覺れば上の四つの事を離れることができ、覺らなければ永久に上の四つの事を離れることが出來ない、それは何であるか、聖い戒と聖い禪定と聖い智慧と聖い解脫とである。弟子等よ、生老病死を離れた涅槃の境地に至ろうと求め、愛ずるものと別れることに世の常なき想をするが善い」。

三。これより先波斯匿王にはバンドラとゆう將軍があつた。剛く直くして民の歸仰をうけていたが、王は老年になつて、ただ一人の慰安者であり、相談者であつた末利夫人を失つた爲に、この將軍を遇す道を誤り、讒言を信じて、彼とその子供達を

あざむいて殺して了つた。後に王は大いに悔いて怏怏として樂しまず、彼の甥のデーガ・カーラヤナを取立てて將軍とし、せめてもの慰としていた。

世尊が釋迦族のメーダルバとゆう邑に居給うた時のことであつた。波斯匿王は所用あつて、ナガラカに來ていたが、カーラヤナを呼び、「馬車の用意をせよ、園に行き美しい景色を見たいと思う」と命け、鹵簿肅肅と、町を出掛けて園に入つた。

王は、園の林藪の中を逍遙しながら、靜かにして人いきれのない、獨り棲むに相應しい美しい樹下を見て、世尊の事を思い出し、こうゆう處で世尊に御給仕申しあげたらばと思つた。「カーラヤナよ、私はこうゆう靜かな美しい樹下で、世尊に御給仕申し上げたいと思う、世尊は今、何處に在ますであろうか」。「大王よ、世尊は今メーダルバとゆう釋迦族の邑にいられます」。「この市からメーダルバまで、何れほどの距離があるか」。「大王よ、さほど遠くはありません、三里程でありますから、日沒までに行く事が出來ます」。「それでは馬車の用意をせよ、世尊に御遇いに參るであろう」。

かくて王は、美しい車にて市を出掛け、日沒までにメーダルバに着き、精舍に進み車を捨てて徒歩にて入つた。其時、多勢の佛弟子が露地を經行していたが、王は彼等に近ずいて、世尊にお遇い申したいが、今何處に在ますかと尋ねた。「大王よ、世尊はこの戸の閉してある室に居給うから、靜かに近ずいて緣に上り、咳拂をして門を叩かれるならば、世尊は戸を開き給うでありましよう」。

王は劒と冠と總て王のしるしである五つのものを取り去つて、カーラヤナに渡し一人敎えられたように進んで、世尊の御室の門を叩いた。世尊は戸を開き給うた。

四。王は室に入り、世尊の御足を摩り、名乘て接吻し、手にて世尊の御足を押頂いを擧げた。「世尊、私は憍薩羅の王波斯匿であります」。「大王よ、貴方は如何なる理由で、このような改まつた挨拶をなし、心の供養をなされるのでありますか」。

「世尊、私は世尊に對うて正しい信心がありません。それは、世尊は正覺者、法は世尊に依つてよく說かれた法、僧伽は善い行の人人とゆうことであります。世尊、私はこの世に於て、十年、二十年、三十年、四十年、自ら淨らかな行を修めながら、沐して後宵を塗り、鬢髮を刈り込み、五つの欲に耽り樂しむ出家や婆羅門を見ます。又私は茲に生命のある限り、圓滿な淨らかな行を修めている佛弟子を見ます。世尊、私はこの敎團より外に、このような淨く圓滿な修行を見ません。世尊、これも私が世尊と法と僧伽とに對うて正しい信心のある一つの理由であります。

世尊、王は王と爭い、刹帝利は刹帝利と爭い、婆羅門は婆羅門と爭い、居士は居士と爭い、母は子と爭い、子は父と爭い、兄弟姉妹相爭い、朋友相爭うこの世の中に、この敎團だけが、弟子等は互に和み合つて水と乳とのように、爭なく慈の眼をもつて眺め合つているのを見ます。私はこの敎團の外に、この樣な和合の團體を見る

ことが出來ません、それでこれも、私が世尊に對う正しい信心のある、一つの理由であります。

世尊、又私は園林巡をして、或る出家が痩せ衰え、顏色靑ざめ、血管が太く顯われ、人を見るのに眼のすわつていないのを見受けます。その時私は思います。この人人はきつと淨い行を樂しまないのであろう、或は又、何か惡い事をして、それを隱しているため、このように痩せ衰え、人を見るのに目がすわらないのであろうと。それで私はその人人の處へ行いて、その理由を尋ねると、彼等は病氣であると答えます。世尊、私は茲では皆の人が樂しそうに修行をし、謙敬に鹿のように優しい心に住するのを見ます。それで私は、眞に此等の大德達は、世尊の敎において勝れた點を見るから、このようにして居られるのであろうと思い、これも私の世尊に正しい信心のある一つの理由であります。

五。世尊、又私は灌頂をした刹帝利の姓の王でありますから、殺したいと思えば殺し、生したいと思えば生し、逐放ちたいと思えば逐放つことも出來ます。而も私は會議の時に、私の話なかばに口を挿むものを止める事が出來ません。私の話が終つてからにせよと云つても、私の話なかばに饒り出すものがあります。然るに今茲では、世尊が數百の會衆に法を說いていられても、弟子達の中で噴嚏一つ咳一つするものがありません。嘗て世尊が數百の會衆に說法せられた時であります。或る弟子が咳をすると、同學の人が膝で突いて、尊者靜かになさい、音を立ててはならぬ、師が法を說いていられると申しました。

私はこのように思いました。實に勝れたことである。劒も用いず、棒も用いないで、この會衆は善くもかく調伏られていると。世尊、私はこの敎團の外に、このように調伏られた會衆を見たことがありません。これも世尊、私が世尊に正しい信心のある一つの理由であります。

世尊、又私はこうゆう事を見ます。或る賢い怜悧しい、毛の先でも割くように巧みな論議に長けた刹帝利の姓の人人が、他の議論を見事に破つて遍歷する。彼等は世尊がどこそこにお着きになつたと聞いて問題の仕度をする。喬答摩の處へ行つてこの質問をしよう。こう問われてこう答えたならば、此ように論議を吹き掛けようと。然も彼等が世尊の所へ近ずくと、世尊は法を說いて彼等を勵まし喜ばしめ給う。彼等はその法話により、問もかけず議論もせず、必ず世尊の弟子となることを申開いたします。世尊、これも私が世尊に對うて正しい信心のある一つの理由であります」。

六。世尊、又同じ樣に他のいかなる賢い人人も、世尊に行いて示敎に預つて勵まされ喜ばされ、世尊の許可を得て御弟子となり、浮世を離れて熱心に修行し、程なく證を開いてこの樣に云う。我我は何も少しも失わない、何故なら、聖者であるからと。世尊、これも私の世尊に對うて正しい信心のある一つの理由であります。

世尊、又イシダツタとブラーナの二人の棟領は、私の祿を食み、私に生計を與え

られ名譽を得ている者であります。然るに彼等は、世尊にするように私に對うて尊敬を示さない。嘗て私が白砂を運び上げさせている時でありましたが、**イシダツタ**と**ブラーナ**とを調べて見ますと、彼等二人は或る雜沓した家に宿り、夜更まで法話をなし、それより世尊の在ます處を問糺し、世尊の方へ頭を向け、私の方を足にして寢ました。それで私はこのように考えました。實に奇妙なことである。此兩人は私の祿を食みながら、世尊にするように私を敬わない。實に此等の人人は世尊の御教に殊に勝れた點を見ているのであろうと。世尊、これも私が世尊に對うて正しい信心のある一つの理由であります。

世尊、世尊も刹帝利、私も刹帝利、世尊も憍薩羅の人、私も憍薩羅の人、世尊も八十、私も八十であります。世尊、これに依つて私は世尊にこの上ない恭敬を拂い、心の供養をするに相應しいのであります。世尊、それでは私はこれで御暇をいたします」と、右に繞つてその場を去つた。

世尊は王が去ると間もなく、弟子等を呼び掛け給うよう。「弟子等よ、憍薩羅の王波斯匿は法の塔を建てて行つた、弟子等よ、この法の塔を受持てよ、これを反覆して學び、これを傳え持つがよい、弟子等よ、法の塔には利益あり、實に修行の初である」。

波斯匿王が世尊に正しい信心を申述べている間に、**デーガ・カーラヤナ**は五つの王章を取つて舍衛城に走り、毘瑠璃太子を立てて王とした。世尊の御前を辭つた王はこの事を知つて、最早、舍衛城に入ることの出來ないことをさとり、僅かな侍臣に護られて南に下り、女婿の阿闍世王に賴ろうとした。しかし老衰えた王は志を果さずに、途に病を得て、この世を去つた。

第五節　迦維羅城の滅亡

一。これより先、世尊が舍衛城に遊化せられて間のない頃、波斯匿王は弟子等に親しみの少いため、世尊の近親から皇后を迎えるならば、弟子等に信賴を得ることが出來ようと考え、使を遣わし、迦維羅城に女を求めさせた。王の心の中には、一方こうしておけば、當時の譽の高い家柄と緣が繼がるとゆう考もあつた。

王使は迦維羅城にその旨を傳えた。茲において釋迦族の人人は相集つて、この事を相談したが、假令大國の王とは云え、系圖の正しくない波斯匿王に、釋迦族の姫を嫁がせることは出來ないことである。と云つて、その願を容れなければ、王は兵の力を恃んで押し寄せて來ることが明かである。それで、一族の長者の摩訶那摩が、腰元に生せた女を、血脈正しいものとして、波斯匿王に嫁がせることとした。王使は王の命令に依り、その女が父の摩訶那摩と共に食事を取るのを見とどけて心安めて歸つた。

やがて、この王妃に王子が生れ、毘瑠璃太子と名けられた。王は王子をいつくしみ育てて、王子が八歳になつたときに、射術を學ばせるために、迦維羅城に送らせた。王子は祖父の摩訶那摩の家に至つて、射術を學んでいたが、其のころ、釋迦族の公會堂が新たに出來上り、幡を立て羅網を張り、美しさを盡して、世尊の落慶の御供養を待つて、使うことに定つていた。王子は仲間の子供と公會堂に入つて遊んだが、釋迦族の人達は大いに腹を立て、臂を取つて引きずり出し、尊いこの御堂に、下婢の子の分際で、どうして入つたのかと罵つた。王子はこの思い掛けない侮辱に、幼い身を燒かるるほどに腹を立て、我れ若し王位につくの日が來たならば、必ず迦維羅城に來て民達を根絶しに殺して仕舞うであろうと固く心を決めるに至つた。王子は舍衛城に歸つて、一人の婆羅門にこの怨を、日に三度歌わしめて、その怒を新たにしながら、時の至るを待つていた。そしてこれを知つた將軍**デーガ・カーラヤナ**もまた、報復の日の來るのを待つていた。

二。毘瑠璃王は既に王位を奪い、今こそ時至れりと臣達を集め、「今、民民の主人は誰であるか」と尋ねた。「もとより大王に在します」。「それでは四部の兵衆を集めよ、今より、迦維羅城を攻め取ろうと思う」。王の命令の儘に、四部の兵衆は集められ、王はこれらを從えて、迦維羅城に向つて進みかけた。このことを聞いた弟子等は驚いて世尊に申しあげた。世尊は座を立つて、迦維羅城への道のほとり、一本の枯れた枝も葉もない樹の下に坐つて毘瑠璃王を待ち給うた。進軍の途中、王は世尊を見奉り、車を下つて、世尊の御許に近ずいて世尊に申しあぐるよう。「世尊、尼拘盧陀の樹などの枝葉の生え繁つた樹があたりに澤山ありますのに、何故このような枯れた樹の下に御坐りなされて居らるるのでありますか」。

「王よ、親族の蔭は涼しいものである」。

毘瑠璃王は世尊の御意中を察り、軍を返して城に入つた。然しながら、その時にも猶、その前に歌を歌うように命けられた婆羅門は、王の怒を新たにする歌を忘れないで日に三度ずつ歌うて、王の心を呼び起した。王は更に兵を動かして、迦維羅城に向つた。世尊は復もその枯樹の下に顯われ給うた。それがため王は車をめぐらして城に歸つた。このことが三たび繰り返された。四度目に王が軍を進めたときには、世尊も宿緣のとどめがたいことを知られて、此度は靜かに法を觀べて精舍に停まり給うた。王は軍を進めて迦維羅城に迫つた。

三。迦維羅城の住民は弓術に勝れていたので、毘瑠璃王の軍を迎えて、矢を射かけた。然し、その矢は或は耳を殺ぎ、或は髻髮を射、弓を射、弓弦を射て、武力を減らせたが、然し、一人の生命をも取るようなことはなかつた。流石に年少氣鋭の王も、城民の巧みな弓術に恐怖を懷いて、一度は退こうとしたが、又も婆羅門の歌に怒氣を催し、且つ一人の婆羅門が、「釋迦族の人達は皆戒行を持ち、蟲でも殺さないのであるから、進みさえしたら必ず勝つに相違ありません、この機會を失つたら、釋迦族を亡ぼす時がありません」と勸めるのを聞いて、前進を命けた。釋迦族の人人は城内に退いて、堅く門を閉じて守つていた。王は城外にあつて大いに呼ばわり、門を開くよう、若し開かなければ、一族を盡滅にすると脅かした。

釋迦族に奢摩と呼ばれる年少い童子があ

つた。毘瑠璃王が城門の傍らにあると聞いて、鎧を着け、劍を取り、獨り城外に出でて王に戰を挑み、荒れ狂う魔王のように兵衆を斬つて王に迫つた。王も童子の勢に敵いかねて敗走つたが、釋迦族の長老は奢摩のはたらきを聞いて呼び寄せ叱咤けて云うよう。「汝は年少うして何故に家門を辱しめるのであるか、釋迦族のものはすべて皆善を行い、蟲の生命さえも取らないのである、もとより毘瑠璃王の軍勢を破ることは容易いことであるが、多くの人人を殺すことを恐れるのである、私達の佛は殺す勿れと教え給い、殺生の苦の果が地獄に墮ちるか、人間に生れても壽命が極めて短いことを教え給うたではないか、汝はこの家門の掟を破つたものである、城を出でて、何處になりとも去るが善い」。奢摩童子は據處なく、逐われて他へ去つた。

四。 毘瑠璃王は、再び城門に來て、門を開けよと迫つた。素直に開けば何も爭を好むものではない、若し城入を許さなければ、武力に依つて門を破り、一族を鏖にすると罵つた。釋迦族の人人は、もとより門を開く意はなかつたが、惡魔が一人の釋迦族のものと化けて頻りに開門を主張つたため、遂に毘瑠璃王の城入を許すこととなつた。王は城内に入り、先ず釋迦族のものを捕えしめ、多數を斬るも事煩わしと、穴を掘つて生埋にし、大きな象をしてその上を踏み渡らしめた。五百人の美しい女を捕えて虜となし、他は皆男女老少の別なく生命を奪おうとした。

王の祖父摩訶那摩は、世尊に歸依する信者であつた。王の處に至り云うよう。「どうぞ、たつた一つの私の願を容れてください」。「どうゆう願でありますか」。「私が水に入つて浮び上る間の僅かの時間だけ、この城内のものが自由に城を出でて逃げることを許して頂きたい、水面に出たら又殺して下さつても致し方がありません」。王はそれ位のことならば、善かろうと之を許した。摩訶那摩は喜び勇んで、水底に入り、髮を解いて樹の根に縛り、其處に尊い死を遂げた。此間に釋迦族のものは、四方の城の門から逃げ出したが、既に覺悟を極めた彼等は、逃げる容子をしては更に城内に歸つた。北より出ずるものは西より歸つた。

摩訶那摩の水の中にあることが餘りに長いので、王は探らせて祖父の死を知り、後悔を生んで城民の生命を助け、五百人の釋迦族の女達を連れて王城に歸ろうとした。親に別れ、夫に離れた釋迦族の女達は、せめては、虐王の手から身を護ろうと心を決め、一人も王の命に從う者はなかつた。王は怒つて、これらの女達を坑に投入れ、獨り軍を旋して王城に入つた。城に近ずく時王は妙なる樂の音を耳にした。王の兄祇陀王子は先には父に別れ、今又弟が迦維羅城を伐つたと聞いて打沈み、僅かに樂の音に心を慰めて、宮殿の奥深く垂れ籠めていた。王は祇陀王子の奥殿にすすみ、守門の兵を斬つて自ら兄の室に入つた。「何故兄の君には、我等の遠征を援けないで妓女と戯れているのでありますか」。「私はものの生命を取ることが、嫌いなのである」。王は怒にまかせて、兄の王子を斬り捨てた。人人は優しい祇陀王子の德を讃えて、その死を傷んだ。

地にありては王の子、天にありては神の子、すべて皆、これ善きことの報い、祇陀の德ぞ尊けし。

この世のうれえ、かの世のうれえ、惡しきをなさば惡しき報。

この世のよろこび、かの世のたのしみ、功德をなさば、功德の報。

地にありては王の子、天にありては神の子、すべて皆、これ善きことの報い、祇陀の德ぞ尊けし。

五。 五百の釋迦族の女達は手足を縛られて坑に投入れられ、一心に御佛を念い奉つた。「世尊は、妾達の種族から出で給うて、普く法の雨を天下に注がせられます、妾達は今この苦難におうております、どうぞ御慈悲を垂れさせられて妾達をお救いください」。世尊は弟子等を連れて、この傷しい戰の場に顯われ給うた。五百の女達は世尊を見奉り、喜と共にその裸體を恥じろうた。世尊に從う帝釋の神は衣を與え、毘沙門の神は食を施して飢を醫した。

世尊は靜かに、盛んなものは必ず衰え生けるものは必ず死ぬる道理を說き、この身體があつて五欲があり、五欲があつて執着が起る、このことを知つて生老病死の怖を超えねばならぬことを教え給うた。女達はこの御教に塵垢を離れて淨い法の眼を得、喜んで死に就き、皆神の世に生れた。

世尊は弟子等を呼んで、城の東門に向い、城の中に濛濛と燃え盛つている大きな火を見て宣うた。

なべてのものに常なし、顯われては消ゆる定、生と死を離れて、常の樂あるなれや。

世尊は又嘗て、世尊と世尊の教團の住所であつた尼拘盧陀の林に入り、昨日に變る今日の有樣を眺めて弟子等に教えて舍衞城に還り給うた。その時、誰云うとなく、王と王の兵衆とは七日の中に死んで地獄に墮つるであろうとゆう噂が立つた。王は恐れて婆羅門に相談り、六日の間は身を謹んで事なきを得たが、七日目に阿闍羅伐帝河に遊んで、その夜は河邊に宿つたが、夜半に暴風驟雨が起つて、兵衆と共に王の生命を奪い去つて仕舞つた。宮殿も亦、雷のために燒かれてしまつた。

六。 世尊はこのことについて、再び弟子等に教えたもうた。

身と口と意に、惡をなして、命みじかく、この世に惱み、かの世に惱む。

家にあれば火に燒かれ、水にあれば水におぼれ、命おわりて、地獄の火に燒かる。

尙世尊は、次の物語をなし給うた。「弟子等よ、昔、王舍城に饑饉があつて、民達は皆、城の外の大きな湖の魚を取つて命をつないだ。その湖の魚の中に、拘璃と兩舌とゆう二匹の魚があつて思うよう。『我我は何の罪もなく、又、城の人達に何の犯すところもないのに、人人は我我の生命を取つて食べている、二人で心を合せて、この怨を晴そうではないか』と。その時その村に八歳ばかりになる一人の子供があつて

自ら魚の生命を取らないが、人人が魚を取つて陸上に投げ上げると、悶え跳ねて死んで行くのが面白く、喜んで、眺めていた。弟子等よ、因果の道理は恐ろしいほど確かに報いて來る。拘璃の毘瑠璃王は兩舌の婆羅門にそそのかされて、迦維羅城の人人にその怨を晴した。こうして怨は怨を重ねて輪廻のわだちを深く掘つているのである。私は今頭の痛を覺え、重い石で壓しつけられているようであるが、これも、拭い去ることの出來ぬ一つの報である。

第六節　極樂世界

一。世尊は尙給孤獨園に滯在せられ、一日、舍利弗に告げ給うよう。

舍利弗よ、ここより西の方遙かに、極樂とゆう淨土がある。其處に阿彌陀とゆう佛がいらせられ、現り法を說いて居られる。其國の人人は苦とゆうことを知らず、ただ樂の日をのみ送るから、極樂と名けるのである。

舍利弗よ、その御國には七つの寶で作られた池があつて、淸らかな水が湛えられ、底には金の沙を布き車の輪のように大きい蓮華が咲いて居る。その青色の華には青い光があり、黃なのには黃の光、赤いのには赤い光、白いのには白い光があつて、淸く妙な芳をあたりに漂わしている。又その池の四方には、金、銀、瑠璃、玻瓈によつて造られた四つの階があり、樣樣の寶玉によつて飾られた樓閣が建連つている。空には永し世の音樂が鳴り、地には黃金の色照り映え、夜晝六たび、神神しい華が光り輝いて降つている。その國の人人は朝まだき に華皿に華を盛り、あらゆる御佛を供養し奉つて、朝食の前に歸つて來る。又白鵠、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命などゆう鳥が、常に雅かな音を出してあらゆる「德」と「力」と「敎」とを歌うている。人人はこの聲を聞いて、みな御佛を念い御法を念い僧伽を念う。舍利弗よ、しかし是等の鳥は、罪の報から生れたものではない。彼の御國には三惡道の名すらもない。其等の鳥は、みな御法の音を宣べ傳えしめようとして、御佛の作り給うた所である。

そよ風吹いて並ぶ寶の樹樹をわたり、輝く羅網に觸れては微妙き音をいだすこと、百千の音樂を一時に奏ずるようである。この音を聞くものはまた自然に御佛を念い、御法を念い、僧伽を念うのである。舍利弗よ、その御佛の國は、かような功德と莊嚴とを具えている。

二。舍利弗よ、かの御佛の光は量りなく十方の國國を照して少しも障えられず、またその御命に限りがないから、阿彌陀と名け奉るのである。そして、佛となり給うてから十劫の時が過ぎて居る。又舍利弗よ、かの御佛の弟子達も、菩薩もその數甚だ多く、世の數え方では計り知れない。

又彼の國に生れる人人は、皆迷に還らぬ位にあり、其中の多くは佛となるべき位に入る。そしてその數はまた數え盡し難い。舍利弗よ、之を聞く人は、かの御國に生れようと願うがよい。何故かと云えば、かかる多くの聖者達と一つにいることが出來るからである。しかしながら舍利弗よ、人の

世の小さな善や德を以ては、かの御國に至ることは出來ない。卽ち阿彌陀佛の御名を持つて一日二日又は七日に亙り、心を一つにして散り亂れる事がないならば、其人の命終る時、阿彌陀佛は多くの聖者達と共にその前に現われ給い、其人は心たじろがず、直ちにかの御國に生れることが出來るのである。舍利弗よ、この利益を見る故にこの樣に說くのである。されば聞く者みな願を起して、かの御國に生れるがよい。

三。舍利弗よ、私がいま阿彌陀佛の讚り知りがたい功德をほめたたえるように、十方の恒河の沙の數にも等しい數多い佛達も各自その國において、まことの御聲をもつて天が下を覆い、「汝等よ、あらゆる御佛の護り給うこの讚り知りがたい御敎を信するがよい」と說き給うのである。

舍利弗よ、人もしこの御佛の說き給う阿彌陀佛の名と、その御敎とを信し奉れば、すべての御佛の護りをうけ、此上ない覺から退くことはないであろう。されば舍利弗よ、私の語と、佛達の說き給うところとを信するがよい。苟もかの御國に生れたいと願うう人は、昔も今も後の世も、等しなみに此上ない覺から退かぬ位に入り、かの御國へ生れるのである。

舍利弗よ、私がいま御佛の讚り知りがたい功德をほめたたえるように、かの御佛も亦私の功德をほめ給う。「釋迦牟尼佛は濁つた世、邪見はびこり、煩惱盛んに、人人けがれ、命短き時に、よく正覺を得て、すべて世の人人に信し難い法を說き給う、ということになし難いことをせられるのである」と。舍利弗よ、實にこのように、私はこの濁つた世になし難いことを行うて覺を得、すべての人人の信し難い法を說いたのである。

世尊がこの敎を說き了られると、舍利弗をはじめ、あらゆる弟子達、すべて集つた人人は、この御敎を聞いて信し歡び、御禮を申しあげた。

四。世尊は又一日、弟子等を集めて、今まで世尊に從うた弟子等の特徵を擧げて敎え給うた。

弟子等よ、私の弟子の中、最も法臘のたけたのは阿若憍陳如である。智慧の第一は舍利弗、神通の第一は目連である。頭陀行の第一は大迦葉、天眼の第一は阿那律である。

貴姓の第一は迦利豪陀の子跋提、美音第一は羅鳩吒迦跋提である。師子吼に第一は賓頭盧、說法に第一は滿多仁の子富樓那、短かく說かれたものを廣く開いて說きわけることに第一は大迦旃延である。

弟子等よ、又自分の姿を巧みに化作すことの第一は朱利槃特、心の解脫に巧みなことに第一も朱利槃特である。想の解脫に巧みなことの第一は摩訶槃特、諍なきに住もうことの第一は須菩提、供養に値いする者の第一も須菩提、藪林に住むことに第一は離波多佉提羅婆尼耶、禪定に第一は疑者離波多である。精進に第一は蘇那考利毗沙、美言に第一は二十億耳、所得に第一は斯波離、信仰の堅固に第一は跋迦利である。

弟子等よ、又研學の心の盛んな事の第一は羅睺羅、信仰に依つて出家した事の第一

は賴陀秣羅、聞を得るに幸運に第一は鳩吒陀那、詩才に第一は婆耆沙、總ての人人に喜ばれるに第一は番迦多の子優波世那、坐具の管理分配に巧みなことの第一は末羅人の陀婆、神神に愛し敬われることの第一は彼隣陀婆茶、速かに大事を了解ることの第一は婆比耶陀流知利也、美しく說法するに第一は鳩摩羅迦葉、得解の第一は摩訶俱稀羅である。

弟子等よ、又、多く聞くことの第一は阿難、記憶の第一も阿難、解智に第一も阿難、精進の第一も阿難、奉事の第一も阿難である。大衆を率ゆるに第一は優留毘羅迦葉、家族を喜ばすに第一は迦留陀夷、病なきに第一は薄拘羅、前生の記憶に第一は蘇毘多、律を憶持つに第一は優波離、尼を敎誨するに第一は難陀迦、五官の制御をするに第一は難陀、弟子を敎誨するに第一は摩訶劫賓那、火定に入るに巧みな事の第一は左伽多、佛の說法を引き出すに第一は羅陀、粗衣に滿ち足ることの第一は毛伽羅闍である。

五。弟子等よ、尼の中で、最も法臘のたけたるものは摩訶波闍波提喬答彌である。智慧の第一は計摩である。神通の第一は蓮華色、律を憶持つに第一は波吒遮羅、說法に第一は法興、禪定に第一は難陀、精進に第一は蘇那、天眼の第一は左俱羅、捷慧の第一は跋陀鳩陀羅計左、前生の記憶に第一は迦維羅の跋陀、疎衣に滿ち足ることの第一はキサーゴータミー、信仰の堅固に第一は芝伽羅摩多である。

弟子等よ、私の信者の中、最初に歸依した者は帝波須と跋利迦である。布施の第一は須達多長者、給孤獨、說法の第一はマツチカサンダ村の質多長者、四攝事に勝れて第一はアーラービーの手長者、美食を供養するに第一は釋迦族の摩訶那摩、心に欲う食物を供養するに第一は毗舍離の郁迦長者、僧伽に奉持することの第一は郁迦多長者、確かな信心を喜ぶことに第一は修羅奄婆陀、人人に喜ばれること第一は醫師の耆婆、信實の第一は那鳩羅の父である。

弟子等よ、私の女の信者の中、最初に歸依した者は世那尼の娘修闍多である。布施の第一はミガーラの母毗舍佉である。多く聞くことに第一は偏僂の鬱多羅、美食を供養するに第一は拘利人の娘修波婆娑、看病に第一は須彼耶、信仰の堅固に第一は迦帝耶仁、信實の第一は那鳩羅の母、三寶の德を傳え聞いて信仰を起したことの第一は、鳩羅羅佉羅の人迦利である。

第八編

第一章　涅槃の豫言

第一節　七つの衰えぬ法

一。世尊は、愈八十歳の齢を迎え給い、王舍城に歸つて靈鷲の山に滯まり給うた。

摩竭陀の國の阿闍世王は、跋耆を伐とうと思いたち、雨行大臣に命けるよう。「雨行よ、世尊は此處より程遠からぬ處にいらせられる、急ぎ彼處に詣でて私のために御教を請い、よく仰せを憶えて歸るがよい、佛の仰せに虚妄はない」。

雨行は、命を承けて車を整え、山に登つて世尊に見え、申上ぐるよう。「摩竭陀の王阿闍世は御足を禮して御起居を伺い奉ります、世尊、聖體安らかに、飲物食物常の如くにましますか」。世尊宣うよう。「善い哉、雨行よ、汝の王も民も、亦共に和いで、物の價平かであろうか」。「幸に佛恩に依つて皆自らに和ぎあい、風も雨も時にかない、國の中、豐かに富み榮えて居ります」。かようにして、禮を迎べて更に申すよう。「世尊、阿闍世の王は常に跋耆を伐とうと欲うて居ります、併し、聖意においてはいかがなものでありましょう、何卒御教をお垂れ下さい」。「雨行よ、私は曾て跋耆に遊んで遮和羅の祠に在つた時、彼國の耆宿達が來て、摩竭陀の王が今我國を侵そうとしているので、私達は互に相警めて此國を護つておりますと申す故、私は彼等に、愁うるに及ばぬ、汝等もし七つの法を守つて國を治めるならば、決して阿闍世のために滅ぼされる事はないであろうといつて、その法を說いたことを覺えておるが、もし今も猶彼等が之を守つておるならば、とうてい破ることは出來ぬであろう」。「世尊、願わくばその七つの法とゆうのを御說き下さい」。

二。その時阿難は、世尊の御後にあつて扇もてあおぎ奉つていたが、世尊、願みて彼に問い給うよう。「阿難よ、汝は跋耆の民達が數數相集つて政を議り、備を修めて自らに守つて居る(一)と聞いたか」。「さように聞きました」。「さらばまた、彼の國の民達が上下常に和いで俱に共に國の事を議らい(二)、古えよりの風習を尊んで妄りに更めず、禮を重んじ敬を守り(三)、男と女の間には自らに別があり、長けたると幼きものとの間によく道があり(四)、父母によく仕え師長に素直に(五)、祖先の宗廟を崇めて儀典を廢てず(六)、道を尊び德を敬うて、もし戒ある人の遠くより來た場合は、衣服飲食坐具藥湯など諸の生計の品品をそなえて之を饗し(七)、これらのことをよく守つて少しも怠らぬとゆう事を聞いたか」。「いかにも、そのように承わつております」。「それでは跋耆は決して衰える事はないであろう、若し國を持つものが、みなこの七つの法を守つたならば、たとえ天が下の兵を擧げて攻めよせるとしても、滅ぼすことは出來ぬであろう」。

之を承わつて雨行は、「跋耆の人が此法の一つを行うても圖ることは出來ぬのに、まして七つを具えていては、尙更であります」と申上げ、世尊を拜んで去り、阿闍世王にこの由を傳えて、戰をやめさせることとした。

三。雨行が立ち去ると、世尊は阿難に仰せつけて、此山の邊りに在る弟子達を盡く講堂に集めさせ、彼等の前に坐つて、語り給うよう。

弟子等よ、私はいま汝等のために、七つの法を說くであろう。汝等、諦かに聽いて善くこれを心にかけるがよい。弟子等よ、數數相集つて法を語らえ、さらば道は久しく住まるであろう。上下相和ぎ互に敬い合うて違うことなく、法を崇め戒を畏み、妄にこれを易えてはならぬ。長たると幼きと、又先なると後なると、相交わるには禮を以てし、心を護つて直きと敬とを旨とし、閑かな處にあつて行を淸め、人を先にし、己を後にして道に邀い、人人を愛しんで來るものには厚く施し、病めるものには懇ろに看護するならば、道は久しく住まるであらう。弟子等よ、又七つの法があつて道を榮えしめる。卽ち淸淨を守つて事の多きを樂わず、欲無きを守つて貪らず、恐辱を守つて諍わず、靜默を守つて戲れず、法を守つて憍ることなく、一心を守つて餘の行に從わず、儉素を守つて衣食に約かであるならば、道は末長く住まることであろう。

四。弟子等よ、一切のいきものに慈を加えよ。人の死んだ時には之を哀れめ、死に行く人は途を知らず、歎き悲しむ人人も亦、その赴く所を知らない。道を得たものだけが、知るのみである。佛はこのために教を宣べる。教は學び、道は行わねばならぬ。天下には道は多い、その中においても、王法は大きなものである。しかし佛道は更に高いものである。

弟子等よ、佛の教法を修めるものは、他の道を得たのを見ても、己のいまだ得ていない事を悲しんではならぬ。たとえば、數多の人人が共に射を習うのに、前に中るものもあり、後に中るものもあつて、其時は同じくはないけれども、射てやまないならば、いつかは竟に中るようなものであり、又、小さな谿を流れる水も、やがては流れて大きな谿に入り、またも流れて大きな河に入り、はては終にみな海に入るように、修めて止むことがなければ、後には必ず證を得るようになるものである。

弟子達は聞きおわつて、大いに御教を歡んだ。

第二節　法の鏡

一。今や世尊は入滅の時の近ずいたのを氣附かせたまい、阿難を呼んで、「是より巴連弗の市に行こう」と仰せになつた。阿難は衣を整え鉢を持つて、諸の弟子達と一しよに世尊に隨い、王舍城を出でて北の方巴連弗へと向うた。

途に菴婆羅致の村を過ぎたが、世尊はその竹園に息うて弟子達に告げ給うよう。

弟子等よ、道に志す者は四聖諦を知らねばならぬ。之を知らないために、長く迷の路にさまようて、止む時がない。弟子等よ、四聖諦とは、苦集滅道である。苦とゆうは生老病死の苦、愛でるものに離れる苦、怨に會う苦、求めて得られぬ苦である。この苦を引き起す煩惱は集、その

因果を滅ぼしたのが滅、そしてその滅に至る道が道である。汝等この苦を知つてその集を斷つならば、正しく心の眼を得たものである。その人には迷がなく、苦は永く絶えるであろう。この故に弟子等よ、心を專らにして佛の語を承けるがよい。慾に遠かり、世と爭わず、殺めず、盜まず、他の女を犯してはならぬ。欺き讒り、佞い綺り、憎しみ罵つてはならぬ。又、嫉み瞋り、心昧くて疑うてはならぬ。身の常ないこと、穢れていることを念い、やがては塵に歸らねばならぬことを念うがよい。古えの諸の佛達は、皆この聖諦を見、この聖諦を教え給うた。後の世の諸の佛も、また皆この聖諦を見、この聖諦を教え給うことであろう。

弟子等よ、家に居ることを貪り、恩愛を慕い、世の榮名を樂うものは、遂に悟の道を得ることはできない。世を樂しむ心で、道を樂しむことは出來ないからである。道は心から生れる。心が淨いならば道は自ら得られよう。今佛は、世のために迷を脫れて正しい道を開いた。すべて惡道を絶とうと思うならば、心を一つにして法と戒とを持つがよい。戒を修めれば禪定が得られ禪定を修めれば智慧が得られ、智慧を修めれば心が淨くなるであろう。弟子等よ、諦かにこれを心にかけるがよい。

二。世尊がこの村に宿られたとき、舍利弗は世尊の御許に詣でて、恭しく世尊を拜んで申すよう。

「世尊、私は世に世尊より勝れた人、又は世尊に等しい法を覺つた人が、過去にも現在にも又未來にも、一人もないと思います」。世尊宣う。「汝はどうしてそれを知るのか」。「世尊、私は具さに三世を知ることが出來ないのでありますが、世尊によつて法を知ることが出來ました、世尊は量りない智慧を具えて、現在と過去と未來とを知り給います、それゆえ世尊は、上無い方にていらせられ、すべての煩惱を脫れ、すべての德を備えていらせられるのであります」。

かくて世尊は、菴婆羅致村から那爛陀の里に入らせられると、里人は歡びお迎え申上げた。世尊は彼等に道を宣べたまい、暫く茲に留まりたもうた。

三。世尊は阿難を隨えて那爛陀を去り、諸の弟子等と共に巴連弗に到らせられ、城の外の樹下に坐りたもうた。この市は恒河をさし挿んで隣國に接く摩竭陀の國境にあつた。

城の人人は世尊の來り給うたことを聞き傳えて、共共に城を出でてその樹下にと向い、遙かに世尊の嚴かな聖容を望んで、歡び急いで座下に至り、佛足に禮拜して傍らに坐つた。世尊は彼等のために道を說きたもうと、人人は聞きおわつて、「私達は、謹しんで佛と御法と僧伽とに歸依致しますとうぞ愍んで私達の信者となることを御許し下さい、私達は今より後、殺すこと、盜むこと、婬を行うこと、詐ること、及び酒を飲むことを止めるでありましよう」と申し出で、世尊はこれを許し給うた。

人人は世尊と御弟子達とのために、供養を捧げまいらせたいと願い、其御許を得たので市の公會堂を拂つて水をば灑ぎ、香を薰らせて座を設け、世尊を御迎え申しあげた。世尊は弟子等と共に到らせ給い、足を洗い手を濯いで室に入り、中央の柱を背にして東に向うて坐らせられ、弟子達はその後に侍り、市民はその前に居並んだ。

世尊告げ給うよう。「世に貪を好み意を恣にすれば、五つの失がある、一つには財日に減り、二つには道を失うて身が危く、三つには人に敬われず死に臨んで悔い、四つには惡聲世に周く、五つには死んで後また苦しみの世に入るであろう。若し、よく意を降して自ら恣にすることがないならば、五つの得るところがある、一つには財日に增し、二つには道に近ずき、三つには到る處に敬を享け死に臨んで悔がなく、四つには好名遠く流れ、五つには死んで後福德の處に生れるであろう」。

かくて、夜は已に半ばに至つたので、「夜は更けた、汝等各宜しきに隨うがよい」とて、人人の御送りを後に、林へと還りたもうた。

世尊、阿難に問い給うよう。「此巴連弗の城を造つたのは誰であるか」。「これは跋者の襲擊に備えるために、摩竭陀の大臣の雨行が同じ大臣の須尼陀と一しよに、阿闍世王の命を受けて造つたものであります」。

世尊、宣うよう。「げにも雨行は賢い、此城は後に必ず榮えて賢者集り商賈集うて、餘の國に破られる事はないであろう、けれども久しい後に、大きな火と洪水と城の內外におこる謀反との三つの災のために、破れる時が來るであろう」。

四。雨行は世尊が弟子達を率いて茲に來り給うたと聞いて、多くの從者を隨えて世尊の座下に詣り、恭しく禮拜して側に坐つた。世尊はそのために教を垂れ給うと、雨行は喜んで、申上ぐるよう。「世尊、私は明日、食を奉りたいと思います、どうぞ御弟子方と一しよに、私の家においでを願います」。世尊はうなずいて、聽し給うた。雨行は家に歸つて、終夜室を淨め、食を具えて旦をば待ち、再び參つて時のお知らせを申上げたので、世尊は弟子等と共に其家に入り給うた。世尊は雨行のささげる食を受け終つて、仰せられるよう。「敬うべきを敬い、事うべきに事え、博く施し、愛をこととし、常に法を聽こうと願うがよい。雨行よ、官にあつて貪り瞋り、虐をなし、縱ままであつてはならぬ、もし、この五つの事を無くすれば、後に悔なく、死んで苦を離れるであろう。雨行よ、之をつとめるがよい」。雨行は謹しんでその御教に順うた。

世尊は雨行の家を去り、弟子等を率いて城の東門を出で、恒河に向いたもうたところ、水はいま一ぱいに漲つている。旅人は我先きにと、船に乘ることを爭うている。世尊は弟子等と共に、屈めた臂を延ばすよりも短い間に此河を渡つて、宣うよう。「佛は船師である、正法によつて苦しみの海を渡り、諸の人人を導いて、悟の岸に到らしめる」。

雨行は世尊を御見送り申上げ、その出でたもうた門を喬答摩の門と名け、その渡りたもうた渡し場を喬答摩の渡と名けた。

五。世尊は進んで拘利村に到られ、とあ

る林に入つて弟子等に告げ給うよう。

弟子等よ、聖い戒と禪定と智慧とを持つて、解脫を得るがよい。この法は微妙うして容易く覺り難い。之を覺らぬために人人は久しく迷にあつて窮りなく苦しむのである。汝等つとめて、自ら淨らかな行を修め、心を知つて其性を清くするがよい。世間と爭わず、自ら身を憂えて靜かに內に念うがよい。さすれば心は明かになり、貪、瞋、癡の三の垢を除いて自ら道を得、心は復び走ることなく縛めらるることもないであろう。弟子等よ、王が民の主であるように、心は萬ずの物の主であるから、善く之を思うが善い。

六。世尊は拘利より那地迦の村に入らせられ、とある河邊の樹下に止まり給うた。時にこの村に疫病がはやり死ぬ者が多かつた。御弟子の迦樓、尼の難提、男の信者の迦陵伽、婆頭樓、須跋陀、須達多、女の信者の須闍多等もその中にあつた。其親族の人人が來て、阿難に問うよう。「彼等は死んで、何處に行つたのでありましよう」。阿難は、世尊にこれを尋ね奉つた。

世尊、宣うよう。「迦樓はこの世において聖者となつて居た。難提、迦陵迦、婆頭樓、須跋陀等の五十人は、天界に生れて證に入り、須達多等の九十人は今一たび、此世に來て苦の因を盡くすであろう。そして、須闍多等の五百人は七生の間に三つの垢を盡くして惡道を離れて證に入るであろう。阿難よ、生があれば死がある、是は世の常である。然るに人は死んだ人のある度に、來てその行先きを問うは煩わしい事である。私は今汝のために、法の鏡を示して、我が弟子達の生れる處を知らせよう。阿難よ、もし我が弟子で、堅き信心を起して、佛を信し法を信し僧伽を信するならば、惡道を離れることが出來るであろう。たとえ天界と人間とを往來するとしても、七生を累ねぬ中に自ら苦の終をなすであろう。されば人人には愚のために迷があり、賢き人は道を持つために迷にかえらない。汝等、正しく佛を念にかけ、法を念にかけ、僧伽を念にかけ、戒を念にかけて、永く憂と嘆とを離れるがよい」。

第三節　菴婆波利

一。世尊はそれより毗舍離に向うて、阿難を伴うて道を進められ、城の外の樹園に止まり給うた。園は城の娼女菴婆波利の有つ所であつたが、彼の女は、世尊が其園に來り給うたと聞いて、淸らかに裝うて五百人の娼女を率い、車を馳せて城を出で、世尊の座下に詣でた。

世尊は遙かに之を觀わして、弟子等に語り給うよう。「弟子等よ、汝等、いま其心を端しうするがよい。寧ろ暴虎の口に入り、狂人の刄の下にたち、或は熱鐵の槍で雙つの眼を抉られるとも欲に惑うてはならぬ。健かに制えよ。已に生れた惡は斷ち、未だ生れない惡は發らないようにし、已に生れた善はそだて、未だ生れない善は發るようにするがよい。かようにして、善くその心を攝めよ、若し初めに止めなければ、後となつては制え難くなる。故に只心を制えるがよい、放逸であつてはならぬ。されば絹進の弓と智慧の鉾とを執り、正念の鎧を被て五欲と戰を決めるがよい。私は道を求めてからこのかた、意と爭うて量りない時を重ねた。その間、邪しまの心に隨わず、勤め勵んで竟に正覺を得たのである。弟子等よ、その心を端しくせよ、汝等の心は久しい間、穢の中にあつた。今や自ら其中から拔け出でて、諸の苦を脫ればならぬ。生れて死ぬる定のものは外を視ても苦しく、中を視ても皆苦に滿ちている」。

二。やがて、菴婆波利は世尊を拜んで、喜んで車より下り、世尊の御前に進んで、禮して傍らに坐つた。世尊問い給うよう。「何のためにここへ來たのであるか」。菴婆波利應えて申すよう。「妾は度度、世尊が神神にも勝りたもうことを聞きました、それゆえ御敎を受けて夜に日に自ら勉め、何とかして邪しまの道に陷りたくないと思うのであります」。世尊宣うよう。「汝は、女となつたことを喜ぶか」。「神が、妾を女としたまでであります、妾は何も喜んではおりません」。「汝若し喜ばぬとすれば、誰が汝に、五百の娼女を養わしめたのであろう、皆これ欲のためである、又、行の淸い者には五つの禍がある、名は稱えられ、官を畏れることなく、身は安く、死んで天界に生れ、ついで淸らかな證の道に立つであろう、されば自ら患えて敎戒を行え、さすれば淨らかな道を得るであろう」。

世尊が種種に法を說き給うと、菴婆波利の心は歡喜に溢れた。世尊、宣うよう。「汝の心は既に淨らかである、男の法に進むことはさまで難しいことではないが、女の法を樂しむようになることは仲仲に難しい、まして年少く家も豐かに、容色のそなわつたものとしては尙更である。菴婆波利よ、財と色とは永劫の寶ではない、唯道のみ尊いものである、强きは病に壞られ、少きは老に遷され、命は死に困しめられ、愛でるものには離れ、怨には隣りあい、求むる所は多く意に隨うことはない、しかし唯道のみは、心のままである、之を行えば侵しうるものとてはない」。

菴婆波利は禮を述べ、座を避けて跪いて申すよう。「明旦些かの供養をささげたいと欲います、どうぞ、諸の聖衆と一しよに妾の家へおいでを願います」。世尊の御許を得て、彼の女は大いに喜び、直ちに禮をなして立ち去つた。

三。時に城に住む離車の人人は、世尊を拜もうと思い立つて、一族五百人、車を連ねて城を出でた。偶ま途に菴婆波利が、その娼女達と一しよに世尊の座下を辭つて、家路に急ぐのに出遇うた。彼と此との車は觸れあい、軸と軸が打ちあい、輪と輪が摩れおうて、離車の人達の幡蓋がその爲に損われた。離車の人達は責めてゆうよう。「何故に汝は私達の車を損うて顧みないのか」。菴婆波利は答えて、「明旦、世尊とその聖衆とを妾の家にお招きする御許を得たので、思わず道を急いで禮を失いました」と

謝つた。離車の人達は驚いてゆうよう。「汝はもう世尊の御許を得たのであるか、菴婆波利よ、暫く汝の御招待を私達に讓つてほしい、私達はそのために百千兩の金を汝に與えよう」。「妾の御招待はもうきまつております、公子等のお求めにそうことは出來ません」。「それならば、百千兩を十六倍した金を與えようから、どうか私達に先を讓つて貰いたい」。しかし、彼の女は尚も肯わなかつた。離車の人達は手を振り手を振り「此女の爲に私達は初の福を闕かされた」と歎きながら、再び容を整えて直ちに彼の園に詣でた。

四。 世尊は之を望んで弟子達に告げ給うよう。汝等、神神の榮光を知ろうとならば、この離車の人達を見るがよい、その威儀はこれと似通うている。弟子等よ、自ら心を攝めて諸の威儀を具えよ、身と受と心と法とを觀めて勤めて懈らず、行くべきに行き止まるべきに止まり、衣や鉢を持つのにも、湯藥を用うるのにも、凡て儀を失わず、坐るにも臥するにも、語るにも默るにも、いつも、心を攝めて亂れてはならない」。

爾時、離車の人達は車を下りて世尊の座下に詣り、前なるは跪き、中なるは頭を垂れ、後なるは掌を合せて、殘らず座についた。世尊問い給うよう。「汝等は何のためにここへ來たのであるか」。彼等は應えて云う。「世尊の此に在ますことを承わつて拜むために參つたのであります」。世尊、乃ちこの人人に語り給うた。「善男子等よ、放逸であれば、利と名は得られず、施すことを樂しまず、道を修むるものを見ることを樂わず、世の事と語とを樂しみ、睡眠と戲論とを樂しみ、惡い友に近ずき、懶惰を樂い、他に輕んぜられ、聞いた事を失い、邊地に住もうを好み、心を調えることは出來ず、食に足ることを知らず、閑寂を樂しまず、從つてその見る所も正しくない。善男子等よ、世間の法も世を超えた佛の法も放逸でない處から生れる、若し道を得たいと思うならば、勤めて放逸でない法を修めよ、放逸のものは、その身は佛と弟子に近ずくとしても、覺より遙かに遠いものである」。離車の人人は申すよう。「私達は自分の放逸であることを知つております、若しそうでないならば、世尊は、私達の處におでましになつたことと思います」。

五。 時にその中に賓耆耶とゆうものがいて、離車の人達に語るよう。「汝等のゆうところは宜しい、頻婆娑羅王は、大きな利を得た、世尊が、その國におでましになつたことは、ちようど池に妙な蓮の咲き出たようなものである、けれども汝等を放逸の人と呼ぶのは、五欲に荒んで佛に近ずくことを知らないからである、世尊が摩竭陀におでましになつたためではない、それは佛は日や月のようで、一人二人のために世に出でたもうたのではないからである」。そして起ち上つて世尊の前に詣り、熟熟と聖顏を視たてまつつた。世尊宣うよう。「汝何を視るのであるか」。賓耆耶、申すよう。「世尊の御德は、大きな山の聳えるよう、天が上にも下にも比がありません。私は今、世尊を仰いで淸い御敎に順い奉り、惱は少しもありません」。世尊宣うよう。「善く

私を視るが善い、自ら福をば得るであろう」。「世尊、願わくは私の思を開くことをお許し下さい」。世尊これを許し給うと、賓耆耶歌を歌うよう。

鷲伽の王は、寶珠の鎧を被れり、摩竭陀の君は、大いに富めり、御佛此に出まして、威德、天が下をぞ動がし給う。

御名の顯われたもうこと、雪山の如くにて、香の微妙じきことは、蓮の華にさも似たり。

其御光を拜むに、日の初めて出でたる如く、月の大空に遊ぶに似たり。

世尊、この光もてこの世を照し、諸人に明けき眼を施し、諸の疑を拂いたもう。

佛智は高く妙にして、また明かに塵もなし、猶暗に、庭の燎を見る如し、願わくは我、淸信の戒を奉りて、自ら三寶に歸り奉らむ。

五百の離車の人達は、此頌を聞いて心動いていつた。「賓耆耶よ、汝の德は大きい、どうぞ重ねてその頌を唱えて下さい」。

賓耆耶は三たび之を唱え、人人は其麗わしい衣をぬいで彼に贈ると、彼は又皆これを世尊に捧げまつつた。

六。 世尊は其意を知ろしめしておさめ給い、かくて人人に告げたもうよう。

離車の人人よ、憍慢を除いて法の光を加えるがよい。財も色も香も花も、戒の莊嚴には及ばぬ。身を榮えしめ、民を安らかならしめるのはただ心を調えるにある。もしこれに道を樂しむ念を加えるならば、德は愈高くなるであろう。よく賢き人を集めて日に其德を新たにし、正しく民を養い人人を導くならば、今より後、德は永く流れて窮まる處がないであろう。

寶玉は地から生れ、戒は多くの善の由る處である。智慧あるものは淨い戒を修めて、迷の曠野をすむがよい。我の見を離れよ。憍慢は慚愧を滅ぼし、諸の善を滅ぼし、諸の功德を失わしめる。容色も閥族も皆常ない。動いて暫くも停らず、いつかはしまいに滅んで行くであろう。どうして誇ることが出來ようか。

また欲は大きな患である。そは敵のように、詐り親しんで密かに害うものである。良に內から發つて烈しいことは世の火にも勝つている。火は盛んに燃えても水は之を消す。しかし、貪の火は、たやすく消し難い。猛しい火が野を燒いても、草の根はやがて、復速かに生えるけれども、貪の火が心を燒けば、正法の生れることは難しい。

貪は世の樂をもとめ、世の樂は汚を增さしめ、汚は己を惡道に陷らしめる。まことに怨の中には貪に過ぎたものはない。又貪は愛を生み、愛は慾を習わしめ、慾は衆の苦をまねく、惡は貪に過ぎたものはない。

離車の人人よ、又瞋恚に隨うてはならぬ。怒は正しい顏色を壞り、明かな眼を翳し、親を斷ち、世に賤しめらる。されば怒をすてよ、若し自ら禁め得ないならば、悔と憂の火は隨つて起り、先ず自らを燒き、次いで人をも燒くであろう。心に合うものを見ては貪を起し、心に合わないものを見ては怒を起す。合うと合わないとを共に忘

れるならば、貪と怒とは、共に除くことが出來るであろう。

離車の人人よ、佛の世に出るのは甚だ希である。善く佛の正法を宣べるものも甚だ希に、聞いて信するものも甚だ希である。よく佛の正法を成しとげるものも甚だ希にそして佛の正法の恩に報ゆることを知る者も亦甚だ希である。離車の人人よ、師に順であれ、其前にては敬い、かげにては稱え、其身去つた後は常にこれを念うが善い。

世尊の語り給う所を聞き了つて、離車の人人は座を起つて禮を述べて申すよう。「世尊、私達は、世尊と聖衆とに御供養を申し上げたいと欲います、どうぞお聽し下さい」。世尊。「私は先に菴婆波利に供養を聽した」。離車の人人は、手を振つてゆう。「彼女は私達の先を奪うた」と。けれども世尊の聖意が、等しなみに及びたもうことを知つて隨喜の心にかえり、各自佛足を禮し、三度世尊を繞つて家路に歸つた。

七。菴婆波利は夜を徹して食を整え、室を飾り座を具え、曉に及んで、世尊の御許に詣でて、時のお知らせをした。世尊は鉢を持つて、諸の弟子達に圍まれ、城へと入り給うた。城の多くの人人は、出でて世尊の一行を拜み、世尊は明月のよう弟子は明星に似ていると語り合うた。やがて世尊は、菴婆波利の家に入つて座につきたもうと、彼女は自ら鉢を捧げて漿をすすめまいらせ、食を終つて鉢を去り給うと、机を除いて黄金の瓶をとり、御手にそそいで申上げるよう。「この城の多くの園のなかに、妾の園が最も勝れております、妾は今これを世尊に捧げたいと思います、どうぞ妾を愍んで、御受けください」。世尊は之を聽され、「菴婆波利よ、塔を起し、精舍をたて、清涼の園をそなえ、橋と船とをもつて人を渡し、又は曠野に水や草を施し、舍をたてて宿をあたえるがよい。菴婆波利よ、施す者には怨もなく畏もない、其名は人に稱えられ、其身は安らかである、淨い戒は世の尚ぶところ、行く所として敬い愛でぬものはない、慾は患であり、不淨である、速かに之から出るように勤めるがよい」。

世尊は、菴婆波利の心が漸く和いで、たやすく教を受けるようになつたことを見て彼女のために四聖諦の要を說きたもうた。彼女は、信心美わしく、ちようど白氈の色を受け易いように、直ちに法を見、法を得て、無畏の位に入つた。

此時、菴婆波利は世尊に申上げるよう。「世尊、妾はいま佛に歸し、聖法に歸し、僧伽に歸し奉ります、どうぞ妾を信者のうちにお加えください、妾は今から後、殺すこと、盜むこと、婬らなこと、詐ること、又酒を飲むことを禁めるでありましよう」。世尊は之を許し給うた。菴婆波利はこれまでの習をすてて、穢から淨められた。

世尊は、聖意のままに毗舍離に止まられた後、阿難に御衣を整えさせ、弟子達を率えて竹芳の村へと向い給うた。

八。竹芳の村は、毗舍離に近い小さな丘の麓にある。世尊は、此村に入つてその北の林に止まりたもうた。村に毘舍陀耶とゆう婆羅門があり、世尊の來り給うたことを聞いて思うよう。「喬答摩の名德は世に流れ、淨い行が具わり說くところは始も中も終も皆眞であるといわれておる、今より往いて見えよう」。やがて座下に詣でると、世尊はそのために道を說き給うた。彼は喜びのあまり明旦、世尊と御弟子方とを家にお招きすることを願うた。世尊、その家に至つて食を終えられ、毘舍陀耶に告げ給うよう。「もし衣や食、或は坐具を以て戒を持つ人に施すならば、大きな果を得るであろう、此德はこれ眞の伴である、到る處影のように隨うであろう、されば善根を植えて後の世の糧とするがよい、德に基ずけば、人は安らかである」。かくて、その家を去りたもうた。

時に此村が饑饉で、穀物の價が高かつた。その上村が小いので、世尊の一行は食を得ることも難しかつた。世尊は諸の弟子達を集めて告げたもうよう。「汝等、毗舍離又は跋耆に往いて知人を訪え、さすれば食に乏しいことはないであろう、私は阿難と一しよに茲に止まろう」。諸の弟子達は命に遵うて出で立とうとすると、世尊は重ねて諭したもうた。「弟子等よ、まず己に克たねばならぬ、良いものを得ても耽らず、惡いものを得ても憂えず、食は唯身を支えるものとして貪つてはならぬ、貪るために迷は絕えない、それゆえ身を節ゆることを知つて能く己に克つ者は、卽ち寂靜を得るであろう」。弟子等みな喜んで世尊を禮み、各自分れて四隣の都邑に向うた。

九。世尊は阿難と共に茲に留まり、四十五年目の安居に入り給うた。偶ま病が發つて聖體をあげて常ならぬ痛を覺えさせられた。自ら念い給うよう。弟子達は今茲には居ない、彼等はみな、私のことを慮うている、彼等に知らせないで滅度に入つてはならぬ、その上この地は私の滅度に入るべき處ではない、それゆえ努めて心を勵まし、壽を留めねばならない」。そのうち疾はやや輕まつたので、室を出でて涼しい樹影に坐り給うた。阿難も此時樹下にあつたが、これを見て急いで世尊に近ずき申上ぐるよう。「世尊、御疾はいかがでありますか、私は御疾と聞いて憂え氣遣いたえいるばかりに驚きましたが、今少しばかり氣力を回復しました、世尊、何故に今人人を御教化したまわぬのでありますか」。世尊宣うよう。「阿難よ、人人は私において何の須つ所があろう。もし自ら私は人人を待つ、私は人人を濟うとゆうのならば、その人は人人に教えなければなるまいが、私は、そうは言わぬ。故に教えねばならぬ理由はない。阿難よ、佛は他と違うておらぬ。私には秘すところはない。私の道には握られた拳とゆうものはない。內もなく外もなく、すべての道を汝等に示したのである。前後說いたところは、皆人人の胸にある。汝等は、ただ之を行うが善い。さすれば私は、いつでも弟子等の心のうちに生きておる。

阿難よ、私の身は已に老い朽ち、私の旅はもう終に近ずいた。齡まさに八十路に近ずいている。形は朽ちた車のよう、牢いことも强いこともない。私は嘗つて汝等のために說いたでないか。生るるも死ぬるも時があり、生れて死なぬ者とてはない。私は

世に出でて普く涅槃の大道をひらき、迷の根を絶つた。汝は私の去つた後には、この法を棄てて呉れるな。

阿難よ、自らを燈となし、自らを歸依處として、他を歸依處としてはならぬ。法を燈とし、法を歸依處として、他を歸依處としてはならぬ。阿難よ、身を觀るときは其の不淨を念うて貪らず、心や體の感受を觀えては、その苦の因であることを念うて耽らず、心を觀るときはその常ないことを念うて執われず、法みなを觀るときは、其無我であることを念うて迷うてはならぬ。

さすれば、衆の苦は消えるであろう。もし私の逝いた後に、かように敎道を修めるものがあるならば、阿難よ、これこそ私の眞の弟子、私の子孫である。彼はこの上ない證の位に昇るであろう。私は天上天下に住もうあらゆる人の身を憂えて、君王の位をすてて出家となり、今は佛となつてなべての世を救うた。汝等も宜しくその身を憂えて、急ぎ衆の惡を斷つがよい。

世尊は、ここに雨時を過し終うた間に、其衣を繕いたもうた。

第四節　舍利弗と目連の入滅

一。或る日舍利弗は禪定より出て思うよう。「過ぎし世の御佛達には、各自上足の御弟子があつたが、彼等は皆其師に先だつて、滅度に入るのを常とした、私も此七日のうちに、世尊に先だつて逝くであろう、しかし、私の母はまだ佛法に歸依して居られぬゆえ、私は今より往いて母を導いて、道に入らしめ、そして、私の產れた室で、滅度に入ることにしよう、まず世尊の御許を請わねばならぬ。」乃ちその室を整えて立ち上り、嚴かに願みてゆう。「ああ、これが此の室を見る最後の時である、もう再び此室に入ることはないであろう」。やがて、世尊の御許に詣でて申しあぐるよう。

「世尊、私は今より滅度に入ろうと思います、どうぞ御許し下さい」。世尊は默つたままでお答えにならない。舍利弗之を請うこと三度に及ぶと、世尊宣うよう。

「汝は何故に茲に止まらないのか」。舍利弗。「世尊、神神が私に、釋迦牟尼佛は久しく世にいらせられたが、今や八十歲に向い給うたからして、やがて遠からず御滅度に入り給うであろうと告げました、世尊、私は世尊の御滅度を見たてまつるに忍びません、尙いつぞや世尊の仰せられましたように、御佛達の滅度に入り給う時には、其上足の御弟子が之に先だつように、私も世尊に先だつて滅度に入りたいと思います」。

世尊宣うよう。「汝は何處に滅度しようと思うのか」。「私は那爛陀の摩伽婆の里の、私の生れた家で、滅度に入ろうと思います」。「汝は善く時を知つている、舍利弗よ、私の弟子の中に、汝のような者を得ることは甚だ難い、今一度弟子達のために法を宣べてくれ」。舍利弗は仰せを受けて恭しく世尊を禮し、人人の前に坐つて法を語つた。

かくて再び世尊に申すよう。「世尊、私は遠い古えから心を盡して諸の佛を見たてまつろうと思いましたが、その願は聽さ

れて、今この世において、久しく世尊を拜むことが出來ました。世尊、私の世は、終りに迫りました、私は七日の間に、重荷を下した人のように、この世を去るでありましよう。これが、私のこの世において、世尊にささぐる、最後の稽首であります」と、掌を合せ、恭しく跪いて、御許を辭つた。

二。諸の弟子達は花と香とを持つて、舍利弗に隨うた。舍利弗ゆう。「汝等は何處へ行こうとするのか」。弟子達ゆう。「尊者を供養もうそうためであります」。舍利弗ゆう。「止めよ、汝等はもう私を供養しおわつた、私に一人の見習の弟子があつて、それが仕えてくれるからもうよい、汝等は歸つて各自道を思うがよい、佛の出世にあいまつることは難く、又人として信心を得、家を出でて法を學ぶことも甚だ難い、弟子等よ、もの皆は常なく、苦であり、無我である、涅槃のみ、永えに寂かである、汝等善く之を念うがよい」。弟子等は皆、涙にむせんだ。

舍利弗が那爛陀の村端についたのは、ちようど日暮であつた。彼が路傍にある榕樹の蔭に憩おうとしていると、一人の青年が來て、彼に禮をなして立つた。彼の甥の優波離婆多であつた。舍利弗問うよう。「汝の祖母君は、今家にいらせられるか」。優波離婆多答えて、「祖母君は、今家にいらせられます」。舍利弗ゆう。「それでは汝の祖母君に、私が少時して家にかえると告げてくれ」。優波離婆多は急いで、祖母の舍利に其旨を語つた。彼女は竊かに「妾の子は少い時から出家となつたが、今や年老いて出家を廢てようとするのであろう」と、急ぎ室を掃うて來るのを待つた。

夕方に舍利弗はその家についたが、內に入ると、遽かに病が烈しくなつて、夥しく血を咯いた。母は驚いて、其室に退いた。神神は下つて、恭しく舍利弗の病を看た。母は異しんで舍利弗の侍者の周那に問うよう。「どうしたのでありますか」。周那答えて、「尊者の德の尊いためであります」。母驚いてゆう。「妾の子さえそのように尊いならば、世尊はどのように尊く在ますであろう」と。そして清い歡喜が胸に溢れた。

三。舍利弗は、道の語るべき時のいたつたことを思い、母に向うてゆう。「母君よ、私の師の生れたもう時、其正覺を得たもうた時、又、正法を宣べたもうた時には、大地が六種に震いました、世に德と智慧とにおいて私の師に勝つた方は一人もありません」。かくて舍利弗が進んで法を說くと、母は喜んでゆう。「妾の子よ、汝は、何故にもつと早く、こうした法を妾に傳えて呉れなかつたのでありますか」。舍利弗ゆう。「母君よ、私は今始めて母の恩に報ゆることが出來ました。母君よ、どうぞ御引き取り下さい、私を獨り茲に殘して下さい」。そして周那を呼んで時を問うと、「曉に近ずきました」とゆう。舍利弗は、やがて身を起して其前に集うた弟子等に語るよう。「弟子等よ、四十四年の間、汝等は私と共にあつた、若しその間にあつて私が汝等を害うたことがあつたならば、どうぞ私を恕してもらいたい」。弟子等ゆう。「師よ、影の形

に隨うように、私達は久しく師に仕えましたが、私達は些かにても、師に對うて快からぬことはありませんでした、私達こそ師の寛いお恕しを請う外はありません」。舍利弗は偈を說いてゆう。

なおざりならず、覺をひらけ、これこそ我が敎なれ。いざ我、滅度に入るならん。我はすべてに解脫れたり。

四。滿月の光淸らかな夕、舍利弗は母の許にいって、其產室に入って臥した。夜の間、彼は烈しい苦に襲われたが、曉に近ずいて坐具を敷き、右脇に臥して、靜かに滅度に入った。母舍利はその傍らに伏し轉んで泣いてゆう。「嗚呼、我子よ、汝の唇は、もはや一語も語らないのか、汝の有っている德を、妾の知るのはあまりに遲かった、もしそれを知る事が早かったならば、妾も數多の聖衆を我が家に招いて、其一人一人に三領あての衣を捧げたであろうに」。夜は明けた。舍利は、其匣を開いて財を出だし、葬儀をととのえた。諸人は來て力をそえ、舍利弗の乳母離婆底は三つの黃金の花をささげたが、群集の混亂の中に倒れて此世を去り、其德によって天界に生れた。

七日の間種種の供養はたむけられ、ついで茶毘は行われて、阿那律は香水で火を消し、周那は恭しく遺骨をあつめて、舍利弗の衣と鉢と一しょに、世尊の座下に持ちかえった。

五。周那は、舍利弗の弟であった。彼は先ず阿難のところに往って舍利弗の滅度したことを語り、其遺骨と衣と鉢とを示したので、阿難は涙にむせんで、この日四方くらしと歎き、世尊の座下に到ってそのわけを申し、「私たちは舍利弗の滅度にあいまして心も亂れてしまいました」と申じあげた。世尊の宣うよう。「阿難よ、心を勞めることはいらぬ、長えに存在えぬものを、長えに在らしめようとするのは無理である。阿難よ、過去の諸佛ですら去りたもうたでないか、もの皆は常ない、生あるものは必ず死にゆく、少しも悲しむことはない、ただ、生れもせず滅びもしないとゆう涅槃の住所、その滅こそ最も尊いものである。

阿難よ、舍利弗の遺骨を私に渡してくれ」。そこで阿難は、遺骨を世尊に奉った。世尊は、之を右の掌に受け、諸の弟子等を呼んで仰せらるるには、「弟子等よ、此はこれ四五日前まで、汝等に諸の敎を說いていた者の遺骨である。彼は久しく德を修めて己を完うした、彼は諸佛のように法を說いた、諸の人人は彼に隨うて敎を聞いた、彼の智慧は大きくて喜を含み、其心は敏くて透徹っていた、彼は欲少うして靜寂を樂しみ、惡を斥け爭を避けて戲論を好まず、そして道を弘めるためには大地のように厚い志を有っていた、弟子等よ、よくこの、賢い法の兒の遺身を見るがよい」。

かくして世尊は、舍利弗の、ために一つの塔を毗舍離の入口近くに建てたまい、阿難を呼んで諸の弟子等と共に、再び王舍城に向い給うた。

六。世尊は王舍城に入って、竹林精舍に留まり給うた。其間は長いとゆう程でもなかったが、目連も亦此間に滅度に入った。その死の因緣は實に次のようである。

王舍城の邊に住んでいた裸形外道の一群は豫てより深く世尊を嫉み奉って思うよう。「佛やその弟子達が、世に敬われる理由の一つは、目連の德が高いためである」と。そのために目連は、伊私耆利の山にある洞の中に住んでいた時、二度まで彼等に襲われたが、幸い二度とも免れることを得た。然るに一日城に入って食を受けようとしたところ、裸形外道がまた襲い來て彼を圍み竟に彼を捉えて瓦や石を以て彼をうち、彼を路邊の草の中に投げ込んで立ち去った。目連は骨摧け肉爛れて痛み堪え難く、終に滅度に入ったのである。このことが聞えわたると、阿闍世王は直ちに裸形外道を縛って殺戮の刑に處した。

かくて世尊は目連のために、又竹園の入邊に、塔をたてるように命け給うた。そして諸の弟子達を觀わして宣うよう。「弟子等よ、舍利弗や目連のこの世に在った時、彼等の巡った所の人人は皆幸福をうけた、それは彼等が能く外道異學を降すに堪える力があったからである、然るに今では汝等の中に彼等は居ない、實に此敎團は、大きな損失をしたことである」。

第五節　入滅の誡

一。世尊は阿難をつれ毗舍離に向うて旅立たれ、恒河の岸邊において再び舍利弗と目連との死を惜み給うた。恒河を渡って毗舍離につき、翌朝市に托鉢し、その邊り道に遮和羅の祠を過ぎて、そこにしばし憩うて宣うた。「阿難よ、毗舍離も樂しく、跋耆も樂しく、十六の國は、その諸の都邑何れも皆樂しい、熙連の河は黃金を多く出し、閻浮提の地は畫のように美しい。阿難よ、自在の力ある人は思いのままにその壽を此に留めることが出來る」。世尊は、三たびまで懇ろに同じ語を繰り返えされた。しかし阿難はその時、心昏やんでいて、その意味を取ることが出來ず、何ともお應えしなかった。世尊は、「退いて靜かに考えよ」と阿難を去らしめ、起って溪邊の樹蔭に至って坐りたもうた。

二。その時、惡魔が世尊の御許へ來て申すよう。「世尊、速かに滅度に入らせられるが善い、世尊の敎化は已に終った、今は正に此世を去りたもうべき時である」。世尊宣うよう。「去れ、惡魔よ、私にはよく時が知れている、まだ滅度に入る時ではない、私は私の弟子とすべての人が、すべて斯の道を受けることが出來るまでは、滅度に入らない」。惡魔、云う。「世尊、曾て尼連禪河の邊に在まして覺をひらきたもうた時に、私は世尊の座下に詣でて、直ちに滅度に入り給うようにとお勸め申した、その時世尊は、去れ、惡魔よ、私自ら時を知って居る、未だ滅度に入るわけにはゆかぬ、私は私の弟子達が集い來って、天界も人間も普く佛の神變を見るようになるまでは、滅度には入らぬと仰せられました。世尊、いまや御弟子達は已に集い、天界も人間も共に神變を拜んだではありませんか、今こそ誠によい時である、なぜ速かに滅度に入りたまわぬのでありますか」。世尊、宣うよう。「去れ、惡魔、佛は自ら時を知っている、此後三箇月を經て私が私の前の世に由

緒ある拘尸那羅の娑羅雙樹の間において、滅度に入るであろう」。惡魔は之を聞いて、佛の語に詐はない、滅度に入りたもうのも遠いことではあるまいと知り、躍り上つて喜び、忽ち姿をかき消した。

三。世尊は、座を端してまたも思惟に入り、靜かに滅度のことを觀めたもうた。そして、自ら宣うよう。「三つの迷を脱れることは、鳥の卵を破つて出でるように安らかな事である、今我が心は平安である、ちようど、敵を破つて戰場より歸る將軍にも似た心地である」と。時に、大地が大いに震うた。

阿難は驚き覺めて世尊の御許に詣り、問い奉るよう。「世尊、今大地の動いたのは何のためでありますか、私は林にあつて、大きな樹のよく茂つていたのが、俄かに暴雨のために跡方もなく摧かれたことを夢みました、ともすれば世尊は、滅度に入り給うのではありませんか」。世尊、宣うよう。「阿難よ、私は三月を過ぎて滅度に入るであろう」。阿難は驚き悲しんでゆう。「唯願わくは世尊、私達を憐み給うて今一劫だけ、或はその半だけでも、御壽をお住め下さつて、永く天上人間をおめぐみ下さい」。かように三たび願うたが、世尊は阿難に告げて「今は請うべき時でない、私は已に此後三月を經て當に滅度に入るであろうと、惡魔に告げた。阿難よ、汝は私に侍えてくれてから、私が言を二重に使うたのを聞いたことがあるか」と仰せになつた。「未だかつてありません、しかし、私はさきに自在の力のある人は、思のままに壽を住めることが出來るとお聞きして居ります」。「私はさきに之を汝にいつた、けれどもその時、汝は應えもせず、又請いもせなかつた、佛の言は一たび口から出でた上は、どうして違うことが出來よう、愚かな者は、自ら云つて自ら之に違うけれども、私はこれをせないのである」。

阿難は悶え懊んで堪えきれず、泣いてゆうよう。「佛の滅度に入り給うことは、何とゆう駛いことであろう、世の眼の消え給うことは、なぜかくまで速いのか」。世尊はこれを憐んで、「阿難よ、悲しんではならぬ、作られたものは皆この通りである、會うたものは一つとして離れぬことはない」。「けれども世尊、人人は久しからずして慈の父を失うのであります、生れたばかりの犢が母に捨てられる樣なものであります」。

「阿難よ、憂えてはならぬ、たとえ私が、一劫の間ここに住つたところで、會うたものはいつかは遂に離れねばならぬ、すべての法の性相はみなこの通りである、私のことについてそのように苦しんで吳れるな、たとえこの肉の身は滅んでいつても、說き殘した妙法の身は、いつまでもいつまでも殘るでないか。阿難よ、私の坐具を持つて來るがよい、今は舍に歸ろうと思う」。

阿難は坐具をとり、世尊に隨うて娑羅の森なる舍にと入つた。

四。夕方になつて、世尊は阿難に命せられるよう。「阿難よ、往いて、此林の邊に來た諸の弟子達を呼んで、講堂に集めてくれ」。阿難は命を諸の弟子達に傳え、弟子達は皆講堂に集つた。

世尊は室を出でて講堂に入り給い、弟子達は起つて禮拜し、世尊は座について弟子達に告げ給うた。弟子等よ、私が今まで汝等に說いた種種の敎は、常に之を思い、之を誦んじ、又之を習うて廢ててはならぬ。天下の人みな自ら心を正しくしたなら、神神はために喜び、人間はために福を受けるであろう。汝等當に欲をおさえて己に克たねばならぬ。身を端し、意を端し、言を端しくせよ。怒をすて、惡をさけ、貪をすてて常に死に心を用い、若し心が邪を望んだならば、決して從うてはならぬ。心の姪を欲うた時も、氣をゆるしてはならぬ。心は當に人に從うべきで、人が心に從うてはならぬのである。心は神となり、人となり、畜生となつて、六つの世を作るが、又證を開いて、美しい佛ともなることが出來るのである。

五。故に汝等は當に心を正しくして、道を行わねばならぬ。唯道を行うもののみがよく、世において安穩を得られる。かくて私の淨らかな道が久しく世に存えて、世間を救い神神を導き、すべての人人を息わしめることが出來るのである。弟子等よ、その道とは何であるか。

弟子等よ、身の不淨であることを思うて貪欲を起してはならぬ。樂を受けても、やがて苦を生むことを念うて溺れてはならぬ。心の常なく遷り變るを念うて執われてはならぬ。また法みなは、必ず主なき無我のものであると知つて、執着を起してはならぬ。これが即ち四念處である。弟子等よ、惡の起ろうとするのを防げよ。その已に起つたものは、斷つがよい。善の已に生れたものは、勤めて育てよ。その未だ生れないものは勤めて發るようにするがよい。これが即ち四正勤である。弟子等よ、常に善を欲うて之に向い、常に心を一つにして法に念をかけ、常に精進んで撓まず、常に思惟つて心を亂さぬようにするがよい。これが即ち四神足である。

弟子等よ、道を信し道に進み、道に念をかけ心を道に定めて、明かに四聖諦の智慧を修め、こうして善の根を養うがよい。これが即ち五根である。堅く道を信して疑と惱とを遮り、勤めて道に進んで懈怠を除き、偏えに道に念をかけて邪しまの想を破り、正しく心を定めて亂れる想を斥け、明かに四聖諦を究めてよく妄りな見を去れ、かようにして善の力を得るがよい。これが即ち五力である。

弟子等よ、正法に念をかけて忘れてはならぬ。すべての法を見て其誠と僞とを擇び、常に進み、常に喜び、僞を除いて、心を息わしめ、心を禪定に住ましめて妄りな見を起させず、不實の境界を捨てて、浮沈する兩端を避けねばならぬ。これ實に聖らかな智慧に入る道である。これが即ち七覺分である。

弟子等よ、正しく見、正しく思い、正しく語り、正しく行い、正しく生き、正しく進み、正しく道を念い、正しく心を定めるがよい。これが即ち八正道である。

六。弟子等よ、これらの敎は、正しく世をすくう淨らかな道である。汝等は諸人の

禍のため、また世の中の隆昌のために、之を修め之を傳えるがよい。弟子等よ、この三十七の道品は、諸の善の源である。是を以て心を修め、貪らず爭わず詐らず、戯れず嫉まず慢らず、智慧と慈愛と恭敬の眼を以て、私の肉體よりも尊い正法の眞身をみるがよい。諦かに私の正法の眞身を見るものこそは、私が現りこの世にあつて、常にその側から離れて居らぬことに氣附くであろう。

私は今汝等のために、末の世に至るまで苦毒の樹を變えて、甘露の果を結ばしめるようにと願う。汝等はこの法の中で、相和ぎ相敬うて、諍訟を起してはならぬ。汝等は同一の師から受けついだのである。水と乳とのように睦みあえ、油と水のように爭うてくれるな。宜しく私の法を守つてともに學び、榮と樂とを同じうしてくれ。心を要らざることに使うて、命をむだに耗すことなく、覺の花の精を食べ、道の果を熟らし、ついで世の中をして、すべて此果に腹ふくらせるように努めて貰いたい。弟子等よ、私は自ら此法を覺つて他のために說いた。此法はよく汝等をして解脫に到らしめるであろう。汝等はよく受け辨えて、事事に善く行うがよい。私はこの三月を過ぎて滅度に入るであろう」。

七。諸の弟子達は之を聞いて驚き悲しみ、五體を地に投げ聲をあげて叫んだ。「佛は、何故にかくまで駛く滅度に入り給うのであろうか、世の眼が、どうして速かに滅び給うのであろうか、世尊、願わくは此世に住つて滅度にお入り下さいますな、すべての人人はみな無明の黑闇の中に迷うて居ります。願わくはいつまでも此に在まして明燈となつてお照しください、すべての人人は悉く迷の荒海に漂うて居ります。願わくはこの世のすくいの舟筏となつて、いつまでもお止まり下さい、もしそうでないならば、すべての人人は長えに行くべき道に迷うでありましよう」。

世尊、弟子達を誡めて、宣うよう。「汝等、且く止めよ、憂と悲とを懷いてはならぬ。世は常ない、牢く强くて永久に變らぬものとては一つもない。肉身は脆い、ちようど電のようである。天つ深空の神神さえも死に行けば、天が下なる王者も、死は避けられぬ、貧しきと富めると貴きと賤しきとの異りはあつても、生れて死なぬものは一人とてない。變るべきものを變らせまいとするのは無理である。汝等は清らかであつてくれ。常に解脫を求めて放逸になつてくれるな。今や私の生涯は完全に過ぎた。我が終りは近ずいた。汝等は此世に殘れ。私は今、思のままに安穩の處に到るのである。汝等愼み戒めて、自らその心を護らねばならぬ。

私の說いた諸の法は、それこそ、汝等の師である。善く之を奉け持つことは、私に仕えたようにするがよい。若しつまずくことなく斯道を進んだならば、即ちこれ正法を護つたことになる。それゆえ私の世に在ると同じように奉け守つて、少しも異うてならぬ。こうしてこそ、自ら解脫に到つて諸の人人をめぐむことが出來るに相違ない」。

既にして日は全く暮れた。世尊は阿難をつれて舍に歸りたもうた。

第二章　金光明

第一節　佛の三身

一。世尊が三月の後に滅度に入るであろうと告げ給うたことを聞いた王舍城生れの妙幢と呼ぶ菩薩は、驚いて世尊の御許に詣でて御尋ね申した。「世尊、世尊は何ゆえ僅か八十歲に足らぬ短い御壽命を持ち給うのでありますか、かねて世尊のお說きになつた所によると、長い壽命を得るには二つの因緣がある、一つには生物の命を害わぬこと、二つには他に食を施すことであるとのことであります、然るに世尊は限りなく遠い昔から他の命を害い給わぬのみでなく、常に、善を行い、飢えたるものに食を施し、時にはその血や肉をすら與え給うたではありませんか、それにどうして、世尊の御壽命は、このように短いのでありましよう」。

世尊は之を機會として、佛の身に就て、凡夫の知り難い奧深いいわれをお說きになつた。

善男子よ、諦かに聽け、聞いてよく考えるがよい。すべて佛に於ては、三種の身が備つて居る。これを備えて、始めて上ない證を得たといわれるのである。もし人、このいわれを深く知ることが出來るとすれば速かに迷を離れることが出來るであろう。

善男子よ、三種の佛の身とは、化身と應身と法身とである。化身とゆうは、佛が人人を救おうために、かりに人の世に生れて道を求むる相を示し、種種に法を究めて覺を開き、ついで能く人人の根機を知り、時を知り、所を知つて、それにかのうたように身を現して法を說くものである。汝等の眼に映ろうて來た各自の知る佛は、皆この佛であつて、それは人毎に見るところを異にしていたはずである。次に應身とゆうのは、佛が求める人のために直ちに眞諦を說き述べて方便の法を用いず、ただ肉體に執われて或は歡び或は怖れつする心を除くを旨とし、限りない佛法の大本となつて居るもので、これはものさながらの理と、それを悟る智慧から生れ出る本願の力によつて現れたものである。終りに法身とゆうは法そのものを身とすることで、佛の身の大本は、この世のあるがままの理と、それを知る智慧との一つになつた法にある。前の二つの身は假りの身で、この法身から表れたものである。それゆえすべての佛法も亦、この中に攝まるべきものである。

二。又、佛は本願の力によつて、ものさながらの理を、ものさながらに證つているから、殊更に行おうとゆう念がなくて、而も、自在に衆の事業を作して行く、譬えば日や月に何の念もなく、鏡と光とにも念がないが、しかもこの三つのものが自ら和合つて影を生むようなものである。ものの眞如は日や月、それを悟る智慧は光、本願の力は鏡で、この三つは各殊更に念をかけるところはないが、よく自在に人人のために、應身、化身の影の身を現わすのである。

善男子よ、鏡が光によつて、空な中に影を現わし、種種の相を示すように、教化を受ける諸の弟子達も、空の法身の中に現われた影を見て救われる。佛の本願の力によつて應化二身が種種に相を現わすけれども、法身の境界には少しも異る事はない。此三身があるので、佛は空寂であつて涅槃の中に止まらないといわれるのである。何故かと云えば、前の二身は假のもの、數數現われて固定まることはないから涅槃があれど、後の法身は應化の身となつて表われるものと、法身として止まるものと、二つあるのではないから、涅槃の中に止まるとはいえないのである。つまるところ法身は三つにして一つ、一つにして三つ、變化を示せど變らず、變らねど變化を示すものである。

善男子よ、すべての凡夫は三つの相に縛られ障えられる。一つは遍計所執相、二つは依他起性、三つは成就相である。遍計所執相とは、暗夜に繩を見て蛇と謬るように凡夫の心の計らいを以て物を見、そしてそれに執われることである。依他起性とは佛の教によつて、ものみなは因縁相依つて出來たものであるから、ものみなは假に結ばれた相であると知ること、繩を見て、その性の麻であることを知るようなものである。成就相とはものみな假の相には違いないが、しかし、眞實の相も理も、その假の相を離れてはないと知つて、假の世に眞の世を見ることである。化身は遍計所執する凡夫を教化しようがための身であり、應身は依他起性を知るものに映り出る佛であり、法身は眞の法を究めて假の世に成就の相を見る證の人にのみ知られる佛の身である。それゆえ、假の身の應化の二身に滅度のあることはやむを得ないが、人人にこの三つの相を知る智慧のないために、佛は涅槃の雲にかくれてしもうもののように、驚き悲しむことになるわけである。

善男子よ、また人には三つの心があつて佛の三身を證ることが出來ない。一つには起事心、眼耳鼻舌身意の六つの識で、外のものを辨えそれに執われて、迷いの事を起すことである。二つには依本心、心の根本に依つて妄りに働いて、すべての煩惱の源となるものである。三つには根本心、心の大源である。人もし、法みなの理を見る智慧を修めて惑を斷てば化身を仰ぐことが出來、煩惱を滅ぼせば應身を知り、上なき道を修めて心の大源をなくすれば、法身の佛に遇うことが出來るであろう。

三。善男子よ、すべての佛は第一の化身では各事業を同じうし、第二の應身では各意を同じうし、第三の法身では各體を同じうする。化身はもと人人の種種な意に隨うて、種種の相を現わすのであるから「多」と說かれ、應身は一つ意になつた弟子のためのものであるから一の相に現われて「一」と說かれる。そして法身はあらゆる相を超え、相を以ては執えることの出來ない境界にあるから、「一」でもなく「一」でもないと說かれる。

善男子よ、化身は應身によつて現われ、應身は又、法身によつて現われる。そしてこの法身は眞實の存在であつて依る處はな

い。

善男子よ、この三身は、それぞれが現わす意味によつて、「常えに變らぬもの」ともいわれ、また、「遷り變るもの」とも說かれる。化身は常に法を說き、緣に隨うてその方便の絕える事がないから、「常」と說かれる。けれども是は根本のものでもなければ大きな用を顯わすものでもないから、「常なし」とも說かれる。次に應身は、始めのない昔から相續いで絕えることなく、佛だけにある法を持つて、人人の盡きない限り、その用も盡きることがないから、「常」と說かれる。けれどもこれ又根本ではなく、用を具えて顯われていないから、「無常」と說かれる。法身はもとより遷りゆく法ではなく、別に相ももたず、そして根本の佛身であるから、云わば虛空のようなものである。故にただ「常」と說かれる。

善男子よ、殊更の念のない智慧を離れて外に勝れた智慧はない。法の眞如を離れて外に勝れた境界はない。此法と眞如と智慧とは、一つでもなく、又、異つてもおらぬ。そして法身は煩惱に染まぬ淸い智慧と、淸い寂滅とをもつているから、それ自身もまた、淸くて煩惱に染められることはない。

四、又、法身は在るものとも無いものとも、一つであるとも一つでないとも、數えられる質のものとも數の考を以ては知られないものとも、また、明るいものとも暗いものともいえない。全く凡夫の計らいを以ては考えて見ることも出來ないものであり、その、萬ずの法のあるが儘なる相に應うた眞如の智慧とゆうものは、そうした定つた相や、定つた相から割り出された理からすつかり離れておるものである。それゆえ、この法身の因緣、境界、處所、果等は思い議ることもできない。もし、此義を了るならば、道より退かぬ心が得られ、佛となるべき位、金剛の心、佛の心など限りない妙法を顯わすことが出來るであろう。

又、法身はそれ自體の上からは、「常」のもの「我」あるものといわれ、禪定の上からは、「樂」のものと說かれ、智慧の上からは、「淨」きものと說かれる。それゆえ、法身の體は常に變らず、自在、安樂、淸淨である。その禪定からは、すべての禪定、神通、大慈悲を出し、その智慧からはあらゆる力と辯才と、議ろうことの出來ぬ妙じい法とを顯わす。ちようど如意珠から量りない珍寶を出すようなものである。善男子よ、かようにして法身の禪定と智慧とはすべての相を超え、相に執われることがないから、何事をなすにも殊更になそうとゆう念がない。「常」のものでも、「斷」れるものでもないから中道と名けられ、生れたり死んだりする約束を越えているから、世の凡の修行によつては至ることの出來ない所で、まさに佛と菩薩の住む所である。

五。善男子よ、佛の境界は、煩惱と苦と相との淨められたところであるから「淸き極み」と呼ばれる。譬えば、鍛えた黃金に汚れのないようなものである。これ、黃金の性が本來淨いためである。從つて、鑛の中にあつてもその性は淨いのであつて、鍛えたために黃金が新たに出來たのでもなく、また鑛の時にその性が失せていたのでも

ない。それと同じように、法身は本來その性淨らかであるから、たとえ煩惱に混つて應化の二身と現れていても、ために法身の清淨が失せているとは云えないのである。この故に、すべての佛の境界は淨いといわれる。又譬えば、夢に大きな河に漂うて、手を運び足を動かして流を渡り、漸くにして向う岸に渡りついて夢醒めはてると、もうそこには流も岸もないように、迷つきれば、生死の流も悟と迷の兩岸もない。けれども、夢醒めたればとて心はもとのままにあるように、迷つきてすべてがなくなつたといつても、覺までがないとゆうのではない。そのすべてのなくなつて虛空のような淨さが、そのままに覺なのであり、そのゆえに佛の境界は淨いといわれる。

善男子よ、法身は惑の障を淨めて應身を現わし、業の障を清めて化身を現わし、智慧の障を淨めて法身を現わすのである。譬えば、空によつて電を出し、電によつて光を出すようなものである。また法身の現われるはその本來の性の淨いため、應身の現われるは智慧の淨まるため、化身の現われるは禪定の淨められるためである。そしてこの三身の淨らかなのは、ものみなの眞如のためであり、その眞如はまた一つ味のものであり、すべての煩惱の妄執から解脫れているものであるから、これを得ておるの究竟のものであり、そして、總てものの諸の佛の體も亦、ただ一つであつて異ることはないといわれる。

六。善男子よ、もし信ずる男又は女があつて、「佛は我が大師である」とゆう定つた信心を起すならば、この人は、佛の身に別の異のないことを、深く心に解るであろう。そして何事につけ起り易い正しくない思惟が、悉く除かれる。卽ち、法には二つの相はない。又分別はないと知つて、煩惱に染まず聖らかに修められるのである。かようにして法の眞如と、眞如に應うた智慧とが淨められ、すべての障が除かれて、すべてのことを自在に攝めとることが出來るであろう。これを眞如の正智、眞實の相と名け、またかように見るのを聖い見方とも眞實に佛を見るものとも呼ぶのである。

この御教化を蒙つて、人人はみな佛の身の奇しきいわれに打ち驚き、永しえに在す法身を願う心を起して、佛の滅度したもうことの悲と疑とを解くことが出來た。

第二節　正法の國

一。その時、その場にあつた神神は、みな聲をそろえて申しあげた。「世尊、この御法は、かつて承つたこともない妙にいみじい御法であります、私共は誓つて、この正法を受け持つ人人をば守り、これを弘める國王をば護り榮えしめるでありましよう」。

よつて世尊は、その中の四天王に告げ給うよう。「汝等四天王よ、此教を護ることは良に善いことである。私は過し百千萬の劫の間に、諸の苦き行を修めて證を得、今この法を說くのである、若し、人の王にして此教を持ち、敬い供養するならば、怨敵は皆退き逃がれ、あらゆる城も聚落も安らぎ榮えることであろう。四天王よ、若しこの教を守れば、諸の王は皆その國に於て、自由に樂しみ、財寶豐に足つて欲少なく、他の國を貪り求めず、弓矢を捨てるに至るであろう。その國の民は、自ら樂を受け、上下互に和ぎ睦んで水と乳との如く、互に愛しみ重んじて歡びあい、慈深くして謙だり、益善を增すであろう。かくて、人は榮え、地は肥え、寒さ暑さ調い、時は序に乖かず、日も月も星も常の程度を失わず、風雨も時に隨い、諸の災も遠く離れるであろう」。

四天王達は諸共に掌を合せて世尊に申上げるよう。「世尊、若し人の王あつて此教を聽くことを樂わず、供養し重んずる心がないならば、私達四天王及び諸の眷屬はみなその國を護らぬでありましよう。かくて正法は光を失い、惡しき道は瀰り、人は迷いの流に墮ち、證の路に乖き、國に種種の災起つて人は心に善を失い、只管に瞋り爭い、互に讒して枉しまの罪に陷いれ、惡病流行り星流れ、地動き井涸れ、暴雨と惡風は屢ば起つて常に饑饉に苦しみ、怨賊は他方より來つて侵すようになるでありましよう。されば世尊、もし人の王あつて、國昌んに民安らかに、正しい教を布めたいと願うならば、此妙なる教を持ち敬い奉らねばなりません。さすれば私達及び量りない神神は、此法の甘露を得て眷屬を增し、神力を以て此王を護り、諸の災を除いて安らかにならしめるでありましよう」。

二。その時、大地神の女堅牢が、座より起ち世尊を禮み奉つて申すよう。「世尊、若し人の王にして、正しい法を持たないならば、國を治め民を安んじ、長く位にあることは出來ぬと思います。世尊、どうぞ、私のために、正しい王法と、治國の要とをお說き下さい、諸の人の王をして、法を聞き、教の通りに行わしめ、正しく世を治めて永くその位を保ち、國の內の人人をして盡く利益を蒙らせて下さい」。

世尊卽ち、彼の女に告げ給うよう。「過ぎし世に力尊幢と名ける王があつたが、その王子の妙幢が太子となる式を擧げたとき、嘗て、己が太子であつたころ、父の王より教えられた、「正しい王法」の歌を說き聞かせた」。

（一）善き業の力によりて、神と生れては神神の主となり、人に生れては人人の王となる。
人の世にあれど、たかく尊く、神神の護る所なれば、天子とは名けらる。
王もし人人の惡を禁むるならば、正しき理に叶いなん。まさに法の如く、これを治むべし。
正法によりてぞ、王とは呼ばるる。もし其法を行わざれば、國の人人の壞わるること、象の蓮池を踏む如けん。

（二）惡風吹き暴雨起り、妖しの星や變怪現われ、日も月も蝕けて光なく、田畑みのらず國饑えん。これみな王の、正法をすつるためぞかし。
非法をもて、人に教えつ、國の內に行き亙らば、諍と僞にみち、神神の護を失い、國の柱の大臣横まに死し、王の身も厄を受け、他方の怨敵は來り侵さん。

かくて處處に、鬪行われ、人は多く非法に死せん、大臣も輔相も心恢い、非法するを敬いて、善法するを罰せん、かくて正法は隱れ、國遂に滅ぶべし。

(三) されば王位を失い、命を害うも、惡法を行うなかれ、害の最も重きは、國位を失うことにあり、そはみな恢の人による。

若し詔うを友とせば、王その位を失わん、政を損うことは、象の華園に入る如けん。されば親屬と他人とを平等に觀、正法の王として偏る黨なくば、法の王なるその名稱、普く天が下に聞えなん。

故に人の世の王たるものは、身をば忘れて正法を弘め、法の寶を尊みて、民に十善を行わしめば、國はゆたかに安らかならん。

第三節　餓虎に身を與う

一。次で世尊は、菩提樹の神、善女天の問に應えて、この會座に集うた一萬の神神の過去の因緣を說き給うた。「善如天よ、量りない遠い昔、持水とゆう長者がいて、醫術に精しく種種の病を治した。その子は流水と呼ばれ、顏容端しく、その性質は敏く、種種の學藝に秀でていた。その時國に疫病が流行り、數知れぬ人人が病の床に呻吟んでいたが、慈ぶかい彼は思うよう。「父は醫術に優れていられるが、今は年老いて杖を力に漸う歩みを運んでおられる、私はいま父から醫術の秘法を學んで、此苦しんでおる人人を救うであろう」。かように、思い定めて父の許にゆき、その旨を申すと、父は喜んで、委さに病の狀と、病の原因とを語つた。

「流水よ、かように病の源を知るならば、その病に隨うて藥を授け、たとえ病の狀が苦げでも、先ずその本を療さねばならぬ、そしてその病人に死相がないならば、それは助かる人である、死相とゆうは、眼や耳や鼻などの作用が倒しになり、尊むべき人や醫師に對うて慢心を起したり、親しい友に瞋を起すようなことをゆうのである、又左の眼が白くなり、舌が黑く鼻梁が歪ち、或は、耳輪が舊と違い、下唇が下に垂れるようになつたのも死相である」。かようにいつて、次に委しく藥品を敎え、更に、「醫師はまず慈愛の心を起し、財を利けることを思うてはならぬ、私は汝のために疾を療す要のことを說いた、汝は之によつて病に苦しむ人人を救え、さすれば量りない果報が得られるであろう」。

かくて、長者の子流水は、よく父の敎を辨えて自ら病を療すことの出來るを知り、偏く城、邑、聚落等に至つて懇ろに病の人を慰め、「私は醫師である、今より汝等の病を治すであろう」と告げた。病める人人は、身も心も躍り上がるほどに喜び、そして多くの人人は病より救われることを得た。

二。このために流水は、「慈悲の菩薩」として國の人に讃えられた。一日彼は二人の子供を伴うて國の內を廻り、人里離れた澤の邊りを行くと、狼、狐、鵰、鷲などの肉を食う禽獸が、同じ方面に向うて流れるように飛んで行くのを見た。そして怪しく思つてその後を追うて行くと、涸れかかつた大きな池があつて、中に澤山の魚が苦しみ跪いて居るのを見つけた。この時、樹神は半身を現わして、流水に語るよう。「善き人よ、汝の名のように此魚を憐んで下さい、流水とゆう言葉は水を流すこと、水を與えることの二つの意味をもつている、どうぞ名のように行うて下さい」。

彼は樹神から此魚の數の數萬もあることを聞き、また面り、日のために曝されて幾程もない水の中に跪いて居るのを觀めて、しみじみと憐れを催した。魚も亦、心あつてか彼を瞻まもるもののようである。彼は、すべてを忘れて救おうと願つた。そして四方を馳けめぐつて、水を求めたけれども、得られないので、まず樹の枝葉を手折つて日陰を造つてやつた。それから、池の水の源を探すと、大きな河があつたが、漁師達が魚を捕るために、險しい上流の處を斷ち切つて水を落したので、この池の水が干上がつたのであることが知られた。斷ち切つた處を繕うには幾百人の人を使うても三月の上もかかるであろう。よつて直ちに城に還つて國王に願い出で、二十の大きな象を借り受け、又、酒家から皮囊を借りて河から水を運ばせ、暫時のうちに舊のように池に滿させた。更に多くの食を家から取り寄せて魚に與え、盡く飽かしめた。

流水、思うよう。「私はいま食を施して、多くの魚の命を助けたが、次に法の食を施して、後の世も邊りなく彼等を救うであろう」と、池の中に入つて、魚のために佛の御名を聞かしめ、更に迷と悟の因果を說き聞かせた。

後の日、是等の魚は法を聞いた功德によつて命終つて天界に生れ、宿世の恩を報いようとて、高樓に眠る流水の許に至つて、數多の眞珠の瓔珞を捧げ、光明に輝く花を膝まで雨ふらしてその福を壽いだ。」

三。世尊はこの因緣を語り了つて善女天に告げ給うよう。「此話の流水は私で、一萬の魚は今此座に集つた一萬の神神である。私はこのように長い生死の間に、量りない人人を惠んで、追追に覺に至らしめたのである、汝等もみな迷を出ることを求め、勤め勵んで放逸になつてはならぬ」。

この時、人人はみな敎の旨を深く悟り、我等もまた大慈悲をもつてすべてのものを救い、勤めて行を修め、この上ない覺を獲るであろうと、信じ歡んだ。

四。世尊はそれより人人を將いて般遮羅村のとある林に詣り給うた。そこは地平かに荊棘なく、美しい花、柔かな草が一面に布きつめられている。阿難に命けて座を造らせ、其上に跏をくんで身と心とを正しうし、人人に告げ給うよう。「汝等は昔、菩薩の苦行した遺骨を見たいと欲うか」。人人は諸共に、「見たいと樂います」と申上げると、世尊は手をもつて大地を指し給うた。此時、地は六種に震い裂けて、七つの寶を鏤めた塔が湧き出でた、世尊は座を起つて禮を作し、右に繞つて本の座に就かれ、阿難に命けて塔の戸を開かしめ給うと、中に七寶の函があり、雪のように白く白蓮華のように妙な遺骨が盛られてある。世尊は、

おうとしておるところが眼についた。二人の兄王子も、少なからず憐みの心を動したが、第三の王子に向うて、「虎は、豹や師子と同じく、唯熱い血や肉を食としている、その餘の食では此虎の飢を救うことは出來ない」と語りきかせて、此場を立ち去った。第三の王子、心に思うよう。「人は皆自分の身を愛して他人をめぐむことを知らない、ただ、すぐれた人が大慈悲の心をもって、我身を忘れて他を救う、然るに私は、百度千度生を受けても、皆腐り爛れてあつた、今とゆう今、私は此身を唾のように捨て、此虎の飢を濟うであろう。良や此身は變りゆくもので、恒に求めても滿し難く、また保ち難い、今や此身を捨てて大きな業をなし、證を得るために捧げよう」と思い定め、少しも躊躇うことなく、直ちに衣服を脱ぎすてて傍らの竹にかけ置き、

我いま法界の人みなのため、覺を得んと願いつる。大慈悲の心ゆるがず、人皆の愛しむ身を捨てん。

覺は、患なく惱なし。なべての智者の樂える所、苦の海に沈める人を、我いま濟うて安らなん。

と歌い、進んで飢きつた虎の前に身を委ねたが、しかし虎は菩薩の慈愛の力に打たれて食いつこうとはしない。王子はこれを見て山より身を投げ、乾いた竹をもって自ら頸を刺し、血を流しつつ虎に近ずいた。この時、地も山も震い動き、海も驚いて逆さに渦まいた。虎は流るる血汐を見ると直ちに飛びかかって肉を啖み盡した。後には唯、白骨があたりに散ばるのみであった。

六。二人の王子は天地の變動を見て、弟の身を案い、此處に至つて見ると、慘れやその姿は失せて、ただ竹の上に遺物の衣服がかかり、血に汚されに白骨の僅かに名殘を止めるだけであるのを見て、氣も絶えいるばかりに悲しみ嘆いた。

この時、母の夫人は高樓に晝寢をしていたが、夢に兩つの乳房が割れ、二つの齒が拔け落ち、手にした三匹の雛鳩の一匹を鷹に奪られて驚きさめたが、天地は冥く、乳房は震え、心は箭に射られたように苦しかつた。折しも侍女が來て、「三人の王子の行方が知れませぬ」とゆう。憂惱に心戰く夫人は王とともに多くの人人を率いて村に入り、普く尋ね求めたが、二人の王子は見出したけれども、第三の王子の姿は見えない。王は悲しんで、

初め子を得し時に歡び少く、後に子を失いし時に苦多し。

我が子の壽命のためには、此身を失うて悔あらじ。

と叫んだ。やがて事の本末を委さに知つて兩親は王子の身を捨てた處に馳けつけて、風に仆るる樹のように大地に倒れて慟きに哭いた。

かくて菩薩の遺骨は七つの寶の塔に置かれ、涙をもって懇ろに祀られた。今や量りない時を重ねて地に沈んだ此寶塔が、人人を利もうとて再び大地から湧き出でたのである。阿難よ、其時の第三の王子は實に我が身、父は淨飯王、母は摩耶夫人である」。

人人は、此因緣を聞いて、各道を求むる心を發した。やがて世尊が神力を攝め給うと、寶塔は自ずからに大地に沒れた。

七。世尊が此經を說き給うと、十方の世界の量りない菩薩達が此會座に集い來つて世尊を禮んで一心に掌を合わせ、音聲をそろえて御德を讃えまつつた。

相好妙に、御光金の山のごと、徧く十方の國をば照し、緣に隨い救い給う。煩惱と愛の染れのぞこり、法の燈燃えてやまず。哀み垂れて、この世、後の世の樂を與う。

御佛の德は廣く、御佛の智慧は深し、大悲の方便もて、救いにいそしみ給いつる。

吾等いま功德の海の、滴の末をし讃えまつる。願くは此福を廻らして、人人に施し、速かに證にいたらんことを。

第四節　菩提心と大悲と方便

一。或る日、世尊は不意なく、限りない莊嚴を具えた大日如來の相を現わし給い、普賢を上首とする多くの菩薩達、秘密主を上首とする金剛力士の中に坐り給うた。

その時、秘密主は問い奉るよう。「世尊、御佛は一切智を得給い、あらゆる人人のために、種種の方便をもって、その智慧を說き布め、その機類に隨うて、種種の法を說き、種種の身を現わし、各自の世界の語を用い、又それぞれの相好を示し給うけれども、而も、その說き給う智慧の道は一味であります。そは虛空のようにあらゆる分別を離れ、大地のようにあらゆるものの依所となり、又は火のすべてを燒いて飽くことのないように愚の薪を燒き、風の塵を拂うように人人の煩惱の塵を除き給うのでありますが、そもそもこうゆう智慧は何を因となし、何を根となし、又何を究極とするのでありましようか」。

二。大日如來は、秘密主に告げ給うよう。「善い哉、秘密主よ、今汝のために說き明すであろう。秘密主よ、そは菩提心を因とし大悲を根となし、方便をば究極とする、菩提とはあるがままに自らの心を知ることである、抑も正しい證の道は、虛空のように定つた相のないものであるから認めること

も説き明すことも出來ない。秘密主よ、あらゆる法にはすべて定つた相はない、みな虛空のようである」。

秘密主問う。「世尊、さらば誰が一切智を求め正覺を成すのでありましよう」。

世尊宣うよう。「自らの心が求者である。またそのまま菩提である。そして一切智である。何故かといえば、心の本性は淸らかで、煩惱に染まぬものであるからである。抑も心は內にもなく外にもなく、その中間にもなく、あらゆる形を離れ色を離れ、六官にては知ることの出來ないものである。何故かといえば、心は諸の分別を離れて、虛空と同じであるからである。菩提の性が虛空と同じであるから菩提は心と同じく、從つて心と虛空と菩提のこの三つは一つである。この三つは大悲を根として、方便を缺目なく具えて居る。されば秘密主よ、私が法を說くのは、道を求むる人をして、その心がそのまま淸かな菩提心であることを知らしめようとするの外はない。もし人あつて菩提を知りたいと願うならば、かようにその心を知るがよい。

それではいかにして自らの心を知るか。それはあらゆる境界、身と心、若くは我、我所等の、その何れの中にも求めることは出來ぬ。秘密主よ、かように知れば、菩薩は『法を明かにする最初の道』を得られる。かくして道を修めれば久しからずしてあらゆる心の障蓋を取り去つて、諸の佛と等しく、限りない語をさとり、人人の心や行を知り、佛の護を受けて迷にあつて迷に染まず、人人のために勞を厭わず、正しき見にあつて、限りない功德を具えることが出來るであろう」。

三。秘密主問う。「世尊、いかにして、此心に菩提が生れ、又、如何ような相によつて、菩提心の發つたことが知られるでありましよう、又、いかなる次第によつて、心は道に進むでありましようか」。

佛、告げ給うよう。「秘密主よ、始めも知れぬ古えから迷に沈んでいる凡夫は、我と我所とに執われて、限りない己れの相を作つている。そは己が自性を觀ないからである。かくて時と處の變化に一つになつた瑜伽の我を見、又は神とその創造の力を信けし、或は外に自然の實在があり、內に主やたましいがあり、知者、見者等が實に在るものと思い込むようになるのである。

秘密主よ、愚かな凡夫は欲に浸る羊のようである。初め一つの齋を持ち、このささやかな法を歡んで屢ば繰り返す。是は善い種の初めて生えるようなものである。次に六齋日において、緣の人人に施をする。是は第二の芽である。更に親族でない人人に施すようになれば、第三の膨らんだ種である。德ある人に施しては第四の葉、更に歡んで伎樂の人に施し、耆宿の人に奉る、是は第五の開いた華である。又、親愛の心で施せば第六の果である。次に、戒を持つて神の世に生れるのは第七の受用種子である。又、この心で此世に迷い、善友の言によつて誠心こめて神神を敬い祀るならば、これ此世を畏れぬ第八の嬰童心と名けられる。次に常と無常と空のいわれに隨うて、解脫を求める智慧を生出すところの勝れた

行がある。それは諸の空を知らなければ、涅槃を知ることが出來ないからである。されば空を了つて、斷と常との見を離れねばならぬ」。

四。秘密主また問う。「願くは世尊、彼の『心』を說き給え」。

世尊、宣うよう。「心の相とゆうは、貪る心、貪らぬ心、瞋る心、慈の心、癡かの心、智の心、決定の心、疑う心、暗い心、明るい心、鬪う心、靜う心、神の心、魔の心、龍の心、人の心、女の心、商人の心、農夫の心、河の心、池の心、井の心、守る心、慳む心、狗の心、狸の心、鼠の心、歌う心、舞う心、鼓うつ心、師子の心、佛鵬の心、鳥の心、風の心、水の心、火の心、迷う心、羂索の心、械の心、雲の心、田の心、鹽の心、剃刀の心、須彌の山に等しい心、海に等しい心、穴に等しい心、生を享ける心などである。

秘密主よ、貪る心とは染れた法に隨うこと、貪らぬ心とは染れない法に隨うこと、瞋る心とは怒の法に、慈け心とは慈の法に隨う心、癡かの心とは道を修むるに考えなきこと、智の心とは勝れた法を修めてすすむこと、決定の心は尊い教を說の如くに行うこと、疑の心はいつも定まらぬ思を懷くこと、闇い心とはためらいの要らぬことにためろうこと、明るい心とはためろうことなく道を修むること、鬪う心とは互いに是非をゆうこと、靜う心とは自らを是非することである、神の心とは心に隨うて思の成ること、魔の心とは迷を喜ぶ心、龍の心とは澤山の資材を思うこと、人の心とは他を利益しようと思うこと、女の心とは欲に隨うこと、商人の心とは初めに聚めて後に析とうとすること、農夫の心とは初めに廣く聞いて後にその求める法に隨うこと、河の心とは二邊に偏る法に隨うこと、池の心とは渴いて厭くことのない法に隨うこと、井の心とは深く物を思うこと、守る心とは唯この心を實とし、餘は皆不實とすること、慳む心とは己のためのみを思うて他に與えぬこと、狗の心とは少分を得て喜ぶこと、狸の心とは徐ろに進むこと、鼠の心とは繫縛を斷とうとすること、歌う心、舞う心、鼓うつ心とは、法を修めてすすみ行き種種の神通をあらわして法の鼓をうつこと、師子の心とは怯れなきこと、佛鵬の心とは暗を思うこと、鳥の心とはすべてにおびえること、風の心とはすべての處に變つて起ること、水の心とはあらゆる善からぬことを洗うこと、火の心とは熾ゆる熱情のこと、迷う心とは執わる所と思う所と異ること、羂索の心とはすべての處に我自らを縛ること、械の心とは二つの足がそのままに止まつているようなこと、雲の心とはいつも雨を降らす思にあること、田の心とはいつも自身に事えること、鹽の心とはうたた思いを增すこと、剃刀の心とはすべて剃り除くこと、須彌の山に等しい心とはいつも高ぶること、海に等しい心とは、自ら事をなして滿足ること、穴に等しい心とは先に決めて後に變えること、生を受ける心とは種種の行をなして、此處彼處に生れることである。

五。次に秘密主よ、世の三つの妄執を超

えて世を出る心が生れる。それは身と心に主がないと解り、心に受ける苦樂の感を捨てて道を修め、業と愛の渇と無明から起る十二因緣を脱け出ることである。秘密主よ、かような湛寂は外道で知ることではない。秘密主よ、世を出る心がこの身の中にあれば、智慧が生れる、即ち身と心の執着を離れて、それ等は水泡の如く、芭蕉の葉の如く、又は、陽炎や幻のようであると觀るならば、解脱を得るであろう。それは即ちあらゆる我と相手の執着を離れて寂然な境地を證るのである。これを世を出で離れた心と名ける。かように心の相續と業と愛の渇の網を離れるのは、一刹を超えるだけの長い行である。

又、次に秘密主よ、大乘の行がある。法みなは永世に存う自性がなく、そは幻の如く陽炎の如く、又は影、響のようであると知る。かように我の心を捨てるならば心は自在の主となり、自らの心は本より生れず死なぬ本不生のものであることを覺るであろう。何故かと云えば、心は過ぎ去ってはなく、未だ起らずしてはなく、現りには直ちに過ぎ去るから捕えることが出來ないからである。かように自分の心の性を知るのは二刹を超える行である。又次に秘密主よ、眞言の門に菩薩の行を行うものは、量りない功德と智慧と方便を具え、天界人間の歸依する所となる。即ちあらゆる感官とその境界を超え離れた虛空にも等しい一切の佛法は、その空の性によって相續いで生れ、又あらゆる法を離れた「自性なき心」を生むのである。秘密主よ、かような初めての心を指して佛となるの因と說く。そしてそれは、業と煩惱と愛の渴から解脫れるけれども、而も業と煩惱の依る所となる。

六。又次に秘密主よ、初地から十地に至る信と解と行の地には菩提心、大悲心、方便心の三の心を觀察べる。そして限りない證に到る智慧によって四の攝法を觀る、實にやこの地は比べるものなく、思い量ることは出來ない。私の說く所のあらゆるものは、皆此地に依って得られる。されば智慧あるものは、一切智とこの信と解と行の地とを惟えるがよい。これは更に一刹を超えて昇り住むことが出來るのであり、最後の方便である佛果によって度ることが出來るのである」。

秘密主、申し上ぐるよう。「世尊、菩薩はいくばくの「無畏」を得るでありましょう」。

世尊告げ給う。「秘密主よ、かの凡夫が善業を修め、不善の業を無くするならば、彼は「善の無畏」を得るであろう。若しあるがままに己れを知るならば、「身の無畏」を得、又、自らの色像を捨てて我身を觀るならば、「無我の無畏」を得、身と心を忘れて法の攀緣に住むならば、「法の無畏」を得、更に法を忘れて緣なきに住むならば、「法無我の無畏」を得、更にすべてに就て、その空なるを思うて、ものみなの自性に性のないことを知るならば、「すべての法の自性の平等である理に無畏」を得るであろう。

七。秘密主よ、眞言の門に菩薩の行を修める者は、十の緣を觀察べて證に至るであろう。それは幻、陽炎、夢、影、乾闥婆城、響、水の月、浮泡、虛空華、旋火輪で

ある。

幻とは呪術や藥の力によって、種種に眼を惑わす形を現わしてそれを往來させるけれども、それは去るのでもなく、去らぬのでもない。眞言の幻を持ち成就げて、すべてを生むのも之と同じい。次に陽炎の性は空で、それは人の妄想から成り立つものである。眞言の想もこれと等しく、ただ假の名に過ぎぬ。次に夢の中に日光を見、種種の形や種種の苦樂を受けても、覺めては何物もないように、眞言の行も其と等しい。鏡によって面の像を現わすように、影の喩によって眞言の成就を發くことが出來るであろう。乾闥婆城によって眞言の成就の宮を解り、聲によって響があるとゆう喩によって眞言の聲を解り、又淨らかな水の月影を現わすように、かの『明を持つ者』である證の境を說くことが出來るであろう。又天より雨を降して泡を生むように、眞言の成就の樣樣の變化もそのように知るがよい。空の中には何ものも作るものはないのに花の形を見るのは、心の迷がなすわざである。種種の妄見を生むのも是と等しい。又、火を持って空の中に廻わせば輪の形のなすように、大乘の文句も之によって知るがよい。さすれば法の財を具え、種種の巧みな大きな智慧を生んで、偏くすべての心の相を知ることが出來るであろう」。

第三章　如來藏

第一節　告別

一。明旦、世尊は阿難を隨えて城に入って托鉢の後、弟子等と共に犍荼の村に向い給うた。その毗舍離を去り給う時、身を回らし城を顧みて、笑ませられた。「之がこの城の見納め、此身で再びこの城に入ることはないであろう」。その時、空には一片の雲もないのに、雨がしとしとと降り注いだ。

弟子等は之を聞いてまたも悲しみ、地に倒れて嘆いた。この事が、諸の離車の人人の間に傳つたので、人人は驚いて胸をうつて叫んだ。「悲しいことである、私達は今から、誰の敎に歸って善いのであろう、往いて、世尊に逢い奉り、世に住まり給うようにとお願い申そう」と。乃ち、車を馳せて城をいで、遙かに世尊の一行を望み、阿難及び諸の弟子達の懊んでいるのを見て、益す悲みを深くしながら、進んで、御足を禮んで申し上ぐるよう。「世尊、今もし、世尊がお逝れになるならば、世の人人はその眼を失うたように再び無明の暗路に迷うでありましょう。さすれば、どうして御敎の道を辨える事が出來ましょう、唯願わくは一刹たりとも、御壽命を此世にお止め下さい」。かようにして、三度願うた。

二。世尊宣うよう。「作られた法は皆悉く常ない。たとえ今一刹、壽命を延ばしたところで、やはり一度は死なねばならぬ。離車の人人よ、須彌の山は高くとも終には頽れ、大海原は深くとも又必ず涸れる時がある。日と月は明かに照っているが、久しからずして西に沈み、大地は堅うしてすべてのものを載せているが、刹盡きて業の火の燃え出るときは、また滅びてゆかねばならぬ。會うものは、皆別れる。過去の諸の

佛の身も亦遷り給うた。されば私だけがどうして作られたものの定めに逆うて、死を迎えずに居られよう。汝等は、ただ私のことについて、そのように憂え懐んでくれるな。私は今、汝等に最後の教を示すであろう」。諸の離車の人人は、悲をおさえて、申すよう。「どうぞお說き下さい、私共はきつと御教のままに行うでありましよう」。

世尊宣うよう。「離車の人人よ、汝等は歡び和いで、相逆うてはならぬ。共に相諭し合うて、善事を考え、戒を護り、禮を行い、父母と長者とを敬い、親戚に相睦んで各自相順わねばならぬ。國の中にある祖先や賢聖の塔廟の祭を修めよ。佛の法を信けして、弟子達を敬い、淸い信仰を持つた人人を愛で護るがよい。人人よ、正しい法によつて國を治め、邪しまに民を虐げてはならぬ。因果の理を學び、ただ一つの實の道を信けし、たとえ肉身は亡びても、法の中に活き殘る佛の滅びないことを知らねばならぬ。此人こそは、實に慚愧の服を着た人である。佛は常に此人を護るであろう。その人は久しからずして道を成しとげるに違いない。かくして國は榮え民は豐かになるであろう。汝等死に至るまで生涯これを受け持つがよい」。

離車の人人は云う。「世尊、私達は生の限り、必ず此御教を守るでありましよう」。

三。ついで世尊は、弟子等に告げ給うた。「弟子等よ、汝等も亦歡び和いで、水と乳とのように仲を違うてはならぬ、常に共に集うて道を講え、又、戒を護つて之を犯そうとする想を起してはならぬ。師と上座とを敬い、靜かな處で道に勤しむ同學の友を愛するがよい。又、人にすすめて、道場に法儀を營み、勤めて佛の法をば護れ。弟子等よ、汝等は在家の人のように、資生の業を營んではならぬ。戲論の言をなしてはならぬ。眠を好みなまけてはならぬ。效ないことに論うてはならぬ。惡しき友に遠ざかつて善き友に近ずき、邪しまな想を起さぬようにせよ。法において得る處があつたなら、更にすすんで上に向うよう心懸けるがよい」。

四。時に、諸の離車の人の妻たちも亦、世尊の久しからずして滅度に入り給うよしを聞いて、諸共に車を馳せて世尊の座下に詣でて諸の供養をささげ、泣いて世尊に申すよう。「世尊、唯願くは此世に住つて、お導き下さい、若し世尊がお逝れになるならば、智慧の眼の盲いた妾達は、いつまでも眞實の道を見ることが出來ぬでありましよう、妾達は德が薄かつたので、生れて女子となり、恒に事事に礙えられて數數世尊を拜みに參らすわけにはゆかなかつたのであります、若し世尊が滅度にお入りになりますれば、妾達の善いと思うものは、日に衰えて行くでありましよう」。

世尊宣うよう。「汝等、徒らに悲しむに及ばぬ、汝等はいまから死に至るまで、勤めて戒を持ち、人の眼を護るようにするがよい、心を直うして、諂い嫉むことをせぬがよい、さすれば、常に私を見ることが出來るのである」。

諸の離車の妻たちは悲に堪えないで、しりぞいて側に坐つた。

かくて世尊は、普く茲に集うた者のために語り給うよう。「汝等は今より戒を守つて、犯してはならぬ、戒を破る人は神神の憎むところで、又、世の人の見ることを喜ばぬものである、命の終ろうとするときでも、怖れにまつわられ、永く惡道に墮ちるであろう。これに反して、戒を持つ人は、神神の敬う所、世の人の見ることを喜ぶものである、命の終ろうとするときも正しい念を持ち、死して淸らかな處に生れるのである」。

六十人の弟子達は、之を承わつて道を成しとげ、限りない人人や神神も亦煩惱から遠ざかつた。

五。世尊は更に犍荼村に到つて、城の北の林の中に入り給い、樹下に息い給うた。

爾時、諸の弟子等に告げ給うよう。「弟子等よ、汝等は戒を守り、禪定を修め、智慧を求めて、解脫を得ねばならない。戒を守るものは惡に隨わず、禪定を修めるものは心が散らず、智慧を求めるものは欲を離れて自由な行が出來る、かくて德高く譽豐かに、終に淸い道に入るであろう。私も久しく之を聞かなかつた故に、さとりを得ることが出來なかつたのである、汝等も勤め勵んで之を修めるがよい」。

世尊は、進んで菴婆羅村に入り、又、林の中に坐つて弟子等に告げ給うた。「戒と禪定と智慧とを修めるものは、迷の海を渡ることが出來るであろう、已に、戒があるなら、禪定が出來、禪定が出來れば、智慧が明かになる、たとえば布が淨いと美わしく染められるように、此三つがあれば道は得やすい。汝等はつとめて此三つを修めるがよい、たとえば谿の水が澄んで居ると底にある砂の色が皆見えるように、道を得たものは、唯、心の淨いばかりで、明かに一切の法を見ることが出來るのである。それ故に道を求めるものは、必ずその心を淨くせねばならぬ、心を淸めれば、道は自然に得られる」。

世尊は、菴婆羅の村から、閻浮の村に移り、又、其邊ゲの村村を廻りたもうた。其間に說きたもうたことは、多く次のようであつた。

「心に三つの垢がある、慾と、怒と、愚とである、戒は慾の垢を却け、禪定は怒の垢を除き、智慧は癡の垢を去るもので、これこそ世を救う道である、汝等は之によつて悲と憂との本を斷つがよい」。

六。世尊は、阿難を呼んで宣うよう。「汝等は皆衣と鉢とを整えよ、私はこれから負伽の市に往こうと思う」。阿難は、弟子等と共に世尊の前後を圍んで、負伽の市に入り城の北にある尸舍婆の樹の林に憩うた。

時に黃昏に近ずいていたが、阿難は樹下に坐つて靜かに大地の動搖いた因緣を考えて居た。少時して起つて世尊の御許に詣つてお問い申すよう。「世尊、地の動くのは何の爲でありますか」。世尊宣うよう。「阿難よ、地は水の上にあつて保たれ、水は風の上にあつて保たれて居る。それゆえ風が動くと水を動かし、水が動くと地を動かすのである。之が地の動く一つの原因である。次に道を得たものが感應を現わそうと欲うて、地を動かすことがある。之がその二つ

の原因である。又、佛が其力をもつて地を動かすことがある。これがその三である。阿難よ、佛の威神はただ地を動かすばかりでなく、又、天をも動かすのである。これ正しい心の力である。阿難よ、私は永劫の古から功を積み德を累ねて、此奇しき自然の法を得た。私は凡てを見、凡てを知つて感化を及ぼさぬものとてはない。憶うに私は昔、慈悲をもつて徧く諸の國に赴き、其國の俗に從い、其言語を用いて、出家を訪い、學者を尋ね、王に到り民に往つて幾度となく往來して、教を授けた。そしてこれを安らかにし、これを慰め堅くその志を立てさせて、其處を去つた。しかも彼等は、竟に私の誰であるかを知らなかつた。かくて又天界に昇つて諸神に向い、淸淨を樂しむものにはそのために淸淨を說き、道の旨に到つて居るものには勤めて教を布かしめ、種種に誘い導いて、又、其處を去つた。しかし彼等も亦、竟に私の誰であるかを知らなかつた。阿難よ、私の力は廣くかつ大きく、出來ないこととてはない。阿難よ、又、私には見ない處もない。けれどもその中で、唯涅槃だけを最も樂しいものとする。

七。汝等も當にこの道を窮め、又、勤めて他人のために說くがよい。佛の世に出るのは優曇華のさくよう、甚だ遇い難いものである。從うて其法もまた聽き難い。それ故に一たび聞いたならば、これを護り、これを露わして、藏め匿してはならない。

弟子等よ、私の去つた後で、もし人あつて私は親しく佛から、又は上座の弟子から、このような法を聞いたといつて、之を說くものがあるならば、汝等はこれを聞いて當に經により律により法によつて、其虛であるか又は實であるかを考えて、その本と末とを究めるがよい。若し其宣べる處が經にも依らず律にも依らず、又は法にも依つて居ないならば、それは、魔の教である。汝等は正に佛の言をもつて之を曉し、彼をして經に入り、律によつて受けさせるがよい。彼がもし經戒に從わないならば、汝等は宜しくこれを斷けねばならぬ。惡草が去られぬと、善い苗がいためられるからである。若し世に教に明かなものがあつたならば、長老であつても、新學であつても、當に往いて、之に問う事が大切である。信者も亦往いて、衣、食、坐具、湯藥などを供養するがよい。汝等は道を同じうしておる、どうして和わないで居られよう。其惡道に墮つるのは、みな和わないためである。汝等は互に、我こそは多く道を知つて居る、汝は教を多く知らないなどと云うではならぬ。知る事が多かろうが少なかろうが、自ら實に行わなければ何の要もなさぬ。言が教に應うていたら用いるがよい、そうでないのは捨てるが善い。弟子等よ、唯、當に法に依らねばならぬ。これこそ實に尊勝の處である。若し法を忘れたならば、心は亂れるであろう。劍を執るにはその道によらなければ、反つてその手を傷けるとゆうことを、忘れてはならない。

世尊は此處に在つて、又、四聖諦を說き給うた。そして多くの弟子達はさとりを開いた。

八、世尊は負伽の市から、鳩婆の村に入り給うた。

村に弗婆育帝とゆう婆羅門があつた。世尊の來り給うたことを聞いて、多くの婆羅門や富豪達と一しよに馳せつけて座下に詣で、「世尊、何故に今この村に來られたのでありますか」とお問い申上げ、「私は必ず三月の後に滅度に入るであろう、それゆえ、毗舍離を出ぜて、徧く諸の都邑を訪い、相次いで此に來たのである」との御答をきき、驚き悲しみ、地に臥し胸をうつて叫んだ。世尊、宣うよう。「痛むことはいらぬ。作られし法の性相はこの通りである。汝等は憂をすてて、私が汝等のために、最後に語る所を靜かに聞くがよい。汝等は父母を敬い孝養をつくさねばならぬ。つねに善い道を以て妻子を導き、奴僕を愍んでその望んで居るものがあるかないかに氣をつけ、善き人に近ずいて惡しき人と離れるがよい。さすれば汝等は此世にあつては人人から敬われ、後の世には常に善處に生れることが出來るであろう。弗婆育帝よ、家にあつて、他人の助によらず、慚しいことを知らないのも、一つの樂である。自分も使わず、他人にも與えず、大いに金をためることも、一つの樂である。大いに富んで、自分のためにもつかい、又、父母眷屬にも與え、聖者學者にささげるのも、一つの樂である。身と口と意とに惡をなさず、智慧聽く明かに多くを聞くことを喜ぶのも一つの樂である。併し四つのなかで前の二つは樂のなかの下なるもので、次の一つは樂のなかの中、後の一つは樂のなかの上である。汝等は今から、長たると幼きと相敎えて、この善の中と上とを行うがよい。

九。弗婆育帝等、世尊に申上ぐるよう。「世尊、私達は今から御教に順うて、互に相導きましよう」。もろともに進んで、歸依のまことを表わし、五つの戒を受けた。そして、「世尊、願わくは御弟子方と一しよに明日、私達の小やかな供養を、お受け下さい」とお願いして、世尊の御許を得た。翌る日の食の座に一人の弟子が善く威儀を攝めなかつたので、人人は之を見て喜ばない色があつた。世尊は之を察して宣うよう。「佛の正法は深く廣くして、海のようである、海に種種の生物の住んでいるように、佛の法の海も亦その通りである、此に既に道を得た者も居れば、未だ得ない者も居る、汝等はこれがために、正法について凝滯の心を起してはならない。作法を知ると知らぬとは兎もあれ、佛を供養することは、ついに福德に歸るものであり、いろいろの流の皆海に歸するようなものである」。

ついで人人のために猶廣く法を說きたまい、人人は皆道に入つた。世尊は進んで波波に向い給い、人人は泣きながら送り奉り、思を殘して去りかねて居た。

一〇。既にして世尊は波波の城に至り、城の外の樹園に住まり給うた。正にこれ二月十四日のことである。園は城の中の冶工の子で、曾て世尊の御教をうけた淳陀の所有であり、誠に閑かな處であつた。

城の人人は皆出でて世尊を拜んだ。世尊宣うよう。「賢き人は家にある時は、恭儉に費用を節え、一は父母と妻子に、二は賓

客と奴僕に、三は親戚と朋友に、四は國王と出家に與えて、以て歡喜を得るがよい、かくして身も全うし家も安らけく、力と色と富と譽とを得、死して、福を得るであろう」。人人は之を聞いて、皆喜んで去つた。

淳陀も亦、世尊が、諸の弟子達と一しよに、その園に入りたもうたと聞いて喜に堪えず、衣を整えて世尊の座下に詣で、御足を禮してお問い申した。「世尊、いかなるわけで茲においでになりましたか、別に故のあることではありませんか」。世尊宣わく、「淳陀よ、私は、久しからずして滅度に入るであろう、それ故に來て、最後に汝等を見ようと欲うたのである」。

淳陀等は驚き悶え、地にたおれて叫ぶよう。「世尊、今は諸の人人をお慈みにならないのでありましようか、何故に滅度に入ろうとお思召されたのでありましようか。唯願わくは、一劫たりとも、この世に御壽をお住め下さい、世の眼は滅びたもうて、私達はどうして迷を出ることが出來ましよう」。世尊、諭し給うよう。「淳陀よ、悲しむことを止めよ、一切の法は皆遷り變る、會うものは必ず離れねばならぬ」。淳陀、云う。「世尊、私もその事は知つて居ります、けれども今や上なき至尊が逝き給うに、どうして惱まずに居られましようか。世尊、此世へ人と生れ出ることは難く、佛の敎に隨い奉ることもまた難く、ちようど芥子に針を投げつけるよう、盲いた龜の大海原で浮木におうようなものであります。願わくは世尊、私達を憐みたもうて、滅度に入り給わないようにして下さい」。

世尊、宣うよう。「汝はいまさようなことを云うてはならぬ、世は皆常ない、常に憂があり、この身は苦の集る所である。私は今これを離れて眞實を證り、已に諸の苦を過ぐることが出來た、私には老も病も死もない、壽命盡きることもない。淳陀よ、私は汝及び一切の人人を憐めばこそ、いま滅度に入ろうとするのである。それは、諸の佛の法が、常にその通りであるからである。淳陀よ、娑羅娑の鳥は春になるとみな阿耨達の池に集い來るように、諸の佛も亦みな滅度に至るのである」。

淳陀は聞きおわつて喜び、座から起つて明日、世尊が自分の供養を受けて下さるように願うた。世尊これを許し給うたので、直ちに辭つて座下を去り、終夜、心を盡して食をととのえた。

第二節　佛性

一。淳陀が去つて間もなく、世尊は、諸の弟子達に告げ給うよう。「汝等もし疑があるならば、今の間に問うて置くがよい。私は汝等のために、其願に隨うてその疑を斷ち、然る後に滅度に入るであろう。弟子等よ、佛の此世に出ることはまれである。人の身は得ることが難い。佛に隨うて、信心を起し、よく忍び難きを忍び、戒を守つて破ることなく、聖の位を得ることも亦難い。たとえば黃金の砂か優曇華を尋ねるようなものである。

汝等は私に遇うて、空しう過してはならぬ。私は往昔の修行によつて、今この上ない力を得たのである。汝等のために限りない時の間に、手足や髓までもすてて來た。汝等は放逸であつてはならぬ。弟子等よ、正法の城には功德の寶がそなえられ、戒と禪定と智慧とをもつて牆とし堞としてある。汝等は今この佛法の寶の城に入りながら、譬えば賈人の態態寶の城に入りながら諸の瓦や礫をとつて歸るように、虛妄のものを取つて歡んではならぬ。

汝等は小さな心を以て滿ち足る思をしてはならぬ。汝等は出家はしたが、しかし、未だ大乘を慕う心を起さない。染衣を服しておるけれども、心はいまだ清淨の法に染つては居ない。食を求めて處處を經廻つては居るが、いまだ大乘の法の食を乞うては居ない。鬚髮を除いてはいるが、いまだ正法のために諸の煩惱を除いては居ない。私はいま、實に汝等に告げる。佛の法性は、眞實であつて倒ではない、汝等は、當に勤めて心を攝め、猛く諸の煩惱を摧かねばならぬ。智慧の日が沒めば、汝等は無明のために覆われるであろう。

弟子等よ、たとえば、諸の藥草がよく人人を惠むように、私の法は妙なる甘露を出して、人人の煩惱の病を救うのである。いま、私の子である在家出家の弟子等をして悉く秘密の藏の中に憩わしめよう。私も當に此中に憩うて滅度に入るのである。その秘密の藏とはなんであるか。佛の法身、般若の智慧、解脫の法、即ち之である。弟子等よ、佛の法の身は常住のもの、涅槃は永世の樂、佛は永世の我である。佛の正法は清淨に、つくられた法は不淨である。我とゆうは佛の義、常とゆうは法の身の義、樂とゆうは涅槃の義、淨とゆうは正法の義である。

人人は、苦を樂と思い、樂を苦と思い、常なきを常と思い、常なるを常なしと思い、我なきを我ありと計らい、我あるを我なしと計らい、不淨なるを淨と計らい、淨きを不淨であると計ろうているが、これみな何れも顚倒の見である。汝等は、必ずこの顚倒の見を離れねばならない」。

二。弟子達、申上ぐるよう。「世尊は永くこの四倒を離れて居られますのに、どうして今一劫なりとも此に留まつて、私共をお導き下さらないのでありましよう。佛がもし逝き給うならば、私達はどうしてこの煩惱の身を以て行を修めることが出來ましよう」。

世尊、宣うよう。「汝等そのように云うてはならぬ、私の上なき正法は永えに世に傳わる、佛が諸の人人を安らかにするように、佛の遺法も亦汝等を安らかにするであろう。汝等必らず勤めて、何處にあつても、常に常樂我淨の想を修めるがよい」。弟子達申すよう。「世尊は先に、あらゆる法に我はない、汝等これを學んで我の想を離れよ、我の想を離るれば憍慢を離れ、憍慢を離るれば則ち涅槃に入ることが出來ると御說きになりました、私達は今、いかようにこの義を解つてよいでありましよう」。

三。世尊、宣うよう。「汝は要なことを尋ねた。私は譬をもつて汝に告げよう。ある心の闇い國王があつた。彼に一人の醫師があつたが、亦、頑なで愚かであつた。其醫師は唯、乳藥だけを知つていたが、而もそ

れとて確かではなかつた。病になると、その病の性質を考えないで悉くこれを用いた。王も亦これを怪しまない。偶まよく病と藥とを知つた醫師が旅より來たが、舊の醫師はこれを輕しめて教を受けようとはしない。よつて旅の醫師はたのむよう。「私はあなたに事えたい、どうぞ許して頂きたい」。舊の醫師云う。「汝が若し能く、四十八年の間、私に事えるならば、私はきつと汝に教えよう」。旅の醫師云う。「必ず心を付けてお仕えしましよう」。一日、舊の醫師が旅の醫師を伴つて王に見えた。旅の醫師はそこで王に對うて種種の醫方を說いた。そこで王は初めて舊の醫師の愚かなことを覺つて之を斥け、深く旅の醫師を敬うた。旅の醫師は、王を教えるのは今であると思い、王に語るよう。「王よ、願わくは國の中に布令を出して乳藥を禁めて下さい、此藥は、人を損うことが多いのであります」。よつて、彼の王は布令を出して、之を犯したものを罰した。今の醫師はそこで、諸の藥を調えて、衆の病を治した。その後間もなく王が病んだ。直ちにその醫師を召してゆうには、「私は今病が重うて、死するばかりに苦しい、どうしたならば之を治すことが出來るか」。醫師云う。「乳を服まれるより外ありません」。彼の王は之を聞いて大いに怒り、「汝は狂うているのか、又は私を欺くのか、先には乳を毒のものといい、今また之を藥だとゆう、おかしいではないか」。醫師云う。「王よ、蟲が居て、木を食んで文字の形にした、けれども此蟲はそれが文字であるかどうかを知らない、人も亦此蟲は文字を知つておると云わない。王よ、舊の醫師も亦、そうである。諸の病の區別をしないで、悉く乳藥を與えて、少しもそれが利くのかどうかを解つて居ません」。王云う。「解つて居ぬとゆうは何のことか」。醫師云う。「王よ、この乳藥は、毒ともなれば、甘露ともなります。若し、牝牛の飲食が適度であり、清い流を飲んで酒の糟などを食べず、放牧の處は高原でもなく又下濕の地でもなくて、牡牛と一しよに住まわないようにし、其犢も柔和にしたなら、其乳は、諸の病に利くでありましよう。之が甘露でありまして他のは多く毒であります」。王云う。「嗚呼、私は今日にして初めて乳藥の良否を知つた」と。即ち、之を服んで病が癒えたので、國の中に布令を出して、「今日からは乳藥を服むのがよい」と傳えた。民は怒つて口口に「王は魔のために狂わされたか」と叫びながら、王の所へ迫つた。王は具さに之を諭して、民と一しよにこの醫師を敬うようになつた。

四。 弟子等よ、佛も亦この通りである。大醫王となつて世に現われ、一切の邪醫を降して人人を調えんがために、我はないとゆう道理を說いた。それは外道に謂う我は、蟲の作つた文字のように意味なきものであるからである。私は時を知るから、「我なし」と說き、又、說いてよい因緣があるから、「我がある」とも說くのである。彼の良醫の、乳の藥である時と、そうでない時とを知つて居るのと同じい。愚かな者は、我をもつて、大いさ拇指に似たりと云い、或は芥子、又は微塵のようであると云う。佛

はこのような我を說かない。故にあらゆる法は我がないとゆうのである。しかし實は我がないのではない。

それでは、何者がこれ我であるか、若し法にして眞實、常住、自在にして變ることがないならば、これを我と名ける。彼の良醫のよく藥を知つておるように、佛も人人のために、あらゆる法の中に眞實に我があると說くのである。汝等よく此法を修めるがよい。

五。 その座に多羅の村の婆羅門の族である迦葉とゆう一人の若者があつた。恭しく掌を合せて、申すよう。「世尊、どうしたならば金剛のように壞れない信心を得られますするか、又何によつて堅固な力を得られますするか」。世尊宣う。「王の子が罪を犯して獄に繫がれたならば、王は之を憐れんで、自ら駕を回らして其處に行くように、道を求める人も亦一切の人人に心をかけて我子のような想をなし、彼等をして涅槃を得させ、すべての恐を安んじてやるがよい、さすれば、永い命を得て上なき智慧を得ることが出來よう」。

迦葉云う。「どうして、戒を破り正法を謗るようなものに對うて、子のような想が出來ましようか」。世尊宣う。「私は一切の人人において子の想をなすことは、一子の羅睺羅に對うのとかわらない」。

迦葉云う。「昔、十五夜の布薩の會の中に、行の正しくない一人の童子がありました、そこで密迹力士が佛の神力を承けて、金剛の杵で、塵のように之を碎きました。どうして、佛は諸の人人を視ること、羅睺羅のようであると仰せになりますか」。世尊宣う。「今、此ように云つてはならぬ。この童子も密迹も、佛の方便として示した假の人で、實の人ではなかつた。迦葉よ、或は正法を謗り、善根を斷ち、或は人人を殺し、邪見に陷り、故らに禁戒を犯すものがあつても、私は悉く彼等を慈み、等しく子のように想うことは羅睺羅とかわらぬ。併し、ただ諸の惡を行うものには、果報があるとゆうことを示すために、この折伏を示したのである。もし弟子にして、法を壞るものを見て、之を責め之を騙り、之を擯げて罰せぬならば、彼は佛法の中にありながら、佛の怨となるであろう。若しよく之を責め、之を騙り、之を擯げて罰したならば、これぞ眞の弟子である。迦葉よ、譬えば王がその子を育てるために、之を嚴しい師匠につけて懲すようなものである。王には少しの罪もない。それは、愛によるからである。佛もそうである。法を壞るものを見ることも、等しく一子のようである。佛いま、正法をもつて諸の國王、大臣、宰相、出家、在家の弟子達に付囑をする。當に諸の修行の人を勵まして、戒と禪定と智慧とを增さしめねばならぬ。彼等が若し怠つて、戒を破り、法を毀つたならば、これを苦しめて治すが善い」と。

六、 迦葉。「世尊、このようにして、長い生を得られるならば、世尊の御壽命はどうして百年にさえ滿ちたまわぬのでありますか。」世尊。「迦葉よ、汝はいま何故、この麁い言を出すのであるか。佛の壽命は諸の壽命において、此上もなく勝れて居る。

その得られた法は、諸の法のなかで第一である。迦葉よ、この國に八つの大きな河がある。しかし何れも歸する所は大海であるように、一切の人人の壽命の河も、歸するところは佛命の大海である。それ故佛の壽命は量りない。又迦葉よ、たとえば阿耨達池が四つの大きな河を出すように、佛も亦一切の壽を出す源である。又たとえば、諸の藥の中に醍醐がその第一であるように、佛は人人のなかで壽命の第一である。佛はこれ常住の法であることを知るがよい。しかし人人を救おうためには、煩惱を伴う身を示して、滅度に入ることを示すのである。迦葉よ、汝等は勤めてこの第一の義を修めて、廣く人のために宣べるがよい。そうしたならば、私の行くところに從い、私の至るところに至ることが出來よう。迦葉よ、當に佛と法と僧伽の常に住まることを想うがよい。例えば樹によって蔭のあるように、常の法があれば卽ち歸依することが出來るのである。もし佛の肉身までが常住であるならば、諸の人人の歸依する所とはならぬであろう。」

七。迦葉、更に申すよう。「私は今から此の旨を以て父母を悟らしめ、七世の父母をして皆これを信けさせるでありましよう。靈しきかな、世尊、私自ら學び、又、それを人のために說くのであります」。

世尊。「迦葉よ、佛の法の身は常に住り壞れることはない、それは金剛の身で食で保つ身ではない、人間の身ではなく、恐怖ある身ではなく、卽ちこれ法の身である。しかし今、病の苦しみを示す所以は、之によって人人を調えようと欲うからである」。

迦葉。「世尊、何によって此法の身を成しとげたもうのでありますか」。

世尊。「迦葉よ、私はよく正法を護つたために之を成しとげたのである。出家在家の弟子達も、勤めて正法を護るがよい。若し法を說くものがあるならば、刀杖を執つてでもこれを護るがよい。私はこの上ない秘藏を付囑した。迦葉よ、もし人人にして、佛は常に住って變らないと信けするものがあるならば、佛は卽ち、その人の身の中にあるのである。迦葉よ、諸の佛の師とするところは法である。法が常住であるから諸の佛もまた常住なのである。迦葉よ、彼の木が燃え終って灰が殘るように、煩惱が滅び終って卽ち涅槃があるのである。鐵は冷かにしてまた熱うすることが出來るけれども、佛はそうではない。煩惱を斷ち終って、永えに淸凉になって居る、煩惱の焰はまたと起ることはない。知るべし、人人は鐵のよう、私は、煩惱を漏さぬ智慧の火をもって、一切の人人の煩惱の鐵を燒くのである。迦葉よ、王がその後園に遊んで、諸の綵女の間に居なくても、彼は死んだとゆうことは出來ない。佛も亦その通りで、此世に見えなくても、常ないものであるとはいわれない。佛は量りない煩惱を出でて、常世に樂しい涅槃に入り、諸の覺の花の間に遊んでいるのである。

八。迦葉よ、私は已に久しくこの大きな涅槃に住んで、此天が下において種種の神通を現わした。藍毗尼の園においては母摩耶より生まるることを示し、人人は驚き喜んで私を嬰兒といった。しかし私は昔よりこのかた、遠く人間の約束を離れておる。ただ世間の約束に順うてこれを示したまでである。佛の身は卽ちこれ法の身であつて、肉、血、筋、脈、骨などから成るものではない。又、生れて七日を經た時、人人は私の髮を剃り、私を導いて產土神に詣らせ、漸く長けて學を授け妻を娶らせた。けれども私は昔から、是等の約束を離れている。後、家を出でて道を修めた時でも、人は皆、悉多太子が初めて家を出でたといい、菩提の樹の下に坐つて、衆の魔を降した時でも、人は皆私を以て初めて之を降したと云つておる。けれども私は、已に遠い昔に世の王の位をすてて法の王となり、久しく衆の魔を降していたのである。ただ世に隨うて、煩惱の强い人人を降そうために、之を示しただけである。そして今に至るまで、この世界にあつて數數滅度を示した。人人はみな、佛が眞實に滅れたと考えた。けれども、佛の性は實に永えに滅びない。これぞ、常住の法であると知るがよい。迦葉よ、涅槃はこれ、諸の佛の法界である。

迦葉よ、私は又時に世に現われて、或は信心のない人となり、或は惡魔となり、女の身をも示し、神の像をも現わし、時には娼女の家に入り、博奕する處を訪い、時には國の王となり、學者となり、疫病が起れば先ず醫藥を施して後に正法を說き、刀兵が起れば卽ち之がために法を說いて災を離れしめ、常の考に執わるる者のために常なきことを說き、この世を樂しと執わる者のために苦しと說き、我があると執わる者のために我がないと說き、この世を淨いと執わるる者のためには不淨であると說き、この世を貪る人人のためにはこの上なく微妙じい法こそ樂であると說き、煩惱を斷たしめるためにこの上なく微妙じい法を授け、諸の外道を濟おうと欲うては正しい法を說き述べた。このようにこの世に出でて、人人の師とはなつたが、心にはもとより師であるとゆう想がない。諸の賢しい人人の中に入つて法を說くけれども、これ唯彼等をたすけようと思うがために過ぎぬのであつて、惡業によつて此身を受けたのではない。佛の正覺はこのように安らかに大きな涅槃に住んでいる。それゆえ常住であつて變らぬのである。それゆえこれを大いなる涅槃と名ける。もし道を求める人が此に住むならば、能く此神通を示して畏るる所がないであろう。

迦葉よ、燈が消えうせるように、佛も滅度すればなくなるものと思うてはならぬ。燈は燈爐のなかに油のある間は燃えるであろうが、油が盡きれば明も亦盡きる。けれども明は盡きても、燈爐は殘つておる。佛も亦その通りである。煩惱が滅びても法の身は常に存まるのである」。

九。迦葉云う。「燈爐の常ないように、法の身も亦常なく變るでありましようか」。

世尊宣う。「さように言うてはならぬ、佛は上なき法の器である、一切の法のなかで涅槃は常住である、佛はこれを體とするから常住である」。

迦葉、申すよう。「世尊は佛に秘藏があると仰せられましたが、左樣ではありますまい、なぜかと云えば、佛は、悉く人人をして知り見ることを得しめ給うからであります」。世尊宣う。「善い哉、汝の云う通りである、佛には實は秘藏とゆうものはない、佛の言は、空に澄む秋の月のように清らかで翳がない、ただ愚かな者は之を解らぬから、秘藏とゆうだけである。迦葉よ、富める者に、ただ一子があつて之を愛しんだならば、その財寶はみな其子に見せる筈である、佛も亦そのように、諸の人人を見ることは一子に同じであるゆえ、覆い藏す所は少しもない」。

一〇。迦葉。「世尊、それでは、どうゆうものが涅槃といわれるのでありますか」。世尊宣う。「迦葉よ、涅槃は解脫である」。迦葉云う。「どうぞ、解脫の旨をお說き下さい」。

世尊。「善い哉、迦葉よ、眞實の解脫を遠離とゆう、諸の愛欲の繫縛を離れるからである。又不生とゆう、解脫は父母によつて生れるものでないからである。又無病とゆう、一切の病に損われぬからである。又無鬪とゆう、貪り奪い合う想がないからである。又安穩とゆう、憂や畏がないからである。又無垢とゆう、智慧の光を障える塵や霧はないからである。又無債とゆう、富める者のように負う所がないからである。又無逼とゆう、甘露のように、調が適度であるからである。又無動とゆう、之を動かすことが出來ぬからである。又希有とゆう、火の中に蓮の生えるように希しいからである。又無量とゆう、大海のように量ることが出來ぬからである。又最上とゆう、虛空のように比べものがないからである。又堅うして朽ちることなく、內が充ちて竹や葦のように空でない。又乳のようにその味一つであり、父母の子に對うように平等である。又、足る事を知つて飢えた者の甘露になる。又、足る事を知つて飢えた者の甘露になることなく、寂靜であつて洪水の漲つたようでない。人人が共に安らかに樂しむことが出來、狹い路を二人並んで行き得ぬようなものではない。人人を憐むために法の愛があるとはいえ、永く餓鬼のような貪りの愛を離れておる。そして臣の王に依るとき、餘に賴の要らないように、人が是に依れば、餘のものに依ることを求めない。曠野を通つて來て家に入れば安らかな氣になれるように、之には險難がない。迦葉よ、かように、解脫は能く一切の畏をすくい、諸の因緣をぬき、憍慢を伏え、放逸を調え、無明を除いて迷をすること、水の能く一切の草木を潤し、一切の生物を潤すようである。迦葉よ、眞の解脫は佛であり、佛は、卽ちこれ涅槃、涅槃は卽ちこれ盡くるなきもの、盡くることのないのが卽ち佛の性、佛の性は卽ちこれ決定、決定は卽ちこれこよなく正しい道である」。

一一。迦葉云う。「世尊、私は今初めて佛の盡きせぬ處に至りたもうたことを知りました、既に盡きせぬ處でありますから、御壽命も亦盡きたまわぬことをよく知りました」。世尊。「善い哉、迦葉よ、汝は今善く正法を持つたのである。若し、人が諸の煩惱を斷とうと思うならば、當にこのように

正法を持つがよい。迦葉よ、この敎の弘まる處は、其地卽ちこれ金剛の如く尊く、此中の諸の人も亦金剛のようである。若しこの敎を聞くものがあるならば、卽ち道において躓かず、悉く其願うところを成しとげることが出來るであろう」。

迦葉。「戒を持つ弟子にも、亦犯すことがありますか」。世尊。「法が衰えて、聖者が現われず、諸の弟子達が、律とそうでないものとを辨えない時に至れば、彼等を調えるために、一人の人がその中に交つて、而も同じ煩惱の塵には汚されることなく、唯智慧の光を和げて、煩惱の中に入るとする、是のような人は犯すところがあつても戒を破つたとはいえない。若し戒を犯して、憍慢の心で覆いかくして悔いることのないものがあるならば、是こそ、眞に戒を破る人と云わねばならぬ」。

迦葉。「人人の中に眞のものと、そうでないものとがあります、その區別のし難いことは、菴摩羅の果の生なのと熟つたのとの區別し難いのに似ておりますが、どうして之を知ることが出來ましよう」。世尊。「經に依るがよい、經に依れば心の眼が出來、之によつて區別をすることが出來る」。

一二。迦葉。「佛の說き給う所は、眞實であります、私は之を信けいたします、世尊の語り給うように、諸の弟子達は、當に法に依つて人には依らず、義に依つて語に依らず、智慧に依つて分別に依らず、完全ならぬ經には依說かれた經に依つて、完全ならぬ經には依らないでありましよう」。

世尊。「法とゆうは卽ちこれ法性である。人とゆうのは、卽ち是れ劣つた敎の人である。法性は佛、劣つた敎の人は生死の中にある人である。佛は常住、生死ある世は常ない。たとえ佛の常ないことを云う者があつても、必ずそれを信してはならぬ。

義とゆうは、佛の常に住る理である。語とゆうは諸の論綺飾の辭である。佛が常住であるから正法も常住であり、正法が常住であれば、僧伽も常住である。諸の論の辭は、貪求を說き、諂諛を語つて、佛は弟子に淨らかでないものを蓄えてもよいと聽したなどと述べているが、宜しく彼の義によつて此語に依つてはならない。

智慧とゆうは佛の智慧である。劣つた敎の人はよく佛の德を知ることが出來ない。かかる智慧に依つてはならぬ。若し佛卽ちこれ法の身であることを知るならば、これこそ眞實の智慧である。これは應に依らねばならぬところである。

完全に說かれた經とゆうはこの上なき大乘のことである。完全に說かれてない經とゆうは、劣つた敎の法である。もし佛の常住をゆうならばこれ完全、もし佛の常なきをゆうならばこれ完全ならぬものである。劣つた敎の法に依らず、應に大乘の法に依らねばならぬ。それは、佛が人人を救うために劣つた敎の法を說き、又、大乘の法を說くのであるが、劣つた敎の法は、ちようど、初めて耕して未だ果を得ないようなものである。

迦葉よ、私の說くように止まる所を知るがよい。私の滅くなつた後に、惡魔が獵師の法衣を纏うたように、在家出家の弟子の

相をして追追に、この正法を沮むことと思われるからである。

迦葉よ、若し、一切の人人に悉く佛の性があつても、煩惱に覆いかくされているから、知りもせず又見もせない。それ故に應に勤めて煩惱を斷たねばならぬと說くものがあるならば、この人は罪を犯さない。もし自分は已に道を成しとげた、何故なれば佛の性があるからとゆう者があるならば、この人は罪を犯したのである。たとえ佛の性があつても、修めなければ未だあらわれない、未だあらわれなければ道を成しとげたのではない。迦葉よ、世の人は我があると說いてはおるが、佛の性のあることを知らない。それ故に是は我のないものに我の想をなして居るのであつて、顚倒の考である。佛法に於て我があるとゆうのは、即ち佛の性のことである。世の人人の、佛の敎には我とゆう事は說かれないと主張るのは、この佛性の我までも我がないとするものである。是また顚倒の考である。

一三。迦葉よ、たとえば貧しい女があつて、家に黃金の函のあるのを自分には知らない。他の人が來てその女に、「汝は私に草を除つてくれるであろうか」と云う。女、答えるよう。「汝がもし、妾に黃金の函を見せたなら、妾は直ぐに汝のために働くであろう」。その人が「よろしい」といえば、女は「妾の家の人は皆之を知らないのに、どうして、汝は知つているのか」とゆう。その人は、「私はよく之を知つて居る」といつて、其家の中で黃金の函を掘り出したので、女は異しみ喜んで、其人を敬うた。迦葉よ、私も亦そうである。一切の人人に元來その有つておる佛の性を見せるのである。

又、迦葉よ、たとえば一人の女があつて、其嬰兒が病に罹つたので、彼女は憂えて醫師を賴んだ。醫師來つてこれに藥を與え、且つ告げてゆうには「兒が藥を服んだならば、暫く乳を與えてはいけない、藥の消化れるのを待つて後にこれを與えるがよい」。そこで女は苦いものをその乳房に塗つて兒にゆう。「妾の乳には毒がある、觸れてはならない」。兒は飢えて乳を求めたが、毒と知つて呑まなかつた。やがて藥が消化れたので、母は水でその乳房を洗い、其兒を喚んで「乳を與えるから來い」と云う。けれども兒は毒を恐れて來ない。母は、「さきには藥をきかせるのに毒を塗つたが、今はその藥も消化れたから、もう毒を洗うて仕舞うたゆえ、來て乳を呑め、些しも苦いことはない」と云う。兒は之を聞いて、漸くに飲んだ。迦葉よ、佛も亦そのように、世間の諸の妄見を除いて、世間の考えておる我の眞でないことを知らしめようとして、さきにあらゆる法は我がないと說いたが、今はもう如來藏を說くのである。それゆえ恐を抱いてはならぬ。彼の嬰兒の母の喚ぶのを聞いて、喜んで乳を飲むように、當に自ら佛の秘藏を辨ねばならぬ」。

一四。迦葉。「世尊、若し我があるならば嬰兒の生れる時に何故知慮がないのでありましよう、何故生をうけて後に死ぬことがあるのでありましよう、若し佛の性がつねにあるならば、何故に貴い賤しい貧しい富むなどの差別があり、何故に殺害、老衰、

醉亂、忘失などがあるのでありましよう、そしてその我である佛の性が、何處へいつているのでありましよう」。

世尊。「迦葉よ、たとえば王の家に一人の力士があり、眉間に金剛の珠を飾つていたが、偶ま他の力士と角うたときに、彼の頭がその額に觸れたので、珠が膚の中に入つてしまつて、其處に瘡が出來た。よつて醫師を招いて之を治して貰おうと乞うたところ、醫師は、この瘡は珠が膚に入つたために出來たものである事を知り、力士に問うよう。「汝の眉間の珠は何處にいつたか」。力士は、驚き悲しんでゆう。「珠はないのであろうか」。醫師。「愁うることはない、珠は汝の膚に沒れている」。力士。「汝は私を欺くのか、若し皮の裏にあるならば、どうして膿血が出ないのか、若し筋の裏にあるなら、汝はどうしてそれを見ることが出來よう」。時に醫師が、鏡をとつて其面を照したところ、珠は明かに鏡の中に映つた。力士は之を見て奇しく思うた。迦葉よ、一切の人人も亦この通りで、善き友に近ずかないから佛の性があつても見ることは出來ない。貪、瞋、癡のために覆われ、種種の業報によつて、種種の世に生れ、たとえ人間に生れても、聾、盲、瘖瘂、又は跛躄の身を受けるのである。私の諸の弟子達も、またこのように、善き友に近ずかないから、我のないことを學んで、我のない理を知らない。自ら我のないことの眞性を知らないので、どうして我のあることの眞性を知られよう。迦葉よ、彼の力士が、明るい鏡の中にその寶珠を見るように、諸の人人も、その煩惱の盡くる時に、乃ち明かに佛の性を證るのである。

又、迦葉よ、雪山に一つ味の藥があつて、其味は極めて甘い。深い叢の下にあつて、人之を見ることが出來ない、ただその香によつて其ありかを察るだけである。古、一人の聖王があつた。木樋を作つて此藥に觸れたので、藥は流れ出て樋の中に集まつた。王の死んだ後、此藥が或は醋く、或は鹹く、或は辛く、或は苦く、其流るる處に從うて味はみな同じでなかつた。眞の味は獨り留まつて山の中にあつた。人人は苦しんで繫つけれども出なかつたが、後に聖王が復出でて此味を得た。迦葉よ、佛の秘藏も亦、その通りである。煩惱の叢に覆われて、無明の人人は之を見ることが出來ない。一つ味とは、佛の性にたとえたのである。佛の性は一つ味であるけれども、煩惱のために種種の生を受けるのである。

迦葉よ、佛の性は猛くして壞ることは出來ない。それゆえ能く害うものもない。けれども見ることはできぬ。汝が若し道を成しとげたならば、乃ち證ることが出來るであろう」。

一五。迦葉。「世尊、若し殺すことがなければ不善の業はないのでありますか」。世尊。「迦葉よ、實に殺すことがある。人人の佛の性は身と心の中に住んでいる。若し身と心を壞れば之を殺すとゆうが、若し殺すことがあれば、卽ち惡趣に墮ちよう。世の人は橫まに我の相を計ろうのも、皆妄想である。妄想は眞實ではない。世の計ろうのと異つた我の相こそ、これ佛の性である。

これ、最もよく我を計ろうたものである。迦葉よ、砂礫は穿つことは出來るが、金剛は穿つことは出來ない。身と心は砂礫にたとうべく、佛の性は金剛にたとえてよい。魔や人人は皆身と心を破ることが出來ても、終に佛の性だけは破り得ない。迦葉よ、佛の性はこのように、思い議りがたいものである。

迦葉よ、大乘は甘露の法である。これによって涅槃に至ることが出來るであろう。人人がこれを知るなら、生も死も超えるであろう。迦葉よ、汝はよく三寶に歸依することを辨えるがよい。この三寶に歸依する性は、卽ちこれ我の性である。若しよく諦かに、我の性の佛の性であることを見れば、この人は秘られた佛を見出すことが出來るであろう。

迦葉よ、佛をたのむものは、更に餘の神神をたのまない。これ眞の信者である。法に歸するものは外道を求めない。かくて畏るる所のないようになれるのである。

一六。迦葉よ、私は今更に汝のために善く如來藏に入つて說こう。若し偏えに我の執着に住まるならば、常に苦を離れない。若し偏えに我がなくなれば、道を修めても效がない。若し全く我がないとゆうならば是卽ち邪見である。若し我が常にあるとゆうならば、是また邪見である。若し偏えに諸行は變ると計ろうならば、また是も邪見であり、若し偏えに諸行は變らぬと計ろうとも、是また邪見に陷るのである。若し、ただ苦のみを云えば、卽ちまた邪見であり、若し、ただ樂のみを云えば、卽ち又邪見である。故に佛の法の中道は、遠くすべての二邊の道を離れて眞實を說くのである。たとえば、良醫はよく病の因を知つて其れに隨うて之を癒すように、佛は諸の煩惱の體や相や其差別を知つて之を除き、秘められた佛であるところの淨らかな佛の性を開くのである。凡夫は之をさとらぬ。

苦と說けば、樂のあることを思わず、變ることを說けば佛の性の變らぬことを知らず、我がないといえば一切の佛法に我がないと云い、秘れたる佛の性は煩惱に蓋わるも煩惱を離れて空寂であるといえば、之を聞いて斷滅の見を起す。けれども、智き者は佛の常住にして變易のないことを知つて居る。若し、解脫は幻のようであるといえば、凡夫は之を磨滅びるものと考える。けれども智き者は、よしや人の身をかりた佛は生れ死にするとしても、その法の身は常住にして變らないのを知つて居る。若し無明は諸行の原因となるといえば、凡夫は、明と無明とを違つたものとする。けれども智き者は、其性の二つないことを知つて居る。この二つとない性こそ實の性である。若しあらゆる法は我がないといえば、凡夫は、我あることと我のないこととを二つとする。けれども智き者は其性の二つないことを知つておる。性に二つなければ、それは卽ち實の性である。迦葉よ、牛が草の甘いのを食えばその乳は甘く、草の苦いのを食えばその乳は苦い。人人は明と無明の因緣によつて二つの相を作る。しかし若し無明が轉ると明となるように、一切の善惡の法も亦この通りである。迦葉よ、雪山

に諸の毒の草があるとゆうけれども、其中には藥草もある、牛が之を食えば醍醐を得るように、諸の人人の身は、常なき毒の藥であるとは云うものの、またこれ佛の性の妙じき藥に外ならぬ。ただ煩惱の客塵に覆われておるため、人人は之を見ることが出來ないのである。若し誰にても之を見るならば、則ちこよなき覺に入るであろう。是人は能く佛の恩を報ゆるものである。これ眞の佛の子である」。

一七。迦葉申す。「世尊、どうして、此佛の性を見ることが出來るでありましょう」。

世尊。「經に順うて信せよ、卽ち知ることが出來る。迦葉よ、盛りの夏の頃、水が漲ると鷲若は高い丘をえらんで其上に雛をおき、然る後に心安めて遊ぶように、佛も世に出でて量りない人人を敎化し、心を正法に住ましめて卽ち滅度に入る。迦葉よ、あらゆる遷變りは、これ苦である。涅槃はこれ樂である。そは上なき微妙のもので、あらゆる遷變りを壞るものであるからである。謹しみ愼しんで放逸にならぬのは、これ甘露の地である。放逸であつて謹愼のないのは、これ死の路である。放逸は迷、迷は苦である。これ、上なき樂である。もし遷り變るに赴くならば死であつて、こよなき苦をうけるであろう。もし涅槃に赴けば死がなくて、最も妙なる樂をうける。それゆえに凡夫には死があり、聖者には老も死もない。そは上なき常世の樂である涅槃に入るからである。

迦葉よ、月が此處に沒るれば此處の人人は月が沈んだと云い、月が他方に現われれば彼處の人人は月が出たと云う。けれども月は常にあつて、其性には出沒はない。佛も亦そうである。其性には生滅がない。ただ人人を敎化するために、生滅を示すのである。迦葉よ、人人は月の始には月が盈つると云い月の終には月が虧けると云う、けれども月の性は常に滿ちて、增すこともなく減ることもない。佛も亦そのように、人人の見るところは同じくなくても、常に住まつて變らない。

一八。迦葉よ、月は、一切の上に現われる。城邑にも、聚落にも、山にも澤にも、若しくは井戸、若しくは池、若しくは瓶、若しくは鑊、いかなる處にも現われる。人の行くこと百里であろうが千里であろうが、月は常にその身に隨う。然るに人人は月を鑊の口のようであると云い、或は車輪にも似ておると云う。けれども月の性は一つであつて異る相はない。佛も亦そのように、世に隨うて量りない因緣を示すけれども、其性は常世に變らない。

迦葉よ、佛がこの世にあつて身を捨てることは、蛇の故い皮を捨てるようなものである。また金師が好き金を得ると、意のままに隨うて種種の器を造るように、佛は、この世において種種の色身を現わすのである。それは、人人をして迷を出でさせようためである。

迦葉よ、世に丈夫の相がある。それは佛の性のことである。若し人として佛の性を知らぬならば、卽ち男の相がないといわねばならぬ。男であつても、その人を女と名

ける。これと違つて若し女でも、能く自身に佛の性のあることを知るならば、この人は丈夫の相があるので、是れ正しく男子である。

迦葉。「世尊、私には今丈夫の相があります、それは秘されたる佛の性を見る教に入ることが出來たからであります。佛は今始めて私を覺まして下さいました、私はこれによつて確かに明かになることが出來ました」。世尊は迦葉を讃めて宣う。「善い哉、迦葉、こよなき法は深うして知り難い、然るに汝は今知ることを得た、ちようど蜂が蜜を採り集めたようなものである」。

一九。 迦葉また世尊に申すよう。「世尊、諸の佛及びこの教を受ける人人には、その性に差別がないとのことでありますが、詳しく斯旨を說いて人人に惠んで下さい」。

世尊。「迦葉よ、たとえば長者の子が毛色のさまざまな多くの乳牛を蓄うていたが、或る時祭のためにその乳を搾ると、乳の色は皆同じく白かつた。彼は怪しんで、牛の毛色は各異つて居るのに、その乳はどうして皆白いのであろうと思つた。けれども考えた後に、皆これは業報の因緣によつて其色が一つであることを了つた。迦葉よ、佛の性がすべての人に於て一つであることも、この通りである。それは、同じく煩惱の漏ることを盡しておるからである。

又迦葉よ、たとえば、黃金の鑛を鎔して之を鍊つて黃金にすれば、其價が貴くなるように、いかなる人も皆同一の佛の性を成しとげることが出來る。それは、彼の鑛の滓穢を除くに同じく、煩惱の汚穢を除けば一切の人人の有つ同一の佛の性が顯われるからである。

迦葉よ、佛の常住を知らぬものは、これ生れつきの盲である。若し佛の常住を知つたならば、これ神の眼を持つ人である。縱え神の眼はあつても、之を知らねば肉の眼に異らぬ。それはこの人は己の手足を知らず、又、人をして知らしめることが出來ぬと同じであるからである。

佛は常に一切の人人の父母である。

迦葉よ、佛は常に一切の人人の父母である。佛が一つの言で法を說けば、異つた人人も各自ら解ることが出來て、皆歎えて、佛は今日私のために法を說き給うたと思うておる。迦葉よ、兒が生れて、十六月の間は、父母がまずその音に同じうして、赤兒のゆうように語り、それから徐ろに語を敎えるのと同じく、佛も亦そのように、諸の人人の種種の音に隨うて法を說き、その見るべき所に隨うて種種の相を現わすのである。それは彼等をして、安らかに正法に住ましめようがためである」。

第三節　淳陀の供養

一。 夜も明くれば、世尊は諸の弟子達を伴うて、淳陀の家に入り、その供養を受けさせたもうた。淳陀は自ら食を世尊と弟子等にそなえ、別に栴檀の樹芽を煑て世尊に奉つた。然るに一人の弟子が、その器をとつて水を飲み、過つて之を壞した。

食終つて、淳陀は小さな凡をとり、世尊の前に出でて尋ねまいらせた。「世尊、世に幾何の出家がありますか」。世尊。「善く道を行うて憂と畏との海を度り、高く人間と天界との道を超えて涅槃に到る者が、これ其一つである。善く第一の義を說いて汚すことなく、慈あつて明かに諸の疑を決めるものが、これ其二つである。遙かに無垢の地を望んで他を顧みず、勤めて倦むことなく、法をうけて自ら養うものは、これ其三つである。外淨かであつて內濁り誠なくして穢を行うものは、これ其四つである。淳陀よ、一人をもつて多くの人を責めてはならぬ。世に善いことと惡いことがあり、淨いものと穢れたものとが雜わつているから、一つと見なしてはならぬ。それゆえ形によつて卒かに相親しんではならぬ。形の好いのは好いのではない、意の淨い者こそ好いのである」。

淳陀云う。「嘗て世尊は、有つているものを一切に施すのは讃むべきことであると仰せになりましたが、この義はどうゆうことでありますか」。世尊宣う。「ただ一つだけを除くがよい」。淳陀。「それは何でありますか」。世尊。「戒を破る人である、戒を破る人とゆうは善根を斷ちきつた人のことである」。淳陀。「それは如何ような人でありますか」。世尊。「もし麁惡な語をだして正法を謗り、永くそれを改めないで慚ずる事のない者である。もし四つの重い禁戒を犯し五つの逆罪を造つて、心に怖畏も慚愧もなく、永えに正法を護る心もなく、却つて之を輕んじ賤め、謗り毀つて語に過咎の多いのは、之また善根を斷つものである。又、もし佛も法も僧伽もないとゆうことを說くものがあるならば、これも亦善根を斷つものである。これを除いた餘に施すものは、凡て稱えねばならぬものである」。

二。 淳陀。「こうゆう戒を破る人でも猶救われるでありましようか」。世尊。「因緣さえ具われば救われよう、若し悔い、慚じ、恐れて法に還り、自ら、どうしてこの重い罪を犯したのであろうか、正法の外には私を救うものがない、正法に立つてきつとこれを護らねばならぬと、己を責めるようになれば、五つの逆罪とはいわない、若しこの人に施せば、その福に限りがない。淳陀よ、一人の女があつて身重になり、產期に近ずいて、偶ま國が亂れたので、他國に逃れゆき、とある廟に留まつてその子を產んだ。既にして故鄉の鎭まつたことを聞き、其兒を携えて歸途についたが、中路に河水が溢れ漲つているので、兒を負うて渡ることが出來ない。よつて念うには、いつそ、子と一しよに死のう、子を捨てて獨り渡ることは出來ぬからと、心を決めて、ついに一しよに溺れた。この女の性は惡かつたけれども、子を愛しんだことによつて、死んでから天界に生れた。淳陀よ、正法を護る心も亦この通りであつて、前に善からぬ業があつたとしても、正法を護ることによつて、彼は世間のこの上ない福田となられるのである。

淳陀よ、道を信ずるものは他を羨んではならぬ。他の語に迷うてはならぬ。又、他のものが作すか作さぬかを見て居てはならぬ。ただ自分の善と惡とに氣をつけることが要である。さすれば道を得ることが早いであろう。汝は汝自ら心を修めて、いかようなことにも、放逸にならしめてはなら

ぬ」。

淳陀は聞き已つて、歡喜に溢れた。

三。 世尊は淳陀の家を出て、諸の弟子達に圍まれながら、拘尸那羅に向い給うた。淳陀も家の人と共にその御後に隨うた。

往きたもうこと半ばにして、またも御病が起つた。靜かに路傍の樹の下に休まれ、阿難に語り給うよう。「私はいま、脊に痛みを覺える、茲に座を敷いてもらいたい」。阿難は直ちに仰せのままに、座をととのえまいらせた。

世尊はその上に憩われて、阿難に仰せられるよう。「咽喉が渴いてならぬ、河にいつて、淨らかな水を汲んで來て呉れ」。しかし阿難は申しあげた。「世尊、さきごろ商人が五百の車をつらねて河の上流を通りましたので、水が濁つております、恐らく、飲み給うことは出來ますまい。世尊、茲から餘り遠くない處に迦屈蹉河があります、そこには清い冷かな水があります、彼處へ行かれて御渴をいやし、且つ御足をお冷しになるがよいと存います」。けれども世尊は、三度かように仰せられたので、阿難は止を得ず、世尊の鉢を持つて岸に到つて見ると、いつか水は清らかに澄んでいた。阿難は驚き恐れて、感歎の言葉を放つた。「佛の神力は、どうしてかくも靈しくおわすのであろう」と。即ちこれを汲んで世尊に奉つた。

その時阿羅羅迦羅摩の弟子で年若い末羅族の弗迦奢とゆう者が、拘尸那羅から波波の市に赴こうとて此處を通りすぎた。偶ま樹下に在ます世尊の麗わしい聖容を拜んで前み出で、禮をなして申し上ぐるよう。「喬答摩よ、聖道においては、禪定が第一であります、是は私共の情を調え、心を攝め、驚と畏とを絶ちます、私の師の迦羅摩は、曾て或る路邊の樹下に息われた時、五十臺の車がその前を通りすぎたけれども師は寂默を守つて、身を動かすことさえせられなかつた、私はつくずく、禪定の尊いものであることをさとりました」。世尊、宣うよう。「弗迦奢よ、私が曾て、阿車麻の村の或る樹の下に坐つて、道を念うていた時、五百臺の車が私の側らを過ぎた、又曾て、阿越の村の草廬にあつて人の世の生死を觀めていた時、雷が鳴り渡つて、村の中の二人の兄弟と、四頭の牛とが、そのために驚いて死んだことがある。その時私は、眠つていたのではないが、それを見もせず又聞きもせなかつたので、人人は奇じくたたえた」。弗迦奢は、これを聞いて歎えた。「世尊、佛の禪定は思い議ることが出來ません。私の師などの、遠く及ぶ所ではありません」。猶いろいろに教を受けて、涙にむせんだ。世尊、宣うよう。「法を愛ずるものは、臥して居る時でも安らかで喜を得、志も淨い、賢い人は、眞の人の說いた法を行うことを樂しんで、萬ずのものの雨に潤うように、德に歸るものである」。

四。 語り終られた後、弗迦奢が從者を顧みて云うよう。「金色の衣を二領持つて來てくれ、私は世尊に上ろうと思う」。かくてその衣を捧げ、跪いて申すよう。「世尊、どうぞ私を憐んで、之をお受け下さい」。世尊は、弗迦奢に告げたもうよう。「私は今汝のために、其一領だけを受けよう、他の一領は、之を阿難に贈るがよい、阿難は日も夜も、親しく私に侍り、且つ今日は私の看病をしてくれている、病めるものと、それを看病るものに施すことは、大きな施を完うする者と云わねばならぬ」。弗迦奢は喜んで、其一領を世尊の座下にすすめ、一領を阿難に獻げた。阿難は、「弗迦奢よ、美しいことである、汝は善く人の世の師の仰せに隨うた、私も喜んでお受けしよう」といつて、之を受け取つた。

弗迦奢は衣を差上げてから、側らに坐つた、世尊はまた、其ために道を示したもうた。彼は聞き已つてゆう。「世尊、私は今佛と法と僧伽とに歸依し奉ります。願わくはどうぞ、私に正法の信者となる事をお許し下さい、私は今から壽の盡きるまで、殺すこと、盜むこと、婬ること、詐ること、又、酒を飲むことを禁めましよう」。世尊はこれを許し給うた。弗迦奢ゆう。「世尊、私は忙しい身であります、これで、お暇申します、世尊は他日、波波をお通りになりましたならば、どうぞ、私の村に御駕を枉げて、御教化下さい、私は家に持ち合わす食や衣や藥を世尊に差上げたいと念います」。かく禮をなして、歡んで去つた。

五。 弗迦奢の去つた後で、間もなく阿難は、その金色の衣を世尊に奉つた。世尊はその志を愍んでこれをお受けになり、聖體につけたもうた。その時、聖容はひときわ嚴かになつて、威光は焰のように燃えつた。

阿難は奇しき思をなして、「世尊、私が世尊にお侍えしてから二十五年にもなりますが、未だ曾て今のように嚴かな威光を見奉つたことはありません、いかにも奇しきことであります、どうぞその故をお聞かせ下さい」とお尋ね申した。世尊宣うよう。「阿難よ、私の威光が常に異るのは二度である、一度は道を覺つた時で、一度は滅度に入ろうとする時である、汝は今こそ知るがよい、私は今日の夜半に必ず滅度に入るであろう」。

人人はこれを聞いて皆泣いた。世尊は進んで加屈蹉河に到り、水に下つて聖體を洗い、出でて歩を岸の上の樹蔭に移し給うた。御光は黃金のように復、河の兩岸にかがやきわたつた。

その時阿難は、世尊の浴みしたもうた時の御衣を乾かすために、後の方に居つたので、世尊は淳陀に命せになつて、座を敷かせ、その上に息いたもうた。

第四節　三種の治し難き病人

一。 多羅の迦葉は、又お問い申した。「一切の人人に、四つの毒の箭があつて病の因となつて居ります、それは、貪欲と瞋恚と愚癡と憍慢とであります。この因がある爲に、諸の病があります、然るに、世尊には是因がないのに、どうして、今日は、我が脊が痛むと仰せになりますか」。

世尊。「迦葉よ、私には今實に一切の病はない。佛は遠い昔から一切の病を離れて居る。迦葉よ、佛は人の中の師子であるとゆうけれども、佛は實は師子ではない。師子とゆうのは佛の秘密の敎のことである。私が今病であるとゆうのも、是と同じく、

佛の秘密の教に外ならぬのである。

迦葉よ、世に三人の治しがたい病人がある。一つは大乘を謗る者、二つは五つの逆罪のある者、三つは善の根を斷つた者である。この三つは、世間の極めて重い病である。佛をおいて外の者の力では、どうしても治すことの出來ぬものである。

迦葉よ、菩薩は浮世を捨てると、禁戒を受けて威儀を闕かさず、進むにも止まるにも安祥に、小さな罪にも恐を抱き、戒を守る心は金剛のように固くあらねばならぬ。

迦葉よ、ある人が一つの浮囊をもつて大海を渡ろうとしたところ、海の中に鬼がいてその浮囊を與えよと云つた。その人はこれを與えれば自身は溺れねばならぬと思い、「たとえ、私は殺されても、之を與えることは出來ぬ」と答えた。鬼は、「汝が若しその全部を與えることが出來ぬなら、せめてその半分を與えよ」とゆう。しかし、その人はまだ肯わないので、鬼は更にゆう。「汝が若しその半分をめぐむことが出來ないなら、どうかその三分の一を頒けてもらいたい、それもいやなら、せめて掌程でもよい、いや微塵ばかりでもよい」。けれどもその人は、どうしても肯わないで云つた。「汝の今求める處は、誠に僅かである、しかし私は今この海を渡るのに前途が遠いのか近いのかまだ見解もつかない、若し汝に少しでも之を與えるならば、空氣がもれ出ることは知れている、それではこの大海を渡ることは出來ない、恐らく、死ぬより外はないではないか」。迦葉よ、道を求むる人の禁戒を持つのも、この通りでなければならぬ。道を求むる人が禁戒を守る時には、諸の煩惱の鬼が「汝は私を信ずるがよい、私は少しも汝を欺かない、汝は殺生、偷盜、邪淫、妄語の四つの重い禁戒を破つたならば、安らかに涅槃に至ることが出來るであろう」と告げる。道を求むる人はそのとき、應にこのようにいわねばならぬ。「私はたとえ、此禁戒を持つために無間地獄に墮ちるにしても、これを犯して天界に生れたいとは思わぬ」。道を求むる人は、かように堅くこれ等の禁戒を護り、心を金剛のように固め、大きいと小さいとを問わずに重んじて、差別のないようにせねばならぬ。かようにすれば、則ち根本の淨い戒を完うすることが出來るのである。これが聖らかな行といわれるもので、このようにしてこそ、信心と、禁戒と、慚愧と、多く聞くことと、智慧と、煩惱を離れることの七つの聖き財を有つて、聖人となることが出來るのである。

二。又次に迦葉よ、道を求むる人は、まさに四聖諦を知らねばならぬ。その第一は苦諦で、人の世の諸の苦の逼る有樣である。中について生と老と病と死は、何人も免れることは出來ない。迦葉よ、ここに一人の容麗わしい女があつて、着飾つて他の家を訪ねたが、其家の主人は問うた。「汝は誰であるか」。「妾は功德天とゆう幸の神である」。「何をするのか」。「妾は到る處に寶を與えるのである」。これを聞いて、主人は喜び、その女を客間へ導き、香を燒き花を撒いてもてなした。しかるに暫くして、又一人の女が門前に立つた。まことに

陋しい形裝で、膚は破れ衣も亦垢ずいて居る。主人は云う。「汝は誰であるか」。「妾は黑闇天とゆう、禍の神である」。「どうしたものか」。「妾は往つた處の家家で、その寶をなくするものである」。これを聞いて主人は、刀に手をかけ、「出て行け、行かねば殺す」と云つた。然るに女は、「おお、汝は愚かな人である、今汝の家へ入つたのは妾の姉である、妾はいつでも姉と離れずに居るのであるから、妾を追い出せば、一しよに姉をも逐い出すことになるであろう」。主人は家に驅けこみ、このことを功德天に尋ねた。功德天は、「いかにもその通りである、妾を愛しまれるならば妹も愛しんでもらいたい」。かく云われて、主人は遂に二人とも逐い出して了つた。二人の女は次にある貧しい家に行つた。そこでは喜んで、二人を家に招いたとゆうことがある。迦葉よ、生があれば老があり、又病もあれば死ぬこともある。愚かなものは、この二つともに愛着しむが、道を求むる人はその二つを共に愛着しまないのである。

三。迦葉よ、若し金剛の雨が降つたならば、木も草も皆壞れて了おう。けれども、金剛だけは壞れない。死の雨はすべての人人を壞けるけれども、涅槃の境地にある菩薩だけは損うことは出來ぬ。迦葉よ、死んだ者は、恐しい處へ行つて而も食はとられず、道は遠くてその上伴人もない。夜昼常に進み進んで、その行先は際涯もない。ただ幽かに暗うして燈もない。まことに、死は大きな苦といわねばならぬ。

迦葉よ、次は集諦で、それは愛の渴の事である。もと愛には善きものと惡しきものとがあるが、善き愛は菩薩の求めるもので、惡しき愛は凡夫の求めるものである。その凡夫の愛を集と名け、菩薩のそれは、集とは名けない。たとえば、王の外に出る時は、臣達が皆是に從うように、愛の渴のゆくところには、常に諸の煩惱が從うのである。濕地によく芽を吹くように、愛の渴の濕地に煩惱の芽が生える。又、愛の渴は鬼の女のようである。鬼の女は子を產むと皆是を食つて了い、しまいにはその夫さえも食うと聞いておるが、愛の渴は善を生むに從うて食い、さては人人までも食物にする。又、愛の渴は花の莖に隱れている蛇にも似て居る。人が花を愛でて、その莖に毒蛇の居ることも氣附かずに之を摘みはてはその毒を受けて死んでゆく。人人は五つの欲の花を貪つて、遂には愛の渴の毒に螫れて惡道に墮ちるのである。それゆえ菩薩は煩惱の火を消して、寂滅の淸閑に入るのである。煩惱がなくなれば、樂があり、迷の世の惱みを受けることもない。それが第三の滅諦である。最後に道諦とゆうは、八つの正道のことである。迦葉よ、燈があつて初めて物を見ることが出來るように、菩薩は大乘に住み、八つの正道に因つて、すべての法を見ることが出來るのである。

四。迦葉、申しあげるよう。「世尊、或は信心を道とお說きになり、或は放逸ならぬを道とお說きになり、或は精進、禪定、身の不淨を觀めること、萬ずのものに常なきを思うこと、又は戒を持つこと、善き友

に近ずくこと、慈を修めること、智慧の刀で諸の煩悩を斷ち切ること等、それを何れも道諦とせられて居ります。それに今、八つの正道がこれ道諦であると仰せられるのは、上のお言葉の如きを、皆いつわりだとせられるのでありましようか」。

世尊、迦葉を讃めたもうよう。「よくも尋ねたことである。それらのものは皆道諦の中に攝まつている。善男子よ、この道は只一つであるが、佛はいろいろな人の爲にいろいろに說分けて聞かせた迄である。たとえば、一つ火でも木に燃えれば木の火と云い、草に燃えれば草の火と云うように、又一つものでも、眼に見えるところを色と云い、耳に聞えるところを聲と云い、鼻にかげば香、舌で味わえば味と云うように、この佛の道にあつても、一つのものが幾種にも云われるのである。ただ、それは人人を敎化すために、いろいろに分けるだけである。かようにして說き聞かすればこそ、量りない人人も、遂には迷を超え出ることが出來るのである。

五。その時、文殊師利菩薩が世尊に申しあげるよう。「世尊、世尊のお說きになつた世間の俗諦と、佛の證らるる眞諦とのいわれをお聞かせ下さい」。「俗諦はそのまま眞諦である」。「それでは二つの諦はないように思われます」。「人人の常の分別に從うて二つの諦があると說いたのである。文殊よ、名のみあつてその實のないのが俗諦で、名と實と伴うのが眞諦である、心が顚倒にならないで、ありのままに世の法が知られたならば、之を眞諦と名けるのである」。「世尊、それでは實諦とはどうゆうことでありますか」。「文殊よ、實諦とは眞に在るもののことである、若しものが眞でなかつたなら、實諦とは名けない、實諦には倒事はない、實諦には虛がない、これを大乘と名けるのである。これは佛の說くことがらで魔の說けない處である。文殊よ、實諦は一つの道であり、淨らかなものであつて、二つとはないもの、常住と常樂と常世の我と清淨とのの備つたものである」。「しかし外道にもそのことを云いますが、それもやはり、實諦でありましようか」。「諸の外道には移り變るものを常住とゆうのであるが、それは誤りで實は常ないものと云わねばならぬ、すべては因緣があつて出來るので、もの自體ひとりでに在るとゆうことはないからである。ものみなは移り變つて常ないものであるから、それは苦であり、無我即ち自由がなく不淨のものである。この中にあつて、ただ物性だけが生もなく滅もなく、去ることもなく來ることもなく、相あるでもなくないのでもなく、肉身や感覺や感覺に映るもののように、うつり變りのあるものではない。眞に常世に住まるものである、從うて永世の樂であり、我、即ち自在の主であり、又まことの淨いものであるといわねばならぬ。それゆえ諸の外道に云うているとしても、それはこの理を辨えぬものであるから、眞の常住、眞の常樂、眞の自由ある我、眞の清淨とはいえぬので、從うてそれが實諦であるとは猶さら云えぬのである」。

六。その時、諸人の中に無垢藏とゆう信者があつて、座より起ち掌を合せて、世尊に申すよう。「世尊、諸の佛の智慧には限りがありません、けれども、この敎には及びません。とゆうのは、この敎によつてこそ、この上なき正眞の道が得られるからであります」。世尊仰せられるよう。「無垢藏よ、牛から乳を出し、乳から酪が出來、酪から生酥が出來、生酥から熟酥が出來、熟酥から醍醐が出來る、その醍醐は實にこよないもので、すべての藥がこの中に含まれて居る。若し呑むならば、皆すべての病が除かれるであろう、佛も亦此通りである。佛から諸の敎が出で、その中から最後に涅槃が出るのである、それはちようど醍醐のようなものである。醍醐は佛性にたとえるので、その佛性とは實に佛のことである」。

迦葉、申上げるよう。「世尊、誠にこの敎はこの上ないものであります、私は今から能く努めて、身の皮を剝いで紙とし、血を刺して墨にかえ、髓をしぼつて水とし、骨を筆に代えてでも、この敎を寫しましようう、そしてこの敎が永く廣く世間に傳わるよう、その義を說き弘めたいと念います。世尊、若し、貪欲の强いものがあつたならば、私は先ず彼に財を與えて、それから、この敎を勸めましよう。若し身分の貴いものがあつたならば、先ず氣に入りそうな語を用いてその意をむかえ、それからこの敎を勸めましよう。また萬ずの人には威勢を示して皆がこの敎を持つようにし、憍慢のものにはその僕使となつて喜ばせ、それからこれを勸めたいと思います。また若し佛法を謗るものがあるならば、よくこれを說き伏せてこの敎を勸めるでありましよう。そしてこの大乘を喜ぶ者が出來たならば、私はその人の所に往つて、之を敬い、之に供養して讃め歎えるでありましよう」。

世尊は、これを聞しめして歎えたもうよう。「まことに美わしいことである、汝は大乘を愛ずるものである、汝はこの因緣によつて、量りない菩薩に先だつて、道を成し遂げることであろう」。かく宣うて、更に次の物語を語りたもうた。

第五節　半偈の價

一。迦葉よ、遠い古、まだこの世に佛の出でまさぬころ、私は雪山に住んで菩薩の行を修めていた。地には藥草が生え茂り、いろいろの鳥がその間に集い、流は清く、果は甘く、諸の香の高い花が咲きほこつていた。私はその時、廣く大乘の敎を求めていたが、いまだ得ることが出來なかつた。その時、諸の神神が私を異しんで互に語り合うよう。「この者は、欲の躁がしい思を去つて、寂かな心を持つておる離欲の人である、恐らく來世には帝釋の神にでもなろうと思うているのであろう」。一人の神は云う。「世間には大士とゆうものがある、人人をめぐむために種種な修行をするが、自分のためを計つては何事もなさぬ人である。かような人は、迷の上に過咎を見るので、たとえ地に財寶が滿ちて居つても、唾を見るのと等しく、少しも貪着を起さぬ、肉身の妻子や、下僕や舍宅さえも捨て、又

は神の世の榮華をすらも望まない、唯、一時も早くこよなき道を成し遂げて、一切の人人を饒もうとのみ望んで居るとゆうことである。彼は恐らく、こうゆう人ではあるまいか」。すると帝釋天が云つた。「若し汝の言うようなことならば、この人はすべての人人を救いとる筈である。神神よ、世にもし、賴むべき佛の樹影があるならば、人人の惱はすべて解かれることであろう、それゆえ、もし彼が佛となるべき人であるならば、私達は何をおいても彼の護をせねばならない、けれども、それはたやすく信することの出來ないことである。之までも、百千の人達が道に心を立ててそのように願うたけれども、みな僅かな緣にふれても、その志を壞してしまつた。それはちようど、水に宿つた月影が、水面に流るる蓮にすら、搖り動くようなものであつた。それゆえ私は、これから彼のもとに赴いて、その決心がどれほどのものであるかを試そうと思う」。こういって、帝釋天は神の座から消えて雪山に現れ、世にも恐ろしい鬼に姿をかえて、そしていとも朗かに歌つた。

諸行は、常なきならい、生れて死するは世のさだめ。

二。迦葉よ、この半偈を聞いて私は、渴いて水を得、囚われて卒かに赦免を受けた者のように、喜び踊つた。尊い歌である、正しくこの世の眞諦を傳えた歌である、これこそ大乘の法でなくしてどうしよう、私はここに、躍る心をおさえて、座を立つて四方を見まわした。「一たい、誰がこの尊い偈を歌つたのであろう、長い間求めに求めた善き導きの師は、一たいどこに在すのであろう」と。しかし、そこには、何者の姿も見出せなかつた。ただ一つ、私の眼に映つたのは、世にも恐ろしい形狀をした一人の鬼であつた。私は思つた。「いま、半偈を唱えたのはこの鬼であろうか、いやそうではあるまい、あの恐ろしい形貌をした鬼の口から、どうしてかの尊い佛の梵音が漏れ出よう、それはちようど火の中に蓮華が咲き、日の光から水が湧き出るようなものではないか」。「しかし、彼をおいては誰も見えない、もしやかの鬼が、古の佛に會うて、あの偈文を聞き知つているのであるまいか」。こうも思われた。そこで私は、まず鬼に尋ねて見ようと決心した。

三。よつて私は、鬼のところへ往いて、「汝は何處でこの尊い半偈を得られたか」と尋ねた。鬼は、「いや、そのことなら尋ねて呉れるな、私は、この幾日もの間、何にも食べていない、あちこちと食を搜しているが、どうしても得られない、そのために心が亂れて、思わず唱えたのがあの半偈である、ことさら、心あつて唱えた譯ではない」と云う。私は更に、請うた。「そう云わないで、どうか教えて頂きたい、私は必ず生涯あなたの弟子となりましよう。あなたの今の偈文は、まことに尊いものであるが、言葉も半分で、意味も完全になつていない、財の施は盡きることもあるが、法の施には盡きることがないとも云う、どうぞ教えて頂きたい」。「汝はただ自分のことばかり考えていて、この私のことは少しも念つてくれぬでないか、私は今、飢えきつて居る、

どうして說いてなど居られるものでない」。「では、あなたの食は何でありますか」。「問わぬがよい、若し聞いたら、誰でも驚くであろうから」。「ここには誰も居ない、私だけである、何も畏れはしないから、どうぞ汝の食物を云つて下さい」。「それならば云おう、私の食は人間の暖い肉、私の飲物は人間の熱い血、それが、私の食物である」。「それならば、どうぞ、後の半偈を說いて下さい、やがては死ぬるこの肉體のこと故私には少しの用もありません、死んで虎狼や鵄梟に啄べられるよりは、今汝に供養して、尊い御法にかえることが出來れば、まことに私の心からの望であります、私はいま、この朽ちはつる肉體を捨てて、永久にかわらぬ堅い法の身が得たいと願うております」。「いや、さようなことを言つても、誰も信することは出來まい」。「それは愚しい言葉と思います、たとえば、瓦や礫を捨てて七寶の器をとるように、この朽果つる身を捨てて金剛の身を得ようと云うのではありませんか、それでもまだ信することは出來ぬといわれるのならば、私はなべての神神や佛方に誓つて、その證を立てて頂きましよう」。「それほどに云うならば、後の半偈を說くであろう」。迦葉よ、こうして鬼はようように肯うた。私は衣を脫いで、鬼のために法座として敷き、「ではどうぞ、後の半偈を說いて下さい」と恭しく、跪いて言つた。すると鬼は、

生滅に囚わるる、その心を滅ぼせば、
寂靜の樂のあり。

と說いて、「さあ、菩薩よ、私はこれで全部の偈文を說いた、汝の願は滿されたことであろう、若し人人に惠もうとゆうのであるなら、私にその身を施してもらいたい」と云う。

四。迦葉よ、私はその時、深くその偈文の義を味い、それからその偈文を、石や壁や、或は樹や道の所所に書きつけ、さて再び衣を着けて高い樹に上つた。すると樹神が、「何をするのか」と私に尋ねた。「偈を頂いた感謝に、この身體を獻げようとするのである」。「そのような偈に、何の德があるか」。「これぞ實に、三世の御佛達の正しい道である」。私はかように答えて、更に、「どうかすべての慳み强い人達や、また少しの施をして心昂ぶる人達に、今私が、半偈のために尊い身をば、草を捨てるように擲つのを見せてやりたいものである」と言つて、言葉已ると、樹から身を躍らせた。然るにまだ身が地の上に至らぬ前に、かの鬼は神の姿に復つて、私の身を空で受け取り、地の上に靜かに置いた。そして、諸の神神と一しよに私の足もとにひれ伏して讃め歎え、そして、「尊い志である、これこそ眞の菩薩である、能く量りない多くの人人をお惠み下された、どうぞ、私の罪を許して下さい、そして、もしこよない道を成し遂げたもうた曉は、必ずこの私をも、お救い下さい」といつて、私の足に禮をなして立ち去つた。

迦葉よ、私は斯ように半偈のために此身を捨てたが、それから長い長い時を經て、道を成し遂げることが出來たのである。迦葉よ、私のもつている量りない功德は、こ

れ皆佛の正法を供養しまつつた報である。汝も亦、今こよない道に心を立てた。もう恒河の沙ほどに數多い菩薩達よりも、超えすぐれて居る。

第六節　四つの量りない心

一。世尊は更に說き給うよう。「迦葉よ、法を知り、義を知り、時を知り、足ることを知り、自と他と尊さ卑しさとを知り、又、慈、悲、喜、捨の四つの量りない心を修めるがよい。

迦葉よ、私は量りない方便をもつて、狂える人人を調え、人人が若し財寶を貪るならば、その人の爲に身を聖王と化えて、永くその要求に隨うて種種に與え、その後で彼にこの上ない覺の道を敎えて安めてやろう。人人が若し五つの欲に耽るならば、妙じい五つの欲をもつてその願を充たしてやり、その後で彼をこの上ない覺の道に勸め入れて安らかにしてやろう。人人がもし榮えて自ら尊ぶつているならば、その人のために永く僕使となつて趨りつかえ、先ずその心を得て後、彼をこの上ない覺の道に安めてやろう。人人が若しかたくなであつて、自分のことを善いとのみ思いこんでいるならば、永く訓り諭して其心を調え、そうした後に敎えて、これをこの上ない覺の道に安めてやろう。迦葉よ、これ等の方便は、少しも虛妄にはならぬのである。佛は蓮の花に似て居る、たとえ衆の惡の中に居つても汚されることはない。

迦葉よ、慈を修めると、能く貪欲の心を斷ち、悲を修めると、能く瞋恚の心を斷ち、喜を修めると、能く苦を斷ち、捨を修めると、能く貪欲や瞋恚や人人に差別を見る心がなくなる。

二。迦葉よ、菩薩は量りのない多くの人人に對うて、平等な心を持つて少しも差別をせない、即ちこれが、慈の成就である。しかし、大きな慈ではない、大きな慈は實に成し難いからである。たとえば莢豆の乾いた時は、錐を刺すことも出來ないように、煩惱の硬いことはひどいものである。一日一夜心を繫けて亂れないようにし、之を調え伏えることは難しいものである。また瞋恚の去り難いことは、家を守つて居る狗のようであり、慈の失い易いことは、林を走る鹿のようなものである。又、彼は石に畫くようであり、此は水に畫くようなものである。又、彼は火の聚のようであり此は電の光のようである。迦葉よ、もし、菩薩が甚だしい惡人にむこうても差別をせず、過を見ず、又、瞋を起すことがないならば、それが即ち大きな慈といわれるのである。

迦葉よ、諸の人人のために、利樂にならないことをなくして了う、是が大きな慈である。諸の人人のために、量りない利樂を與えるのが大きな悲である。諸の人人に對うて、心に歡喜を生むのが大きな喜である。一切の法を見るにつけて平等で隔てを立てず、己の樂をすてて、これを他人に與えるのが大きな捨である。此四つの量りない心は、諸の善の根本である。

三。迦葉よ、菩薩が施を行うのは、畏怖あつてのためではない。名譽や利益のためではない。他を欺くためではない。それゆえ、このために憍慢を起したり、又、返報を望んだりしてはならぬ。これを行う時には、己を顧みず、又、それを受ける人を擇んではならぬ。諸の人に對うて、慈の心平等に一人子を想う樣にせなくてはならぬ。その苦しむのを見ては、父母が病む兒を見るように惑み、その樂しむのを見ては、父母が病む兒の癒えるのを觀るように歡び、己に施した後は、猶父母が子の長けた後に能く思のままに生活を營むのを見るようにして、意をかけるには及ばぬ。

四。迦葉よ、菩薩が慈を修めれば、能く量りない善を生む。故に慈は眞實であつて虛妄ではない。若し人あつて何が善の本であるかと問うならば、慈であると答えるがよい。迦葉よ、能く善をなすのは、正しい思惟であるから、正しい思惟はそのまま慈である。又迦葉よ、慈は即ち佛であり菩提の道であるから、慈はまことに、すべての人人を育む父母とゆうべく、從つて父母はまた佛なのである。又迦葉よ、慈は人人の佛性である。久しく煩惱に蓋われているので、人これを見ないけれども、人にこれがあつて慈とせられる上は、佛性はそのままに佛である。この故に慈はまた常住、常樂、常我、常淨であり、この性即ち敎法、敎法は僧伽を離れてない、從つて僧伽は敎法、敎法は佛、佛は慈である。迦葉よ、もし慈が常住、常樂、常我、常淨でないならば、その慈は己をだけ利する小さなものである。迦葉よ、かように慈は凡情に議りがたいものであるから、法も佛も佛性も、また皆思い及ばぬものであるが、菩薩は、自他共に樂しむ大乘の涅槃に住んで、この慈を修めるものであるから、眠にあつても眠に墮ちることがなく、眠に墮ちることがないから、また醒めるとゆうこともない。常に精進の一途があるだけである。また善からぬことを行うことがないから、眠にあるときにも、恐しい夢に驚かされるようなことはない。しかも命終つて神の世に生れることはあつても、そのために、神の世の樂に縛られることもない。迦葉よ、慈を修めることには、このように量りない功德が滿されておる。

五。迦葉よ、菩薩が慈と悲と喜とを修めると、一子を極愛する位に住むことが出來る。迦葉よ、何故に極愛と云い、一子とゆうのか。迦葉よ、父母はその子の安らかなのを見れば、大いに喜び、その子の患を見れば、大いに愁うるように、菩薩は是位に入ると、諸の人人を見ること、一子に同じく、その善を修めるのを見ては、大いに喜び、その煩惱の病に纏わられるのを見ては、大いに惱んで身の諸の毛孔から血が流れるからである。また迦葉よ、幼兒が若し、糞、泥又は、瓦片を口に置くならば、父母は怪我をせぬかと心配して、左の手で頭を捉え右の手でそれを摑み出すように、菩薩は、是位に入ると、諸の人人の法身が未だ長らないで、身口意の三つの業に善からぬことを行うのを見て、即ち智慧の手で之を拔き、彼をして迷の世に流轉せしめないようにと希うのである。また迦葉よ、兒

が死ぬと父母はなげいて、一しよに死にたいとまで願うように、菩薩は善根を斷つた人が地獄に落ちるのを見ては、彼が若し、苦を受ける場合に、或は一念でも悔悟の心を起しはすまいか、もし起したならば、其ために法を說いて、一念の善にても起させたいと思い、俱に地獄に生れようと願うのである。又迦葉よ、父母が唯一子であると、其子の寤寐、行くにも住まるにも、常に之を懷い之を患えて、若し罪咎があれば、懇ろに之を誘うて、惡を增すことのないようにとするように、菩薩も又、諸の人人の或は三つの惡道に落ち、或は人間や天界にあるにしても、常に之を心にかけて忘れることがない。縱え諸の惡を行うとしても、終に瞋ってその者に更に、惡を加えさせるようなことはせないのである」。

七。迦葉お尋ね申すよう。「世尊、たとえば、甘露を數次貪れば種種の味を得るように、また眞金を數次鍛えれば更に美しさと柔かさを加えるように、私は、佛からまことに奧深い旨を得ました。世尊、諸の菩薩は、慈と悲と喜とを修めて、一子地を得たならば、次に、捨を修めて何を得られるのでありますか」。

世尊、宣うよう。「虛空のように平等な心地を得るであろう。迦葉よ、菩薩が此位に住むと、父母親族等の殊更に愛するものがなくなり、諸の境にも差別を見ず、心は虛空のように平等になるのである。

迦葉よ、菩薩は一切の法を知つて居る。又その義を知つておるから、敎に樣樣あつても、それは一つに歸するものである事も知つて居る。又一切の言辭を知つているから、諸の人人のために說くことも思のままである。しかし、その德に執われない。若しこれに執われるならば、菩薩とは云わない。それは執えられれば、諸の苦を免れることが出來ないからである。これを四つの無礙とゆう、無礙とは卽ち自在のことである。それには求める所がない。もし求める所があるならば礙えられよう、礙えられれば顚倒の心が起る、しかし菩薩には顚倒の心はない、それゆえ礙えられることもない。菩薩はこのようにあらゆる法に心を住めないから大乘を得るのである。迦葉よ、汝の問うた所にも、求める所がない、私の說くところにも求める所がない。若し求める所があるならば、これ魔の眷屬であつて、私の弟子ではない。

八。迦葉よ、一切の俗諦も、佛にあつては眞諦である。それは、諸の佛は、眞のために俗諦を說き、又是によつて、人人に眞のいわれを得させるからである。若し人人に眞のいわれを得させることが出來なければ、諸の佛はどうして俗諦を宣べよう。迦葉よ、佛が時に俗諦を說けば、人人は佛は眞諦を說いたと思うて居るし、又時に、眞諦を說けば、佛は俗諦を說いたと思うて居る。これは、諸の佛のまことにいわれ深い智慧の境界であつて、外のものの知ることの出來ないところである。

迦葉よ、道の性や相には生もなく滅もない故に捉えられない、又色像もない、故に量ることは出來ない。それでも實際は、用があるのである。ちようど心は見ることが出來ないけれども在ることに相違がないようなものである、故に菩薩は明かに之を見ることが出來るのである。迦葉よ、見ると云うのに二通りある。推測の見と了了の見である。前のは煙を見て火を見るとゆうようなもので、後のは眼に色を見るようなものである。迦葉よ、眼の淸くて完全な人が、自分が掌の中の菴摩羅の果を見るように、菩薩は明かに道を見、菩提と涅槃とを見るのである。それゆえ私は、昔舍利弗に、「舍利弗よ、世の人の知るものは佛之を知つて居り、世の人の知らないものも亦、佛は之を知つて居る、故に佛は、一切を悉く覺つて居るのである」と云つたのである。

第四章　滅度

第一節　波羅蜜

一。この時またこの集會の中に、德王と云うものがあつたが、恭しく、世尊に申上げるよう。「世尊、煩惱を斷つて涅槃を得るといえば、未だ斷たないものは得られぬことになります、さすれば涅槃の性は、先に無かつたものが、今出來て來たと云うことになります、若しそうであるならば、常ないものと思います、どうしてそれが常住のものであるとゆうことが出來ますか」。

世尊、宣うよう。「涅槃の性は、先に無くして今有るものではない。佛があつても無くても、その性と相は常住にある。諸の人人は煩惱に覆われてこれを見ないから、無いとゆうのである。夫故に佛が出でて智慧の燈で、これを見せしめるのである。本無いものが今有るのではない、たとえば盲人が醫師に治してもろうて、日や月を見るようなものである。

德王よ、菩薩が乞う者を見て與えるのは施である。けれども、この上ない施ではない。乞う者がないのに、心を開いて自ら施すならば、之をこの上ない施と名けるのである。又、時時に施すのでは、この上ない施とはいえない、常の施を修めるのが、この上ない施である。また、他に施した後で悔を生むのも、この上ない施では ない。施をして悔いないのが、この上ない施である。王が賊を怖れ、或は水や、火の難を恐れて施すのは、施ではあるが、この上ないものではない。歡んで施すのがこの上ない施である。報を望むのはこの上ない施ではない、報を望まないのが、この上ない施である。若し、名利や家法や憍慢のために施したならば、やはりこの上ない施とはいえぬ。菩薩が施す者と受けるものと施す財物とに心を捉われず、時節を見ず、福田であるとないとに區別をせず、因を見ず、緣を見ず、果報を見ず、多い少いを見ず、淨い穢いを見ず、自他を計らわず、又、自分と受者と財物とを輕しめず、唯、涅槃のために施を修めて一切の人人をめぐむのが、眞の上なき施である。他の五つの上なき道もこれに同じい。

二。德王よ、善根を斷つた人は運命の定つたものではない。若し、定つたものであるならば、遂にこよなき道を得ることは出來まい。定つて居らぬから、能くこれを得ることが出來るのである。五つの逆罪でも

正法を謗ることでも又その通りである。菩薩は一切の法に對して定相を見ない。佛にも又定相がない。佛には色相があるのでないが、色相がないのでもない、中印度に生れて、或は舍衛城にも居り、或は王舍城にも居る、それゆえ常住ではない。けれども佛は茲にあつて彼にないとゆうことは出來ぬ、虛空のない處のないように、一切の處に亙つて遍く佛はいるのである。それゆえ、常住でないのでもない。佛は今は滅度に入ることを示すから、定つた形をして居るのではない。しかし常住、常樂、常我、常淨であるから定つていぬのでもない、されば佛にも定相があるのではない。

徳王よ、佛は常に聖き行を修めているから煩惱の漏れぬものである。菩薩も亦聖い行を修めて、永えに諸の漏を絶ち、常に善く心を攝めて、貪欲、瞋恚、愚癡、憍慢、嫉妬などを怖れるがよい。

徳王よ、一時、或る國に多くの人が群集うて長い道に滿ちて居た。王がある臣下に勅して、一つの油の鉢を持つて其中を回らさせ、若し一滴でもこぼしたならば、汝の命を斷つであろうと命けた。そして一人の男に刀を拔かせて、其後えに隨わさせたが、彼の臣は王の命を畏れて、油を一滴も漏さなかった。菩薩も亦このように、迷の間にあつて智慧をすてず、五つの欲におうて貪を生まなければ、心清らかに戒が具つて、永く諸の漏を斷つであろう。

三。徳王よ、いかにして漏を離るることが出來るか。若し善く斯教を修め、斯義を思うならば、之を離れることが出來よう。此人は眞に私の弟子であり、善く私の教を受けたものであつて、之こそ私の見るところ、私の心をかける所である。彼は諦かに私の滅びないことを知るであろう。彼の住む處はいずこにもあれ、私も亦其中に住つて常に移るまい。若し喜び信ずる人があつて、私を見、私を敬うて、道を修めようと思うならば、この教を持ち、斯義を思う者の處に行つて之を敬い、之に仕えて、乏しいところのないようにせねばならぬ。彼がもし遠くから來るときは、應に十里の道を出むかえるがよい。それはこの教の遇い難いことは、優曇華にもまさるからである。私は遠い古えにこの教のために日毎身を割いて金に代え、佛に獻げて法を聽き、竟は邊りない功德を成しとげるようになつたのである。それゆえ能くこの教を受けるものは、必ず諸の漏を斷つに相違ない。

徳王よ、菩薩はその身を觀ること病の如く、怨の如く、毒箭の如くでなければならぬ。身は苦の聚るところ、諸の惡の本である。けれども菩薩は、猶心をつくして、その身を養わねばならぬ。それは身を貪るためでなく、法のためである、生死のためではなく涅槃のためである。

徳王よ、菩薩は常に善く身を護らねばならぬ。それは身を護らねば命を完うすることが出來ず、命が全うされねばその教を受持つて廣く斯義を傳えることが出來ぬからである。徳王よ、河を渡ろうと思う者は善く筏を護り、路に臨む人は善く馬を護る。菩薩も亦その通りで、是身の淨らかでない

のを見ても、この道を持つためには、善く之を護つて乏しうさせぬが善い。

菩薩は、荒い象を懼れなくとも、惡い友を怖れるがよい。象は唯身を壞るだけであるが、惡い友は心までも壞るであろう。また象は肉の身を壞るに止まるが、惡い友は法の身までも壞り、象に殺されても惡道に落ちないが、惡い友に害われると必ず惡道に到るであろう。

徳王よ、又菩薩は衣服を用いる時にも身のためにせず、ただ法のためにせねばならぬ。憍慢を增さず、心は常に卑下るがよい。虛榮のためにせずに、羞恥をかくすためにし、寒さ暑さ、風雨、毒ある蟲を障えるためにすれば、足りるのである。飲物食物を受けるのでも、心に貪がなく、身のためにせず、常に正法のためにせねばならぬ。肌膚を美しくするためにせず、ただ人人のためにするがよい。憍慢のためにせず、身の力を支えるためにするがよい。また、房舍の施を受ける場合にも、貪と慢のためにせず、心を菩提の家として、煩惱の惡賊や雨風を遮けることをのみ、心がけねばならぬ。また、醫藥を求めるにも心に貪と慢となくして、ただ正法の爲にせねばならぬ。身の命のためにせず、常世の命のためにするがよい。すべて菩薩が、此四種の供養を得ることは、道のためであつて壽命のためではない。そのゆえは、もし之を受けなければ身を支えることが出來ず、身を支えることが出來なければ苦を忍ぶことが出來ず、忍ぶことが出來なければ善根を修めることが出來ぬからである。

四。徳王よ、たとえば王があつて、一つの箱に四匹の毒蛇を盛り、一人の人にこれを養わせ、若し一匹でも怒らせたならば、其人を戮殺にしようといつた。其人は恐れて箱をすてて逃げたので、王は五人の奴隷にその後を追わしめた。五人は密かに相談つて、一人のものに彼を詐り親しませて連れ歸ろうとしたが、彼は信せないで、とある村に入つて隱れ家を探した。その時空から、この村は人の住まぬ村である。今宵、六人の賊が來るであろう、汝もしこれに遇うなら、きつと命はないであろうとゆう聲がした。よつてまたもそこを逃出したが、行手に大きな河にぶつかつた。此河は流がきつく、それを渡ろうとしても船がない。そこで種種の草木を集めて筏を作り、さて自ら思うよう。「私が若し、ここに住まつていたなら、毒蛇と奴隷と彼の詐り親しむ者と、六人の賊とのためにきつと殺されるであろう、若し進んで河を渡れば水に沈んで了うであろう、しかし縱え沈むにしても、彼の蛇や賊等のために害われたくはない」。こう考えて、筏を水の上に置き、流をきつて遂に彼の岸に着いたので、漸く平安を得ることが出來たとゆう。徳王よ、身はこの箱に似、四大は毒蛇のようである。菩薩はこれを恐れて、聖の道に走るのであるが、しかし猶、五陰の奴隷は、諸の煩惱に己を裝おうて來り害おうとする。けれども菩薩の身は金剛のように堅く、心は虛空のように廣いから、そのために壞られることはない。一つの貪愛が詐つて親しみ寄ろうとするけれども、これにも欺かれない。六人の

聚落の實に善からぬ住處であることを見ては、六塵の賊にも劫かされない。かくて、道を修めてまつしぐらに進んで回らない。更に、路に煩惱の暴河に遇い、その深さは測ることも出來ず、その邊は見渡すことは出來ぬ。種種の恐しい魚がこの中に潜んでいて、人人を害うのであるが、菩薩はここでも諸の道品の筏を作つて、ついに、常樂の彼岸に到るのである。

菩薩が涅槃の道を修める時には、身と心とに苦がある。けれども、若し自分が之を忍ばなければ、人人をして煩惱の河を度らしめることが出來ないと思い、彼は默つて一切の苦を忍ぶのである。忍ぶ故に漏を生まない。菩薩すら漏がないのであるから、佛がどうして有漏であろうか」。

第二節　大涅槃

一。德王。「どうゆうのが大いなる涅槃でありましようか」。

世尊。「大慈悲を以て一切を愍み、諸の人人に對うて猶父母のようにして、能く人人に生死の河を度らせ、普く一實の道を示してやる、それが卽ち大涅槃である。又、大我があるので大涅槃と名ける。大我とゆうのは涅槃は我のないもの、自在なるもので、求めるものがないから一切の法を得ることが出來、虛空のように一切の處に滿ちているから實には見ることは出來ぬが、而も一切の人に思のままに見せることが出來るからである。又、大樂であるから大涅槃と名ける。大樂とゆうは、苦もなく樂もなく、遠く一切の潰鬧を離れて智慧は圓かに、身は常に存えて寂靜であるからである。又、純淨であるから大涅槃と名ける。純淨とゆうのは、能くあらゆる迷の世の不淨を斷つて業も身も心も淨いからである。

德王よ、菩薩は諸の人人に皆佛性のあることを知つて居る。佛性があるから、善の芽を斷ち枯した人人でも、猶その心を捨てれば、必ず皆、上なき覺の道を得ることが出來るのである。これ實に佛ならでは知りがたいことである。

二。德王よ、大涅槃に近ずく原因に四つある。一つには善き友に近ずき、二つには心を專らにして法を聽き、三つには念を繫けて法を念い、四つには法の如くに修めることである。德王よ、人が病において、善く醫師の教をうけ、教の通りにその藥を服めば、病が癒えて身が安らかになるであろう。善き友は卽ち良き醫師である。菩薩が善くその教に隨うならば、煩惱の病を除いて涅槃の平安を得るであろう。

三、德王よ、煩惱の起らぬのを涅槃とゆう。あらゆる智慧が、いかなるものに對うても礙にならぬのが佛である。佛は凡夫ではない。其身と心と智慧とは、普く邊ない國國に滿ち充ちて居て、障えられることがなく、又常住であつて、遷り變ることがない。

德王よ、菩薩は一つの事を護り、一つの實に順う。一つの事とゆうのは菩提の心である。菩薩の之を護ることは、ちようど世の人の一子を護るようであり、瞎者の一目を守るようである。これによつて道を得て大涅槃に至るのである。どうして一つの實

に順うか、菩薩は一切の人人は皆一つの道に歸るとゆうことを知つて居る。一つの道とゆうは大乘である。

德王よ、菩薩はこの教を修めて、信心と直心とを得、人人の過惡を見ても之を云わない、それは煩惱を生んで惡趣に墜ちはせぬかと氣遣うからである。また若し人人に少しでも善事を見れば之を稱える、善事は佛性であり、佛性を稱えるから、人人をしてこよなき覺の道に心を發さしめるのである。

德王よ、世に稀なこと優曇華のような人が二人ある、一人は惡を行わぬ人で、一人は罪があれば善く悔ゆる人である。又二人がある、一人は恩をなす人で、一人は恩を念う人である。又二人がある、新しきに法を受けるものと、故きに教を溫ねて忘れない者とである。又二人がある、法を聞くことを樂しむものと、法を說くことを樂しむ者とである。又二人がある、善く問う者と善く答える者である。善く問う者は汝で、善く答える者は私である。私は善き問によつて、こよない法輪を轉ばすことが出來るのである。

四。德王よ、善根を斷つた輩は諸の佛に遇うても遇わなくても、善根を斷つ心を離れることが出來ない。けれども、若し能く菩提の心を發すならば、又、こよない覺の道を得るであろう。德王よ、王があつて箜篌の音を聞き、その淸く妙じい感えを忘れることが出來ないために、異しんで侍臣に尋ねた。「斯る音は何處から出るか」。侍臣。「箜篌から出ます」。すると王は、「ではその音を持つて來い」とゆう。侍臣は、箜篌を持ち來つて王に、「王よ、これであります」と云つた。王は箜篌に向うて、「聲を出せよ」と云う、けれども聲は出ない、そこで弦を斷つたが、猶出ない。はては、それを裂いて聲を求めたけれども、得られないので王は怒つて、侍臣に「汝、何故に私を欺いたか」と云つた。侍臣は王に、「王よ、音を得るには、この方法によつては出來ません、まさに衆の緣の方便によらねばなりません」と、云つたとゆう。德王よ、人人の佛性も亦、この通りである、それは、住處がなくして、唯衆の緣によつて見ることが出來るからである。善根を斷つた輩は佛性を見ない、どうして惡道の罪を遮ることが出來よう。若し、彼等がこの佛性のあることを信じたならば、惡道には行くまい。再び善根を斷つた人とは云えぬのである。菩薩は常に人の善をほめて、彼の缺點を訟えない。また、自ら直しくして惡を犯さない。若し、誤があれば、直ちに悔改めて師と同學の前にかくさず申開き、自ら責めて再び作さない。輕い罪でも極めて重い想をして、人が詰つて問えば實に犯したと答え、この罪は誰が作したのか、他がしたのではないかと問われれば、他ではない、私の仕業であると答え、心を直しくして佛性のあることを信ずるのである。故に彼は善根を斷つた人ではない、佛の弟子である。

五。菩薩は大涅槃のために、この諸の事を具えて、作し難いことを能く作し、忍び難いことを能く忍び、施し難いものを能く

施すのである。若し、常に一粒の麻の實を食べるならば道を得られるとゆうものがあれば、菩薩は永えに一粒の麻の實を食い、若し、火に入るならば道を得られるとゆう者があれば、菩薩は永えに獄火の中にあるであろう。若しまた、頭や目を施したならば道を得るであろうと云う者があれば、菩薩は皆これを施すであろう。そして父母が好い衣は其子に與え、子が慢り罵つても愛のゆえに瞋らず恨まず、又、自分がこの子にこの衣を與えたとゆう念ずら起さぬように、菩薩も亦、これは自分のしたことである、私は施し難いものを、よく施したなどと念わぬ。その人を見ることは、ちようど一子に對うようである。若し子が病にかかれば父母も亦病むように、菩薩も亦人人の煩惱の病をあわれんで、法を說いてその惱を斷つてやる。しかし終に、私が人人のためにその煩惱を斷つてやつたとは念わぬのである。若しこの念を起すならば、道を得ることが出來ぬのである。

徳王よ、私は一切の人人の善友である。若し重い煩惱に結ぼれたものでも、私に遇うことが出來れば、私は力をもつて其者のためにこれを斷つてやるであろう。

第三節　世尊の病

一。其時、淳陀は側らに侍つていたが、世尊が自分の差上げた食物を受けられたために病みたもうたことと思うて、自が心を咎めていた。その中、阿難が來たので、お側から退いた。

世尊は、淳陀が心配している事を知ろしめして、阿難を顧みて問い給うよう。「淳陀に何か悔があるのではないか」。阿難。「世尊、淳陀は食物を奉つたことを、悔んでいるのでありましようか」。

世尊。「阿難よ、汝等がさように云うてはならぬ、私が昔覺を開いた時に、**スジャーター**とゆう女があつて供養した、今滅度に臨んでは淳陀がいて、同じく私に供養してくれた、この功德は正に等しいもので、而も大きい、汝は往いて淳陀に、心を勞めることはない、汝の行うた德は大きい、長えに福を得るであろう、世尊はこのように仰せになつたと告げるがよい」。阿難は、仰せの通り、淳陀に傳えた。

淳陀は喜に堪えないで、前み出でて、世尊に申上げるよう。「世尊、私はそれほどの福を積んだのかと思うと有難くてなりません」。その時、世尊は頌を說かれた。

「與えるものに德あり、慈しむ者は、
罪の怨を防ぎ、德に滿され、貪と怒
と愚とを斷ち、はては、涅槃に入る
ならん。

淳陀よ、汝は必ずこれを說き弘めて、聞くものに長夜の平安を得させるがよい」。

二。かくて世尊は、阿難に告げたもうよう。「阿難よ、私は復、脊に烈しい痛を覺える、私はいま臥そうと思う、座をしいてもらいたい」。阿難は即ち仰せのままに隨うた。世尊は臥して靜かに思惟に入り給い、少時あつて阿難を呼び、「阿難よ、私に七覺分を說いてくれ」と仰せになつた。阿難は仰せのままに之を說いた。世尊。「精進を說いたか」。阿難。「說きました」。世尊。「阿難よ、ただ精進して疾く道を得るがよい」。かく語り終られて、また思惟に入りたもうた。一人の弟子がひどく心を動かされて云つた。「世尊は正法の王でありながら、猶病を忍んで道を聞きたもうのである、まして餘のものにあつては、猶更心を專らにして敎を聞かねばならぬ」。

三。時に劫賓那が、阿難の所に來てゆうよう。「私は少しばかり、世尊にお伺い申したいことがある」。阿難。「世尊の聖體が安らかであらせられないから、お心をさわがせ申すことも如何かと思う」。

之を聞き付けられた世尊は、「阿難よ、劫賓那を呼ぶがよい、話そうと思うことがある」と命せられた。許されて劫賓那は、入つて世尊を拜んだ。世尊。「問いたいことがあるならば、何なりとも問うがよい」。劫賓那。「世尊、佛は天上天下の至尊でおわします、なにゆえ、神神に藥を持つて來させて、病をお癒しになりませぬか」。世尊。「劫賓那よ、宅も建つてから久しくなれば、皆壞れるものである、けれども大地はいつでも安らかである。私の身は舊い宅のようなもの、心は大地のようなものである、身は病の爲に危いけれども、心は常に安らかである」。劫賓那。「燕の子は父母に養われ又存らえます、今若し世尊がお逝れになつたならば、私達は誰に依つてよいでありましよう」。「私は生れて死なぬ者はないと ゆうことを、常常說いて置いた。劫賓那よ、必ず佛を念い、又、戒を重んずるがよい」。これを承つて劫賓那は禮をなし退いた。

世尊はかつて、此邊で拘尸那羅の年少い人人が、道路の修繕をしているのに遇われて、その人人の力では移すことの出來ぬ大きな石を移されたことがあつた。そして人人は、深く世尊の威神に心からうたれたのであつた。

四。その時、世尊は、阿難を呼び、「阿難よ、私は今から、拘尸那羅の城外の熙連河の邊にある娑羅雙樹の間に往こうと思う」と仰せになり、かくて世尊の聖顏は、雪山のように靜かに、迦屈蹉の河の畔りを去られて熙連河を渡り、娑羅の林にと到りたもうた。

時に、淳陀が前み出でて、申上ぐるよう。「世尊、私は滅度しようと欲います、愛もなく憎もない處、彼の量りない功德の海に到るでありましよう」。世尊宣うよう。「時もよい、汝のなすべき事は、既になしおわつた」。そこで淳陀は世尊の御前で、燈の消えるように命を終つた。

時に一人の娑羅門があつて、拘尸那羅から波波に往こうとて、この道を過ぎた。偶ま世尊を見て、渴仰の思に堪えず、前み出でて申上げた。「私の村はここからあまり遠くはありません、願わくは來つて宿らせられ、明旦食を終つてから拘尸那羅にお出で下さい」。世尊。「已めよ、娑羅門、汝は今私に供養をしたと同じである」。娑羅門は、三たび請うたけれども、世尊は同じく許し給わなかつた。そして、「阿難が後に居るから、彼處へ往つて、其志を語るがよい」と仰せになつた。娑羅門は阿難に其志を訴えた。しかし阿難はいつた。「止めよ、娑羅門、汝は今已に、世尊を供養し奉つたで

はないか、時は暑く、村は遙かである、世尊は、又勞れていらせられる、煩わし奉ることは出來ない」。

五。娑羅の林は、拘尸那羅の城の外、熙連河の岸の角にあつて、水がその三方を廻つて居る。世尊は之を眺めて阿難を顧みて宣うよう。「阿難よ、汝は、彼の林の端に、雙樹の並んでいるのを見るであろう、彼處に往つて座を敷き、私を北に枕をさせて臥させてもらいたい、私はいたく勞れた、今日の夜半に、彼處にあつて當に滅度に入るであろう」。諸の弟子は之を聞いて、復悲しんだ。波波とこの林とは相距ること唯數里に過ぎぬけれども、世尊は此間に二十五度も憩わせられて、漸うに今この林に入りたもうたのである。

阿難は涙を揮い、樹の下に到り、淸らかに掃うて水を灑ぎ、法の如くに座を設け、還つて世尊に申し上げた。「世尊、仰せの通りに準備をいたしました」。世尊は、弟子等と一しよにその林に入り、その座に到り給うた。頭を北にして西に向い、右脇を牀につけて、足を重ねて靜かに臥したもうた。時に神神の樂が響き、また歌が湧き起つた。娑羅の樹は又時ならぬに華を開いて、其色は白い鶴にも似、花片は雨のように世尊の上に注いだ。

世尊、阿難に問い給うよう。「汝は、神神が私を供養するのを見るか」。阿難。「いかにも見ます」。世尊。「しかし、此ようにするのは眞に私を敬い、私に報ゆる道ではない」。阿難。「世尊、どのようにするのが眞に佛を敬い、佛に報ゆる道でありますか」。世尊。「私の諸の弟子、それは男でも、女でも、法に住み、法を歩み、何事となく法によつて行うことこそ、眞に私に奉え私を敬うものである。それゆえ阿難よ、私に順い私に報いようと思う者は、必ずしも香や華や伎樂を以てしなくてもよい、よくこの一ことを心にかけて勤めるがよい、是が卽ちこよなき供養である」。

第四節　寶山の喩

一。その時、世尊は大衆に告げたもうよう。「汝等に若し疑があるならば、心のままに問うがよい、私はよくその疑を解くであろう」。

會の中に、師子吼とゆう一人の菩薩があつた。座を起つて世尊を禮拜み、申し上げるよう。「世尊、佛性に就て今少しくお說き下さい」。世尊。「師子吼よ、一切の人人は末の世に定めてこよなき覺を得るであろう。師子吼よ、譬えば家に乳酪があつて、人が、酥であるかと問うならば、そうであると答えるようなもので、乳酪は、酥ではないけれども、必ず、酥を得ることが出來るからである。人人も亦その通りで、悉く皆心が有り、凡て心あるものは必ずこよなき覺を成しとげることが出來る。故に私は一切の人人に、悉く佛性があると常に云うのである。是れ實に、人人の得る所の一乘で、諸の佛の母である。譬えば、新月は見ることが出來ないけれども無いとはいえないように、一切の凡夫は佛性を見ることが出來なくても無いとはいえない。譬えば雪山に忍辱とゆう草があつて、牛が之を

食えば醍醐を出すけれども、他の草を食えば醍醐を出さない。その時、たとえ醍醐がないからと云つて雪山に忍辱の草がないとは云えないように、今までの教になかつたからと云つて佛性がないとは云えないのである。又譬えば、黑鐵も火に入れれば赤くなり、出せば冷えてまた黑くなるように一切の人人は煩惱の火が消えれば、則ち、佛性を見ることが出來るのである。

二。師子吼よ、涅槃とゆうは卽ち煩惱の火の消えたことである。また涅槃は室であつて能く煩惱の雨風を遮ぎる。涅槃は歸處であつて、能く一切の怖畏のたより場となる。又、洲渚と名ける。欲、有、見、及び無明の暴流も漂わすことが出來ないからである。又、畢竟の依と名ける、能く一切の畢竟の樂を得しめるからである。

師子吼よ、智慧の眼をもつて見るから明かでない、佛の眼をもつて見れば明かになる。そして見ると云うに二つある、眼見と聞見とである。諸の佛は眼を以て佛性を見ることは、掌中の菴摩羅の果を見るようである。人人は聞見するだけであるから、明かでない。若し心に信心を起したならば、もうただの聞見ではない。その信心には二つの因がある、聞法と思惟とである。信心は聞法により、聞法は信心に因るのである。

師子吼よ、一切の法は因緣によつて出來因緣によつて滅びる。けれども人人の佛性は破れもせず壞れもせず、寂かれもせず繫がれもせず、宛も虛空のようである。一切の人人には皆、この虛空がある。けれども、已に虛空のようであるから、凡夫には見えない、ただ菩薩が少しばかりこれを見るだけである。師子吼よ、これは諸の佛にだけ知られるところであつて、人人は之を見ないから煩惱に繫がれて生死の世に苦しむのである。若し佛性を見れば、生死を超えて涅槃が得られるであろう」。

三。師子吼。「世尊、若し人人に佛性があるならば、何故に心の退轉があるのでありましょう」。

世尊。「師子吼よ、實は心の退轉とゆうことはない。心に若し退くことがあるならば終に道を得ることは出來ぬであろう。ただ遲く得るので之を退くとゆうだけである。それは、諸の因緣が和合をせないからである。故に私は正しき因と緣りの因との二つの因を說く。正しき因とは佛性であり、緣りの因とは菩提の心を發すことである。この二つによつて、ちようど石から金を出すように、こよなき覺を得るのである。

又次に師子吼よ、心の退轉があるからと云つて、諸の人人に佛性がないと云つてはならぬ。譬えば二人のものがあつて、他方に七寶の山があり、山に泉があつて、淸く且つ甘い、能く茲にさえゆけば貧しさもなくなり、その泉を服めば壽が延びる、唯、道が遠く險しいので行けないとゆうことを聞いた。二人は一しよに行こうと欲つて一人は旅裝を整え、一人は何も持たないで、ともに出掛けたところ、路に多くの寶を持つた人に出遇うた。二人は問う。「君よ、彼處にまことの七寶の山があるか」。その人ゆう。「私は已にその寶をとり、又、

その泉も飲んで來たのである、しかし路は險しく盜人も多く、往くものは千萬人あつても、着いたものは甚だ少ない」。之を聞いて一人は後悔して云う。「私は、どうして彼處に行くことが出來よう、私には、財產も少しはある、もし途中に殺されてしまえば、長壽どころの話ではない」。然るに、他の一人は、「已に、行って來た人があれば、私も亦行けぬことはあるまい、若し往けるとすれば、願のままに財と泉とが得られるのである、若し往けなければ、ただ死ぬだけのことである、前んで彼處に到って其願を果し、還って來れば父母にも仕えることが出來、宗親をも賑わす事が出來る」と云って出掛けて行ったと云う。師子吼よ、七寶の山とゆうは大涅槃のことである。甘い泉とゆうは佛性のことである、直ちに往ったものは退ろがぬ菩薩、遷ったものは退ろいだ菩薩である。師子吼よ、人人の佛性は彼道のように常住に變らない。悔いて還ったものがあるからとて、それを常住でないとは云えぬ。師子吼よ、菩提の道には決して退くものがないのである。それゆえ一切の人人は必ず道を得ることが出來るのである。故に一切の人人には、たとえ五つの逆罪をなすとか、四つの重い禁戒を犯すとかいった善根を斷つた人人にても、悉く佛性があると說くのである。

師子吼よ、譬えば、燈がつくと闇がなくなり、燈が消えると闇が出來るように、また、蠟の印を泥に印すと、印がなくなってその跡に文が出來るように、人人の業の果もその通りである。この心と身がなくなって別の身と心が續いて出來る、とは云うものの一切の人人は、同じく皆佛性を有って居るのである。譬えば毒を乳の中に入れると、乳が醍醐になっても皆毒がある。そして、乳をば酪とは云えず、酪をば乳とは云えず、醍醐に至るまで、皆この通りに名は各變るけれども、毒の性は失せないで、悉く五つの味の中に加わって居るのである。實は毒を醍醐の中に入れたのではないけれども、若しこの醍醐を飲むならば、その人は死ぬるであろう。佛性もその通り、五つの道に住んで異った身を受けては居るが、佛性は常に一つであって變ることはない。

四。 師子吼よ、涅槃には相がない。相とゆうは色聲香味觸の相、生滅の相、男、女の相である。涅槃には、是等の相がないのである。師子吼よ、それ相に執着をするものは愚癡を生む、愚癡があれば愛の渴があり、愛の渴があれば繫縛があり、縛られるから生をうけ、生を受けるから死なねばならぬ。若し弟子達が禪定と智慧と捨心とを修めるならば、能くこれらの相を斷つであろう。木を拔くには先ず振り動かして拔けば易く拔けるように、また衣を洗うには先ず灰汁で洗い、後に清水にすすげば潔くなるように、また壯士がまず鎧で自らを裝おうてその後に能く敵を破るように、菩薩はまずこの三つを修めるのである。師子吼よ、或は樂を受けたことで、或は法を說いたことで、或は布施を受けたことで憍慢の起った時には、宜しく禪定を修めるがよい、智慧を修めてはならぬ。

努力を盡しても覺が得られないと悔い、氣力が鈍くて己を思うように調えることが出來ぬとか、煩惱が盛んなために自ずと戒を損うとゆうような心配のある時には、宜しく智慧を修めるがよい、禪定を修めてはならぬ。若しこの二法に平均がとれて居たら捨心を修めるがよい。若し禪定と智慧を修めて煩惱が起るならば、此時には捨心を修めてはならぬ、宜しく經を讀み、又佛を念うがよい。

五。 師子吼よ、佛の法の身には住處がない、佛性も亦都て住處がない。一切の人人は是に對うて退墮することがなく必ず得られ、又、必ず見ることが出來るのであるから、一切の人人に悉く佛性があると云うのである。譬えば王があって、大臣に一つの象を來かせて盲者に示させたところ、衆盲は各自手で之に觸れた。王は彼等を呼んで問うよう。「汝等象を何に似ていると思うか」。するとその牙に觸れたものは、象は大根の根のようであったと云い、耳に觸れたものは箕のようであったと云い、顏に觸れた者は石のようと云い、鼻に觸れたものは杵のよう、脚に觸れたものは木臼のよう、腹に觸れたものは牀のよう、尾に觸れたものは繩のようであったと答えたと云う。師子吼よ、彼の衆盲の象の說明は完全でない、併し全く說かないのではなかった。そのように人人は或は身と心を佛性だと云い、或は身と心を離れてある我が佛性だと云って居る。けれども佛性はこれらのものでない。しかしこれらを離れてもないのである。師子吼よ、佛は常住におる、其法の身は邊なく礙り無く、生れもせず滅びもしない、是を我と云うのである。人人には眞實にこのような我はない、しかし必ず之を得られるに相違ないから、佛性があると名けるのである。

六。 師子吼よ、大慈大悲を名けて佛性とする。それは、大慈、大悲が常に菩薩につき隨うて居ることは、影の形に隨うようであるから、諸の人人は必ず、之を得られるゆえ、一切の人人は悉く佛性があると云うのである。大慈、大悲は佛性であり、佛性は卽ち佛である。又大喜大捨を名けて佛性とする。それは菩薩が諸の迷の世を捨てなければ、こよなき覺を得ることが出來ぬからである。諸の人人は、必ず之を得られるに相違ないから、一切の人人に悉く佛性があると云うのである。大喜大捨は佛性である、佛性は卽ち、佛である。又、佛性を大信心と名ける、それは信心によって能く菩薩の道を完うするからである。諸の人人は必ず之を得るに相違ないから、一切の人人は悉く佛性があると說くのである。大信心は佛性である、佛性は卽ち、佛である。又佛性を一子地と名ける。それは一子地によって、菩薩が一切の人人に對うて平等の心を保てるからである。そして、諸の人人は必ず之を得られるに相違ないから、一切の人人は悉く佛性があると說くのである。一子地は佛性である、佛性は卽ち、佛である。

七。 師子吼よ、この敎は海の如くであつ

て、その底を窮めようとしても窮められない。而も一味であつて變がない。一切の人人は同じく佛性を持つて居るので、解脫に赴く教の乘物も皆同一であり、その解脫も同一であり、因も一つ、果も一つ、その境界の功德も亦同一である。すべては必ず常住、妙樂、自在、清淨となることが出來る。又、この教を持つ者は、潮が滿ちても一定の限度を超さないように、たとえ身を失うても禁戒を犯さない。また、是には量りない寶があり、量りない佛の德があるから、逆惡の死屍も是には宿らない。一切の人人は平等であり、同一の法性であるから、この經には常に增すことも減ることもないのである」。

八。この時、優波摩那とゆう御弟子があつて、かつて阿難が世尊の侍者でなかつたころに、常に世尊に侍つて御用を足して居たものであるが、今世尊の茲に臥したもうことを聞いて深く憂え、世尊のお側近くに行つてその前に立つた。すると世尊が優波摩那に、「汝今、私の前に立つてはならぬ」と仰せになつたので、彼は側らへ退いた。

阿難は奇しく思うて、お問い申すよう。「世尊、私は久しく佛の左右にお仕え申して居りますけれども、今迄この樣なお言葉を承つた事がありません。それに今滅度にお入りになろうとするのに、どうして優波摩那を御前からお避けになるのでありますか」。世尊。「阿難よ、私は彼を忌うのではない、神神が今私を見ようとて、競うて來て居るが、優波摩那が私の前に居るので彼等はその威德に遮られて、私に近ずくことが出來ないからである」。

阿難。「世尊、優波摩那はどうゆう因を修めて、今のような威德を得ましたか」。世尊はこれに就て、古え、毘婆尸佛が此世に在ました時に、彼は喜んで、手に草の炬火を持ち、佛のみもとを照したことがある、是に因つて、今その威光が神神にも及んで、神神の光すら及ぶことが出來ないことを仰せになつた。

第五節　四つの處を念え

一。阿難は又、お問い申した。「世尊が世においでになりますれば、この世の德の淸い人や、行篤い人達が來て、世尊を拜むでありましよう、そして、私はそのために法を聞き、福を得るのでありますが、今、世尊がお逝れになりますれば、その人達の來ることもありません、そのとき私達は、如何ようにすれば宜しいでありましよう」。

世尊は答えたもうた。「阿難よ、心配するに及ばぬ。私の生れた迦維羅城の藍毗尼の園を念うがよい。又、私が道を成した尼連禪河の畔りの菩提樹の下を念うがよい。又私が始めて法輪を轉ばした波羅奈の鹿野苑を念うがよい。更に私が滅度に入るこの拘尸那羅の城外の娑羅樹の園を念うがよい。さすれば、汝等は皆福を得るであろう。

阿難よ、若し信心があつて佛の功德を念い、一莖の花でも供養することがあるならば、それでも能く涅槃に到ることが出來よう。阿難よ、若しただ心だけでも佛を念い、ただの一度でも敬の心を起したならば、亦必ず涅槃が得られるであろう。

阿難よ、又、若し佛の御名を聞くものは涅槃に入るであろう。阿難よ、佛は諸の福田の中の第一である。私は凡ての歸趣なき者のために歸趣となり、すべての舍なき者のために舍となり、暗の中にある者のために燈火となり、盲いた者のために眼となるのである」。

二。阿難は又、お問い申すよう。「闡那とゆう御弟子がありますが、天性躁しくて罵ることを好み、屢ば多くの弟子達と爭います。世尊のお逝れになつた後は、之をいかがして宜いでありましよう」。世尊。「汝等は彼と語らわぬようにするがよい、彼はきつと自ら愧じて改めるであろう」。

阿難。「若し澤山の女達が來て弟子達に會おうと欲う時には、私達はこの後どうして宜いでありましよう」。世尊。「會うてはならぬ」。阿難。「若しどうしても會わねばならぬ時には、如何致しましよう」。世尊。「語らぬようにするがよい」。阿難。「若し道を聞きたいと請いますならば、如何致しましよう」。世尊。「もとよりその爲に法を說くがよい、ただ老いた者は母と思い、年上の者は姉と思い、そして、年少い者は妹だと想うて、善く汝の身と語と意とに氣をつけるがよい」。

阿難。「御在世の時と御滅の後とで、世尊を供養し奉るのに、その功德に異いがあるでありましようか」。世尊。「異ることはない、それは佛の法の身は永えに存在をするからである。阿難よ、佛を見るのは、即ち聖法を見るのである、聖法を見るのは、即ち僧伽を見るのである、僧伽を見るのは、即ち涅槃を見るのである。それ故三寶は、常住にあつて變ることがなく、能く人人の歸處となるものであることを、知らねばならぬ」。

三。阿難。「世尊が滅度にお入りになつた後は、どのように葬儀を行うて宜いでありましようか」。世尊。「汝は此事の爲に、心を遣う事はいらぬ、唯道を護るがよい、己のために勤め、汝の善根のために汝の全身をささげるが善い、又、私に聞いたところを樂しんで人のために說くがよい、私の身は必ず諸の人達が來て、葬つてくれるであろう」。阿難。「彼等はどうゆう法を以て葬り奉りますか」。世尊。「諸王の中の王を葬る法式で、私を葬るであろう」。阿難。「その法はどのようでありますか」。世尊。「湯で洗い綿で被うて、之を金棺に入れて香油を灌ぎ、善い香で包み、そして之を燒いて舍利を收めて塔を建てるのである。道行く人は之を禮み、花をささげ、香を供えて德に進むであろう、これが諸王の中の王を葬る法である」。

これを聞いた阿難は惱みにたえず、竊かに後の室へ隱れ、戶に倚れて獨り歎いた。「私はまだ學地にあつて、未だ深く道を得ていない、然るに佛は今私をすてて、滅度に入らせられる、私は何時になつたならば解脫の道を踐み得ることであろう。此後私は誰のために、朝に水を齋し、夕に褥を整え、又、その御顏を洗い、御足をすすぎ申そうか」。かく思うて、手を擧げて樹枝にすがり、胸をうつて泣いて居た。

四。諸の弟子達は世尊の側らに侍つて

居たが、世尊問いたもうよう。「阿難は何處に居るか」。「彼方の樹の下に泣いて居ります」。「阿難を呼んでくるがよい」。使をうけて阿難は歸り來り、世尊を禮んで側らに立つた。世尊はこれを見て、宣うよう。「阿難よ、私は先に已に、汝のために語つたではないか。一切の諸行は、みな悉く常ない、會うたものは必ず離れねばならぬ。汝は今何を悲しんで居るのか。阿難よ、汝は以前から私に侍えて私のために何事もしてくれた、又、汝の身も口も意も皆常に清らかで、瑕も穢もなかつた。勉めるがよい、汝の得られる福は量りないであろう。

諸の弟子等よ、阿難にそのように悲しんではならないと云うのは、彼は間もなく解脫を得るからである。弟子等よ、古えの諸の佛には、皆阿難のような侍者があつた。また、後の諸の佛にもあるであろう。弟子等よ、阿難は信心固く、心は眞直で、身に病がなく、常に勤めて惓らない。その智慧は深くして妙に、私の說いた法を殘らず憶えて忘れない。又弟子等よ、阿難は、善く時節を知つている。若し人が來て私に會おうと欲う時には、阿難は先ず私の爲にその時が好いかどうかを考えてかかる。私が何時弟子達に會うか、或は、何時在家の信者に會うか、また外道の人達に會うかとゆうことを考えて居るのである。それ故に彼等が來て私に逢い、又、私から法を聽いて、皆多くの功德を得たのである。これ皆阿難が時の宜しきをはかろうて、私に彼等を導いたからである。弟子等よ、聖王を見るものは、誰しも皆その語るのを聞き、或は默るのを見て歡び、又、その別れる時には慕わしさに堪えないで、ちようど飢えた人の飽くことを知らないような心持になるものである。人人の阿難における場合も亦この通りである。溫雅の德は、彼に滿ちて居る。弟子達が來ればその健康を問い、尼衆が來れば誡めて、姉妹よ、聖戒を奉けよと云う。更に在家の人人の來た時には、三寶に歸依せよ、聖戒を守れ、汝の父と母とを敬え、聖者を供養せよと勵ます。之を聞くものは皆歡び樂しむのである。若し彼が默つて居るのを見ると、どうしたのかと聞くのを常とした、そしてその去る時には德を慕い、誼を念うのである。弟子等よ、阿難にはこうした勝れた德がある。

故に阿難よ、汝は自ら惱んで、師が滅度に入つたならば、また解脫の期がなかろうなどと悲しむには及ばない。私が道を成して以來說いて來た、一切の法と戒こそは、即ちこれ汝の師である。汝の護りである。汝の恃むべき所である。私は、世の父であり、世の友である。そして父として友としてせねばならぬことをなし了つた。この上は汝は私の滅くなつた後に、之を念い、之を行うて怠らぬようにし、摩訶迦葉と共に世を導いて、大いに佛事を修めてくれ。阿難よ、徒らに心を勞わしてはならぬ。汝は必ず解脫をする。そして私の正法は廣く流れて、人人をめぐむであろう」。

五。之を聞いて阿難の憂はやや除れた。そして、世尊に請い奉るよう。「世尊、私の心は醒めました、しかしまだお問い申したいことが一つあります、どうかお敎え下

さい」。世尊。「何事であるか」。阿難。「世尊、此處から餘り遠くないところに毗舍離があり、王舍城があり、舍衞城があり、波羅奈があり、膽波があつて、何れも國豐かに民榮え、佛法も亦盛んに行われて居ります。世尊、それにもかかわらず、何故此等の諸城には行かれないで、此片田舍の拘尸那羅に來て滅度に入りたもうのでありますか」。世尊。「阿難よ、さように申してはならぬ、賤しきものの家でも、王がもし訪ねたならば、世間では貴むであろう。價の卑しい藥でも、これによつて病が癒され、腐つた死體でも船が卒かに壞れた時に、之を浮子として向う岸に渡ることが出來たなら人人は必ず喜ぶことであろう。阿難よ、微妙の功德が是城によつて莊嚴られて居る、それは此處は諸の佛や菩薩の修行をした處であるからである。前の世に私が此に來て王となつたこともある。その時城は榮え殿堂は美しく、威が熾んで、民は皆よく順うた。けれども、私は念うには、『世の榮華も久しく保つことは出來ず、身は朽つべき器である、唯、道のみが眞である、諦かに之を見るもののみが足ることを知るのである』。かように思つて位を捨て、偏えに道を修めた。憶うに、こうゆうことが七度あつた。それゆえ、私は已に七度までも骨を茲に置いたのである。此地はかくまでに私に宿緣がある。今ここに來て涅槃に入るのは、此地の往昔の恩に報いようと欲うからである」。

阿難はこれを承つて、申すよう。「いみじいことであります、此地に、さまでの尊い宿緣があるのでありますか、私は二度、此地を鄙しいとは思いますまい」。

六。その時、世尊は阿難に仰せられるよう。「汝、城に往つて、民達に今日の夜半に私が滅度に入ることを告げ、若し、疑があるならば、急いで詣でて尋ねるがよい、時を失うて後悔をしてはならぬと告げるがよい」。阿難は仰せをうけて、一人の弟子をつれて城へ赴いた。

時に、城中に事があつて、諸の末羅族の人人が集つて談り合をして居たので、阿難は其處へ往つて、廣く世尊の命を傳えた。人人は、驚き悲しみ、歎欷の聲が巷に滿ちた。その聲が王の宮殿にも聞えたので、王は怪しんで左右の者からそのわけを聞き、驚いてその子の阿晨に、直ちに世尊の座下に詣でてこの宮殿にお入りになつて滅度せられるようにと願うて來いと命けた。阿晨は走せて世尊の座下に詣で、阿難よりその願を世尊に申し上げた。世尊は、「此處へ呼べ」と仰せられたので、阿晨は進み出て、禮をなし、「人人は迷の淵に沒んで居ります、唯、御佛のみ之を濟うて下さいます、然るに今お去れになろうとは何とゆう疾いことでありましょう。世尊、どうぞ、私の父の宮殿で滅度にお入り下さい、林の中でお逝れにならぬよう願います、是が父の願であります」と申しあげた。世尊。「阿晨よ、世は眞でないから樂しむべきものはない、賢き者は必ず佛に逢うて法を聞こうと願い、信心と戒行と布施とに立つて、多く聞き廣く學ぶのである。それゆえ垢を離れて、世世富を受け、譽は遠くにまで知られ、竟

に涅槃を得るであろう。阿晨よ、還つて私に代つて汝の父に傳えるがよい、この地は、私に宿緣がある、私は最後に身を此に置こうと欲うと」。阿晨は、直ちに宮に還つて此由を父に傳えた。王は、泣いて令を傳え、民を卒いて、直ちに娑羅の林に詣でた。時に二月十五日の日の正に暮れようとする頃であつた。

七。阿難は、この人人に一人一人世尊を禮ませて居ては、夜を徹しても果されまい一緒に禮ませるがよいと思つたので、人人を集めて置いて、世尊に申しあぐるよう。「世尊、拘戸那羅の諸の末羅族の人人はここに、共に世尊の膝下に參つて居ります」。世尊は懇ろに、之を勞いたもうた。

王は前み出でて伏して申すよう。「世尊、願わくは御敎を垂れて下さい、私達は謹しんで行うでありましよう」。世尊。「人も神も皆死に赴く、生れて死なぬ者はない、汝等は悲しんではならぬ。私は今日から、盡きることのない淸らかな所に到るであろう。彼處は常に寂靜で、永えに憂が除かれてある。汝等少しも私のために悲しむことはいらぬ。汝等は必ず善を念い、惡を遠ざけ、犯した過を改めて來るべき善を修め、德を勤めて賢に親しみ、事の出來た時には思を廻らし、決して卒暴しいことをなしてはならぬ。人の命は得難い、當に萬の民を憐まねばならぬ。明かな者は貴び、愚かな者は赦し、乏しい者に施し、足らない者に惠んで、民を視ることは子のようにし、政を正しくして人を惠み、利を同じうして下と共に樂しむがよい。是こそ、永劫の福の道である。世に諸の邪がある。汝等は必ず自ら愛わねばならぬ。このようにすれば、ただに私を見ることが出來るばかりでなく、諸の苦の網を離れることが出來るであろう。道を行うことは心にある、必らずしも私を見ることはいらない。ちようど病人が醫者に逢わなくとも、方によつて藥を服めば、病苦の除かれるのと同じである。若し私の敎の通りに行わぬならば、私に逢うたとて效ないことである。たとえ私と一しよに坐つて居ても、私を去ることは遠いであろう。若し道を行うならば、たとえ身は私と離れて居ても、これこそ私に近いものといわねばならぬ。汝等は心を修めるがよい、放逸であつてはならぬ。世に諸の惡があり、苦が迫つて居る。各擾れ動いて、自ら安んずることがない。宛も風の中の燈火にも似て居る。どうぞ、汝等をして壽長く、病と痛とをなからしめたいものである」

八。時に羅睺羅は、「私に何の喜があつて、世尊のお逝れになるのを見て居ることが出來よう」と思い、林を出でて東北の方に去つたが、父を憶うて涙に咽んだ。しかし思い廻らして、「夜が明ければ、私は再び滿月の諸の星に圍まるるように、諸の弟子達に圍まれて法を說き給う、我が父世尊を見奉ることは出來ないのである」と思い、復た林に歸つて世尊の側らに坐つた。

世尊は、羅睺羅に告げたもうよう。「羅睺羅よ、歎くことはない、汝は父に對うてなすべきことをなした、私も汝に對うて爲すべきことを爲した。羅睺羅よ、心を煩わしてはならぬ、私は汝等と一緒に一切の人人のために畏るることなく、又勤めて怨をなさず、又害をなさなかつた。羅睺羅よ、私は今滅度に入れば、更に他の父とはならぬ、汝も亦必ず滅度に入つて、更に他の子とはならぬのである、私と汝とは、俱に亂をなさず、又怒をなすまい。羅睺羅よ、佛の法は常住にある、汝は宜しく、常なきすべての法を捨てて、唯解脫を求めねばならぬ、是が卽ち、私の敎である」。羅睺羅を始め人人は、皆ともに歡んだ。そして、佛の聖法のいみじきことを歎えた。

九。時に拘戸那羅の城に、一人の年老いた異學の者があつて、名を須跋陀と云い、齡百二十に及び、學は博く人に重んぜられて居た。此夜、眠から覺めたところ光が城にみちて居て、家には一人も居ない。そして、世尊の滅度に入られるとゆうことを聞き、「私の道の諸の典に佛の世に出で給うことは、優曇華のように極めて少であると書いてある、然るに、私の心には今疑がある、喬答摩ならではこれを明かにしてくれるものはない、往つて敎を請おう、時遲れてはならぬ」。かく思うて、直ちに世尊の座下に急いだ。

偶ま林の外で、阿難に遇うたので、「私は喬答摩の滅度に入られるとゆうことを聞いた、どうか私を導いて、御敎を請うことを得させて下さい」と請うた。阿難。「須跋陀よ、止めるがよい、世尊は終りに近ずき給うた、煩わし奉ることは出來ない」。須跋陀。「しかし、阿難よ、佛の世に出でたもうことは、優曇華のさくように珍らしいと云われて居る、どうか私に、一度だけ喬答摩を拜むことを許して下さい」。かく、三度請うたが、阿難は許さなかつた。その時、世尊は二人の語るのをお聞きになつて、阿難を呼んで、「阿難よ、私の最後の弟子を障えてはならぬ、須跋陀を許して私のところへよこしてくれ、私は彼に逢おうと思う。彼は心直く、智慧明かであるから、進んで、疑を解こうとするのである、議論をしようとて來たのではない」と仰せられるので、阿難は須跋陀を導いて、世尊の御前にいた

つた。

須跋陀は喜に堪えず、禮をなして、申しあげるやう。「喬答摩よ、お問い申したいことがあります、どうぞ、お許し下さい」。世尊。「どう云うことであるか」。須跋陀。「喬答摩よ、世に諸の學者があつて、皆、自ら師であるといつて居る、富蘭那迦葉、末伽梨拘賒梨子、刪舍耶毗羅胝子、阿耆多翅舍欽婆羅、迦羅鳩駄迦旃延、尼犍陀若提子などがこれであります。是等は皆、その說く所を正しい見であると云い、他を邪しまな見であると云い、己の行を解脫の因と名け、他の行を迷の因といつて斥けて、互に爭うて居ります。喬答摩よ、何れが定めて迷の因であり、解脫の因でありますか、彼等は一切の法を知つて居るのでありましようか、又、その知らない法がまだ他にあるのでありましようか、どうか之を敎えて下さい」。

一〇。世尊、說きたもうよう。「そう煩わしく問うてはならぬ、それは效ないことである、ただ諦かに聽くがよい、私は汝のた

めに說こう。須跋陀よ、八つの聖き道がこれ、解脫の道である。この道を有つことが解脫の因であり、この道を有たぬことが、迷の因である。須跋陀よ、彼等は邪見を持つている。今世と後世とについて、自ら作した所の果報を受けねばならぬことを信せず、好んで鬼神を祭つたり、卜占を行うて福を求めようとして居るからである。彼等は邪しまな思を有つて居る、その念は欲と怒とにあるからである。彼等は邪語を犯して居る、詐り綺り謗り諂うて居るからである。彼等は邪業を犯して居る、妄りに殺し妄りに取り、又、婬逸であるからである。彼等は又邪しまな生活をして居る、道に依らないで衣や食を貪るからである。彼等は邪しまな精進をして居る、勤めて惡を止めず、善を行わぬからである。彼等は邪しまな念を有つて居る、常に樂を貪つて、賢き者を憎むからである。彼等の禪定は邪しまのものである、それは欲に專らであつて、解脫の尊さを見ないからである。されば彼等は何れも正しい見ではなく、解脫の因ではない。須跋陀よ、私は昔、王宮にあつた時、世は凡て彼等に迷うた。私が家を出でて道を修め、三十五歲の時菩提樹の下でこの八つの聖い道を究め、其後茲に四十五年の間正しく道を見、正しく道を思い、正しく語り、正しく行い、正しく存らえ、正しくはからい、正しく念い、正しく心を集める道を宣べて來た。

須跋陀よ、業が盡きて、苦の盡きることを思うている。けれども、實はそうでない。煩惱が盡きて、業、苦が盡きるのである。須跋陀よ、若し業の因緣を斷つて解脫が得られるならば、一切の聖者も解脫を得られまい。それは過去の本業には、始めも終りもないからである。けれども、斯道はよく始終のない恐ろしい業をも遮るのである。若し苦行をうけて道が得られるならば、一切の畜生も亦悉く道を得るであろう。されば先ずその心を調伏えるがよい、身を調伏えてはならぬ、此に眞の解脫の因のあることを知らねばならぬ。須跋陀よ、私は今三界の中で、獨り言い、獨り步んだ。佛は實に、これ一切種智である。疑があるならば問うがよい、私は少しも厭うことはない」。

これを聞いた須跋陀は、「世尊、私はよく解りました、私は今賤しい道をすてて、淨らかな行をとろうと欲います、どうか惑みまして私を御弟子の數に容れて下さい」と請うたので、世尊は御許しになつた。

一一。かくて須跋陀は、直ちに髮を下ろし袈裟をつけ、志を盡くして敎を念うた。心は淸いこと明月のようになつた。世尊はその爲に又、四聖諦の道を說き給うた。須跋陀は、ここに覺を開いた。

爾時、世尊は、阿難に仰せらるるよう。「私は昔、先ず阿若憍陳如を濟つたが、今日は最後に須跋陀を濟つた。度うべきものは既に皆度い終つた、今より後は汝等互に相傳えて敎え合うがよい。阿難よ、須跋陀は異學の者であつた。けれども私はその善根の熟つたことを知つて、聽して道に入らしめた。私の滅くなつた後に、諸の異學の者が來て、道に入ることを求める者があるならば、汝等は四月の間これを試みて、その志を察り、その行を視てから、その後に之を許すがよい」。

須跋陀申上ぐるよう。「世尊、たとえ私に四十年の間法を學ばせて、その後に道に入ることを許したもうても、私は能く之に順いましよう、まして唯の四月位はものの數でもありません」。世尊は仰せられた。「須跋陀よ、如何にもその通りである、私は汝の志の篤いことを知つて居る、汝の言に詐はない」。その時、須跋陀は、「世尊、私は世尊の滅度したもうのを見たてまつるに忍びません、なにとぞ、私の先だつことをお許し下さい」と請い、世尊の御許を得て、世尊に先だつてその場に逝いた。

第六節　最後の敎誡

一。時に夜はようように更けて來た。月明かに、星澄み、風やんで流靜かに、林のなかは寂然として聲もない。世尊は、普く諸の弟子達のために、又略めて法の要を說き給うた。

「弟子等よ、汝等は私が滅度に入るのを見て、正法はここに永久に絕えたと思うてはならぬ。私はこれまでに汝等のために、戒を制め法を說いて來た。汝等は私の滅くなつた後においては、必ず之を敬うて、闇で明にあい、貧しい人の寶を得たように尊ばねばならぬ。これこそ汝等の大師であることを知つて、私の世にある時と同樣に守るがよい。

弟子等よ、蓄養、犧鑿、卜占、算計、これみな、汝等の爲してはならぬ事である。身を節え、定めの時に食べて、淨らかに自活するがよい。浮世の事に交わり、王者の使命をいたし、呪術を行い、仙藥を弄び、好を貴人に結んで親しみ狎れるようなことがあつてはならぬ。必ず、自ら心を正しくし、解脫を求めるがよい。瑕をかくしたり異つたことを行うたりして、人人を惑わしてはならぬ。衣服、飲食、臥具、湯藥について、よく量を知り足ることを知つて、徒らに蓄えてはならぬ。これは略めて、戒を持つことの要を說いたのである。戒は、これ正しく解脫に隨う本である、禪定と智慧はこれから生れる。されば汝等は正しく戒を持つて缺いてはならぬ。よく戒を持てば則ち善である、戒がなければ諸の善も功德もみな生れることが出來ない。戒はこよなき安穩の功德の住處であると知るがよい。

二。汝等が已に、よく戒に住むならば、當に五つの根を制えて五つの欲に入らぬようにせねばならぬ。牛飼人の杖をとつて牛を驅り、牛をして人の苗を犯させぬようにするがよい。もし五つの根を縱にすれば轡をとつて制えない惡馬が、人をひいて穽に陷れるように、ただ、五つの欲ばかりでなく、將に涯しもなく、制えることの出來ないことになるであらう。時世の禍を被るようなことは、苦がその世限りですむけれども、五つの根の賊の禍は、世を累ねて迫り甚だ重い。されば智慧ある者は、制えて之に隨わない。これに對することは賊のようで縱にはさせない。たとえ之を縱にさせても、みな間もなく滅すであろう。

此五つの根は心を主とする、されば、汝等は必ずよく心を制えねばならぬ。心の畏ろしいことは毒蛇、猛獸、怨賊よりも甚だしい、大きな火の熾なのも喩べものにはならぬ。たとえば人あつて、手に蜜を盛つた器をとつて走り轉び、ただ蜜のみを見て、深い坑のあることを見ないようなものである。又、たとえば、狂うた象に鉤がなく、猿が樹の上に躍ねまわつて、制えることの出來ぬようなものである。汝等は心を挫いて、放逸にならぬよう注意をするがよい。心を縱にすれば、善がなくなる。これを一處に制えれば、事として辨えられぬものはない。されば汝等、必ず進んで心を折伏えるがよい。

三。 汝等、諸の飲食を受けること、當に藥を服むようにするがよい。好きものにも惡しきものにも、功德の增減の念があつてはならぬ。僅かに身をささえ、飢渴を除けば足りる。蜂が花におうた時は、ただ其味のみを取つて、其色と香を損わぬように、汝等も亦人の供養をうけたならば、僅かに己の惱を除けばよい。多く求めて善心を破るようなことなく、賢い人の牛の力を量つてこれを用い、分を過して其力を竭さしめぬようにせねばならぬ。

汝等は晝の間は善を修むるに勤めて、時を失わぬようにするがよい。初夜にも後夜にも、この心がけを廢ててはならぬ。中夜には經を誦んだ後に息むがよい。睡眠のために一生を空しく過してはならぬ。無常の火は、諸の世間を燒いている。汝等これを念うて、早く自らを救うことを求めるがよい。覺めよ、諸の煩惱の賊は、常に伺うて人を殺めようとしている。どうして睡眠を貪つて、自ら警めないでおられよう。煩惱の毒蛇が汝等の心のなかに睡つて居ることは、たとえば、黑蛇が汝の室のなかに睡つて居るようなものである。必ず持戒の鉤をもつて、早く之を除くがよい。蛇が既に出て仕舞えば、安んじてそこに眠れるであろう。未だ出ないのに睡るのは、これ、慚なき人である。慚愧の服は、諸の莊嚴のなかで最も勝れている。慚愧は鐵の鉤の如く、よく人人の法にもとる行爲を制える、故に愧ろうて暫くも心を替えぬようにするがよい。もし慚愧を離れるならば、即ち、諸の功德を失うのである。慚愧を知るものには善があり、慚愧を知らぬものは禽獸と一つことである。

四。 若し人が來て節節に切りきざむことがあつても、汝等は自ら心を修めて瞋り恨むことがあつてはならぬ。また必ず口を護つて、惡言を吐いてはならぬ。惡い念と惡い言とは、他を傷けないで却つて己を傷ける。もし怒を縱にするならば、則ち自ら道を妨げ、功德の利を失うであろう。忍の德は持戒も苦行も及ばぬものがある。能く忍を行うものを力ある大人と名ける。もし惡罵の毒をも、歡んで忍ぶことが出來ないならば、この人を道に入れる人、智慧ある人とは名けない。怒は德の怨であつて、その害は能く諸の善を破り、好き名を害うて、人人は彼に逢うことを喜ばないであろう。まことに、瞋の心は猛き火よりも恐ろしい。されば德を愛でて恨を懷かず、常

に防ぎ護つて、怒の入りこむ隙を作らぬがよい。功德を劫める賊のなかでは、瞋恚より甚しいものはない。道を行う人で、瞋恚を懷くは宜しくない。たとえば清涼しい雲のなかに霹靂の火の起るように、許すことの出來ぬものである。

汝等必ず自らの頭を摩でて見るがよい。既に飾をすてて壞色の衣をつけ、鉢をもち食をうけて、自活していることが知られよう。若しまた憍慢が起つたならば、疾くこれを滅ぼさねばならぬ。憍慢を增長させることは、在家の人でも宜しくない。まして世を離れて道に入り、解脫のために自らその心をへり下して、食を受けるとゆう身にあつては猶更である。

五。 弟子等よ、諂の心は道に違う。汝等は宜しく、その心を直くするがよい。實に諂は欺で、道に入つた人には少したりともあつてはならぬ。されば、汝等は必ず心を端しうして質直を本とし、ただ法を念うて欺くことがあつてはならぬ。

弟子等よ、欲の多い人は求むることが多いから、苦惱もまた多い。欲の少い人は求めがないから患もない。欲少き人は諂の心で、人の意を求めることはない、また目や耳の欲望のために牽かれない。心坦かで憂がなく、事に觸れても餘裕があつて、常に充たぬところがない、則ち、ここに涅槃がある。

汝等、諸の苦惱を脫れようと欲うならば、必ず足ることを知るがよい。足るを知る法はこれ富み榮え安穩の處である。足ることを知る人は地の上に臥して居ても、猶安樂であり、足ることを知らないものは、天堂に住んでも意にかなわぬ。足ることを知る人は貧しくても富んで居るのであり、足ることを知らないものは富んで居ても貧しく、常に五つの欲にひかれる。

汝等が寂靜の安樂を求めるならば、必ず閑しい處を離れて閑かに居るがよい、靜かな處におる人は神神の共に敬う所である。故に己と他との仲間を離れて、獨り閑かな處に住み、苦の本を滅そうと思うがよい。若し多くの人と共にあることを樂う者は、即ち、諸の惱をうけるであろう。たとえば多くの鳥が集れば、大きな樹でも枯れる患のあるようなものである。世間の縛は、汝等を衆の苦のなかに沈ませて、ちようど老いたる象の泥に溺れて出ることの出來ないような、破目に陷れるであろう。

六。 汝等もし勤め勵むならば、事として難いものはない。少かな水も常に流れれば能く石を穿つようなものである。この故に汝等は常に勤め精むがよい。もし、行者の心が屢ば懈れば、火を鑽つて未だ熱けないうちに止めれば、竟に火を得られないのと同じことである。

汝等は正しい念を求めねばならぬ。これは汝等の好き友である、善き護者である。常に、正しき念にあれば、諸の煩惱の賊も入ることが出來ない。されば汝等は必ず正しい念を攝めるがよい、正しい念を失えば諸の功德を失う。若し念の力が强ければ鎧を被て陣に入るように、五つの欲の賊のなかに入つても畏れることはなく、又害われることもない。

弟子等よ、心を攝めれば心は禪定のなかにある。心が禪定にあれば、よく世間の生滅の相を知るであろう。この故に、汝等は常に勤めて禪定を習うがよい。禪定を得れば心は散らぬ。たとえば、水を惜むもののよく堤を治めるように、汝等も亦智慧の水のためには善く禪定を修めて漏さぬようにするがよい。

弟子等よ、智慧があれば貪着がない。汝等は常に自ら省みて之を失うてはならぬ。かようであれば私の法によつて解脫が得られる。若しそうでなければ、道の人でもなく在家でもなく、名のつけようはないのである。實の智慧は、これ生老病死の大海を度る強い船である。無明の暗黑に輝く大きな燈であり、一切の病苦の良藥、煩惱の樹を伐る斧である。故に汝等は必ず聞き、思い、修むる智慧を以て、己を惠むがよい。智慧明かであれば、肉の眼であつても、明かに見とうす人と云うのである。

弟子等よ、種種に戯論をすれば心が亂れる。されば、出家はしても解脫は得られない。故に汝等は急ぎ戯論を離れて煩惱の寂まつた樂を得るがよい。

七。汝等、常に一心になつて、諸の放逸を捨てること、怨賊を離れるようにせねばならぬ。私は放逸ならぬことによつて正覺に入つた。量りない善は放逸ならぬことから生れる。汝等は、唯勤めて之を行うがよい。山の間にある時も、澤にある時も、樹下にある時も、また靜かな室にある時も、常に受けた法を心にかけて、忘れてはならぬ、常に勤めて之を修めるがよい。空しく死ねば後に悔いねばならぬ。私の說くところは良醫の病を知つて、藥を說くようである。これを知つて服まぬのは、醫の咎ではない。又、善い案内者が人を善い道に導くようなものである。之を聞いて行かぬは、導くものの過ではない。

汝等もし、苦集滅道の四聖諦に對うて、疑があるならば、疾く問うがよい。疑を懷いて決を求めないようではならぬ。

八。世尊は、かく三度仰せられたが、會の中に一人の問う者もなかつた。阿那律は人人の心を察つて、世尊に申上げるよう。

「世尊、月を熱くし、日を冷くすることが出來ても、佛の道を變えさせることは出來ません。佛の說きたもう苦は眞にこれ苦であつて、樂とすることは出來ず、苦の集は眞にこれ因であつて、更に異つた因はありません。苦がもし滅べば、即ち、これ因の滅であり、因が滅びるから果も滅びる。苦を滅ぼす道は、實にこれ眞の道であります、更に餘の道はありません。世尊、この諸の人人は、四聖諦について全く疑がありません。唯この中にまださとりを開かぬ者は、世尊の滅度を見て悲しむでありましょう。初めて道に入つたものは、夜、電光をみて道を知るように、世尊の御教を聞いて皆濟れることと思います。もし已に悟つて苦の果を渡つた者ならば、唯この念をなしましょう。世尊の滅度は何故かくまでも速かなのであろうと」。

阿那律はかく申上げたが、世尊は、諸の弟子を憐みまして、猶、固く道に進ましめようと欲われ、大悲の御心をもつて、又、

人人のために說きたもうた。「汝等、悲惱を懷いてはならぬ。たとえ、私がこの世に住まることが一劫であつても、會うたものは必ず離れねばならぬ。會うて、離れぬ理はない。

自らを利し人を利する法は、皆具うて居る。たとえ私が久しく住つても、この上異なることはないであろう。救わねばならぬものは、天上といわず人間といわず、皆悉く已に救うた。その未だ救わぬ者も、後の世に救われるだけの因緣を作つた。

今より後、諸の弟子達は、互に傳えて之を行うならば、卽ちこれ、佛の法の身が常に存在して滅びないことになる。

必ず知らねばならぬことは、世の常ないことである。會えば必ず離れねばならぬ。憂惱を懷くことはいらぬ。世の相は皆この通りである。常に勤めて解脫を求め、智慧の光をもつて諸の癡暗を滅ぼし、疾く、別離のない家に到るがよい。

世は實に、危く脆い。固いものとてはない。私のいま滅度に入ることは、悪い病を除くようである。之はこれ應に捨つべき罪惡のものである。假に名けて、身とはするが、沒んで生と老と病と死の大海に在るものである。智慧あるものが何故これを除いて、怨賊を殺すようにすることを歡ばないでおろうぞ。

汝等は一心に勤めて速かに迷の火坑を離れるがよい。一切世にありとしある法は、皆これ壞れるものである。

汝等、且く靜かにせよ、言うてはならぬ。時が來た。私は滅度するであろう。これが私の最後の誡である」。

九。かく宣うて、靜かに寂定に入り給い、聖體は少しも動き給わぬ。阿難は阿那律に尋ねた。「世尊は、已に涅槃に入りたもうたのでありますか」。「否、まだである」。

既にして、世尊は諸の禪定を經たもうて、靜かに天上より降りたもうた母后摩耶夫人を拜んで、終に滅度に入りたもうた。その時、阿那律は、「世尊は正に滅度に入りたもうた」と告げたので、阿難は普く、之を大衆に傳えた。

時に大地は震い、空に鼓鳴り、娑羅樹の花は雨のように降り注いだ。

第七節　茶毘の烟

一。諸の弟子達は悲しみにたえないで、胸をうつて咽ぶものもあり、地に倒れて悶えるものもあつた。皆、「世の眼は何ぜかくも早く滅びたもうたのであろう。誰が今日から、この人人を導いて下さることであろう、人人は今日から誰にたよつてよいのであろう。三つの惡道は常に我我の前に開かれているのに、解脫の門は全く私達には閉された」と云つて歎いた。阿那律は、「さように憂え悲しんではならぬ、佛は先に私達のために、諸行の[illegible]も相も皆、このように常ないことを說きたもうたではないか」と慰めた。

二。その時、神神は空にあつて歌う。

世尊はその昔誓によりて、我等のためにこの世に出でまし、人と神とを誘いて、涅槃に導きませし。

御佛はこれ、慈の母ぞ、普く大悲の乳

を與えて、人人を育てたまえり。今や忽ち、御かくれまして、人みな依所を失いぬ。

痛ましや、甘露の法は下らず、人人の善き芽は、今ぞ漸く衰えなん。願わくは、法の寶と舍利の御光、我等を照して、迷をのがれさせたまえ。

阿那律も亦、世尊の御前に跪いて、頌をささげた。

正覺の王、我等に法の乳を與えて、法の身を育みませしが、いまや諸人の、法身成らざるに、永く滅度に入りたもう。惱ある人人、また誰にか歸らむ。

世尊、我等のために、劫を重ねて、諸の苦を經、竟に正覺を遂げましぬ。さわれ、世に住まりたもうこと、久しくあらず、今や滅度に入りたもう。

我等、暗に在り、魔、甲を解いて慶べり。願わくは、大悲の舍利の御光、我等を攝めませ。法の御寶、常に流れて、窮まることの、なくてあれかし。

阿難も亦泣いて、頌うた。

我幸に、世尊と同じく、釋迦の族に生れ得て、二十餘年、御側に侍りぬ。いまや世尊は、我等をすてて、大滅度に入りたもう。悲しきかなや、無明の長夜を、心いためついかがせん。

我未だ、迷の網を解き出でず、無明の殼を離れず、世尊の智慧の嘴、未だ之を啄みて、破りたまわぬに、いまはたすてて、疾く去りましぬ。

我はげに、生れて日のなき、嬰兒のそれのごと、慈の母を失いて、やがては死にぞ、いたるらん。

我、今世尊に、懺悔しまつる。二十餘年のその間、懈怠多く、御心にかのうこと能わざりき。

願わくは、大悲を垂れまして、我に甘露の法をそそぎて、安穩を得せしめたまえ。願わくは、末の世をきわめて、常に世尊に觀えしめたまえ。願わくは大慈の光もて、一切の世にて、攝めとりたまえかし。

我が胸せまりぬ、いかで能く、聖恩を陳ぶるを得ん。

三。人人みな悲しみかつ痛んで、阿難に請うよう。「尊者よ、願わくは我我に、親しく佛を拜むことをお許し下さい、再び、佛の出世におうことは難いから」。阿難、念うよう。「世尊が世に在ました間は、女子で、其の座下に詣つたものは僅かであつた、それゆえ今こそ、彼等に聖體を拜ませてやらねばならぬ」。よつて大勢の尼達を始め清信の女達をして、前んで拜むことを許してやつた。女達は、皆哭いて禮をなし、種種の香や華をささげた。

中に、一人の媼があつた。齡は百歳に迫り、身は貧しく、奉るものとて一つもないのを悲しんで、「どうぞ、未來には何處にあつても、常に御佛を拜むことの出來るようにして下さい」と心かけながら、佛足の上に臨んで泣いた。そして、はからずも涙が落ちて御足を濡らした。既にして、諸の女子が皆退いたので、次で阿難は、餘の人人に世尊を拜ませた。人人は前んで、禮をなし、それぞれ供養をささげ、悲しみなげいて退いた。

阿那律及び諸の弟子達は、倶に、聖體の左右に侍つて、道をかたらいながら夜を明かした。

四。その時、阿那律は阿難に云うよう。「阿難よ、拘尸那羅の町へ行つて、世尊のお逝れになつたことを、諸の末羅の人達に告げて來てもらいたい」。阿難は城へ往つて、之を傳えた。人人は悲しんで直ちに走せつけ、娑羅の林に集りて先ず寶輿をつくり、聖體を其上に安んじて香をたき、華をそなえ、樂を奏でて御德をたたえた。

一日を終えて、諸の末羅の人達は、阿難に請うよう。「佛は今や、滅度に入りたもうた、最後の御供養はまことに値いがたいことである。どうぞ私達に七日七夜の間、佛の聖體を留め奉つて、意のままに、供養をささげさせて頂きたい。そして、諸の人人をして、長夜の安らかさを得させて下さい」。阿難はこれを阿那律に語ると、阿那律は、「彼等の意にまかすがよい」と云つたので、阿難はこれを末羅の人人に傳え、人人は喜んで七日の間、厚く供養し奉つた。

七日を經て、末羅の年少い人人は、世尊が阿難に語られた所に隨うて、新しい淨らかな絹で聖體を纏い、これを黃金の棺に遷し奉つて、諸の美しい花と香とを散し、寶輿に安んじ奉り、又樂を奏で、頌を歌うた。

諸の末羅の人人は、「七日の期限は、もう來てしまつた、今は、聖體を荼毘し奉らねばならぬ」と語り合い、街を掃き清め、道に淨水を灑ぎ、皆で聖棺を舁き奉つて、城に入つた。弟子達を初め、王も民も、皆その後に隨い、幢幡や華蓋は相連つた。神神は空に御德をたたえ、人人は地に之に和して、哀歌を唱えた。

時に路夷と云う末羅の娘があつた。平常篤く道を信じて居たが、聖棺が城の中に止まつた時に、手に金色の大きな車の輪ほどもある花をささげて、聖棺に奉つた。又、摩訖迦と云う一人の媼があつて、聖棺がその家の前を過ぎたもうた時に、その夫が死んでから一度も着なかつた美しい摩波拉多の衣をささげて、聖棺の上を覆い、聲をあげて、「諸の末羅の人は幸である、今こそ大きな德を得た、世尊がこの地で滅度遊ばして、善く供養し奉ることが出來たから」と歎えた。

五。かくて、人人は聖棺を舁き奉つて城を出で、靜かに熙連河を渡つて寶冠寺に到り、寶輿をその殿堂に下したてまつつた。そして中庭に栴檀やその他の香薪を積み、聖棺をその上に遷し奉つて、香油を灌いだ。諸の弟子達や信者達は、皆聲をあげて泣いた。末羅の大臣路夷は大きな炬火をとつて、薪に火をつけようとした。けれども薪は燃えない。このように三度したが三度とも燃えないので、人人は奇しんで、そのわけを阿那律に尋ねた、阿那律は答える。「摩訶迦葉をお待ちになるためであろう、迦葉は、今世尊におわかれしようとて此處へ來かけて居る、このために世尊が、火のつかないようにせられるのであろう」。

六。是よりさき摩訶迦葉は、鐸叉那耆利の國で道を傳えて居たが、世尊が滅度に入